

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第2号

Japanese Studies in East Asia

No.2

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2019年9月20日発行

巻 頭 言

このたび、『東アジア日本学研究』第2号を刊行することができたことをよろこばしく思います。第1号（春季号）は、前年の学術大会をうけて、その発表内容を小論文としてまとめて提出されたものをまとめた論文集でしたが、今回の第2号（秋季号）は、より本格的な論文として提出されたものをまとめた論文集です。

東アジア日本学研究学会が目指す目標のひとつは、東アジア世界の中で、東アジアの視点に基づいて、日本の文化と社会をどのように分析し、評価し、位置づけることができるのかということです。その意味で、この第2号によって本学会における本格的な日本研究がスタートしたということができます。

日本は明治以来、「脱亜入欧」のかけ声のもと、とにかくアジア世界からの脱出を試み、かたちの上でも欧米社会に近づくことが良いことであるという価値観のもとで発展を遂げようとしてきた社会です。そのような流れの中で、日本研究の分野においても、同じアジア諸国との比較研究ではなく、もっぱら欧米社会との比較研究が試みられる傾向がみられました。しかし、日本がまぎれもなくアジアの一員である以上、そのことの認識にたち、その事実にもとづいて、アジアの視点で日本を捉え直し、アジア社会の比較において再度日本をアジアに埋め戻す作業が求められています。そのような日本研究がこの第2号の刊行によって本格的にスタートしたということです。そしてそのような日本研究が可能になったのは、東アジア地域における優秀な日本研究者の台頭が近年著しくなってきたからにほかなりません。

この第2号では、中国語話者が日本語を学習し修得する際の特徴を通して中国語と日本語の異同を明らかにしようとする研究、女性の家事・育児と労働に焦点をあてた日中の比較研究、茶道をめぐる日中の比較研究、朝鮮半島における平和構築をめぐる日中韓の役割の可能性に関する研究、野間宏の創作活動をめぐる研究などが提出されました。

以上のように、多様性に富んだ視点からの日本をめぐる比較研究が展開されています。今後とも、本誌が量質ともにますます発展し、世界の日本学研究において大きな役割を担うことができるようになること切に願っています。

東アジア日本学研究学会会長
安達義弘

目次

巻頭言	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	1
【論文】		
李惠	中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について —中国国内の学習者を調査対象として—	3
馮荷菁	中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用実態と学習過程について —アンケート調査を中心に—	17
楊偉健	中国語と日本語疑問詞の不定全称の対照研究 —「ナニ」「ダレ」及び“什么”“谁”を中心に—	35
何潔	中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察 —日本語母語話者との比較対照を中心に—	53
陳帥	「ゼロ初級外国人生活者」向けの地域日本語教育プログラム研究	71
黄婕	李白の詩作における「洛陽」	87
李先瑞	サルトルの「全体小説」と野間宏の創作実践	99
李鋼哲	朝鮮半島における平和構築と日中韓3か国の対朝鮮開発援助協力	111
周堂波	後藤朝太郎と西川一草亭の茶道認識 —お茶に関する中日対照の目線から—	129
李東輝	日本の働く女性の育児不安の実態及びその影響要因 —大阪市での調査を中心に—	141
朴紅蓮	「10人の傑出した母親」の選抜からみた中国女性の仕事と家庭の二重負担 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に—	159
学会役員		175
学会動向	李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	176
東アジア日本学研究学会会則		177
『東アジア日本学研究』投稿要領		180
『東アジア日本学研究』執筆要領		182
『東アジア日本学研究』査読要領		183
編集後記		185
後書き	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	186

中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について —中国国内の学習者を調査対象として—

李 恵（首都大学東京大学院生）

要旨

本稿では、「実現する・理解する」というような中国語と同じ語形の二字漢語動詞を取り上げ、李(2012)における作文の誤用例を問題文として、中国国内の学習者による習得状況を明らかにすることを目的とする。その結果、誤用の種類を4類8種の分類となり、学習者の習得状況を明らかにした。具体的に、以下の通りである。1) 学習者の習得率は(4)、(1)・(2)、(3)という順番になっている。2) 品詞性及び自他動詞の習得において、従来注目された自他動詞より品詞性の相違による二字漢語動詞のほうが習得されにくいことがわかった。3) 日本国内の学習者は意味用法に関する習得率が最も低いのに対し、中国国内の学習者は活用語尾及び共起性に関するものは最も習得しにくい。4) 学習環境においては、日本国内の学習者は直接法で教えられているため、授業を受ける際に、日中両言語の比較が行われていないことが要因と考えられる。中国国内の学習者と比較して、日本国内の学習者は母語話者からのインプットによって語彙の共起をしているが、日中両言語の意味用法に関する区別が明確に学習されていないということがその原因の一つであると考えられる。一方、中国国内の学習者は日本語を使用する機会が少ないため、テンス・アスペクト・ボイスについての習得率が低いと考えられる。5) 最後に、辞書と教科書の記述が二字漢語動詞の習得に影響を与える可能性が確認された。

キーワード： 二字漢語動詞、学習環境、日本語能力、辞書と教科書

はじめに

中国人日本語学習者(以下、「学習者」とする)が日本語の文を産出する上で漢語を使用する際に困難を感じる問題点の一つが「動名詞」または「漢語サ変動詞」などと呼ばれる「二字漢語+する」である(五味2006)。日本語にも中国語にも漢語があるため、学習者において有利な点がある。しかし、一方で中国語での漢語の知識がマイナスの転移として働き、誤用を引き起こす場合もある(庵2008)。

日本語教育の現場では、日中両言語の「二字漢語サ変動詞」(以下、「二字漢語動詞」とする)の誤用はこれまでにしばしば指摘されている。

4 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について（論文） —中国国内の学習者を調査対象として—

今の生活は疲れているが、充実だと思います。（充実している）

日本の文化を了解したいです。（理解したい）（李2012）¹⁾

例のように、日本語には「実現する、理解する」というような中国語と同じ語形の二字漢語動詞が多く存在している。中国語の語形と同じであるのに、品詞性及び意味用法などの面で、中国語と異なる場合もあり、学習者が習得しにくいことは周知の事実である。

二字漢語動詞に関する先行研究は自他動詞や意味に関する研究が様々な角度から行なわれている。しかし、二字漢語動詞に焦点をあて、全ての誤用項目を考慮して習得状況を分析した研究は管見の限りではまだ少ない。また、日本国内の学習者と中国国内の学習者の二字漢語動詞による習得状況の相違点に関する先行研究も管見の限りでは見当たらない。

そこで、本稿は先行研究を踏まえながら、李(2012)における日中両言語の二字漢語動詞を取り上げ、中国国内の学習者による習得状況を明らかにする。また、学習環境・辞書と教科書の記述が二字漢語動詞の習得に影響を与える可能性があるかについて考察することを目的とする。

I. 先行研究

1. 二字漢語動詞の日中対照に関する研究

石・王(1983)では品詞性の面から二字漢語動詞を以下のように分類している。ア)日本語では動詞であるが、中国語では副詞である。イ)日本語は自動詞で、中国語は形容詞である。ウ)中国語では名詞、日本語では動詞である。エ)中国語では他動詞であるが、日本語では自動詞である。オ)中国語では動詞として自他両用ができるが、日本語では自動詞の用法しかない。

侯(1997)は、新聞や雑誌から用例を集め、対照分析の結果、日中言語における同形語の品詞の相違を8種類に分けて指摘した。その中で二字漢語動詞の場合、石・王(1983)と結論がほぼ一致していることがわかった。

以上の先行研究は本稿における品詞性及び自他動詞をさらに分類する根拠になる。

2. 二字漢語動詞の誤用に関する研究

河住(2005)は、学習者による漢語の使用に見られる問題点を文法・文体・意味・語彙の四つの問題点に分類した。その中で「品詞の選択に問題を含むもの」、「文法的共起関係において問題を含むもの」、「意味的または文体的に共起しないもの」という面で学習者における二字漢語動詞の誤用問題に触れている。

李(2012)は、日本国内の学習者の作文から二字漢語動詞を抽出し、(1)品詞性及び自他動詞に関する誤用、(2)意味用法に関する誤用、(3)活用語尾と共起性に関する誤用、(4)助詞に関する誤用という四分類に分けて中日対照研究を行い、日本国内の学習者における二字漢語動詞の誤用状況を明らかにした。また、学習者の習得は(1)、(4)、(3)、(2)の順となり、「(2)

意味用法に関する誤用」の習得が一番低いことがわかった。

以上の先行研究を参照しつつ、本稿の分類をさらに四種八類に分け、李(2012)における誤用例を問題文としてアンケート調査を作成し、中国国内の学習者に調査を行う。

3. 二字漢語動詞の習得に関する研究

庵(2008)は、日中同字同義の二字漢語動名詞を対象に動詞の自他の判定に関するアンケート調査を母語話者と学習者(初級・中級・上級・超級)に対して行い、形態的に指標を持たないサ変動詞における自他がどのように習得されているのかについて考察した。その結果、母語話者が一貫して「する」を使用していないことがわかった。学習者が機械的に「～する」を回答していれば、習得したことになるわけだが、実際の分布はそうになっていない。また、受身形がよく習得されているのに対し、使役の習得率は低い。特に、「他動詞に相当する使役形」はまったく習得されていないという。

周・吉本(2015)は、語構成が「動詞＋名詞」であるような同形の日中二字漢語動詞を抽出し、VN型動詞の自他の傾向とその語としての一体性との間の関連性を大規模なコーパスに対する統計調査によって明らかにした。また、母語の知識が第二言語習得に与える影響について考察されている。

以上の先行研究は全て二字漢語動詞の自動詞性・他動詞性の習得に関する研究である。本稿はその上で、品詞性・共起性・意味・助詞におけるそれぞれの習得状況を考察する。

Ⅱ. 本稿の目的

これまでの二字漢語動詞の習得に関する研究は、品詞性・自他動詞・意味・共起性などにそれぞれ焦点を絞り、考察したものであるため、本稿では四種八類の習得状況とその問題点をアンケートによって明らかにすることを目的とする。

また、学習環境の相違・辞書と教科書の記述がそれぞれ二字漢語動詞の習得に影響を与える可能性があるかどうかについて考察する。なお、学習環境の相違とは、日本国内の学習環境と中国国内の学習環境という相違を指す。

具体的には、李(2012)から抽出した文をさらに四種八類に分け、選択と穴埋めの問題文を作成し、中国国内の学習者にアンケート調査を行う。そして、学習者における二字漢語動詞の習得状況による結果に基づき、二字漢語動詞の習得に与える要因を考察し、日本語教育現場での提言を検討してみたい。

Ⅲ. 本調査

1. 調査概要

李(2012)における学習者の作文から抽出した誤用例を設問文として、中国国内の大学の日本語専攻の学習者を対象としてアンケート調査を行った。選択と穴埋めという形式で、

6 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について（論文）
—中国国内の学習者を調査対象として—

最も適切な答えを選んで、回答させた。

調査対象者は中国国内の大学で日本語を専攻する大学生 113 名である。日本語能力試験 N 1 に合格した学習歴 3 年の学習者 14 名を上位群と見なし、N2 に合格した学習歴が 2 年から 3 年までの学習者 38 名を中位群と見なす。それ以外の学習歴が 1 年から 2 年までの学習者を下位群と見なす。

2. 調査内容

本調査で考察する項目は、李(2012)の分類を基にして、以下の表 1 のとおりとした。分類によって、予備調査から出た誤用例を設問文とし、分類ごとに五つの問題文を設定した。分類にあたる誤用例に欠けている場合、侯(2002)・河住(2005)・庵(2008)中の例文を参照した。

表 1 アンケート設問文の設定²⁾

分類		設問文
(1)	(1)－A	1－2)、1－10)、1－16)、1－20)、1－23)
	(1)－B	1－1)、1－4)、1－8)、1－9)、1－14)
	(1)－C	1－3)、1－6)、1－12)、1－19)、1－22)
(2)	(2)－A	1－11)、1－13)、1－18)、1－21)、1－26)
	(2)－B	1－7)、1－15)、1－17)、1－24)、1－25)
(3)	(3)－A	2－1)、2－3)、2－5)、2－7)、2－9)
	(3)－B	2－2)、2－4)、2－6)、2－8)、2－10)
(4)	(4)	1－5)、1－27)、1－28)、1－29)、1－30)

*例文についてはアンケートを参照のこと

(1)品詞性及び自他動詞に関する設問の下位分類は以下のとおりである。(1)－A は日本語では動詞であるが、中国語では形容詞・副詞であるもの、(1)－B は日本語では自動詞であるが、中国語では他動詞であるもの、(1)－C は日本語では自動詞の用法しかないが、中国語では動詞として自他両用ができるものとする。

(2)意味用法に関する設問の下位分類では、類義語は(2)－A とし、異義語は(2)－B とする。

(3)活用語尾と共起性に関する設問の下位分類では、活用語尾の問題は(3)－A とし、共起性の問題は(3)－B とする。

助詞に関する設問は(4)とする。

(3)の設問は穴埋め問題文とし、(1)・(2)・(4)の設問は選択問題である。

IV. 調査結果

本調査の正用率の結果は以下のとおりである。図1は四種の習得率であり、図2～図5は上位群・中位群・下位群による八種の習得率である。

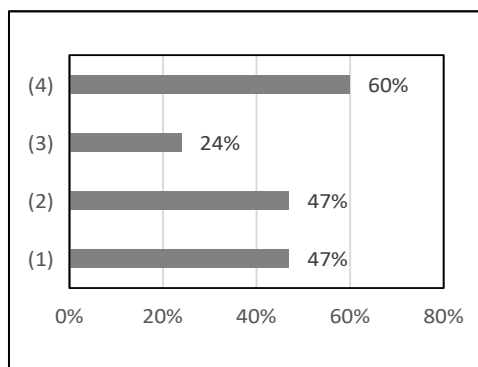


図1 全体の結果

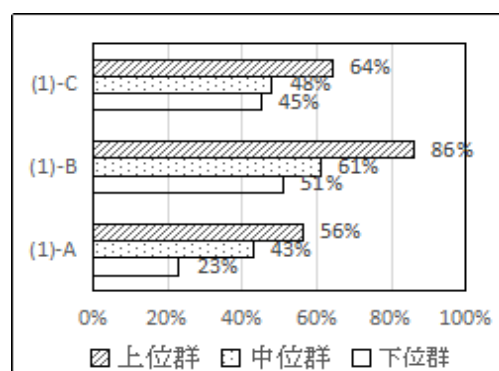


図2 品詞性及び自他動詞による結果

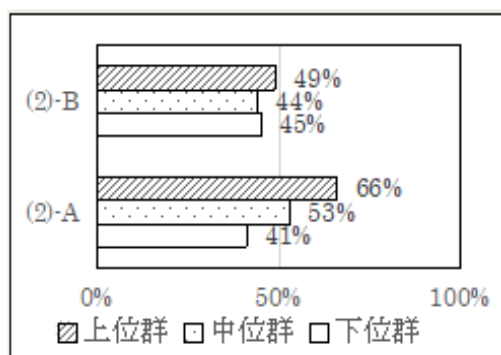


図3 意味用法による結果

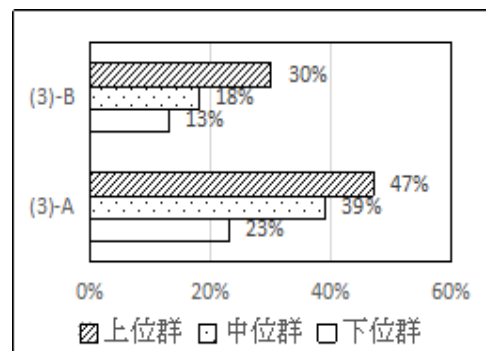


図4 活用語尾と共起性による結果

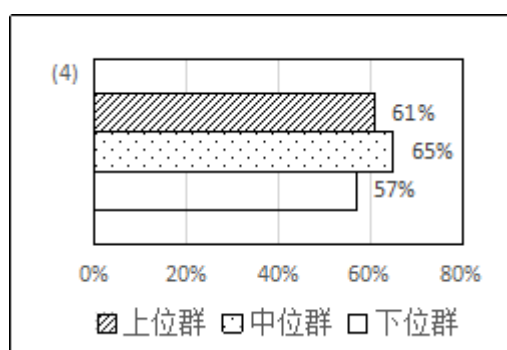


図5 助詞による結果

本稿は二字漢語動詞の習得する基準は庵(2008)を参照する。庵(2008)は、全体の80%以上が正しい答えの場合その形式は「習得されている」、50%以上80%未満の場合は「習得されているとは言えない」、50%未満の場合は「習得されていない」と見なした。

8 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について（論文）
—中国国内の学習者を調査対象として—

図1から見ると、学習者による四種の習得率は47%、47%、24%、60%であるため、(4)助詞に関する誤用、(1)品詞性及び自他動詞に関する誤用・(2)意味用法に関する誤用、(3)活用語尾と共起性に関する誤用という順番になっている。

図2から見ると、品詞性及び自他動詞に関する習得状況において、(1)-A「日本語では動詞として使われているが、中国語では形容詞・副詞として使われているもの」は正用率がそれぞれ56%・43%・23%であり、上位群は習得しているとは言えないが、中・下位群は習得していないことがわかった。また、(1)-B「中国語では他動詞用法を持つのに、日本語では自動詞の用法のみ」の正用率はそれぞれ86%・61%・51%であることがわかった。上位群は習得しているのに対し、中・下位群は習得しているとは言えない。(1)-C「日本語は自動詞として使われていて、中国語は自他動詞として使われている」という分類では、正用率が64%・48%・45%であり、上位群は習得しているとは言えないが、中・下位群よりは若干正用率が高く、中・下位群は習得していないことが分かった。今まで、自他動詞の習得に関する研究が注目されてきたが、本稿は「(1)-A日本語では動詞として使われているが、中国語では形容詞・副詞として使われているもの」のほうが自他動詞の習得率より低いことが明らかになった。また、習得率は1-(B)、(1)-C、(1)-Aという順番であることが分かった。

図3のように、意味用法に関する習得において、「(2)-A類義語」の正用率は66%・53%・41%である。上・中位群が習得しているとは言えないのに対し、下位群は習得していない。「(2)-B異義語」の正用率は49%・44%・45%である。上・中・下位群がまったく習得していないことがわかった。

活用語尾と共起性に関する習得状況では図4のように、活用語尾に関する正用率は47%・39%・23%であり、共起性に関する正用率は30%・18%・13%である。上・中・下位群がまったく習得していないことがわかった。

助詞に関する習得状況が図5から見ると、正用率が61%・65%・57であり、上・中・下位群は同様に習得しているとは言えない。上・中・下位群の差がないことがわかった。これは、助詞の学習はほぼ日本語を学習してから一年ぐらいの時期なので、学習者の第二言語が発達している中に定着させないと、上級学習者でも混乱が生じやすいと考えられる。

以上の結果について、「習得されている」場合を「○」で、「習得されているとは言えない」場合を「△」で、「習得されていない」場合を「×」で示すと、表2のように、まとめることができる。

表 2 学習者による習得状況

四種	八類	上位群	中位群	下位群
(1)	(1)－A	△	×	×
	(1)－B	○	△	△
	(1)－C	△	×	×
(2)	(2)－A	△	△	×
	(2)－B	×	×	×
(3)	(3)－A	×	×	×
	(3)－B	×	×	×
(4)	(4)	△	△	△

V. 考察

第5章では中国国内の学習者における二字漢語動詞の習得状況を明らかにした。李(2012)における日本国内の学習者の習得率は「(1)、(4)、(3)、(2)」の順番に対し、中国国内の学習者の習得率は「(4)、(1)・(2)、(3)」である。この結果は学習環境という要因が習得に影響を与える可能性を示唆している。日本国内の学習者は教室指導と母語話者からのインプットなどで日本語に接触しているが、中国国内の学習者は教室指導と辞書・教科書のみの接触である場合が多い。そのため、学習環境と辞書・教科書の記述という二つの面から分析する必要があると考えられる。

1. 学習環境の相違について

迫田(2002)では、第二言語習得において、目標言語圏で学習しているのか、自国で学習しているのかという環境の相違が言語の習得に影響を与えると述べている。李(2012)によると日本国内の学習者は意味用法による正用率が最も低かったが、本調査の学習者は活用語尾と共起性による正用率が最も低かった。これは、日本国内の学習者は直接法で教えられているため、授業を受ける際に、日中両言語の比較が行われていないことが要因と考えられる。中国国内の学習者と比較して、日本国内の学習者は母語話者からのインプットによって語彙の共起をしているが、日中両言語の意味用法に関する区別が明確に学習されていないということがその原因の一つであると考えられる。一方、中国国内の学習者は日本語を使用する機会が少ないため、テンス・アスペクト・ボイスについての習得率が低いと推測できる。勿論、学習環境のインプットも個人差により異なるので、さらに調査する必要があると考えられる。

2. 辞書・教科書の記述

フェイスシートの記述から、学習者が使用している辞書が『広辞苑』・『新明解国語辞典』・『日漢大辞典』・『クラウン漢日辞典』・『現代漢語詞典』³⁾・『新編日語』⁴⁾であることが分かった。以上の辞書・教科書における二字漢語動詞の品詞性や用法の記述を整理すると表2のとおりである。「自他の記述がある」場合は◎で、「自他の記述がないが動詞としての例文がある」場合は□で、「名詞しかない例文」の場合は▽で、「用法を記述されていない」場合は⊗で示した。

表3 (1)に関する辞書と教科書の記述

分類	調査語	『広辞苑』	『新明解』	『日漢大辞典』	『クラウン』	『新編日語』
(1) A	充実する	⊗	◎	◎	□	⊗
	興奮する	⊗	◎	◎	□	▽
	努力する	⊗	◎	◎	□	⊗
	一致する	▽	◎	◎	□	⊗
	一貫する	⊗	◎	◎	□	⊗
(1) B	普及する	▽	◎	◎	□	◎
	向上する	□	◎	◎	□	▽
	発展する	□	◎	◎	□	▽
	感動する	□	◎	◎	□	◎
	満足する	□	◎	◎	□	◎
(1) C	注意する	□	◎	◎	□	◎
	挑戦する	□	◎	◎	▽	⊗
	反対する	□	◎	◎	□	▽
	干渉する	□	◎	◎	⊗	⊗
	参加する	▽	◎	◎	□	◎

表3から見ると、二字漢語動詞に関する辞書の記述について、自他動詞が明示的に記述されているのは『新明解国語辞典』・『日漢大辞典』である。『広辞苑』には自他動詞に関する記述がまったくないことがわかった。『クラウン漢日辞典』は自他動詞が明示的に記述されていないが、動詞としての例文が見られる。この結果は学習者が自他動詞に関する語彙を調べる際に、『新明解国語辞典』・『日漢大辞典』を選択することが求められることを示唆している。従って、以下の(2)(3)(4)の分類は学習者が使用している教科書のみの分析になる。

表 4 (2)－Aに関する教科書の記述

分類	調査語	『新編日語』
(2) A	理解する	⊗
	了解する	⊗
	予想する	◎
	想像する	⊗
	独立する	⊗
	自立する	▽
	改正する	⊗
	訂正する	⊗
	発見する	⊗

表 5 (2)－Bに関する教科書の記述

分類	調査語	『新編日語』
(2) B	体験する	◎
	実感する	⊗
	看病する	⊗
	診察する	⊗
	勃発する	⊗
	爆発する	⊗
	緊張する	◎
	支配する	◎
	把握する	⊗

表 6 (3)－Aに関する教科書の記述

分類	調査語	『新編日語』
(3) A	相談する	◎
	心配する	◎
	解放する	◎
	向上する	▽
	解決する	⊗

表 7 (3)－Bに関する教科書の記述

分類	調査語	『新編日語』
(3) B	感謝する	◎
	成長する	▽
	発展する	▽
	理解する	⊗
	減少する	▽

表 8 (4)に関する教科書の記述

分類	調査語	『新編日語』
(4)	体験する	◎
	解決する	⊗
	決意する	⊗
	依頼する	⊗
	生活する	▽

表4のように、『新編日語』で既に学習したのは1-(B)、(1)-C、(1)-Aという順番であり、品詞性及び自他動詞に関する習得率と高い相関を持っていると言える。表5～表8から見ると、(2)(3)(4)という分類に関する『新編日語』の記述が二字漢語動詞の習得率に影響を与える可能性があるが、必ずしも習得率と高い相関を持っているとは断言できない。

従って、辞書・教科書の記述は二字漢語動詞の習得率に影響を与える可能性があるが、さらに調査する必要があると考えられる。

12 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について（論文） —中国国内の学習者を調査対象として—

おわりに

本稿では、李(2012)における作文の誤用例を問題文として、中国国内の学習者にアンケート調査を行うことによって、学習者による四種八類の二字漢語動詞に関する習得状況を明らかにした。具体的に、以下の通りである。

1) 学習者の習得率は(4)助詞に関する誤用、(1)品詞性及び自他動詞に関する誤用・(2)意味用法に関する誤用、(3)活用語尾と共起性に関する誤用という順番になっている。

2) 品詞性及び自他動詞の習得において、従来注目された自他動詞より品詞性の相違による二字漢語動詞のほうが習得されにくいことがわかった。

3) 日本国内の学習者は意味用法に関する習得率が最も低いのに対し、中国国内の学習者は活用語尾及び共起性に関するものが最も習得しにくい。

4) 助詞に関する習得率は最も高いことがわかった。

5) 学習環境・辞書と教科書の記述が二字漢語動詞の習得に影響を与える可能性が確認された。

なお、本稿は学習環境、辞書・教科書の記述等の要因の可能性を指摘するのみであった。今後は、学習環境、他の教科書などの要因を個別に取り上げ、さらに調査、分析することで二字漢語動詞の習得に関わる要因についてより詳細に明らかにしたい。また、他国の学習者における二字漢語動詞の習得との相違点について調査をしたい。

注

- 1) 李(2012)では学習者の作文における 2010 上 63・2009 中 22 という二つの誤用例が挙げられた。
- 2) アンケートにおける 1-1)・1-17)・1-23)は庵(2008)を参照して作成した設問文である。
- 3) 新村(2008)『広辞苑』第六版・山田(2012)『新明解国語辞典』第七版・日本講談社(2002)『日漢大辞典』・松岡(2001)『クラウン漢日辞典』・中国社会科学院語言研究所(2012)『現代漢語詞典』を参照した。
- 4) 上海外国語教育出版社(1994)中国の大学における日本語専攻で使われている教科書で、全部で4冊ある。

参考文献

- 影山太郎(1993)、『文法と語形成』ひつじ書房。
- 迫田久美子(2002)、『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク。
- 文化庁(1978)、『中国語と対応する漢語—日本語教育研究資料』大蔵省印刷。
- 松岡栄氏(2001)、『クラウン中日辞典』三省堂。
- 新村出(2008)、『広辞苑』第6版、岩波書店。

- 中国社会科学院語言研究所（2012）、『現代漢語詞典』。
- 日本講談社（2002）、『日漢大辞典』第1版、上海訳文出版社。
- 山田衷雄（2011）、『新明解国語辞典』第7版、三省堂。
- 庵功雄（2008）、「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学センター紀要』第11号、47-63頁。
- 石堅・王健康（1983）、「日中同形語における文法的ズレ」『日本語・中国語対応表現用例集』v、54-67頁。
- 河住有希子（2005）、「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』、53-65頁。
- 金丹（2017）、「日中同形語における二文字漢語についての一考察」『東京外国語大学記述言語学論集』第13号、87-94頁。
- 候仁峰（1997）、「日中言語における同形語の品詞の相違についての再考察」『日本学研究』、78-88頁。
- 小林英樹（2000）、「漢語動名詞の自他」『日本語教育』第107号、75-84頁。
- 五味政信・今村和宏・石黒圭（2006）、「日中語の品詞のズレー二字漢語の動詞性をめぐって」『一橋大学留学センター紀要』、3-13頁。
- 莊巖（2001）、「日中同形語の意味相違についての考察」『ICU日本語教育研究センター紀要』第10号、67-70頁。
- 竹田野美（2005）、「日中同形類義語」『人間文化研究科年報』第20号奈良女子大学、335-342頁。
- 張善実（2008）、「漢語動詞の二格構文に関する誤用調査—中国人日本語学習者を対象に」『言葉と文化』、34-48頁。
- 張麟声（2009）、「日中両語の自他動詞の対照研究」『中国語話者のための日本語教育研究』第12号、12-45頁。
- 吉田雅子（2011）、「漢語動詞の日中対比」『専修大学外国語教育論集』第39号、39-56頁。
- 李愛華（2006）、「中国人日本語学習者による漢語の意味習得」『筑波大学地域研究』第26号、185-203頁。
- 李惠（2012）、「中国人学習者による日本語作文における二字漢語動詞の誤用について」『首都大学東京日本語研究』第32号、117-129頁。

添付資料

アンケート

1-1) 部屋の換気_____。

①を注意する ②に注意する ③は注意する ④が注意する

1-2) 今の生活は疲れているが、_____と思う。

14 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の習得について（論文）
—中国国内の学習者を調査対象として—

①充実だ ②充実な ③充実 ④充実している

1-3) できるだけ早くこの新製品を_____。

①普及しよう ②普及されよう ③普及させよう ④普及させられよう

1-4) 自分の限界_____と思います。

①に挑戦 ②に挑戦しよう ③を挑戦 ④を挑戦しよう

1-5) 私は、中国にいた時とは違う生活_____。

①に体験している ②を体験している ③は体験している ④が体験している

1-6) もっと我が国の社会福祉を_____たほうがいい。

①向上し ②向上され ③向上させられ ④向上させ

1-7) 「月日の経つのは早いものだ」という言葉は、子供の時にはあまり_____。

①得できなかった ②体験できなかった ③直感できなかった ④実感できなかった

1-8) 私はそのやり方_____。

①に反対する ②を反対する ③が反対する ④へ反対する

1-9) 私のこと_____ないでください。

①を干渉し ②が干渉し ③は干渉し ④に干渉し

1-10) 彼女は_____一晩眠れなかったそうだ。

①興奮に ②興奮なので ③興奮して ④興奮だったので

1-11) 日本の文化_____。

①を理解したい ②を了解したい ③を認識したい ④を承知したい

1-12) 我々は祖国の経済を_____なければならない。

①発展させ ②発展し ③発展する ④発展され

1-13) 将来の人生がどうなるか色々なことを_____。

①予想した ②予測した ③回想した ④想像した

1-14) 友だちと一緒に買い物をしたり、イベント_____して、寂しくなかったです。

①に参加したり ②が参加したり ③を参加したり ④へ参加したり

1-15) 私は熱があったので、午前中に病院で_____。

①看病した ②看護した ③診察をうけた ④診察した

1-16) みんな_____日本語の勉強をしています。

①努力して ②努力に ③努力した ④努力な

1-17) 戦争が_____。

①勃発した ②爆発した ③活発した ④出発した

1-18) 私はもっと強くて_____人間になった。

①独立した ②自主した ③自立した ④自決した

1-19) 先生たちに応援をいただいて、ほんとうに_____。

①感動しました ②感動されました ③感動られました ④感動させました

1-20) 双方の見方は_____ことが分った。

- ①一致の ②一致な ③一致している ④一致だ

1-21) 特にアクセントを_____くれました。

- ①改正して ②訂正して ③更改して ④改定して

1-22) 周りの人を_____, もっと優秀な人材になりたい。

- ①満足して ②満足されて ③満足させて ④満足られて

1-23) 我々は_____この方針を堅持してきた。

- ①一貫に ②一貫して ③一貫で ④一貫した

1-24) 大学の学習は科目が少ないので、_____。

- ①緊張ではありません ②忙しくありません ③緊張していません ④忙しいです

1-25) 私は自分の人生を_____と思っている。

- ①思いどおりにしたい ②支配したい ③把握したい ④主宰したい

1-26) 彼女はこんなに美しかったのか、と私は今頃_____。

- ①気付いた ②発見した ③発見する ④気付く

1-27) こんな問題_____しました。

- ①が解決 ②を解決 ③に解決 ④の解決

1-28) 留学_____ことは人生を変えるきっかけになるかもしれない。

- ①を決意する ②に決意する ③が決意する ④は決意する

1-29) 私は、国書日本語学校_____。

- ①を依頼しました ②が依頼しました ③は依頼しました ④に依頼しました

1-30) 初めて、知らない環境_____ことは、本当に不安でした。

- ①で生活する ②に生活する ③を生活する ④へ生活する

2-1) 私に悩みがあった時、先生はすぐ_____。(相談)

2-2) この二年間、ほんとうに先生たちには_____。(感謝)

2-3) 私をいろいろ助けて、_____本当にありがとう。(心配)

2-4) 私はこの一年間で自分が_____ことを実感しました。(成長)

2-5) やっと試験が終わって、山のような勉強から_____。(解放)

2-6) これから、中国はますます_____だろう。(発展)

2-7) 学生が自分の能力を_____た。(向上)

2-8) だんだん日本のことを_____なり、慣れてきました。(理解)

2-9) 何かあったら、自分で_____なければならない。(解決)

2-10) たばこを吸う日本人の数が_____こともわかってきた。(減少)

**Acquisition of two-character *suru* verbs by Chinese learners of Japanese:
Targeted at Chinese domestic Japanese learners**

LI, HUI

Abstract

In this paper, I take up the two-characters *suru* verbs of words same as Chinese "jitugen suru,rikai *suru*" and using the misuse of sentences in Li (2012) as a problem sentence,the purpose is to clarify the acquisition situation by Chinese domestic learners

As a result, 4 types of misuse were classified into 8 types, and the learner's acquisition situation was clarified. Specifically, it is as follows. 1) Learners' acquisition rates are in the order of (4), (1) (2) and (3). 2) In the acquisition of part-of-speech and self-transitive verbs, it was found that the two-character *suru* verbs due to differences in part-of-speech are harder to be acquired than the self-transitive verbs that have been noted conventionally. 3)While the learners in Japan have the lowest rate of learning about semantic usage, those in China are the hardest to learn inflection and co-occurrence. 4) In the learning environment, learners in Japan are taught directly by the law, so it is considered that the comparison between Japanese and Chinese languages is not performed when taking classes. Compared with learners in China, learners in Japan co-occurred vocabulary with input from native speakers, but the distinction regarding semantic usage of both Japanese and Chinese languages was not clearly learned Is considered to be one of the causes. On the other hand, Chinese learners are less likely to use Japanese, so the rate of learning about tense aspect voice is considered to be low. 5) Finally, it has been confirmed that the dictionary and textbook descriptions may influence the acquisition of two-character *suru* verbs.

Keywords : Two-character *suru* verbs, learning environment, Japanese language ability, dictionaries and textbooks.

中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの 使用実態と学習過程について —アンケート調査を中心に—

馮 荷菁（九州大学大学院）

要旨

今までの研究は、日本語の会話におけるスピーチレベル・シフトの生起の条件・機能に焦点を当てて分析されてきたが、従来上級日本語学習者にとって習得困難な学習項目の一つとされているスピーチレベル・シフトの使用意識が未だに明らかにされていないのが現状である。そこで、本研究では、中国人日本語学習者を対象とするアンケート調査を通し、学習者のスピーチレベル・シフトの使用意識の究明を試行した。その結果、中国国内における日本語教育は、初級レベルからスピーチレベル・シフトの指導上に問題がみられたため、中国人日本語学習者（留学前）のスピーチレベル・シフトの使用意識が不足していることがわかった。また、初級レベルの使用意識の不足により上級レベルにまで影響を与えるという点は、上級学習者であってもスピーチレベル・シフトをなかなかうまく使用できないという問題の根本的な原因であると考えられる。この結果は今後の中国の日本語教育、具体的に中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの指導に寄与できればと考える。

キーワード： スピーチレベル、スピーチレベル・シフト、使用意識

はじめに

日本語のスピーチレベル・シフトに関する先行研究の多くは、会話におけるスピーチレベル・シフトの機能分析である。だが、日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用に関する意識調査が未だにされていない。そのため、日本語学習者のスピーチレベル・シフト使用の問題点を明らかにすることが難しくなり、母語話者のように巧みにスピーチレベル・シフトを使い、円滑にコミュニケーションを取ることも一層難しくなるであろう。

そこで、本研究では、中国人日本語学習者を対象にスピーチレベル・シフトの使用実態と実際の学習過程を把握するうえで、スピーチレベル・シフトの使用の問題点を明らかにしたい。このような調査を通じて、今後の日本語教育における中国人日本語学習者に対するスピーチレベル・シフトの指導に寄与できればと考える。

I. 先行研究

1. スピーチレベル・シフトの機能

日本語のスピーチレベル・シフトは、生田・井出（1983）で取り上げられて以来、シフトの生起する条件及びその機能が明らかにされてきた。先駆的な論考である生田・井出（1983）は談話内で敬語レベルの使い分けがみられる場合、発話の敬語レベルを決定する要因を、①社会的コンテキスト、②話者の心的態度、③談話の展開という3点を挙げた。また、宇佐美（1995）と三牧（1993）はそれぞれ心的距離の調節と談話の展開標識の二つの機能を分析している。宇佐美（1995）は、スピーチレベルを「+・0→」¹⁾と逆の「→+・0」²⁾へシフトすることによって心的距離を縮小したり拡大したりする機能、すなわち、心的距離の調節ストラテジーとしての機能が指摘されてきた。また、相手のスピーチレベルに合わせることによって、心的距離を縮めており相手への共感を示すことにもなると指摘している。一方、三牧（1993）は、テレビ対談番組におけるスピーチレベル・シフトの談話展開標識の機能を、「(1) 新しい話題への移行、(2) 重要部分（結論・結末・意志・事実・論点等）の明示、強調 (3) 注釈・補足・独話等の挿入」（p. 39）の3点を挙げた。

2. スピーチレベル・シフト研究の現状、問題と今後の課題

陳（2004）によると、スピーチレベル・シフト研究が共通している分析の枠組み上の問題は、発話単位の認定、スピーチレベルの分類、シフトの捉え方という3点に分けられる。発話単位の認定について、「スピーチレベル・シフト研究を行うには、まず談話を一文または一発話ずつに区切る必要がある」（p. 34）ことを提示し、先行研究では明記されていないと指摘している。スピーチレベルの分類上の問題点として、尊敬語などを含む発話をすべて「デス・マス体」と同レベルと扱うのは妥当ではなく、「終助詞と発話のスピーチレベルとの関係は不明」（p. 36）であり、「デス・マス体」でも「ダ体」³⁾でもないものに関して先行研究では一致していないことが挙げられる。シフトの捉え方の問題点には、「会話の場合、相手の発話のスピーチレベルとの関係」（p. 37）及び「基本レベル」⁴⁾以外の文・発話の扱い方」（p. 37）の2点がある。

また、陳（2004）は日本語学における課題には、a. 電子メール、チャットなど書かれた談話を資料とする研究、b. 友人同士の談話についての研究、c. 日本人児童・学習者の習得研究、d. JFLとJSL⁵⁾の学習者の比較研究、e. スピーチレベル・シフト現象を有する言語との対照研究の五つがある（p. 39）一方、スピーチレベル・シフトを教科書への導入と教育現場での指導が日本語教育における課題であると主張している。

宮武（2009）は、日本語会話における今後のスピーチレベル研究の課題として、「1) 先行研究で使用された用語の整理と、その研究で使用する用語の明確な定義、2) スピーチレベルの分類の精緻化、3) 研究目的に適したデータの選択、4) 準自然会話を扱う研究においてあまり扱われていない要因についての解明」（p. 318-319）の4点を挙げた。

上述の通り、スピーチレベル・シフトの研究は機能分析と現状・課題分析のものに限られ、日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用に関する意識調査が未だにされていない。そこで、本研究では、次の2点についてさらなる研究が必要であると思われる。

- (1) 中国人日本語学習者のスピーチレベルに関する学習経験
- (2) 中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用に関する認識

II. 調査方法

上記2点の研究の必要性に基づき、本研究では、主に中国人日本語学習者が実際にどのようにスピーチレベル・シフトを学習してきたか、そしてどのようにスピーチレベル・シフトを使用しているかを明らかにするため、アンケート調査を実施した。

実施概要について、本調査は、2019年1月、中国人日本語学習者30名に協力を求めアンケート調査票に記入してもらった。調査の手順については、まず、協力者に調査の目的、趣旨を十分に理解してもらってから、アンケート調査を実施した。次に、調査票に協力者の年齢、性別、学習期間を入力してもらい、その後、15項目の問題をよく読んで適切な選択肢あるいは記述を記入してもらった。

調査票の言語について、本調査では全ての学習者は中国語母語話者であるため、中国語の調査票を使用した。ただし、日本語の訳文については、アンケートの項目と回答を分析する際に使うため、できるだけ中国語の語句・語法に従って忠実に翻訳した。なお、本研究の調査対象者は中国人日本語学習者30名で、すべてN2合格者であると限定した。調査対象者の詳細を以下の表1に示した。

表1 調査対象者の一覧⁶⁾

調査対象者	年齢	性別	日本語の学習年数	日本留学の有無・期間	調査対象者	年齢	性別	日本語の学習年数	日本留学の有無・期間
CSM1	26	男	3年	有・4年	CSF16	27	女	3年	有・2年6ヶ月
CSF2	24	女	5年4ヶ月	有・2年9ヶ月	CSF17	24	女	2年	有・3年5ヶ月
CSF3	29	女	11年6ヶ月	有・4年	CSF18	26	女	7年	有・5年
CSF4	27	女	8年	有・3年	CSF19	28	女	10年	有・2年
CSM5	26	男	6年	有・2年6ヶ月	CSF20	28	女	4年	有・5年
CSF6	25	女	7年5ヶ月	有・4年10ヶ月	CSM21	27	男	5年	有・4年
CSF7	26	女	8年	有・2年	CFM22	22	男	3年6ヶ月	無
CSF8	32	女	14年	有・4年	CFM23	18	男	3年	無
CSF9	26	女	5年	有・2年	CFF24	19	女	1年5ヶ月	無
CFF10	26	女	7年6ヶ月	無	CFM25	21	男	2年	無
CSF11	26	女	8年5ヶ月	有・2年3ヶ月	CFM26	20	男	3年	無

CFF12	22	女	6年6ヶ月	無	CFM27	20	男	3年	無
CFF13	25	女	9年	無	CFF28	20	女	2年6ヶ月	無
CSF14	27	女	8年3ヶ月	有・3年11ヶ月	CSF29	25	女	6年	有・5年
CSF15	31	女	1年	有・3年	CSF30	26	女	8年4ヶ月	有・6年

Ⅲ. アンケート調査の結果と分析

1. 中国国内の日本語教育におけるスピーチレベル・シフトの学習状況

質問1の結果を表す表2によると、中国人日本語学習者30名のうち、27名は日本語学習の1年目にスピーチレベルを勉強し始め、残りの3名は2年目から勉強し始めたことがわかった。すなわち、学習者は初級・中級からスピーチレベルに触れたということである。

表2 質問1（日本語学習の何年目に、スピーチレベル（「です・ます体」、「だ・である体」）を勉強し始めましたか。）の結果

何年目	人数（比率）
1年目	27（90%）
2年目	3（10%）

表3 質問2（学部生のとき、中国国内で使用されていた日本語教材は以下のどれですか。）の結果

日本語教材	人数（比率）
『標準日本語』（人民教育出版社）	6（20.00%）
『総合日語』（北京大学出版社）	9（30.00%）
『新編日語』（上海外語教育出版社）	7（23.33%）
『みんなの日本語』（外語教学と研究出版社）	1（3.33%）
その他：『基礎日本語』（外語教学と研究出版社）	3（10%）
『新大学日本語』（大連理工大学出版社）	1（3.33%）
『新経典日本語』（外語教学と研究出版社）	1（3.33%）
西安外国語大学自編日語精読教材	1（3.33%）
北京第二外国語大学自編日語精読教材	1（3.33%）

表3からわかるように、中国国内で様々な教材が使用されている。また、表4によると、スピーチレベルの内容を「b. ある程度紹介している」教材が最も多く、「a. 詳しく紹介している」教材は全体の3分の1を占めているのに対し、「c. ほとんど紹介していない」教材はなかったことがみられた。

表4 質問3（使用した教材の中では、スピーチレベルの内容をどれくらい紹介していますか。）の結果

項目	人数（比率）
a. 詳しく紹介している	10（33.33%）
b. ある程度紹介している	20（66.67%）
c. ほとんど紹介していない	0（0%）

教材では具体的にどのようにスピーチレベルの内容を紹介しているかについて、本研究では、『標準日本語』（人民教育出版社）中級Ⅰを例に取り分析する。

『標準日本語』においては、スピーチレベルを「普通体」と「丁寧体」に分けたうえ、「普通体」と「丁寧体」をそれぞれ「動詞、形容詞の辞書形+「～だ」という形式で文を完結する場合、このスピーチレベルは普通体と呼ぶ。その他、普通体には「～である」もある」（筆者訳）⁷⁾、「文末の動詞は「～ます形」あるいは「～です形」で完結する場合は丁寧体と呼ぶ」と定義している⁸⁾。また、スピーチレベルに関する説明・解釈について、「普通体は口語体で、親しい友人あるいは家族の間で使用される。あまり親しくない人に対して使用することは失礼である。丁寧体は文書体では、日記、新聞記事、辞書釈明および小説などで広く使用されている。敬体は口語体では、親しい友人あるいは家族以外の人に広く使用される。したがって、本書は初級から丁寧体を勉強しはじめた。丁寧体は文書体では、手紙及び広告などで使用される。」⁹⁾と書かれている。さらに、普通体と丁寧体のシフトについて、「普通体の文章と丁寧体の文章には、明確な区別があるため、一つの文章の中に普通体と丁寧体を混用しないでください」（p. 33）と強調している。

図1 質問4（先生はどれぐらいの時間でスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを説明しましたか。）の結果

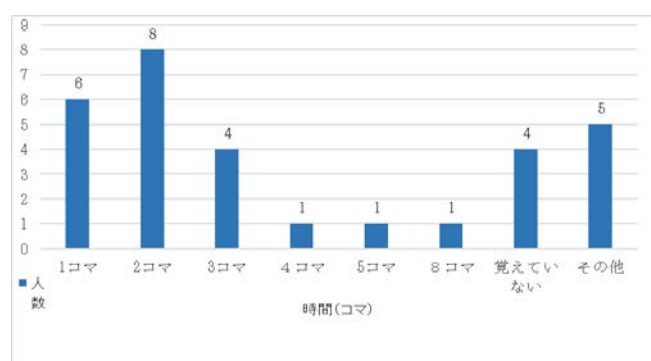


図1は質問4の結果を示したものである。図1により、およそ半分の学習者（14人）は1コマと2コマを選んでいることがわかった。また、1コマを選んだ6人のうち、「1コマがかかった。先生は後の授業でもよく触れる」¹⁰⁾（CSF8）という自由記述がみられた。そして、2コマを選択した8人のうち、「2コマぐらいかかった。主に敬体（丁寧体）について説明した」（CSF14）という自由記述も観察された。さらに、「その他」の中、「3～5コマ」、

「6 コマぐらい」、「10 コマ以上」、「たくさん」、「特に説明していないが、授業の練習ではよく行っている」という回答がみられた。

図2 質問5（授業以外に、どれぐらいの時間でスピーチレベル・シフトを
復習・勉強しましたか。）の結果

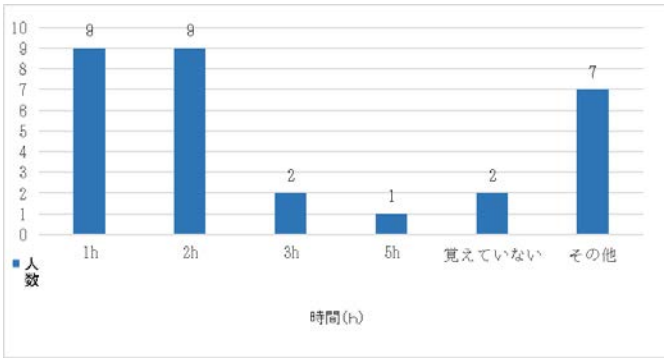


図2は質問5の結果を示している。ここで言う復習・勉強は、授業の後で行われる自習、あるいは趣味でドラマや映画などを見る時の勉強のことを指す。図2をみると、半分以上の学習者は1時間と2時間を選択している。「その他」の中、「30時間ぐらい」（一人）、「一ヶ月」（一人）、「かなり長い時間がかかった」（二人）、「復習しなかった」（二人）、「復習時間と関係のないことを記入した」（一人）といった内容がみられた。

上記からわかるように、かなり長い時間をかけて復習・勉強した学習者と、あまり復習・勉強しなかった学習者が両方いる。さらに、「復習しなかった」理由について、「わざわざ時間をかけて復習しなかった。また復習する必要がなく、日常の会話のうちにだんだん習得できると思う」（CSF14）という自由記述がみられた。そして、復習時間を書かずに、「当時難しい内容だとは思わなかった。実は過去も今もなかなか身につけない感じがする」

（CSF8）という自由記述もみられた。これは初級レベルの時、スピーチレベル・シフトに関する使用の意識が欠けていることが言えるのではないかな。

表5 質問6（初級レベルの時、日本語を話すうちに、文末に意識的に「です・ます体」
あるいは「だ・である体」を使ったことがありますか。）の結果

項目	人数（比率）
a. ある	26（86.67%）
b. なし	4（13.33%）

表5からわかるように、初級レベルの時、26人は文末に意識的に「です・ます体」あるいは「だ・である体」を使ったことがある。その理由をそれぞれ表6と表7に示した。

表 6 質問 7 (意識的に「です・ます体」を使った理由は何ですか。)の結果

意識的に「です・ます体」を使った理由	
1. 教材からの影響	教科書の例文がそう書かれている (CSM1)、日本語の文の基本的な型 (CFM26)、(教科書からの) ¹¹⁾ 文型を覚える (CFF28)
2. 尊敬などの表明	タメ口を使わない (CSF2)、尊敬を表す (CSM5、CSF29)、ポライトを示す (CSF6、CSM8、CFF12、CFM27)、敬意を表す (CFF10、CSF16)
3. 指導者からの影響	(教師から) 要求されている (CSF9、CFF13)、教師から失礼にならないと強調されているから、習慣になる (CSF14)
4. 指導方法による影響	変形の練習 (CSF4)、敬語の使用 (CSF4、CSF7、CSF15) (をする時使用している)、丁寧体を先に勉強した (CFM22)
5. 学習者自身の意識	普通体と丁寧体の使用場面が異なるので、かなり注意して使用している (CSF3)、日本語の文末に「です・ます体」で完結すると強く思う (CSF11)、習慣 (CSF17)、読みやすい (CFM23)、初心者は比較的にスピーチレベルのきを準ずる (CFM25)

表 7 質問 8 (意識的に「だ・である体」を使った理由は何ですか。)の結果

意識的に「だ・である体」を使った理由	
1. 文書体の表現	作文/レポート/論文などの文書を書く (CSF2、CSF3、CSM5、CSM8、CFF10、CFF12、CSF16、CSF17、CFM22)
2. 親しい間柄の表明	親密感を示す (CSF3、CSF6、CSF29)、友人同士で使う (CSF16)、相手との距離を縮める (CFM22)
3. 日本語母語話者からの影響	口語化、日本人っぽく感じる、ドラマなどから倣う (CSF4)
4. 指導者からの影響	(教師からの) 要求がある (CSF9)、文の完結性 (を考慮する) (CSF15、CSF29)、普通体を学んだ後 (CFF28)
5. 学習者自身の意識	普通体は「です・ます体」より高級感を持つと思う (CSF11)、留学してからずっと「です・ます体」を使うことは相手にプレッシャーをかけるため、「だ体」を多く使う必要があると意識しはじめた (CSF14)
6. 教材からの影響	教材から学んだ (CFF13)、日本語の文の基本的な型 (CFM26)

表 6 と表 7 はそれぞれ質問 7 と 8、すなわち、意識的に「です・ます体」と「だ・である体」を使用した理由についてまとめたものである。

表 6 により、学習者は意識的に「です・ます体」を使用した理由には、1. 教材からの影響、2. 尊敬などの表明、3. 指導者からの影響、4. 指導方法による影響、5. 学習者自身の意識の五つが挙げられる。そして、「5. 学習者自身の意識」は 1～4 の影響によるものだと考えられる。例えば、学習者は丁寧体を先に勉強した (CFM22) から、日本語の文末に「で

す・ます体」で完結すると強く思い（CSF11）、段々読みやすく（CFM23）なり習慣（CSF17）として定着されたことが十分に考え得る。表 6 により、中国国内の日本語教育における「です・ます体」の学習と使用は、教材、指導者と指導方法に大きく依存していると言えよう。

また、表 7 をみると、学習者は意識的に「だ・である体」を使用した理由として、1. 文書体の表現、2. 親しい間柄の表明、3. 日本語母語話者からの影響、4. 指導者からの影響、5. 学習者自身の意識、6. 教材からの影響の六つが挙げられる。そのうち、「3. 日本語母語話者からの影響」におけるドラマから母語話者の日本語を倣う（CSF4）ことと、「5. 学習者自身の意識」における留学後の「だ・である体」の使用意識が変化した（CSF14）ことから（2 節を参照）、中国国内の日本語教育における「だ・である体」の学習と使用は「です・ます体」の学習と使用より多元的かつ自主的であることが言えよう。

表 8 質問 9（現在（上級レベル）は、日本語を話す時、スピーチレベル・シフトをどの程度使っていますか。）の結果

項目	人数（比率）
a. いつも、必要に応じスピーチレベル・シフトを使っている	19 (63.33%)
b. 時々スピーチレベル・シフトを使っている	9 (30%)
c. ほとんどスピーチレベル・シフトを使わない	2 (6.67%)
d. その他	0 (0%)

表 8 は質問 9 の結果を示している。表 8 により、90%以上の学習者は a と b の二項目を選択しているのに対し、c 項目を選んだ学習者がわずか二人であることがわかった。

表 9 質問 10（ほとんどスピーチレベル・シフトを使用しない（しなかった）と思う理由は以下のどれですか。）の結果

項目	人数（割合）
a. スピーチレベル・シフトの使い方を把握できないため、ミスをしたくない	12 (40%)
b. 日本語教師や日本人からスピーチレベルを話の途中から変えないほうがいいと言われた	5 (16.67%)
c. スピーチレベル・シフトの使用の重要性に気づいていない（重要だと思っていない）	13 (43.33%)
d. その他	7 (23.33%)

表 9 によると、ほとんどスピーチレベル・シフトを使用しない理由について、c 項目が最も多く選択されたことがわかった（43.33%）。これは質問 5 にみられる「当時難しい内容だとは思わなかった。実は過去も今もなかなか身につけない感じがする」（CSF8）の記述から、スピーチレベル・シフトの使用の重要性に関する意識が欠けていることを裏付けられるのではないかと考えられる。また、「その他」のうち、「完全にスピーチレベル・シフトができない

わけでもなく、自分の安全な場所に滞在する傾向がある（普段の使用するスピーチレベルに慣れているから、シフトを挑戦しない）」（CSF14）（3 節を参照）、「基本的に丁寧体を使う」（CSF16）、「同一相手と会話しているうちに、スピーチレベルをほぼシフトしない。当然言い間違えた時もある」（CSF20）、「親しい友人との会話では、スピーチレベル・シフトが必要ではない」（CSF19）といった記述¹²⁾がみられた。

2. 日本留学後のスピーチレベル・シフトの使用状況

表 1 の調査対象者の一覧により、中国人日本語学習者 30 名のうち、日本留学経験者は 20 名であり、留学期間は 2 年から 6 年まで様々であることがわかった。本節は 20 名の日本留学経験者向けの質問 11～14 を分析する。なお、質問 11（日本留学経験の有無）と 12（日本留学期間）は表 1 に示したため、自由記述の質問 13 と 14 を具体的に分析していく。

表 10 質問 13（日本へ留学した後、教科書で勉強したスピーチレベル・シフトの知識と実際の会話（特に日本語母語話者との会話）でのスピーチレベル・シフトの間に、相違点を感じたことがありますか。）

の結果

教科書の知識と実際の会話におけるスピーチレベル・シフトの相違点	
1. 口語体・方言・略語の多用	口語体を多く使用する（CSF4）、日常会話ではよく方言と略語を使用する（CSF16）、単にスピーチレベル・シフトの問題ではなく、日本語母語話者の使用する日常的な略語ができないことが実際の問題である（CSF19）
2. スピーチレベル・シフトの巧みさ	<p>日本語母語話者は上下関係/親疎関係により巧みにスピーチレベル・シフトを使用している。たとえ上下関係にしても公的場面では丁寧体、私的場面では普通体の使用がみられる（CSF6）</p> <p>教材では簡単に（スピーチレベルの）区別だけを説明した。実際の会話ではもっと巧みに使用する。日本語母語話者同士の会話を観察すると、場所/場面によりスピーチレベルをシフトしていることが分かった。（しかし）日本語母語話者との会話では、目上の人は私（目下）に対して「です・ます体」を使用し、逆に私は目上に対してよく無意識的に普通体を使うことがある。もちろん書く時はできるだけ「です・ます体」を使う（CSF8）</p> <p>教材ではスピーチレベル・シフトがあまりみられなく、実際のコミュニケーションでは気づいた（CSF29）</p> <p>日本語母語話者と接触してから、スピーチレベル・シフトがよく使用されていることに気づいた。しかし、学習者にとって概ね場面/対象により（スピーチレベルを）区別するしかない（CSF30）</p>
3. 一つのス	日本語母語話者は外国人が日本語の変形をうまく身につけないと考慮した上、普通体を使う（CSM5）、日本で「です・ます体」を使用する機会が「だ・である体」より多いような気がする（CSF11）

スピーチレベルの維持 ¹³⁾	日本語母語話者は一つのスピーチレベルを長く維持することができるから、突然のシフトにより何かを強調しているのかもしれない、あるいは何らかの効果を持ち出すのではないと思う。こう考えたのは自分の研究と似ており、興味を持っているからである。しかし、自分は会話する時、伝えようとする内容に集中しているから、シフトの機能という問題を考える余裕がない（CSF14）
---------------------------	---

表 10 によると、実際の会話におけるスピーチレベル・シフトの使用の特徴として、1. 口語体・方言・略語の多用、2. スピーチレベル・シフトの巧みさ、3. 一つのスピーチレベルの維持の 3 点が挙げられる。

日本へ留学した後、日本語母語話者とコミュニケーションする機会が多くなるにつれ、日本語母語話者の使用するスピーチレベル・シフトの複雑さに気づいてきた学習者が多いことがみられる。その複雑さに関して、具体的に語彙レベルにおける口語体・方言・略語の多用（CSF4、CSF16、CSF19）と、談話レベルにおける参加者の属性とスピーチレベル・シフトの関係（CSF6、CSF8）により反映される。「単にスピーチレベル・シフトの問題ではなく、日本語母語話者の使用する日常的な略語ができないことが問題である」（CSF19）と述べているように、語彙レベルとスピーチレベル・シフトは切っても切れない関係を有している。また、実際の会話は教科書での説明と異なり（CSF8、CSF29）、場面や相手との関係（上下関係/親疎関係）などの社会的要素を考慮したうえでスピーチレベルを選択することの必要性が示される。さらに、一つのスピーチレベルの維持について分析すると、例えば、「日本語母語話者は外国人が日本語の変形をうまく身につけないと考慮した上、普通体を使う」（CSM5）のように、母語話者は外国人日本語学習者の日本語能力を知らないため、一概にフォリナートークを用い、結果的に普通体が多用しシフトの生起がみられない可能性が生じてしまう。そのほか、上級学習者であってもスピーチレベルを意識し続けることの困難さということを自由記述（CSF14）により観察できた。この点については学習者個別に問題点を発見し指導することが肝要であると三牧（2007）が指摘された。

表 11 質問 14（日本へ留学した後、スピーチレベル・シフトの使用に関する意識が変わりましたか。

具体的な経験があれば、ご記入ください。）の結果

日本留学後のスピーチレベル・シフトの使用意識の変化	
1. スピーチレベル・シフトの練習	日本語母語話者の話し方に近づこうとするために、スピーチレベル・シフトを流暢に使用することを努力する、あるいはシフトの練習をする（CSF4）
	対話相手の年齢/上下関係を判断してから、スピーチレベルを選択するようになった（CSM5）、対話者との関係を判断してから、どのスピーチレベルを選択するかを決める（CSF6）、授業では丁寧体を使わなければならない（CSF9）、先生に対して会話する時、敬語を使用する（CSF16）

2. 対話者の社会的属性による判断	<p>二人は仲が良いにもかかわらず、「です・ます体」を使い続けることは相手にストレスを与える。日本人の若者同士は普通体を使いこなしているが、(留学生の)私に気を遣い「です・ます体」の使用を維持する。その後、「だ体」を使ってみたが、相手は依然として「です・ます体」を維持していることに気づいた。また、「だ体」は相手との距離が縮められると教師からの指導は正確だが、会話の対象/場面を考慮せずに普通体を使うことができない。(例えば)アルバイト先の知合いはお客に対して普通体を使ったということは非常識だと思った (CSF14)</p> <p>日本語におけるスピーチレベル・シフトによって、話し手と聞き手との関係を反映することができる。例えば、普通体を使うことで、相手と親しくなりたいという心理を表出でき、「です・ます体」では逆に相手と一定の距離を保つ (CSF30)</p>
3. 普通体の使用	<p>普通体を多用するようになった (CSF7)、感嘆 (例えば、「かわいい」、「すごい」) の場合、たとえ正式場面/目上に対しても「です・ます体」を使わない (CSF29)</p>
4. 学習者自身の評価	<p>目上の日本語母語話者と会話する場合、目上の対話者は目下の私に「です・ます体」を使用することがあるが、私はよく無意識的に普通体を使ってしまう。(自分の)スピーチレベル・シフトの使用にあまり良くないと思う (CSF8)</p>
5. その他	<p>意識が変わったが、うまく説明できない。とにかく教科書から学んだ知識はあまり使用しない (CSF19)</p>

表 11 は日本留学後のスピーチレベル・シフトの使用意識の結果を表している。表 11 からわかるように、中国人日本語学習者は留学を契機に、日本語母語話者のスピーチレベル・シフトの複雑さに気づき、学習者自身のスピーチレベル・シフトの使用意識に影響を受けている。具体的に、日本語母語話者とうまくコミュニケーションを取るために、スピーチレベル・シフトの練習をしたり (CSF4)、スピーチレベル・シフトを使用する前に相手との関係や場面などの社会的属性を判断するようになったり (CSM5、CSF6)、普通体の使用範囲を明確になったりする (CSF29) ことがみられた。また、母語話者との会話を通して、学習者は内省しながら自身の問題点 (3 節を参照) を見出した (CSF8) ことも観察できた。さらに、使用意識という主観性を持つものを考えてもうまく説明できないという記述がみられ、結果的に教科書でのシフトの知識は実際の会話であまり使用されない (CSF19) ことが示された。これらのことから、中国人日本語学習者は日本留学後、スピーチレベル・シフトの使用意識が高まった傾向にあるということが言える。

3. 中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用上の問題点

本節では、最後の質問 15 について、全ての中国人日本語学習者は日本語を学習して以来、スピーチレベル・シフトの使用に関する問題点を自由に記述してもらった内容を分析する。

表 12 質問 15（最後に、自分自身の日本語学習を振り返ってみて、スピーチレベル・シフトの使用で失敗したことや困ったことがあれば、その問題点をご記入ください。）の結果

今までの日本語学習におけるスピーチレベル・シフトの使用上の問題点		
非 留 学 経 験 者	1. スピーチレベル・シフトの必要性	日本人とのコミュニケーションでは、（日本人は）特にシフトを重視していないことに気づいた。同じコミュニティでは、お互いの関係が固定しているから。だから、非母語話者は本当によく巧みにシフトすることが必要なのだろうか（CFF10）
	2. 指導者との相違	先生から「ます体」は日常ではあまり使用しないと言われたが、ドラマを見ると結構使っている感じがした（CFF13）
	3. シフトの難しさ	丁寧体から普通体に変わることは容易ではない。否定、過去式などでは問題を起こす可能性がある（CFM22）
	4. 学習者の意識不足	シフトを速く反応できない（CFF24） シフトに関する明確な認識がない（CFM25）
留 学 経 験 者	1. 同世代に対するスピーチレベルの選択	同世代の日本母語話者に対して、いつ「だ体」を使い、いつ「です・ます体」を使うか。そして、どうやって自分、教授、同級生、後輩を呼称するか（CSM1） 同世代に対して、どんな時に普通体に変わるかは分からない（CSM5）
	2. シフトの難しさ	普通体を使い慣れているから、丁寧体使用が必要される場面であっても不注意に普通体になってしまう。巧みにスピーチレベル・シフトをすることは学習者にとって難しい（CSF3）、日本語母語話者のスピーチレベル・シフトを観察しても、実際の会話でなかなか巧みに運用できない（CSF30） ¹⁴⁾
	3. 定型文の学習不足	変形のほか、（日常で）よく使われる用法、例えば「んだ」をより学習したい（CSF4）、「と思う」の使用（がうまく運用できない）（CSF18）
	4. 日本の人間関係に対する理解不足	文法を身につけたとしても、日本の人間関係のため、どちらのスピーチレベルを使用するかが分からない。これは一種の社会文化の問題であろう（CSF6）
	5. 一つのスピーチレベルの維持	ずっと会話の時に「です・ます体」、書く時に「だ・である体」を一貫して使用している（CSF17）
	6. 中国国内の日本語教育と日本の日本語教育の相違	（中国）国内の（日本語）教育では、「食べます」「食べました」のように、もっと文法の正確性を強調する。日本では、「食べる」「食べるんです」「食べた」「食べたんです」のような言語現象もよくみられ、文法より語用論的な運用と言語使用の流暢さを重視する（CSF21）
	7. 教材によるシフト使用の重要性の不足	そのほか、教科書での解釈により、学習者がスピーチレベル・シフトの使用の重要性を無視してしまう（CSF30）

表 12 は日本留学経験のない学習者と日本留学経験のある学習者にみられるスピーチレベル・シフトの使用上の問題点をまとめたものである。

表 12 によると、日本留学経験のない学習者のスピーチレベル・シフトの使用の問題点には、1. スピーチレベル・シフトの必要性、2. 指導者との相違、3. シフトの難しさ、4. 学習者の意識不足の 4 点がある。そのうち、問題「1. スピーチレベル・シフトの必要性」の自由記述（CFF10）と問題「4. 学習者の意識不足」の自由記述（CFM25）から、中国国内における日本語学習者はスピーチレベル・シフトの使用の必要性に関する認識が未だに喚起されていないことがみられる。この点について三牧（2007）も同様な結果が得られ、さらに会話教育における文体の系統的な指導案の一つとして、「初級段階から文体を意識させる」（p. 64）ことを提示している。

一方、日本留学経験者は比較的に多様かつ複雑な問題点を挙げていることがわかった。日本語母語話者との接触の機会を増加するとともに、スピーチレベル・シフトに影響し得る要素である対話者の社会的属性（CSM1、CSM5）と日本の人間関係（CSF6）を含める社会文化能力と社会言語能力の重要性を感じてきた学習者が多くみられる。また、初級の指導は実際の会話との相違が感じられ（CSF21）、さらに教科書での解釈によりスピーチレベル・シフトの使用の重要性を無視してしまう（CSF30）ことが観察される。

全体的にみると、たとえ上級日本語学習者になったにもかかわらず、スピーチレベル・シフトを未だにうまく使用できないことが現状であると言える。表 12 から、初級レベルでスピーチレベル・シフトの使用の必要性に意識されないこと（「4. 学習者の意識不足」）により、上級レベルになると（留学後の母語話者との会話）スピーチレベル・シフトの使用に影響を与えてしまうことがみられる。この点は上級学習者であっても、スピーチレベル・シフトをなかなかうまく使用できないという問題の根本的な原因であると考えられる。したがって、今後の中国国内の日本語教育では、三牧（2007）が提案した学習者のレベル別による系統的な指導が緊要であると考えられる。系統的な指導を実践する前に、まず指導者は初級段階からスピーチレベル・シフトを認識させることを意図した教科書へ導入することが至急ではないかと考えられる。

おわりに

本研究では、アンケートを通して中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用実態と学習過程を分析した上、スピーチレベル・シフトの使用の問題点を以下にまとめる。

1) 中国国内の日本語教育では、初級レベルでスピーチレベル・シフトの指導上（指導者、教材、指導方法など）の問題があるため、中国人日本語学習者（留学前）のスピーチレベル・シフトの使用に関する意識が不足している。

2) 初級レベルのスピーチレベル・シフトの使用意識の不足により、上級レベルのスピーチレベル・シフトの使用に影響を与える。この点は上級学習者であっても、スピーチレベル・シフトをなかなかうまく使用できないという問題の根本的な原因であると考えられる。

本研究はアンケート調査を分析したにもかかわらず、学習者間の個人差が避けられない

ことを考慮したうえ、今後は学習者個人に向けて質的分析の方法であるインタビュー調査を用い、スピーチレベル・シフトの使用意識をより深く考察したいと考えられる。

注

- 1) 宇佐美（1995）は、「+レベル」は尊敬語、謙譲語などを含む改まり度の高い発話で、「0レベル」は丁寧体を含む発話で、「-レベル」は常体を含む発話である。+から-、0から-へ移行したものを「敬語使用から不使用へのシフト」と捉え、「+・0→-」と表した。（p. 30）
- 2) 注1)と同様、宇佐美（1995）は、-から+、-から0へ移行したものの双方を「敬語不使用から使用へのシフト」と捉え、「-→+・0」と表した。（p. 30）
- 3) 「デス・マス体」と「ダ体」の片仮名表記は陳（2004）による記述である。本研究では、中国人日本語学習者は平仮名表記がより見やすいことを考慮したうえで、後述のアンケートにおいて「です・ます体」と「だ・である体」という平仮名表記を用いることにした。
- 4) 陳（2004）は、「基本レベル」を「ある書き手・話し手がある談話において最も多く使っているスピーチレベルのことである」（p. 37）と定義している。
- 5) 日本語を海外で学ぶ場合はJapanese as Foreign Language（JFL）であり、日本で学ぶ場合はJapanese as Second Language（JSL）である。
- 6) CはChinese、S/FはSecond Language/Foreign Language、M/FはMale/Femaleを指す。
- 7) 本研究では、本文中の日本語訳文は筆者が訳したもので、注では中国語原文を付する。
- 8) 『標準日本語』中級Iにおける「普通体」と「丁寧体」の定義の中国語原文はそれぞれ次のようである。「用动词，形容词的普通体和“～だ”的形式结句的。这种语体叫作简体。简体的结句形式除上述的以外，还有“～である”」、「与此相对，句末的动词为“～ます形”或“～です”形式的就叫作敬体」。（p. 33）
- 9) スピーチレベルの説明・解釈の中国語原文を付する。「简体在口语中用于亲密的朋友或家庭成员之间。如果对不大亲近的人使用则是失礼的。在书面语中，简体广泛用于日记、新闻报道、辞书释义及小说等。敬体在口语中广泛用于亲密的朋友或家庭成员之外的人之间。因此，这套读本从初级开始就是从敬体学过来的。在书面语中，书信及广告等用敬体。」（p. 33）
- 10) アンケートの回答の原文は中国語であり、日本語訳は筆者による。
- 11) 括弧内の内容は、筆者が回答者の意思を把握したうえで解釈を加えたものである。
- 12) 「その他」における残りの3名はシフトするという回答をしたため、特記しない。
- 13) 教科書での会話は「です・ます体」の維持が比較的に多くみられる。ここで言う一つのスピーチレベルの維持は学習者が日本語母語話者との会話から観察された特徴の一つである。
- 14) 学習者CSF30の自由記述を、内容を判断したうえ、「2. シフトの難しさ」と「7. 教材によるシフト使用の重要性の不足」の二カ所に分類した。

参考文献

生田少子・井出祥子（1983）、「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12（12）、77-84頁。

宇佐美まゆみ（1995）、「談話レベルから見た敬語使用-スピーチレベルシフト生起の条件と機能-」『学苑』662、27-42 頁。

陳文敏（2004）、「スピーチレベル・シフト研究の現状と課題」『日本学と台湾学』3、28-48 頁。

三牧陽子（1993）、「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第 I 部門人文科学』42（1）、39-51 頁。

三牧陽子（2007）、「文体差と日本語教育」『日本語教育』134、58-67 頁。

宮武かおり（2009）、「日本語会話におけるスピーチレベルを扱う研究の概観」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』1、305-322頁。

人民教育出版社・光村图书出版株式会社合編（1990）、『中日交流标准日本語 中級 I』人民教育出版社。

付録 【中国人日本語学習者のスピーチレベル・シフトの使用に関する意識調査】

年齢：_____歳 性別： 男・女 日本語の学習年数：_____年_____ヶ月

1. 日本語学習の何年目に、スピーチレベル（「です・ます体」、「だ・である体」）を勉強し始めましたか。

_____年目

2. 学部生のとき、中国国内で使用されていた日本語教材は以下のどれですか。

- a. 『標準日本語』（人民教育出版社）
- b. 『総合日語』（北京大学出版社）
- c. 『新編日語』（上海外語教育出版社）
- d. 『みんなの日本語』（外語教学与研究出版社）
- e. その他：_____

3. 使用した教材の中では、スピーチレベルの内容をどれくらい紹介していますか。

- a. 詳しく紹介している b. ある程度紹介している c. ほとんど紹介していない

4. 先生はどれぐらいの時間でスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを説明しましたか。

_____コマ（1 コマ 45 分程度）

5. 授業以外に、どれぐらいの時間でスピーチレベル・シフトを復習・勉強しましたか。

_____h

6. 初級レベルの時、日本語を話すうちに、文末に意識的に「です・ます体」あるいは「だ・である体」を使ったことがありますか。

- a. ある（7 番以降を回答してください） b. ない（9 番以降を回答してください）

7. 意識的に「です・ます体」を使った理由は何ですか。

8. 意識的に「だ・である体」を使った理由は何ですか。

9. 現在（上級レベル）は、日本語を話す時、スピーチレベル・シフトをどの程度使っていますか。

- a. いつも、必要に応じスピーチレベル・シフトを使っている
- b. 時々スピーチレベル・シフトを使っている
- c. ほとんどスピーチレベル・シフトを使っていない
- d. その他：_____

10. ほとんどスピーチレベル・シフトを使用しない（しなかった）だと思う理由は以下のどれですか。

- a. スピーチレベル・シフトの使い方を把握できないため、ミスを犯したくない
- b. 日本語教師や日本人からスピーチレベルを話の途中で変えないほうがいいと言われた
- c. スピーチレベル・シフトの使用の重要性に気づいていない（重要だと思っていない）
- d. その他：_____

11. 日本へ留学した経験がありますか。（b を選択する場合、15 番へ）

- a. ある b. ない

12. 日本留学期間はどれぐらいですか。

_____年_____ヶ月

13. 日本へ留学した後、教科書で勉強したスピーチレベル・シフトの知識と実際の会話（特に日本語母語話者との会話）でのスピーチレベル・シフトの間に、相違点を感じたことがありますか。

14. 日本へ留学した後、スピーチレベル・シフトの使用に関する意識が変わりましたか。具体的な経験があれば、ご記入ください。

15. 最後に、自分自身の日本語学習を振り返ってみて、スピーチレベル・シフトの使用で失敗したことや困ったことがあれば、その問題点をご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

The using condition and learning process of speech level shift in Chinese Japanese learners: focus on questionnaire survey

FENG, Hejing

Abstract

Speech level shift in Japanese is considered to be one of the difficult learning items for advanced Japanese learners. However, many studies have focused on the analysis of the conditions and functions of speech level shifts in Japanese conversation. And the consciousness of learner's use of speech level shifts has not been clarified yet. Therefore, this research tried to draw out the learner's consciousness of using speech level shift through a questionnaire survey that targeting Chinese Japanese learners.

As a result, since Japanese education in China had problems in teaching speech level shift from the beginner level, Chinese learners (before studying abroad) were not aware that the importance about using speech level shift. In addition, it is influenced to the advanced level and is leading to the fundamental cause of the problem that even advanced learners can't use speech level shift quite well.

This study contributed to the teaching of speech level shifts for Chinese Japanese learners in future Japanese education.

Keywords : speech level, speech level shift, consciousness of using

中国語と日本語疑問詞の不定全称¹⁾の対照研究 —「ナニ」「ダレ」及び“什么”²⁾“谁”を中心に—

楊 偉健（九州大学大学院生）

要旨

本稿は、疑問詞に何らかの要素をつけて前提集合のすべてのメンバーを指すことを不定全称表現と呼んだ。そして、先行研究を踏まえた上で、「ナニ」「ダレ」及び“什么”“谁”を中心に、疑問詞による不定全称における疑問詞の指示範囲を、任意性指示、類同性指示、極端性指示の3つに分類した。その後、収集した例文を分類ごとに分析し、「疑問詞+ α 」における「疑問詞」及び「 α 」の意味について分析を行った。その結果、日本語では極端性指示を表すことができず、中国語では類同性指示を表すことができないことが分かった。また、「 α 」について、任意性指示の「 α 」は「も」の基本義である類似事態の含意／追加の役割をはたしている。類同性指示の「もが」は取り立ての意味が強く、個体を強調している。極端性指示の“也”は譲歩的な意味で否定文に用いられ、極端な特例から全体に拡張することが明らかになった。

キーワード： 疑問詞、不定全称表現、任意性指示、類同性指示、極端性指示

はじめに

疑問詞は、疑問を表す意味に加えて、多くの意味を持っている。その中の1つとして、「ナニ／ダレ+も」と“什么／谁+都³⁾／也⁴⁾”のように、日中の両言語とも「疑問詞+ α 」の形式で前提集合⁵⁾のすべてを指す意味がある。この2つは構文上非常に類似しているが、その意味を吟味すると、多少異なるところが存在している。

(1) 誰に叱られても気にならなかった。(尾上 1983 : 421)

(无论被谁训斥他都不在意。)⁶⁾

(2) 突然の訃告に誰もが驚いた。(『日本産経新聞 2000』)

(大家(个个)都对突然而来的訃告感到吃惊。)

(3) 僕は彼女から何一つ聞き出せなかった。(『死の長い鎖』)

(我从她那儿什么也没问出来。 / 我从她那儿一点儿东西也没问出来。)

(1) の前提集合は「誰」によって囲まれ、叱られる対象の任意性を表している。親に叱られたのであれ、先生に叱られたのであれ、全然気にならなかったことを意味している。また、実際に叱られたかについては言及されていない。(2) の前提集合は“谁”で囲まれ、具体的な指示対象は文脈で含意されている。「もが」を用い、「誰」を取り立てることによって、訃告を聞いた個々の個体が驚いたことを意味し、結局「誰」が指している範囲の全員が驚いたことを表す。(3) の前提集合は「何」によって囲まれ、彼女から聞きたい情報の集合を指している。「一つ」によって、その集合の最小量を取り出すことができる。文脈から、この最小量の内容を否定することで、彼女からの情報が1つもないという意味を表す。

本稿では、例文のように「疑問詞+ α 」によって前提集合のすべてのメンバーを指示することを「不定全称」と定義し、意味論の立場から、疑問詞が不定全称を表す際の日中表現に焦点を当てて対照を行い、それぞれの特徴を明らかにする。日本語と中国語の疑問詞の不定全称を表す際にはいくつかの形式が存在し、それらの形式間の深層的な意味の対応関係を分析し、両言語の関連性を分析する。

I. 先行研究及び不定全称の分類基準

疑問詞に関する研究は数多くあり、さらに、疑問詞の不定全称に関する研究も多い。日本語の不定称は、大まかに、疑問（君は誰ですか？）、不定（誰か来たようだ。）、不定全称（誰も知っていることだ。）の3つに分類されている（金井 2010、三尾 1979 など）。中国語の疑問詞も、日本語と同様にこの3つに分類することができるが、疑問と不定の場合、構文上の特徴が見られない。不定全称の場合には、“什么 / 谁+都 / 也”の形式がよく見られる。それに対応する日本語の表現は多様で、「何／誰も」、「何／だれ〜も」、「何ひとつ」「誰ひとり」、「誰だって」などがある。

尾上（1983）は疑問詞⁷⁾の各用法を細かく分析し、疑問詞の語性が未知項Xであると述べている。X項に何を代入してもその事態が成立するという[E汎称用法]、及びX項に何を代入しても結論が変わりはないという[F条件一般化用法]があると指摘した。EとFはいずれも、X項に何を代入しても述語との結びつきに影響を与えないことから疑問詞が指している内容の任意性を表していると考えられる。だが、[E汎称用法]の特例には[E1汎称否定タイプ]があり、「も」の類同性を強調している。「誰も知らない」を例として、「Aさんー知らない」を考えると、「Bさん〜」「Cさん〜」など同趣のことも想起されるという意味である。つまり、「X項の任意性」を表していると述べ、特例として「同趣」を表す「も」に言及している。本稿は、この「任意」と「同趣」に焦点を当てて研究する。

杉村（1992）は中国語の“Q⁸⁾+也 / 都”について分析し、“Q+都”の疑問詞に任意のメンバーを代入しても文自体に影響しないと指摘した。この点は呂（1980、1983）の解釈と一致している。加えて、“Q+也+P⁹⁾（否）”において、疑問詞は“偏指”、つまり、「指

示している範囲内でPの可能性が一番高い対象(極端的対象)」を表していると述べている。

本稿は、先行研究を概観した上で、「疑問詞+ α 」における疑問詞の意味を大きく「任意性指示」、「類同¹⁰⁾性指示」及び「極端性¹¹⁾指示」に分類することとする。以下では、この分類ごとに先行研究を簡潔に説明し、分類の基準も述べる。

1. 「任意性指示」に関する研究

尾上(1983)は疑問詞であるX項に「何を代入しても事態が成立する／結論に変わりはない」ということを強調し、X項の任意性を強調している。呂(1980、1983)は“什么”と“谁”について、「表示任指(不定の任意の対象を指示すること)」の疑問詞は“都, 也”の前に用い、例外がないことを表すと記述している。

杉村(1992)は、“WH+都”の疑問詞の任意性を強調している。

(4) 誰に叱られても気にならなかった。(1) 再掲)

(无论被谁训斥他都不在意。)

以上の例文は、親に叱られたのであれ、先生に叱られたのであれ、全然気にならなかったという意味を表し、事件の可能性について述べている。

本稿は、「疑問詞+ α 」における疑問詞が前提集合の任意的メンバーを指すことを「任意性指示」と定義する。なお、任意のメンバーと述語の結びつきには決まりがなく、その可能性を強調している場合が多く見られる。

2. 「類同性指示」に関する先行研究

尾上(1983)は[E汎称用法 - E1汎称否定タイプ]の説明で、「も」の働きで特定項目から同趣のものが想起されると述べている。汎称とは、同類のものを広くひっくるめて呼ぶことである。

楊(2007)は、「誰もが」は“个个(個々)都”に対応し、集合内のXもYもZもすべてのメンバーが実際に述語と同一関係を結ぶことを表していると述べている。

(5) 突然の訃告に誰もが驚いた。(2) 再掲)

(大家(个个)都对突然而来的訃告感到吃惊。)

「突然の訃告に誰も驚いた。」や「突然の訃告に誰でも驚いた。」のように、「もが」を「も」や「でも」で代用すると意味が若干変わる。それは、「もが」は主語である「誰」を取り立てて、その個人個人が驚いたことを表すことで、「誰」に属する全員が驚いたことを表しているためである。特に、已然の事態に使う場合が多い。

本稿は、「疑問詞+ α 」の形で、疑問詞が指しているあるメンバーが持っている性質が他のメンバーにも同様に対応することを「類同性指示」と定義する。類同性指示の場合、特に、個々のメンバーが述語と強く結びついていることを強調し、人々の責任を強調する場合や、已然の事態に用いられることが多い。

3. 「極端性指示」に関する先行研究

杨（2000）は“也”について、従来の類同を表す説を確認しつつ、類同から極端事例の提示、さらに譲歩文の解釈も可能であると指摘している。

(6) a. 来了 几个 人？（杨 2000：181）

来た 幾つ 人

（何人来ました？）

b. 一个人 也 没 来。（杨 2000：181）

一人 も なかった 来る

（一人も来ませんでした。）

c. 谁 也 没 来。（杨 2000：181）

誰 も なかった 来る

（誰も来ませんでした。）

(7) 僕は彼女から何一つ聞き出せなかった。（(3) 再掲）

（我从她那儿什么也没问出来。）

(6)では、aの質問に対して、bとcの答えが可能である。bの答えは人数が限定され、cの答えは人数や種類（学生、先生…）などの最低限を否定している。このような場合、「疑問詞+ α 」の中の疑問詞は、(7)に示されているように、日本語の「何ひとつ」「誰ひとり」に類似し、最低限を意味している。

杉村（1992）は、“Q+也+P（否）”には2つの状況があると述べている。1つは、前述のように集合の最低限を否定することで、それ以上のすべてを否定することができるということである。もう1つは、集合内の最上限を否定することで、それ以下のすべてのメンバーを全面的に否定することである。

(8) 什么 困难 也 不怕。（袁 2004：5）

なに 困難 も 怖がらない

（どんな困難（山ほどの困難）も怖がらない）

(8)に示しているように、“什么困难”は、最上限の困難に偏って、最上限の困難も怖

がらないことでほかのすべての困難も怖がらないことを表す。

本稿は、疑問詞が集合の極端的制限、つまり最低限または最上限を指すことで、“也”及び後続する否定と結合し、最低限以上、または最上限以下の全体を表すことができると考える。このような場合、「疑問詞＋ α 」の疑問詞は「極端性指示」とであると定義する。

4. 「も」、「也」、「都」に関する先行研究

楊（2002）は、「も」の基本意義を「類似事態の含意」あるいは「類似事態の追加」であるとして、任意のメンバーに「も」をつけて全体に拡張できることを示した。

楊（2000）は、“也”が従来の類同を表す説を確認しつつ、類同から極端事例の提示、さらに譲歩文の解釈も可能であると指摘している。

杉村（2003）は、“也”を「分挙副詞」、「都」を「統括副詞」に定義している。“也”は「XもYもZも」の形で全体に拡張し、“都”は「任意のメンバーも」の形で全体に拡張することができる。

5. 先行研究のまとめと問題点

先行研究を概観した結果、日本語も中国語も「疑問詞＋ α 」の形で前提集合のすべてを表すことができるという点ではほぼ一致している。しかし、両言語の対照に関する研究は少ない。以上、先行研究を概観し、意味論の立場から、不定全称を表す日中表現を整理し再分類を行った。具体的には、以下の表にまとめることができる。

表1 分類基準及び先行研究との対応

分類	疑問詞の意味及び全体との関係	先行研究との対応
任意性指示	疑問詞が前提集合の任意的メンバーを指すことを任意性指示と定義する。ただし、任意のメンバーが必ず述語と結びつくことはなく、単にその可能性を強調している。	尾上（1983）[E 汎称用法] [F 条件一般化用法] 呂（1980）“任指” 杉村（1992）“任指”
類似性指示	類似性で、特定のメンバーが持っている性質が他のメンバーにも同様に適用することによって全体を表す。個々のメンバーが述語と強く結びついていると強調している。	尾上（1983）[E 汎称用法 - E1 汎称否定タイプ] 楊（2007）「誰もが」
極端性指示	疑問詞が集合の極端的制限（最低限／最上限）を指すことで、“也”及びその後の否定と結合し、（最低限以上、最上限以下）全体を表すことが実現できる。	杉村（1992）“偏指”

表1で示しているように、「疑問詞+ α 」における疑問詞の意味はまず任意性指示、そしてその特例として類同性指示及び極端性指示が挙げられる。また、先行研究との対応に記述している通り、両言語とも、任意性指示に関する研究はあるが、類似性指示と極端性指示は一方の言語についての研究しかない。また、「疑問詞+ α 」の中で、「 α 」としてよく用いられている「も」、「也」、「都」などの機能についても詳細な分析が少ない。

以下では、日中両言語における「疑問詞+ α 」の分類及び「 α 」の働きをそれぞれ分析し、各分類の表現及びその意味の対応関係を明らかにする。

II. 日本語の実例分析

少納言コーパスから、日本語の「何」を含む例文は623件、「誰」を含む例文は266件収集された。そのうち、本稿の研究対象「疑問詞+ α 」に該当する例文は、それぞれ117件（何回も／何日ものように、何が数値を表す場合を除く）と113件抽出された。以下では、分析対象の例文を用いて、日本語疑問詞の不定全称について分析を行う。

1. 任意性指示の分析

任意性指示とは、疑問詞が前提集合の任意的メンバーを指すことである。まず、任意性指示を示す「誰」の例を見られたい。

- (9) 誰も予想していなかった咆哮。（『中日新聞』2005年6月15日）
- (10) 水泳部員なら、誰でもできます。（Yahoo!知恵袋）
- (11) おれも落ちたものだな、と考える一方、恋は思案の外というから、このようにどうしても切れない未練は誰にもあるものだと言七郎は考えた。（『平七郎御用控』）
- (12) 目の前にアメリカみたいな国があれば、誰だって国境くらいは越えたくなるでしょう。（『小説宝石』2001年3月号）
- (13) 人間誰しも忘れられない風景というのがある。（『FENEK』2004年3月号）
- (14) 誰一人、自ら欲してこの世に生まれ出た者はいない。（『人間とは如何なる存在か』）

(9)～(14)は「誰+ α 」の例文である。「誰」を「も」「でも」「にも」「だって」「一人」などの要素がサポートしている。「誰」が任意のメンバーを指している上に、助詞のサポートで全体に広げることができる例である。

(9)の「誰」の範囲は、前文脈に含意されている現場の任意の人を指し、「も」によって、現場にいる全員に広げることが実現できる。(10)の「誰」は、前文脈の水泳部員の任意のメンバーに限定され、「でも」によって水泳部全員に広げることができる。つまり、「水泳部員の任意のメンバーができる」ということによって、「水泳部員全員ができる」ということを表している。(11)の「誰」は、平七郎の考えで囲まれた任意の人である。

「にも」によって、任意の人にどうしても切れない未練があることによって、一般の人皆に未練があるということを推測している。(12)の「誰」も、(11)と同じように、書き手により囲まれた任意の人だと考えられる。任意の人が、「アメリカみたいな国があれば、国境くらいは越えたい」ことで、「だって」によって「誰でも国境くらいは越えたい」という推測に広げている。(13)の「誰」も、「人間」に囲まれ、任意の人には忘れられない風景があるということで、「しも」によって、すべての人には忘れられない風景があるという推測を表している。(14)の「誰」も任意の人を指し、任意の人も自ら欲してこの世に生まれたのではないという恒常的な事実を表している。

次に、任意性指示を示す「何」の例を見られたい。

- (15) 自分は何をしたらいいのだろう、と仕事を与えられるのを待っていてもシスター達は何も言ってくれないから、自分にできることは何なのだろう、と自分で仕事を探すしかない。(『やっぱりノープロブレムへの旅』)
- (16) 二十一歳になると徴兵されるので、「それまでに何でも吸収しよう」と必死だった。(『私の履歴書』)
- (17) ふいに、目の前の女のことを何もかも知っているような錯覚を味わう。(『人生ベストテン』)
- (18) 変な話だけど、女は何ひとつ疑わない。(『さよならジェーン』)

(15)～(18)は「何+ α 」の例文である。「何」を「も」「でも」「もかも」「ひとつ」などの要素がサポートしている。「何」が任意のメンバー指している上に、助詞のサポートで全体に広げることが可能となっている。

(15)の「何」は仕事に囲まれ、任意の仕事を指している。「も」によって全体に広げ、すべての仕事を言ってくれないことを表している。(16)の「何」は文脈で含意している知識に囲まれ、任意の知識を指している。「でも」によって全体に広げ、すべての知識を吸収しようという意味を表している。(17)の「何」は女のことに囲まれ、この女の任意のことを表し、「もかも」によって女のことのすべてを指すことに広げている。(18)の「何」は任意の変な話を表し、任意の1つに対しても疑わないことから、何も疑わないことに広げている。

以上、(9)～(18)の例文は、「疑問詞+ α 」の形式で疑問詞が任意のメンバーを表し、「 α 」(も、でも、ても、だって、もかも、ひとつ／ひとり)のサポートで、全体に広げることを実現している。「疑問詞+ α 」の場合、述語は前の疑問詞が指しているメンバーを1つ1つ代入せず、発話者の大まかな推測や恒常的な事(真理)に対してよく使われている。

2. 類同性指示の分析

類同性指示とは、特定のメンバーが持っている性質が他のメンバーにも同様に対応することによって全体を表すことである。個々のメンバーが述語と強く結びついていることを強調している。類同性指示を示す例を見られたい。

- (19) そしてそれは、誰でも多少は経済問題を理解しなければ生きていけない社会のことなのです。現代とは、それ故、誰もが経済学を学ぶ必要に迫られている時代であるのです。（『朝日新聞』2002年5月8日）
- (20) 高齢者、身体障害者等が公共交通機関を円滑に利用できるようにするため、旅客施設、車両等における施設整備（ハード面）を進めるとともに、誰もが高齢者、身体障害者等に対して手助けがしやすい環境づくり（ソフト面）に取り組んでいる。（国土交通白書）
- (21) 突然の訃告に誰もが驚いた。（(2) 再掲）

(19) の「誰」は広義の人を指し、「もが」によって取り立て、一人ずつが経済学を学ぶ必要性を強調し、みんなが経済学を学ぶ必要があるという意味である。(20) の「誰」も広い範囲の社会人を指し、「もが」によって取り立て、社会人である個人個人が高齢者、身体障害者等に対して手助けしやすいような環境に取り組むことを表している。そして、前述したように、(21) の「誰」は個人個人を強調し、個人個人が驚いたことを表している。

以上、(19) ～ (21) の例文は、「疑問詞＋もが」の形式で、「もが」によって疑問詞を取り立て、疑問詞が指している範囲内の個々の個体を強調している。

- (21) 突然の訃告に誰もが驚いた。（(2) 再掲）
- a. 突然の訃告に誰でも驚いた。（作例）
- b. 突然の訃告に誰も驚いた。（作例）

(21) において、「もが」を「も」に入れ替えても文法上問題はない。ただ、「誰もが」の場合、楊（2007）が述べているように、集合内の個々のメンバーをスキャンニングする機能があり、意味上、「誰」が指している個々メンバーを逐一スキャンニングした上で最後の集合全体になると考えられる。「誰も」に入れ替えても集合メンバーの全員に当たることは変わらないが、個々のメンバーへの強調が希薄化し、意味が変わってしまう。

3. まとめ

本節では、不定全称を表す日本語の「疑問詞＋ α 」の形式について、疑問詞の指示焦点によって任意性指示と類同性指示の2つの種類に分類した。任意性指示は疑問詞が囲まれている範囲内の任意のメンバーを指し、任意のメンバーが述語と結びつくことができることを表している。「 α 」（も、でも、ても、だって、もかも、ひとつ／ひとり）のサポートで全体に拡張でき、「疑問詞＋ α 」が全体を表すことができる。発話者の大まかな推測や恒

常的な事実・真理に対してよく使われていることが観察できる。一方、類同性指示は、任意性指示の特例として、「誰+もが」の形で、「もが」が主語である「誰」を取り立て、「誰」が指している個々の対象を強調している。特に、已然の事態に使う場合が多く見られる。

Ⅲ. 中国語の実例分析

CCL コーパスから、中国語の“什么”を含む例文は 485 件、“谁”を含む例文は 229 件収集された。そのうち、本稿の研究対象「疑問詞+α (“也”、“都”)」に当てはまる例文はそれぞれ 57 件、51 件抽出された。以下では、分析対象である例文を用いて、中国語疑問詞の不定全称について分析を行う。

1. 任意性指示の分析

任意性指示とは、疑問詞が前提集合の任意的メンバーを指すことである。任意性指示を示す“什么”と“谁”の例を見られたい。

(22) 这个家，什么 都 留给 你， 孩子 给 我。(《王贵与安娜》)

この 家 何 統括的 あげる あなた 子供 あげる 私 (に)

(この家のものは、すべてあなたにあげるが、子供は私がもらう。)

(23) 你 干 什么 事 都 有 前手 没 后手。(《花儿与少年》)

あなた する 何 こと 統括的 ある 前の手 ない 後ろの手

(あなたは何事も頭隠して尻隠さず)

(24) 那么 些个 邻居，常年 住 这儿 的，谁 都 不 出面。(《小墩子》)

あんなに 多い 隣人 長年 住む ここ の 誰 統括的 ない 出てくる

(一年中ここに住んでいる何人かの隣人は、誰も出てこない。)

(25) 三个月里，我 干的 活 比 谁 都 多。(《一百个人的十年》)

3ヶ月で、 私 した 仕事 より 誰 統括的 多い

(3ヶ月で、私は他の誰よりも多い仕事をした。)

(26) 来的 几个人 谁 都 不愿 扮演 通知 润表妹 的 角色。(《曹叔》)

来た 何人 誰 統括的 したくない 果たす 通知する 従妹の潤 の 役割

(来た人々誰も、従妹の潤に知らせる役割を果たす気がない。)

(22) と (23) は、“什么+都”の形で“什么”が前提集合の任意のメンバーを指し、統括的意味を表す“都”の働きによって全体に拡張することができる。(22) の“什么”は家の中の任意のものを指し、“都”が統括的意味を加え、“什么都”は家のすべてのものを指すことができる。(23) の“什么”は事を修飾し、あなたは任意の事にも頭隠して尻隠さずの状態である。そこに“都”が統括的意味を加え、あなたは任意のすべての事に対して頭

隠して尻隠さずの状態であることを表している。

(24) ～ (26) は、“谁+都”の形で前提集合のすべてのメンバーを指すことを示している。(24) の“谁”は「ここに住んでいる隣人」の任意のメンバーを指し、“都”が統括的意味を加え、“谁都”は「ここに住んでいる隣人」の全員に拡張することができる。(25) の“谁”は「一緒に働いている人」の任意のメンバーを指し、“都”が統括的意味を加え、“谁都”は「一緒に働いている人」の全員に拡張することができる。(26) の“谁”は「来た人々」の任意のメンバーを指し、“都”が統括的意味を加え、“谁都”は「来た人々」の全員に拡張することができる。

(22) ～ (26) は、任意性指示を指している疑問詞+“都”の形式である。また、任意性指示を指している疑問詞+“也”の形も見られる。

- (27) 我 挨个儿 病房 转, 护士们 谁 也 不 找 我。(《一百个人的十年》)
私 次々 病室 回る 看護師たち 誰 も ない 呼ぶ 私
(私が病室を回っても、看護師たちは誰も私を呼ばない。)

(27) の“谁”は「看護師たち」の任意のメンバーを指し、“也”を用いて「A 看護師も B 看護師も」誰も私を呼ばないことを表している。この文の“也”を“都”に入れ替えても、文法的にも意味的にも変化はない。

2. 極端性指示の分析

極端性指示とは、疑問詞が集合の極端的制限、つまり最低限、または最上限を指すことで、“也”及びその後の否定と結合し、最低限以上、または最上限以下の全体を表すことである。「疑問詞+“也”」において、疑問詞が極端的なものを指し、“也”によって、「その一番下のメンバーが～ない、それ以上のメンバーも～ない」、あるいは「その一番上のメンバーが～ない、それ以下のメンバーも～ない」という意味を表している。このような場合、“也”は程度の甚だしさを強調し、それ以外のメンバーも同様に後続する述語と結びつくことができる。極端性指示を示す“什么”と“谁”の例を見られたい。

- (29) 冰箱¹²⁾ 都 打开 查看了, 秋毫无犯。家 里 什么 也 没有 少。(《黄伞》)
冷蔵庫 まで 開いて 確認した 秋毫も侵されず 家 に 何 も ない 紛失
(冷蔵庫まで確認したが、いささかのものも取られていなかった。家の何も紛失していなかった。)

- (30) 脑子 完全 停顿, 不会 哭, 不会 笑, 什么 也 不会。(《一百个人的十年》)
頭 完全 止まった できず 泣く できず 笑う 何 も できない
(脳は完全に止められ、泣くことも、笑うことも何もできない。)

(31) 我姐夫 口才好, 能说善辩, 大辩论 谁 也 辩不过 他。(《一百个人的十年》)

私義兄 弁舌が上手 弁舌さわやか 大弁論 誰 も かなわない 彼

(私の義兄は弁舌が上手なうえ、さわやかで、大弁論ではだれも彼にはかなわない。)

(29) ~ (31) は、“什么/谁+也+否定”の形で疑問詞が前提集合の極端的なメンバーを指し、“也”の働きでその最低限以上、あるいは最上限以下のすべてのメンバーに拡張することができる。(29)の“什么”は、前文の「冷蔵庫の中身」や「秋毫」など、非常にささやかなものを指している。そして、「非常にささやかなものも紛失していない」という最低限を否定することによって、他に大きい物はもちろん、何も紛失していないことを表している。(30)の“什么”は、前文の「笑う」「泣く」のような、人間として生まれつきの行動という最低限の行動もできず、それ以上の難しい行動は何もできないことを表している。

(31)では、「弁舌が上手、弁舌がさわやか」など能力に関わる内容を提示している。“谁”はそれに相当する「一番実力を持っている相手」を指し、一番の実力を持っている相手にも負けないことで、実力が弱い人にも誰にも負けないという意味になる。

これらの例では、「疑問詞+也+否定」の形式で、疑問詞が指している集合のメンバーが何かの順位付けができる場合に、例えば、ささやかなことや、人間生まれつきの本能、及び人の能力の強さなどの場合に、極端性指示に属すると考えられる。“也”は、譲歩的な意味で極端なメンバーを特例として挙げる。加えて、否定によって方向性がつけられ、極端的メンバーを境目にそれ以上、または以下の全員を示す。

一方、日本語には以下の例文がある。

(32) 誰一人、自ら欲してこの世に生まれ出た者はいない。((14) 再掲)

(33) 変な話だけど、女は何ひとつ疑わない。((18) 再掲)

「誰ひとり」、「何ひとつ」は「任意の人/物も~ない」という形式で、「誰/何」は任意のメンバーを指し、「ひとり/ひとつ」によって、最低限に抑えることができる。最低限のメンバーを否定することによって、それ以上のメンバーも無論否定している。

中国語で極端性指示を表す際に「最低限を否定することで、それ以上も否定すること」は、日本語の「何ひとつ/誰ひとり」と類似している。ただし、中国語の(31)のように、最上限を否定することで、それ以下も否定する日本語の例文は見つらなかった。

3. まとめ

中国語で不定全称を表す「疑問詞+α」の形について、疑問詞の指示焦点によって、任意性指示と極端性指示の2つに分類した。任意性指示は、疑問詞が指している範囲内の任意のメンバーを指し、任意のメンバーが述語と結びつくことができることを表している。

「 α 」、つまり“都”と“也”の働きで全体に拡張でき、「疑問詞+都/也」の形式で全体を表すことができる。疑問詞が任意性指示を示している際は、“什么/谁+都”の形式が多く見られ、“什么/谁+也”の形式は少ない¹³⁾。一方、極端性指示は、疑問詞が指している範囲内の極端的メンバー（最低限/最上限）に偏っている。“疑問詞+也+否定”の形式で2つに分け、最低限を否定することで、それ以上も否定することと、最上限を否定することで、それ以下も否定することがある。

なお、任意性指示の文では述語は否定と肯定の両方ともできるが、極端性指示の文では述語は否定に傾いている。

IV. 疑問詞の不定全称の日中対照

前節までで、日本語と中国語の疑問詞が不定全称に用いられる表現を分析し、前提集合と集合内個体の関係によって3つの種類に分類した。本節では、分類ごとに日本語と中国語の対照を行う。

1. 任意性指示の対照

日本語も中国語も、疑問詞が任意の前提集合のメンバーを指し、「疑問詞+ α 」の形で全体に拡張することができる。

日本語の「疑問詞+ α 」では「 α 」に代入できる語が多く見られ、「も」、「でも」「でも」「だって」「もかも」、「ひとつ/ひとり」などがある。中国語の「疑問詞+ α 」では「 α 」に代入できる語が“都”と“也”に集中している。

「も」を含む「も」、「でも」、「ても」、「もかも」などの語は、格によって異なる形になっているが、「も」は類似事態の含意/追加という基本的な意味のもと、任意のメンバーから全体に拡張することができる。

2. 類同性指示の対照

日本語の「誰+もが」では、「誰」が個々の主体の類同性に傾き、「もが」によって取り立て、指示範囲内の個々の主体を強く強調している。「誰」のメンバーが類同的性質を持ち、任意性指示の特例と言える。

一方、中国語の同じ形「疑問詞+ α 」では、個々の主体との関係を強調することができず、楊（2007）が述べているように、“个个都”に対応する。

3. 極端性指示の対照

日本語では、「疑問詞+ α 」の形式で、疑問詞が極端的メンバーを指している例文は見つからなかった。(32)「誰一人～ない」や(33)「何ひとつ～ない」のように、「一人」や「ひとつ」は最も小さい数値を示しているが、疑問詞が指しているメンバーが極端性を持

っているとは断言できない。

中国語は、「疑問詞＋也＋否定」という形式で、疑問詞が指示している範囲内の極端的メンバー（最低限／最上限）を示し、それを境目に（それ以上／それ以下）否定、つまり方向性を付けている。(29) の“什么也没有少”では、“什么”はその最低限のものを指し、最低限のものも紛失しなかったことで、もっと価値があるものも紛失しなかったことを意味する。つまり、最低限のメンバーを否定することで、他のメンバーにも拡張できると考える。また、疑問詞が、最低限のみならず、最上限を指すこともできる。(30) の“谁也辩不过他”という表現では、“谁”は弁舌のレベルが一番高い人を指し、最上限の人も彼に負けるので、最上限の人より下のすべての人も負けると解釈できる。

4. まとめ

日本語も中国語も、「疑問詞＋ α 」の形で前提集合のすべてを表すことができる。本稿は、この形式の疑問詞に焦点を当てて、その意味の方向性を観察し、任意性指示、類同性指示、極端性指示の3つに分類した。3つの種類の対応は、以下のようにまとめられる。

表2 疑問詞が不定全称を表す際の表現の対照

	任意性指示の表現（例文数）	類似性指示の表現（例文数）	極端性指示の表現（例文数）
日本語	何も（62）、何でも（24）、何～ても（13）、何とも（11）、何もかも（3）、何ひとつ（4） 誰も（39）、誰でも（27）、誰にも（17）、誰からも（4）、誰しも（4）、誰だって（3）、誰ひとり（3）	誰もが（16）	
中国語	什么都（32）、谁都（16） 什么也（2）		什么也（23） 谁也（35）

「疑問詞＋ α 」で不定全称を表す際の疑問詞に焦点を当てたところ、日本語には任意性指示と類同性指示の2種類が見られ、中国語には任意性指示と極端性指示の2種類が見られた。類同性指示にしる、極端性指示にしる、疑問詞は集合内の特別的なメンバー（個々の個体、最低限か最上限）に偏っており、任意性指示の特例であると考えられる。また、表2で示しているように、“什么也”は任意性指示と極端性指示の両方の場合がある。任意性指示に属する“什么也”の述語は肯定の可能性が高く、極端性指示に属する“什么也”の述語は否定が多い。また、「疑問詞＋也＋否定」の形式で極端性指示を示す際、疑問詞が指している集合のメンバーには順位付けができると考えられる。

日本語には極端性指示がなく、中国語には類同性指示がない。日本語の類同性指示（誰

もが)は、中国語の“个个都”に対応する傾向が強い。また、中国語の極端性指示(什么/谁+也+否定)は、日本語の「ひとつ～もない」や「少し～もない」に対応しやすいことが確認された。

「疑問詞+ α 」で不定全称を表す際の「 α 」は、指示の分類ごとに異なる働きをしている。任意性指示に属する「 α 」には「も」、「でも」、「ても」、「だって」、「もかも」などがよく用いられ、「も」の基本義である、類似事態の含意／追加という意味が重要な役割をはたしている。類同性指示に属する「もが」は取り立ての意味が強く、疑問詞が指示している範囲の個々の対象を取り立て、個体を強調している。極端性指示に属する「 α 」では中国語の“也”が重要で、譲歩的な意味で極端なメンバーが特例として挙げられ、他のメンバーにも拡張するということを表している。

おわりに

本稿は、疑問詞に何らかの要素をつけて前提集合のすべてのメンバーを指すことを不定全称表現と呼んだ。そして、先行研究を踏まえた上で、疑問詞による不定全称における疑問詞の指示範囲を、任意性指示、類同性指示、極端性指示の3つに分類した。その後、収集した例文を分類ごとに分析し、「疑問詞+ α 」における「疑問詞」及び「 α 」の意味について分析を行った。その結果、日本語では極端性指示を表すことができず、中国語では類同性指示を表すことができないことが分かった。また、「 α 」について、任意性指示の「 α 」は「も」の基本義である類似事態の含意／追加の役割をはたしている。類同性指示の「もが」は取り立ての意味が強く、個体を強調している。極端性指示の“也”は譲歩的な意味で否定文に用いられ、極端な特例から全体に拡張することが明らかになった。

本稿が扱った例文では、極端性指示は否定文のみに見られたが、これは極端の例を出発点にして方向性をつけているためと考えられる。しかし、任意性指示と類同性指示では否定と肯定が混在しており、今後はその特性についてより詳しい分析が必要であると考えられる。また、今回の分析は収集した例文に限られ、データに制約があると考えられるため、今後はデータを広げて分析する必要もあるだろう。

注

- 1) 三尾(1979)は、疑問詞に係助詞の「も」がついたものを不定全称と呼んだ。三上(1972)、金井(2010)も三尾(1979)と同じ用語を用いている。中国語の疑問詞研究では、朱(1982)、石(2010)は“周遍性”という語を用い、前提集合のすべてのメンバーを指示している。このような文では、“都”“也”“不论”などの語と共起する場合が多くみられる。本稿では、日中両言語ともに「不定全称」と呼ぶことにする。
- 2) 本稿では日本語を「」で示し、中国語を“”で示す。
- 3) 都：①(事物を統括して)みんな。すべて、全部。②(疑問詞と呼応して、例外がないこと

を表す) …でも。③ (“不管” “无论” などと呼応して) たとえ…でも。⑤ (“连” “甚至” “一点儿” などと呼応し) 程度の甚だしさを強調する。…さえ、…すら。(『超級クラウン中日辞典』より)

- 4) 也: ① (類同項並存することを表し) …も。② (接続詞 “虽然, 就是, 即使, 尽管” などと呼応し、譲歩あるいは逆説をあらわし) …でも。③ (“连…也” の形で) …さえ…すら。④ (「疑問詞+也+否定述語」の形で全面的に否定し) 何も／どこも／誰も…ない。⑤ (“一+也+否定述語” の形で強い否定を表し) ひとつも／少しも…ない (『超級クラウン中日辞典』より)
- 5) 奥津 (1984, 1985a, b) によると、A を聞かれた場合、相手は答えることができず、B を聞かれた場合、相手は「コーヒー」か「紅茶」かを答えることができるとされている。つまり、「どっち」という不定詞は、「コーヒーと紅茶」のような集合の存在を前提とし、それが明示されなければ使えない。これを前提集合と呼ぶことにする。
 A どっちを飲みますか?
 B コーヒーと紅茶と、どっちを飲みますか? (奥津 1985a: 1)
 また、前提集合の提示の仕方には明示的と暗示的の区別がある。「だれ」「なに」「どこ」「いつ」などの語は、前提集合が明示されていない場合が多い。
- 6) 中国語例文の日本語訳はすべて筆者による。
- 7) 「疑問詞」は原文で「不定語」と表示されている。
- 8) 杉村 (1992) は疑問代名詞、あるいは“周遍性”を示している主語を「Q」で表示している。
- 9) 杉村 (1992) は述語を「P」で表示する。
- 10) 本稿で扱う「類同」という用語は、杉村 (2003)、楊 (2000)、苏 (1984) が提示しているものと同様である。日本語には「類同」に相当する語がなく、「類似」という語があるが、意味が多少異なるとされる。本稿では、先行研究にしたがって、中国語の「類同」という語を用いることにする。
- 11) 本稿で扱う「極端」という用語は、杉村 (1992)、楊 (2000) が提示しているものと同様である。
- 12) 「_____」で示している部分は極端的指示の例文で、疑問詞が指している極端的メンバーの提示語である。
- 13) 108 例文のうち、2 件しか観察されなかった。

参考文献

【日本語文献】

- 尾上圭介 (1983)、「不定語の語性と用法」(渡辺実『副用語の研究』明治書院)、404-431 頁。
 奥津敬一郎 (1984)、「不定詞の意味と文法-「ドッチ」について-」『都大論究』21 号、(1) - (16) 頁。
 奥津敬一郎 (1985a)、「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22 号、(1) - (12) 頁。
 奥津敬一郎 (1985b)、「続・不定詞の文法と意味」『人文学報』173 号、1-23 頁。

金井勇人（2010）、「不定語（句）「誰」「誰か」「誰も」について」『国際交流センター紀要』埼玉大学国際交流センター、21-29 頁。

賈黎黎（2013）、「「だれひとり」「なにひとつ」と“任何一～”に関する対照研究：機能分布の角度から」『対照言語学研究』23 号、27-35 頁。

杉村博文（2003）、「択一対応と周遍対応および偏向指示」『中国語学』250 号、50-67 頁。

三尾真理（1979）、「疑問詞とその用法」『日本語教育』36 号、日本語教育学会、73-90 頁。

山田潤子（1991）、「「だれも」と「なにも」 - 否定対極性をめぐって」『百舌鳥国文』49-62 頁。

楊凱榮（2007）、「全称詞構文の日中対照研究—「誰でも+VP」「誰もが+VP」と“谁+都+VP”“个个+（都）+VP”を中心に—」『日中対照言語学研究論文集』和泉書院）371-390 頁。

【日本語辞書】

呂叔湘（1983）、『現代中国語用法辞典』（牛島徳次、菱沼透原著は 1980 年発行）現代出版。

松岡榮志[ほか]（2008）、『超級クラウン中日辞典』三省堂。

【中国語文献】

呂叔湘（1980）、『現代汉语八百詞』商务印书馆。

杉村博文（1992）、「現代汉语“疑问代词+也/都……”结构的语义分析」『世界汉语教学』第 3 期、166-172 頁。

邵敬敏（2014）、『現代汉语疑问句研究（増訂版）』华东师范大学出版社。

苏培成（1984）、「有关副词都的两个问题」『语言学论丛』第 13 卷、北京大学汉语语言学研究センター、57-61 頁。

楊凱榮（2000）、「“也”の含意と轄域」『中国語学』247、172-187 頁、日本中国語学会。

袁毓林（2004）、「“都、也”在“Wh+都/也+VP”中的语义贡献」『语言科学』第 3 卷第 5 期、3-14 頁。

朱德熙（1982）、『语法讲义』商务印书馆。

用例出典

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）中納言（https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/）

現代汉语語料庫（CCL）（http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai）

Contrastive Study of Indefinite Generic Expressions of Chinese and Japanese Interrogatives: Focusing on "Nani""Dare" and "Shenme" "Shui "

YANG, Weijian

Abstract

In this paper, we defined the indefinite generic expression as indicating all members of the premise set with some interrogative element. Based on previous research, a range of interrogatives in this set of indefinite generic expressions, including the Japanese “*Nani*” and “*Dare*” and the Chinese “*Shenme*” and “*Shui*”, were classified into the three categories of optionality indication, similarity indication, and extremity indication. After that, the collected example sentences were analyzed for each classification, and the meaning of “Interrogative” and “ α ” in “Interrogative + α ” was analyzed. As a result, it was found that extremity indication could not be expressed in Japanese, and similarity indication could not be expressed in Chinese. As for “ α ”, “ α ” in the optionality indication plays a role of implication/addition similar to the basic meaning of “*Mo*”. The indicator of similarity “*Moga*” strengthens and emphasizes individual meanings. It has become clear that the extremity indication “*Ye*” is used in negative statements in a concessional sense that extends from extreme special cases to all cases.

Keywords : interrogative, indefinite generic expression, optionality indication, similarity indication, extremity indication

中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察

—日本語母語話者との比較対照を中心に—

何潔（九州大学大学院生）

要旨

日本語の接続助詞「けど」といえば、「逆接」の意味を表すと最初に思い浮かぶが、実際の会話では、最後まで言わずに、「けど」で言い切ってしまう文を頻繁に耳にする。このように、一見すると不完全な文に思われる発話でも、日本語母語話者なら、その伝達内容を理解でき、コミュニケーションを進めることができる。一方、日本語学習者は、この言いさし表現を状況に応じて的確に使うことや、言いさし表現に込められた相手の意図を理解することに困難を覚えることがある。

そこで、本研究では自然談話コーパスを用い、日本語母語話者と中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態を明らかにすることを目的とする。「けど」文の談話機能は、「情報提供機能」と「情報要求機能」に分類する。意味特性は、話し手の発言意図が「けど」の付されている節の内容そのものか、それとも言語化されていない主節かによって、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の二種類に分ける。「けど」文の談話機能と意味特性の関連性の観点から、両者の相違点を分析した。

その結果、会話においては、日本語母語話者は「終助詞的な特性」を有意に多く使用するのに対して、中国人日本語学習者は「接続助詞的な特性」を有意に多く使用することがわかった。さらに、自分の考えや意見を表出するか、聞き手に情報を求めるか、どのような発話に応じるかによって、「けど」文の意味特性の選択が異なることがわかった。

キーワード： 「けど」、言いさし表現、使用実態

はじめに

日本語の接続助詞「けど」といえば、「逆接」の意味がまず思い浮かぶ。しかし、実際の会話では、最後まで言わずに、「けど」で言い切ってしまう文を頻繁に耳にする。たとえば、筆者はアルバイト先で常に「あのう、登録したいんですけど」と客に言われる。このように、一見すると不完全な文に思われる発話を聞いたとしても、日本語母語話者なら誰もが素早くその伝達内容を理解でき、コミュニケーションを進めることができる。しかし、中

国人日本語学習者にとっては、この言いさし表現を状況に応じて的確に使うことや、言いさし表現に込められた相手の意図を理解することに困難を覚えることがしばしばある。

従来の日本語教育において、中心的に教えられてきた「けど」は、従属節と主節を結ぶ役割を果たす接続助詞であった。そのため、筆者は初めて上記の「あのう、登録したいんですけど」という言葉を客から言われた際に、何の反応もせず、その後続く話を待っていた経験がある。このように、相手の話にはまだ続きがあると誤解したことでその場のコミュニケーションに齟齬が生じた経験のある中国人日本語学習者は、決して筆者一人ではないであろう。従って、中国人日本語学習者は、状況に応じて文末に用いられる「けど」がどのような意味合いを持つのか、または、いかなる特徴を持つかを見極める必要があると思われる。そこで、本稿では、接触場面における自然談話をデータにし、日本語母語話者と中国人日本語学習者における言いさし表現「けど」¹⁾の使用実態を明らかにすることを目的とする。

I. 先行研究

言いさし表現「けど」に関しては、すでに様々な検討がされている。ここでは、本稿と関連性の高い先行研究について述べる。

まず、語用論的な観点から行われた研究としては、三原(1995)、白川(1996)、曹(2000)などが挙げられる。三原(1995)では、言いさし表現「けど」文が談話の中で使われる場合、「相手に対して何らかの働きかけを表す」という「相手伺い用法」を持つと述べている。白川(1996)は、三原の終助詞的に使われた「けど」節は、必ずしも「相手伺い」ではないという実例を挙げ、「けど」の本来的な機能は「聞き手に条件（聞き手に何かをするための情報）を提示することである」と指摘している。曹(2000)では、「けど」の談話機能は「発話緩和」、「発話補完」と「発話断定回避」の三つがあるとしている。

一方、何(2018)では、自然談話のデータを用いて言いさし表現「けど」のジェンダー差に焦点を当て、言いさし表現「けど」の談話機能と意味特性の関連性から包括的に使用実態について考察を行った。何の研究では、ジェンダーの観点から日本語母語話者の言いさし表現「けど」の使用実態を分析したが、本稿では、何の研究手法を参考にし、接触場面における日本語母語話者と日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態を量的、質的な分析を行い、両者の相違を明らかにしたい。

II. 研究方法

1. 言いさし文の定義

言いさし文の定義は、研究者によって異なっており、今のところまだ定まっていない。本稿では、「形式上、複文の主節を伴わず、従属節のみで表現される文（白川 2009 : 7）」かつ、「相手の割り込みではなく話者の意志により最後まで言い切らずに、統語的に不完

全な文であるにもかかわらず、情報伝達において完全文と同じ発話機能を果たしている文（佐藤 1993 : 42）」を「言いさし文」と定義する。

2. 分析資料

本稿では、宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』（以下「BTSJ」と呼ぶ）に収録されている日本語母語話者と中国人日本語学習者の接触場面における自然談話を分析資料とする。具体的には、接触場面の 24 会話（合計約 408 分）の会話資料を基に分析を行う（内訳は表 1 で示す）。発話者はいずれも 20 代の大学生もしくは大学院生の女性であり、中国人日本語学習者の日本語レベルは中・上級である。

表 1 分析データの内訳

会話グループの特徴	会話番号	データ数	総分数
中国人日本語学習者(中・上級)と日本人の友人の雑談	142-151	10 会話	約 173 分
中国人日本語学習者(上級)と日本人の初対面の雑談	152、153、155、156、 158、159、255-262	14 会話	約 235 分
計	24 会話		約 408 分

3. 分析方法

BTSJ コーパスから、言いさし表現「けど」文（以下「けど」文と呼ぶ）を抽出し、本研究で規定した定義に満たす「けど」文の断片を集めた上で、前後のコンテキストから「けど」文の機能及びその文の意味特性を分析する。また、グループごとに「けど」文の機能及び意味特性の出現数を集計してカイ二乗検定²⁾で有意差について検定を行う。一方、会話文を挙げながら両グループ間の相違点について分析し、考察を行う。

Ⅲ. データの分析

本節では、まずは「けど」文の談話機能及びその文の意味特性の分類基準を定める。次に、「けど」文の談話機能とその文の意味特性の出現数を集計し、日本語母語話者と中国人日本語学習者における使用実態について、量的に対照分析を行う。

1. 分類基準

コンテキスト上において、「けど」文がいかなる役割を果たしているかによって、いくつかの機能を分類できる一方、話し手の発話意図が「従属節だけで言いたいことを言い終えているか否か（白川 2009 : 7）」によって、「けど」文の意味特性は 2 種類に分類される。

(1)「けど」文の談話機能に関する分類基準

三原（1995）、白川（1996）、曹（2000）の機能分類を参考にし、「けど」文の談話機能を定めた。まず、話し手が聞き手に何らかの情報を提供するかまたは求めるかによって、「けど」文の談話機能を「情報提供機能」と「情報要求機能」に大分けする。さらに、具体的に使用される場面の特徴によって、「ア. 事実を述べる場合」「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」「ウ. 否定的な意見を述べる場合」「エ. 発話の切り出しの場合」「オ. 情報の補足・補正の場合」「カ. 相手に意見、判断を求める場合」の6つの場面に分類する。

次に、これらの機能については、実例を取り上げながら説明を加える。

「ア. 事実を述べる場合」

この機能における「けど」は、主に客観的な事実や事態などを表出する発話文の終わりに付いている。例文1のように、相手に自分の出身地を聞かれる時、話者は客観的な情報である「出身地は東京です」を「けど」を付け加えて相手に情報提供を行った。

例文1

NNU	えー出身はどこ？。
BA03	東京ですけど<2人笑い>。

（会話データの名称：159-11-BA03-NNU）

「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」

この機能における「けど」は、主に話し手の物事に対する肯定的な意見や、自分の考えなどを述べる発話文の終わりに付いている。例文2のように、話者は「けど」文を用いて、相手に自分の考えを伝えている。

例文2

TF08	えー今度写真見せて<笑い>。
JF08	そう写真ねー、そうあたしの分撮ってないんだよー=。
JF08	=実家のほうに多分写真が??、(うん)あるけどー、そう、あたしも送ってもらおうかと思うんだけど。

（会話データの名称：149-10-TF08-JF08）

「ウ. 否定的な意見を述べる場合」

この機能における「けど」は、主に聞き手と不同調な意見や聞き手の質問を否定する発話文の終わりに付いている。例文3のように、話者は聞き手の言った自分の不勉強な状態に対して、異なる意見を「けど」を付け加えて表出する。

例文3

JF10	だからすごいなあと思って、私何にも…、毎日ダラダラダラダラやってるから、長い期間をかけてやってるけど、進んでない。
TF10	いや、それ私の台詞だよ<笑い>。

TF10	私結構やばーい。
TF10	最近超遊んでる。
JF10	うっそー[すごい驚いた様子]。
TF10	<本当だよ>{<} [つぶやいた]。
JF10	<そんな>{>} ふうに見えない <u>けど</u> 。
TF10	本当だよ。

(会話データの名称：151-10-TF10-JF10)

「エ. 発話の切り出しの場合」

この機能における「けど」は、主に話し手がこれから話そうとする内容の予告情報としての発話文の終わりに付いている。例文 4 のように、話者は、聞き手の遠い距離の通学状況に対して、話者自身の状況を表出しようとするときに、聞き手に理解しやすいために予告情報としての「私は台湾出身」という内容を「けど」付け加えて提供し、そのあとに続く内容がスムーズに台湾の通学情報に移り変わることができた。

例文 4

J3	私でも中学と高校も、(はい)1 時間 10 分ぐらいとか通学してたから。
L1	すごいですねー。
J3	なんか、(えー),,
L1	私、台湾出身なんです <u>けど</u> 。
L1	台湾では 1 時間以上かかるのなんか、すごく想像できないでー(は一)、だから、もともと、前日本語学校の時は 1 時間半ぐらいって、皆に言って、“うっそ、想像できない”って(<笑い>)、で、向こう遠いでほしい 3、40 分でも遠いって言われるの。

(会話データの名称：260-20-J3-L1)

「オ. 情報の補足・補正の場合」

この機能における「けど」は、主に話し手が自分の先行発話に対する補いや、正しく理解してもらうために先行発話に対する修正としての発話文の終わりに付いている。例文 5 のように、話者は相手に夏休みの水泳教室の情報を提供しているとき、その内容に関する補足的な説明を「けど」を付け加えて付加する。

例文 5

TF06	《沈黙 2 秒》えっと…、(うん) 国立市の、プール。
TF06	だから安いの。
JF06	あー、安く泳げる…。
TF06	えっと…、2 時間 350 円ぐらい。
JF06	あつ、知らなかった、「TF06 名」好きなの=。
JF06	=あのね、先週かな、もう終わっちゃったんだ <u>けど</u> ね。

58 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
－日本語母語話者との比較対照を中心に－

JF06	国立市の教育委員会、知ってる？。
JF06	国立市のね、小学校と中学校の、(うん)夏休みの水泳教室のボランティアの、バイト募集をしたの、(はい)学生。

(会話データの名称：147-10-TF06-JF06)

「カ.相手に意見、判断を求める場合」

この機能における「けど」は、主に話し手が自分の不確かな情報や、意見を述べて聞き手の意見を引き出そうとする発話の終わりに付いている。例文6のように、話者は中国の表彰式にある女性への不確かなイメージを「けど」文で表示し、聞き手に暗示的に確認の情報を求める。

例文6

BA02	何か、式とか何か(うんうんうん)、表彰式のときに女の人が、あの、何か,,
NNU	あー。
BA02	お花渡す人とか(そうそうそう<笑い>),そういう人が着ているイメージなんだけど<笑い>。
NNU	そうそうそう<笑い>。
BA02	うんー。
NNU	そうですね<笑い>。
BA02	やっぱり、小姐‘シャオジエ’だよ(うん)、店員さんとか。
NNU	うんー。

(会話データの名称：156-11-BA02-NNU)

(2)「けど」文の意味特性に関する分類基準

朴(2008)は、「けど」文の分析において、話し手の発言意図が「けど」の付されている節の内容そのものか、それとも言語化されていない主節かによって、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の2つのタイプに分けている³⁾。「終助詞的な特性」の言いさし表現では、話し手の発話意図は「けど」の付されている節にあると考えられる。一方、「接続助詞的な特性」の言いさし表現では、実際の発話は「けど」の付されている節の内容であるが、話し手が伝えようとしているのは言語化されていない主節にあると考えられる。以下の例文7は前者、例文8は後者に分類される。

例文7

舞 「ダンス歴は？」

杉山「まったくの初めてですけど⁴⁾。」

白川(2009:7)

例文8 AがBに引越しの手伝いを依頼している：

A 「あの、ちょっと、お願いがあるんだけど。」

B 「はい。」

A 「明日、引っ越しの手伝いをしてもらえる？」

B 「あー、明日はバイトがあるけど。」

A 「あー、そうなんだ。」 (作例)

例文7では、舞の質問に答えることが杉山の発話意図であるが、「まったくの初めてですけど」の「まったくの初めてです」すなわち「けど」の付されている節がこの「答える」という発話意図を達している。このように、「けど」の後続部に何か続いているとは考えにくいため、「けど」文の意味特性を「終助詞的な特性」として分類する。これに対し、例文8のBは「明日はバイトがある」という事実をAに告げたいわけではない。相手の期待に反した事実(バイトがあるため手伝うことができないこと)を認識させたいのである。しかし、その断りの言葉を直接に言わずに、言語化されていない主節の内容として相手に推測させるものである。従って、例文8の場合、Aの発話意図を担っているのは主節の方であるため、「けど」文の意味特性を「接続助詞的な特性」として分類する。

2. 量的分析

(1) 談話機能における使用実態

談話機能の分類基準に基づき、「けど」文を分類し、日本語母語話者と中国人日本語学習者それぞれの出現数を表2にまとめる。

表2 談話機能における「けど」の出現数と出現頻度(グループ別)

機 能 \ グループ	日本語母語話者 (%)	中国人日本語学習者 (%)
ア. 事実を述べる場合	40 (27.2%)	9 (16.1%)
イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合	58 (39.5%)	16 (28.6%)
ウ. 否定的な意見を述べる場合	10 (6.8%)	11 (19.6%)
エ. 発話の切り出しの場合	8 (5.4%)	1 (1.8%)
オ. 情報の補足・補正の場合	29 (19.7%)	18 (32.1%)
カ. 相手に意見、判断を求める場合	2 (1.4%)	1 (1.8%)
合 計	147 (100%)	56 (100%)

表2を参照すると、日本語母語話者と中国人日本語学習者は、「ア. 事実を述べる場合」「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」「オ. 情報の補足・補正の場合」の三つの機能に集中しており、両グループとも8割ほどを占めている。一方、これらの出現回数のデータをカイ二乗検定⁵⁾で分析した結果は、5%の有意水準で有意であった($\chi^2(5)=13.838, p<.05$)。

60 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
－日本語母語話者との比較対照を中心に－

なお、残差分析の結果では、「ウ. 否定的な意見を述べる場合」において、中国人日本語学習者は日本語母語話者よりも同表現を有意に多く使用していることがわかった。

(2) 意味特性における使用実態

意味特性の分類基準に基づき、「けど」文を分析し、日本語母語話者と中国人日本語学習者それぞれの出現数を表 3 にまとめる。

表 3 意味特性における「けど」の出現数と出現頻度（グループ別）

グループ 意味特性	日本語母語話者 (%)	中国人日本語学習者 (%)
終助詞的な特性	128 (87.1%)	40 (71.4%)
接続助詞的な特性	19 (12.9%)	16 (28.6%)
合 計	147 (100%)	56 (100%)

表 3 に示されているように、全体的にみれば、グループを問わず、「けど」の文は「接続助詞的な特性」より「終助詞的な特性」の使用頻度が高い。日本語母語話者では、「終助詞的な特性」に集中しており、「接続助詞的な特性」と比較すると、7 倍ほど多く用いられている⁶⁾。一方、中国人日本語学習者では、日本語母語話者と同様に「終助詞的な特性」がより多く使われているが、その使用頻度の差（2.5 倍）が日本語母語話者ほど顕著ではない。これらの使用数の差は有意であった〔 $\chi^2(1)=5.904, p<.01$ 〕。なお、残差分析の結果では、日本語母語話者は中国人日本語学習者に比べ、会話においては「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、中国人日本語学習者は「接続助詞的な特性」を有意に多く使用していると判断できた。つまり、「けど」文の意味特性の使用には、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に差異があることがわかった。

(3) 意味特性と談話機能の関連性における分析

日本語母語話者と中国人日本語学習者に分け、「けど」の談話機能の出現数と出現頻度を意味特性別に統計して表 4 にまとめる。さらに、図 1 にその結果を棒グラフで示す。

表 4 談話機能における「けど」の出現数及び出現頻度（グループ別、意味特性別）

機 能	グループ 意味特性		中国人日本語学習者	
	日本語母語話者		終助詞的な特性 (%)	接続助詞的な特性 (%)
ア. 事実を述べる場合	終助詞的な特性 (%)	40 (27.2%)	0 (0.0%)	9 (16.1%)
イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合	接続助詞的な特性 (%)	10 (6.8%)	6 (10.7%)	10 (17.9%)

ウ. 否定的な意見を述べる場合	3 (2.0%)	7 (4.8%)	6 (10.7%)	5 (8.9%)
エ. 発話の切り出しの場合	8 (5.4%)	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)
オ. 情報の補足・補正の場合	29 (19.7%)	0 (0.0%)	18 (32.1%)	0 (0.0%)
カ. 相手に意見、判断を求める場合	0 (0.0%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)	1 (1.8%)
合 計	128 (87.1%)	19 (12.9%)	40 (71.4%)	16 (28.6%)
	147 (100%)		56 (100%)	

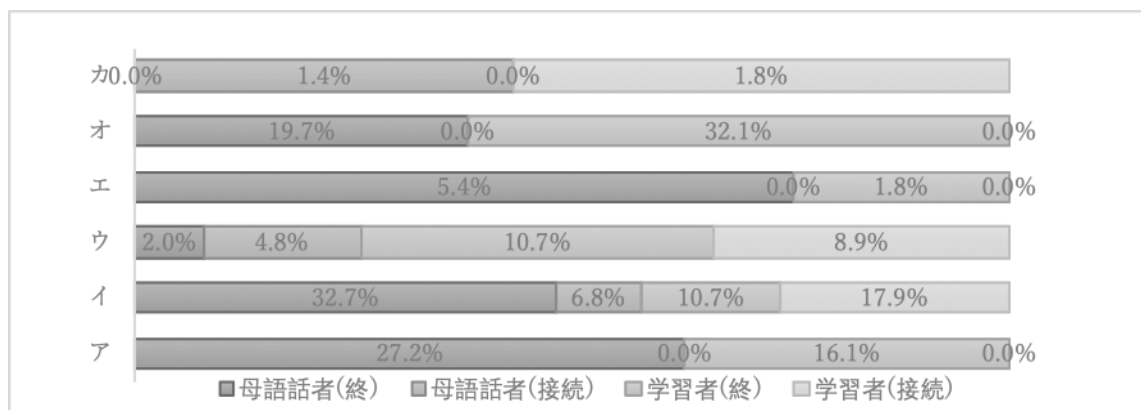


図1 談話機能における「けど」の出現頻度（グループ別、意味特性別）

表4と図1を見てみると、「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」では、日本語母語話者と中国人日本語学習者における意味特性の使用数に差が見られた。日本語母語話者では「終助詞的な特性」(32.7%)が「接続助詞的な特性」(6.8%)より顕著に用いられているのに対して、中国人日本語学習者においては二種類の意味特性にあまり差が見られなかった。一方、これらの2種類の意味特性の使用数に関しては有意な差が見られた〔 $\chi^2(1)=10.831, p<.01$ 〕。なお、残差分析の結果、「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」においては、日本語母語話者は中国人日本語学習者より、「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、中国人日本語学習者は「接続助詞的な特性」を有意に多く用いていることが分かった。つまり、「イ. 肯定的な意見、考えを述べる場合」においては、両グループの間での意味特性の選択には差があるといえる。

IV. データの考察

前節では、日本語母語話者と中国人日本語学習者における「けど」の使用実態について、談話機能と意味特性の関連性の視点から量的な対照分析を行った。本節では、コーパスから自然会話を抽出し、両グループ間に見られた相違点について考察を行う。

1. 肯定的な意見、考えを述べる場合

この機能における「けど」は、主に話し手の物事に対する意見や、自分の考えなどを述

62 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
ー日本語母語話者との比較対照を中心にー

べる発話文の終わりに付けられる。

量的分析から、「肯定的な意見、考えを述べる場合」においては、日本語母語話者は中国人日本語学習者より、「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、中国人日本語学習者は「接続助詞的な特性」を有意に多く用いていることが分かった。次に、両者の使用上における相違点を具体例で示しながら分析していく。

まず、以下の日本語母語話者の会話文を参照されたい。

例文 9 （BA01：日本語母語話者、NNU：中国人日本語学習者）

NNU	えっと、どん、ど、何を一、研究したい、んですか?['んですか'はほとんど聞こえないくらいの大きさで]。
BA01	心理学ゼミに入っているんですね。
NNU	うん。
BA01	それなんで一(うん)、あの一、青年期…。
NNU	青年期?。
BA01	ちょうどわたしたちくらいの(うん)、大学生とか(うんうん)もうちょっと若いと高校生も入って(うん)くるんですけど(うん)、後一、親子関係について(うん)、それをからめて研究したいな一と思ってるんです <u>けど</u> 。

(会話データの名称：153-11-BA01-NNU)

この例文は、NNU が BA01 に修士論文の研究について質問をしている雑談である。BA01 が「青年期団体の親子関係について研究する」と自分の将来の計画を NNU に告げる。BA01 は、文末に「けど」を付け加えているが、彼女の発話意図はそこで言い終わっていると考えられる。しかしながら、このように、「けど」で終わらせることにより、聞き手にとっては「けど」が付かない言い切りの形と比べると、話し手が遠慮がちに話しているように感じられる。

中山(1985)は、「断定を避け言葉尻を濁したり、自分の意見を譲歩形の言葉で述べたりすることによって、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避けている」と論じている。例文 9 のように、日本語母語話者は、自分の考えや意見を述べる際に「けど」を付加し、その終助詞的な特性により、断言を避け、聞き手に婉曲的に伝達する傾向が見られる。

次に、中国人日本語学習者の会話文を示す。

例文 10 （JF04：日本語母語話者、TF04：中国人日本語学習者）

TF04	洗練された文章…,,
JF04	<笑いながら>洗練された文章…。
TF04	であったらよかったんだ <u>けど</u> <2人で笑い>。
JF04	そう、なんか日本語だと、10 文字ぐらいで言わないと(うーん)いけないことを、中

	国語だと、バンって、(あー)新熟語で、(はーはーはー)、言えたり(うん)するじゃない?。
TF04	結構あるね。

(会話データの名称：145-10-TF04-JF04)

この会話は、同じ内容の論文を中国語で書くと、字数が日本語で書くときよりも短くなるという話である。その中で、TF04 はもし日本語の論文が中国語のように洗練された文章であったらよかったという期待を述べている。この期待を述べる表現においては、「あったらよかった」という対比的な表現の文末に「けど」が付け加わることによって、その「接続助詞的な特性」の意味により、主節が推測される。すなわち、「あったらよかった」とこと対比的な「実際そういう洗練された文章がない」という現実が主節として推測される。

内田 (2001) では、「主節のみを言語化すれば最低限必要な情報は伝達されるにもかかわらず、その主節を述べず、対比的内容の『けど終止文』のみを述べることで、かえって主節の内容が強調される結果となっている」と述べている。例文 10 のように、中国人日本語学習者は自分の考えや意見をはっきり述べず、「けど」で言いさし、接続助詞的な特性を発揮させることにより、聞き手にその意図を推測させる傾向が見られる。

2. 否定的な意見を述べる場合

この機能における「けど」は、主に聞き手と不同調な意見や聞き手の質問を否定する発言の終わりに付けられる。

量的分析から、全体の機能については、中国人日本語学習者は日本語母語話者より有意に多く使用していることがわかった。次に、両者の使用上における相違点を具体例で分析していく。

まず、日本語母語話者の会話文を参照されたい。

例文 11 (JF08：日本語母語話者、TF08：中国人日本語学習者)

JF08	なんかあたし多分 2 年後に結婚<笑いながら>してないと思うけど<2 人で笑い>。
JF08	うーんなんかね 【 【。
TF08	】】 あたし 2 年後、2 年後も 5 年後も<2 人で笑い>、し、しれない<2 人で笑い>、この調子じゃ<2 人で笑い>。
JF08	そりゃそうだよ、台湾に帰ってからねー,,
TF08	<あー、ねーねー>{<},,
JF08	<こっちにいる間はちょっと>{>} 【 【。
TF08	】】 台湾に帰る(うん)、ことって、帰りたいとは思ってるんだけど(うん)昨日とも、友達の方‘ほう’から、メールが、来て、なんか、占いの、やつ(うん)、だったの=。

64 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
－日本語母語話者との比較対照を中心に－

TF08	=それをちょっと、何ていう、生ま、れるー、生まれた時間(うん)、何時から何時までを(うん)、あの一中国、の、日本、日本…、あ1日を12個の時間帯に分けて(うんうん)、でどの時間帯に(うんうん)、あるのかそれ、に、プラス(うん)生まれた季節、で私秋(ふーん)、その時間、の、やつとー(うん)、秋っていう、組み合わせで、どれに当たるか(うんうん)、で、ちょっと、見てみたら、その、占いの結果、と、《少し間》遠く(うん)、遠い(うん)、所に(うん)、行った方がいい、良しって書いてあった<笑い>。
JF08	<笑いながら>あーそうなんだ。
TF08	あー“それじゃあたし台湾に帰っても駄目になる”<笑い>。
JF08	<笑いながら>遠いってどのぐらい遠いっていうのもある <u>けど</u> ね。

(会話データの名称：145-10-TF04-JF04)

JF08 と TF08 はいつ結婚できるかの話題をめぐって雑談している。台湾出身の TF08 は今の調子が続くと、自分は二年後も五年後も結婚できないと思っている。JF08 は TF08 が台湾に帰ったら、そういう状況が変わると慰めている。しかし、TF08 は遠い所に行ったほうが結婚の縁起がいいという占いの結果に基づき、自分が台湾に帰っても結婚できないという意見を持っている。それに対して、JF08 は「遠いってどのぐらい遠いっていうのもある」という比較の条件を持ち出し、「遠くといっても、比較尺度がなければ判断できない」という見方を認識させ、「台湾に帰っても決して駄目になるわけではない」という言語化されていない主節の内容を推測させようと試みている。つまり、この状況下において、JF08 は TF08 と異なった意見を持っている。その一方で、聞き手と反対の意見を表明することは相手のフェイスを脅かす恐れがある。よって、それを防ぐため、JF08 は意見表明の発言を言いかけて、「けど」で言いさし、本当に言いたかった「遠いといっても、比較尺度がないと判断できないし、台湾に帰っても決して駄目になるわけではない」という意見を聞き手に暗示的に伝えている。

内田（2001）も述べているように、「けど」には否定内容を明言することへの躊躇という聞き手に対する気遣いのニュアンスを持つ。例文 11 のように、日本語母語話者は、聞き手に不同意を表明する際に、「けど」文の「接続助詞的な特性」を多用している。否定的な意見の主節を含意することにより明言を避けることになり、話し手は自らの主張を和らげようとしている。これは聞き手の気持ちに対する配慮の一つと言える。

次に、中国人日本語学習者の会話文を示す。

例文 12 （J2：日本語母語話者、L3：中国人日本語学習者）

J2	<笑い>、えっ(ん)、え、どれぐらい勉強してるんですか?。
L3	いまー、来てる、今3年、日本に来て3年目に入ったんですけど。
L3	ですねー、まあ、そのぐらいの時間ね。

J2	えっ、えじゃー日本に来る前はぜんぜん、<やっ>{<} 【 【。
L3	】】<いや>{<}、全然とは言えないんだ <u>けど</u> ー。

(会話データの名称：259-20-J2-L3)

J2 は L3 に日本語の学習時間について質問をする。L3 は日本に来て何年目になるかがその日本語の勉強時間になると応答した。それに基づき、J2 は日本に来る前に全然勉強していなかったかと推測して質問をした。L3 は「全然とは言えない」と直接的に J2 の質問を否定して答え、その否定的な応答を「けど」で言いさした。これは、J2 への否定的な態度を和らげようとしていると考えられる。

三原 (1995) では、「ケレドモ文の特徴として、聞き手の質問を否定したり、聞き手にとって不利益になるような事柄を表す場合に用いられることがあげられる」と指摘している。例文 12 のように、中国人日本語学習者は聞き手の質問を否定する際、その否定的な応答に「けど」を付加することにより、応答の否定性を和らげ、聞き手を否定することへの躊躇いの気持ちを表している。

3. 情報の補足・補正の場合

この機能における「けど」は、主に話し手が自分の先行発話を補う際、あるいは正しく理解してもらうために先行発話を修正する際の発話文の終わりに付けられる。

日本語母語話者と中国人日本語学習者の両方とも、このタイプの機能においては、「けど」が「終助詞的な特性」に集約しているが、用例を分析してみると、相違点が見られた。

まず、以下の日本語母語話者の会話文を参照されたい。

例文 13 (JF10：日本語母語話者、TF10：中国人日本語学習者)

TF10	】】<仕事は>{<}ないの?。
JF10	仕事は、日本語を勉強してうまくなること。
TF10	うっそ!、それは仕事なの?。
JF10	うん=。
JF10	=だから日本に来て留学生みたいな扱いになってる。
JF10	学生証もちゃんとあって、映画見る時も 【 【。
TF10	】】えっ?、でもビジネスマンでしょう?。
JF10	うん。
JF10	そうそうそう<そうそう>{<}。
TF10	<研修>{<}かな?。
JF10	まあ、そんなのかな。
JF10	一応ちゃんとしてる(うん)日本語学校に通って、で、学生証を持ってて、(うん)映画見る時もちゃんと学割効いて。

TF10	いいなあ(＜笑い＞)。
TF10	あたしもああいうふうな仕事につきたーい(＜笑い＞)。
TF10	羨ましくしい>{<}。
JF10	＜実際>{>}は、男じゃないとだめみたいだ <u>けど</u> 。

（会話データの名称：151-10-TF10-JF10）

これは、女性同士の雑談である。JF10 は TF10 にアルバイト先で知り合った韓国人のおじさんの話をしている。その人は単身赴任で日本に派遣されており、日本語を勉強することが仕事である。TF10 はその仕事の内容にびっくりさせられ、自分にもそういう会社に勤めたい気持ちを表している。そこで、JF10 は「実際は、男じゃないとだめみたい」という情報を持ち出し、文末に「けど」を付け加え、その内容を補足的な情報として TF10 に伝達したことにより、相手の勤めたいという気持ちを打ち消そうとしている。

白川（1996）では、このような「けど」節は先行の文で話し手自身が言ったことを補正する機能を持ち、先行する文から聞き手が導き出すかもしれない含意をキャンセルするために、但し書き的に付加されると指摘している。例文 13 のように、日本語母語話者は、話し手の先行発話から聞き手に誤った解釈が生じた際、その解釈を正しい方向に導くために、このタイプの「けど」文を使う傾向がある。

次に、中国人日本語学習者の会話文を示す。

例文 14 （J4：日本語母語話者、L4：中国人日本語学習者）

J4	え、じゃあ、「依頼者名」さんとは、どういうふうにしてー、コンタクトができたーの？。
L4	「依頼者名」さんの一学生[↑]、(うんうん)「依頼者名」さん多分、そういう学、前はね、民間のような日本語の学校で、先生として働いたみたい <u>けど</u> ねー[だんだん小さい声で]。
J4	「依頼者名」さんが？。
L4	うーん。
J4	あ、そういう関係で、か。
L4	それでー(うんうん)、「依頼者名」さんの学生[↑]、「L4 の友人名」さんという人が、私と友達なんですよ。

（会話データの名称：262-20-J4-L4）

J4 と L4 は談話録音の依頼者との関係をめぐって雑談している。J4 は依頼者と学生同士の関係を表明して、L4 に依頼者とどういうふうに関わったかを質問している。L4 は自分が依頼者の学生を通して知り合ったと答えようとしている。ところが、突然依頼者の学生という J4 の知らない情報を話し出すと、現在依頼者と学生同士の関係の J4 を混乱させる可能性があるとして L4 は気づいた。それを防ぐため、L4 は依頼者の教師を勤めたという情報

を途中で挿入し、そこで「けど」を付け加えて補足的な内容として J4 に説明している。

石黒 (2014) では、このような挿入的な「けど」節は、「すでに述べた内容だけでは情報が不足していると話し手が判断した場合に、当初の発話計画を変更して入れるものである」と述べている。例文 14 のように、中国人日本語学習者は、聞き手にわかりやすく理解してもらうため、先行発話で言いたらない情報をあとから付け加える際に、このタイプの「けど」を多用する傾向が強い。

4. まとめ

以上見てきた談話機能ごとに、日本語母語話者と中国人日本語学習者の「けど」文の意味特性の選択使用における相違点を次のようにまとめる。

まず、「イ．肯定的な意見、考えを述べる場合」においては、聞き手に情報を伝達する仕方に違いが見られた。日本語母語話者は、聞き手に配慮しながら、自らの考えや意見を婉曲的に持ち出しているのに対し、中国人日本語学習者は、後の文脈や文中の対比要素と比較しながら、強調したい主節を暗示的に聞き手に認識させるといった差異が観察された。

次に、「ウ．否定的な意見を述べる場合」においては、聞き手に対する配慮の仕方に違いが観察された。日本語母語話者は、聞き手と不同調な意見を表明する際、言いたいこと的主節を含意することによって明言を避け、聞き手の気持ちに対する配慮を表している。一方、中国人日本語学習者は、聞き手の質問を否定する際、直接的に否定を行うため、その否定性を緩和させるために、「けど」の「終助詞的な特性」を用いて聞き手の気持ちに対する心遣いを表している。

「オ．情報の補足・補正の場合」においては、先行発話に対する情報補足により生じた効果に違いが見られた。日本語母語話者では、先行発話から聞き手が間違った判断をした際や、伝えたかった内容と行き違った解釈が生じた際に、補正的な情報を挿入するために「けど」が用いられる。一方、中国人日本語学習者は、先行発話で言いたらなかった場合、聞き手の理解に役立つ情報を補足的に入れるために「けど」を使用する。

おわりに

本研究では、「けど」文の談話機能とその文の意味特性の関連性から、日本語母語話者と中国人日本語学習者の使用実態について分析を行った。意味特性の分析においては、日本語母語話者は「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、中国人日本語学習者は「接続助詞的な特性」を有意に多く使用していることがわかった。一方、談話機能においては、自分の意見や考えを述べるか、聞き手への要求か、どのような発話に応じるかによって、日本語母語話者と中国人日本語学習者の「けど」文の意味特性の選択使用に差異があることがわかった。

本稿では、話し手側の使用実態に焦点を当てて言いさし表現「けど」について考察した

68 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
—日本語母語話者との比較対照を中心に—

ものであるが、聞き手側がどのように受け止めているかについては触れられなかったため、それを今後の課題にしたい。

注

- 1) 言いさし表現に関する先行研究では、「けど」「けれど」「けども」「けれども」の表記が見られる。これらの表記には丁寧さなどの待遇表現的な違いがあることは認められるが、意味的に近いものであると考えられる。また、コーパスを調べた結果、「けど」で言いさす文がほとんどであることから、本稿では、「けど」で表記を統一する。つまり、本稿で扱う「けど」には「けど」「けれど」「けども」「けれども」が含まれる。
- 2) χ^2 検定、またはカイ二乗検定とは、帰無仮説が正しければ検定統計量が漸近的にカイ二乗分布に従うような統計学的検定法の総称である。
- 3) 朴（2008）の分類では、「終助詞としての機能」と「接続助詞としての機能」と呼ばれる。この名称は、終助詞と接続助詞それぞれの特徴を直感的に理解しやすい点で優れている。しかし、機能という用語は談話の流れの中でどのような働きをしているかを指すため、「けど」文の発話意図のありかを分類するには適切ではないため、本稿では、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の表現を用いる。
- 4) 本稿では、分析対象となる「けど」は、下線と文字の網かけを付けて強調する。
- 5) χ^2 検定ツール：http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/chisq_ixj.htm
- 6) 田（2013）の調査においても、「終助詞的な特性」のほうは「接続助詞的な特性」より多く使用されることが判明し、本研究はそれと同様な結果となった。

参考文献

- 石黒圭（2014）、「講義の談話における『が』『けれども』の用法」『一橋大学国際教育センター紀要』5、3-15 頁。
- 内田安伊子（2001）、「『けど』で終わる文についての一考察—談話機能の視点から」『日本語教育』109、40-49 頁。
- 何潔（2018）、「言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察—男女差を中心に」『地球社会統合科学研究』9、37-48 頁。
- 佐藤勢紀子（1993）、「言いさし『…が/けど』の機能—ビデオ教材の分析を通じて」『東北大学留学生センター紀要』1、39-48 頁。
- 白川博之（1996）、「『けど』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6、9-17 頁。
- 白川博之（2009）、「『言いさし文』の研究」くろしお出版。
- 田昊（2013）、「『言いさし』の「けど」類の使用実態に関する一考察」『日本語教育』156、45-51 頁。
- 曹英南（2000）、「『けど』で終わる発話の語用論的研究—『言い終わり』の『けど』を中心に」『言語文化と日本語教育』19、89-100頁。

中山治(1985)、『『ぼかし』の構造-日本語の表現心理』『月刊言語』第12号、64-69頁。

朴仙花(2008)、「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—『けど』『から』を中心に」『言葉と文化』9、253-270頁。

三原嘉子(1995)、「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』2、79-89頁。

The Actual Uses of Japanese “*kedo*” by Chinese Japanese Learners:

A Comparative Case study with Native Japanese Speakers

JIE, He

Abstract

The Japanese conjunctive particle “*kedo*” is usually thought to function as a reverse conjunction word whereas it frequently appears at the end of sentence in daily conversations as well. Despite the fact that the sentences seem to be incomplete at first glance, native Japanese speakers find these expressions to be natural and are able to continue the conversation. On the other hand, learners of Japanese language often find such expressions arduous to use in accordance with the context and understand when used by native speakers.

Using natural discourse corpus, this research aims to clarify the actual uses of “*kedo*” of both native speakers of Japanese and Chinese learners of Japanese. The discourse functions “*kedo*” are divided into “information providing” and “information requesting” in this study. The semantic properties are divided into “final particle property” and “connection particle property” based on whether the speaker’s speech intention is affiliated to the subordinate clause with “*kedo*” or the main clause. Drawing on the interrelation of the discourse functions and the semantic properties of “*kedo*”, this paper examines the different uses between native speakers of Japanese and Chinese learners of Japanese.

The results suggest that most native speakers of Japanese tend to use “*kedo*” for its final particle property, whereas Chinese learners of Japanese tend to use it for its connection particle property. In addition, the choice of the semantic properties of “*kedo*” differs depending on whether the speaker expresses his or her thoughts and opinion, requests information from the listener, or the types of response.

Keywords : “*kedo*”, unfinished sentence, actual uses

- 70 中国人日本語学習者の言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察（論文）
ー日本語母語話者との比較対照を中心にー

「ゼロ初級外国人生活者」向けの地域日本語教育プログラム研究

陳 帥（九州大学大学院生）

要旨

近年、地域日本語教育において、「生活者としての外国人」向けの日本語教材やカリキュラムが活発に開発されている。とくに、文化庁は「生活者としての外国人に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」を公表したが、ゼロ初級者に適用できない部分があることや、実際の地域日本語教室で応用しにくいなどの問題がある。また、地域日本語教室においては、学習者が最初に教室に来た際、ボランティアがレベルチェックをしたり、学習ニーズを聞いたりしてから日本語支援活動を設計することが従来の方法である。ボランティアに負担を強いるだけでなく、学習者のニーズに十分応えられるとは言い難い。そこで、筆者は支援する際に最も手間がかかるゼロ初級者に目を向け、彼らの共通的なニーズを整理した上で、地域日本語教室でも参考にでき、学習者も自己管理ができる学習プログラムを開発することを目指す。そのため、本研究では、地域日本語教室に参加しているゼロ初級者が何を求めているのか、地域日本語教室がどのように対応しているのかなどをアンケート調査とインタビュー調査で明らかにする。そして、ゼロ初級者の共通的なニーズに応えられる、日常生活に必要最低限の日本語を効果的に学べる学習プログラムを提案する。

キーワード： ゼロ初級、地域日本語教育、開発、自己管理、学習プログラム

はじめに

地域日本語教育において、来日初期段階のゼロ初級者は重要な対象として扱われてきた。しかし、彼らの多くは、まとまった学習時間を確保することや継続的に日本語教室に通うことは困難な状況にあり、日本語教室側もボランティア活動であるため、多くの時間をかけて日本語学習支援を行うことができない。様々なカリキュラムや支援対策などが提唱されてきたものの、未だにその内容・方法が確立されていないため、多様な学習ニーズに十分応えられていなかったり、教室活動の準備や実践においてボランティアに過度の負担を強いていたりとといった課題が残っている。学習時間が少なく、媒介語が使えないゼロ初級者に対して、各地域の日本語教室は様々な支援方法を試しているが、うまくいかない場合もよく見かけられる。

その一方で、法務省（2016）によると、近年在留外国人数は年ごとに増加している。都道府県別では、47 都道府県全てで前年末を上回った。その中で、最も多いのは、東京都が 48 万 3538 人（対前年末比 2 万 806 人（4.5%）増加）であり、全国の在留外国人数の 21.0% を占めている。大阪府、福岡県も全国の 10 位以内にある。また、日本語学習者は、大学などの教育機関内でも増えているが、地方の教育団体での増加のほうがはるかに顕著である。ゼロ初級者の具体的な人数は統計的に証明が出来ないものの、生活者としての外国人が増加すれば、地域日本語学習者の数も増加するものと思われ、かつその中に多くのゼロ初級者が含まれることは、常識的に考えても否定できない。そのため、ゼロ初級者向けの学習プログラムの開発が求められることは必至であろう。そこで、本研究では、まず様々な状況にあるゼロ初級者の共通的な生活ニーズについての基礎になる調査を行い、その結果を踏まえて、学習者が自律的に使え、支援者にも扱いやすい基本的な日本語学習／支援プログラムを作成した。

I. 先行研究

1. ゼロ初級者のための地域日本語教育に関する研究

地域日本語教育において、「何を、どのように教え/学ぶか」を明らかにするために、第一歩として、日本に在住する外国人の日本語学習ニーズについての情報を収集し、実態を把握する必要がある。その一環として、国立国語研究所は 2008 年に、外国人と日本人のそれぞれを対象に、全国規模のアンケート調査を実施した。その「生活のための日本語：全国調査」は質問票による大規模言語使用調査で、地域的偏りがないように選ばれた全国 20 都道府県において実施された。この調査は日本人を対象とした調査と外国人を対象とした調査で構成されているため、これを基に様々な考察や研究が行われてきた。その中に、松永他（2012：20）では、『生活者』のための日本語教育に取り組むにあたり、多文化理解教室の実践をはじめたが、今後は各地域におけるプログラムを開発していくことが必要である。特に、「生活のための日本語」を学習者が主体的に学べるプログラムが必要になっていく」と指摘されている。

その一方で、文化庁は 2008 年から、生活者としての外国人の困難な状況とボランティアの過度の負担を考慮した上で、各地域における多様な日本語教育の実践の指針となる標準的な教育内容を具現化するものとして、標準的なカリキュラム案の開発に取り組んでいる。文化庁（2010：5）によると、「標準的なカリキュラム案は、来日間もない外国人が生活上の基盤を形成するために必要な生活上の行為の事例とそれに対応する学習項目の要素及びそれらに要する学習時間の目安からなっている」ということである。それだけではなく、各地域での活用方法を明確に示すために、「標準的なカリキュラム案」を基に、5 つの成果物（5 点セット）¹⁾が次々と開発されている。

さらに、近年、このような「標準的なカリキュラム案」の各地域での活用方法を探る一

方で、地域日本語教室で使えるようなオリジナル教材も作られた。平成 26 年度に、文化庁の地域日本語教育実践プログラム (A) が各地で実施された。その結果として、地域の状況や地域日本語教室の特徴に合わせてそれぞれオリジナルの教材が作成されたが、地域に密着した特色を持つ反面、使える範囲がかなり限られている。

その後、「標準的なカリキュラム案」の地域での活用方法を探るために、文化庁により、日本語教育推進プロジェクトが立てられ、各地の日本語学校、公益社団法人、NPO 法人などが委託を受け、実際にプログラムを運営している。福岡では 2016 年の文化庁委託事業の一環として、3 ヶ月間の教育実践が行われた。「地域社会で生活する外国人一人一人の実現したい日常の思いを形にする教室活動」を目指して、ボランティア教師 5 名が学習者 15 名に対して、全部で 30 回の教室活動を実践した。グループは、3 つに別けており、それぞれ、「ゼロ初級グループ」、「主婦グループ」、「男性グループ」となっている。その中のゼロ初級グループの学習プログラムを見ると、確かに生活に密着した場面での日本語支援を目指しているのだが、時間の関係で、日本語の基礎となる五十音図を教えていなかったため、場面シラバスの学習は進めにくいという意見が参加者から聞かれた。そして、プログラムがあまりにも簡単すぎるため、これをほかの生活場面で応用するには、さらに工夫が必要であると思われた。

言うまでもなく、日本語教育の支援だけではなく、日本に暮らしていく上で必要な生活情報や入門的な日本語知識を盛り込んだ「文化庁 (2012)」などもつぎつぎと開発されてきた。とくに、このハンドブックは韓国・朝鮮語、中国語、ポルトガル語、スペイン語及び英語の 5 か国語のそれぞれと日本語の対訳となっているので、日本語ができないゼロ初級の生活者も容易に使えるものになっている。

このように、ゼロ初級者を対象にした学習支援プログラムの策定研究は国によって実施されたものが多数であるが、個人的に取り掛かっている研究はまだ少ない。それぞれに特徴があるものの、実践する際に使いにくい部分もある。

2. 先行研究の問題点と本研究の視点

本研究のプログラムの特徴はまず学習者にも支援者にも使えることである。学習者の立場に立ち、目標と学習内容を設定する。そうすると、学習者の自律学習も期待できる。そして、学習順序をニーズによって決めることで、「標準的なカリキュラム案」の不足を補うことができる。その上、ゼロ初級者が対象であることを考慮し、五十音図と日本語一般の基礎知識をしっかりと教える/学べるようになっている。それによって、これからの日本語学習が進みやすくなると推測できるからである。また、ゼロ初級者の状況を把握した上で、適切な教室活動を場面に応じて提示することを試みている。そこで、本研究の視点の独自性と特色を明らかにするため、先行研究と本研究を、以下の表 1 のようにまとめ、比較してみた。

表 1 先行研究の問題点と本研究の視点

	特徴	問題点
標準的なカリキュラム案 「文化庁（2010）」	生活上の行為の事例、教室 活動の方法例、学習時間の 目安を示している	優先順位がない 学習者が使えない 地域の実情に合わせて使える人材が 少ない
日本語学習・生活ハンド ブック「文化庁（2012）」	生活情報の提供 5ヶ国語の対訳あり	日本語学習／支援を志向していない
外国人住民のための日本 語教室オリジナルテキスト（京都府）	日本語教室で使いやすい 7ヶ国語翻訳つき	使用範囲が少ない 単語と会話からなっており、教室活 動がない
文化庁委託事業-福岡教 育実践	オリジナルな資料を使う 外国人が実現したい思い を基に教える	五十音図や基礎知識を教えておら ず、学習がすすみにくい
本研究のプログラム	学習者も使える 学習順序を調査によって 決める 五十音図と基礎知識も教 える 適切な教室活動を示す	地域の差を考慮せず、共通的なニー ズを重視する 使用教材が決まっている

本研究では学習者の立場に立ち、自律学習する際にも、地域日本語教室のボランティアに自分のニーズを伝える際にも活用できるプログラムを開発する。このようにして、学習者が有効的に日本語学習を進めることができると推測できる。

Ⅱ. 研究課題

前述のように、従来「生活者としての外国人」のための地域日本語教育の中では、ゼロ初級者、つまり来日して間もなく日本語もわからず、日本の生活にも慣れていない人が対象の中心であり、それゆえ、ゼロ初級者向けの「生活のための日本語」を学習するカリキュラムやテキストなどがつぎつぎと開発されてきた。しかし、それぞれの問題点もある。とくに、地域日本語教育の実践の指針となる「標準的なカリキュラム案」は提案の段階にとどまっており、実際の教室での使用はまだ模索の段階だと言えよう。

そして、筆者が東京、大阪、福岡にある約 40 箇所の日本語教室を回ってみたところ、「標準的なカリキュラム案」に基づいて学習支援しているところは極めて少ない。それを活用

している教室は数カ所あるが、そこでは毎回授業準備や内容検討のため非常に時間がかかっていた。とくに、学習時間が少なく、媒介語が使えないゼロ初級者に対応する場合、コミュニケーションが取れないため、いったいどのような学習順序で、どのように学習を進めれば良いか困っているボランティアが多い。そこで、日本に在住し、地域日本語教室に参加するゼロ初級者のニーズや意識を全体的に把握した上で、実際に使える学習プログラムを提示したほうが、ボランティアとしても授業を準備しやすいし、学習者としても学習の一貫性があり、自律学習も促進できると考えられる。

このように、先行研究の問題点、及び筆者自身の経験に基づき、以下の研究課題を提示することとする。

課題 1. 地域日本語教室を利用するゼロ初級者はどのような意識やニーズを持っているか。

課題 2. 地域日本語教室のボランティアはゼロ初級者に対応する際、どのような問題を抱えているか。

課題 3. ゼロ初級者が使えるような学習プログラムとはどのようなものか。

Ⅲ. 研究方法と研究結果

まず、筆者が東京、大阪、福岡の3都市で開催されている地域日本語教室を訪問し、各日本語教室のゼロ初級グループに参加する。そして、教室活動の実施状況やゼロ初級者とボランティアの協働関係を考察する。その場で調査協力者であるゼロ初級者を探し、彼らに対してアンケート調査を行う。このようにして、ゼロ初級者の大まかな状況とニーズを把握する。次に、アンケート調査の結果からさらに出てきた問題を基にゼロ初級者にインタビューしたり、またボランティアに対して普段の学習支援活動について質問したりする。このように得られた内容を分析することで、ゼロ初級者が地域日本語教室に求めていることと、ボランティアの対応状況などが明確になり、実際に使用可能な学習プログラムの開発に役立つと考える。したがって、本研究では2つの調査を行った。調査概要は以下の表2に示す通りである。

表2 調査方法一覧表

	調査期間	調査場所	調査対象	調査方法
調 査 ①	2017年3月～6月	福岡、東京、 大阪	ゼロ初級者 60 人	アンケート
調 査 ②	2016年12月～2017 年8月	福岡、東京、 大阪	ゼロ初級者 5 人 ボランティア 5 人	半構造化インタ ビュー ²⁾

1. ゼロ初級者へのアンケート調査

学習プログラムの学習内容、学習順序、学習方法などを決めるために、まずアンケート調査によって、ゼロ初級者の全体的な日本語学習ニーズについて調査した。

本調査は東京、大阪、福岡に住んでいるゼロ初級者 60 人(中国 30 人、ベトナム 3 人、ネパール 5 人、インド 4 人、インドネシア 10 人、エジプト 1 人、モンゴル 7 人) に対し、選択式・記述式のアンケートで行った。アンケート項目は国籍、年齢、来日時期、滞在予定期間など「学習者の属性」に関するものと、学習時間、学習内容、学習方法、学習活動及び地域日本語教室への希望など、全部で 36 項目である。

インターネットによるアンケート調査を実施したあと、得られたデータを分類し、統計分析を行い、主に、「学習時間」・「学習内容」・「学習方法」の 3 つの観点から調査結果をまとめた。以下、それぞれの結果を記述する。

(1) 学習時間について

学習時間を見てみると、日本語ができないと、日本での生活が困難なので、最低限必要な生活のための日本語を習得できるように、「毎日 1 時間ぐらい勉強したい」という答えが最も多く、63%を占めている。そのほか、「週に 2、3 回日本語教室に通いたい」、「週に 6 時間程度勉強する」というような回答も多く見られる。つまり、ゼロ初級者は、地域日本語教室での週に 1 時間半の学習だけでは時間が足りないと感じている。また、「週に 2、3 回日本語教室に通いたい」という回答から、集中的に日本語を勉強したいという気持ちを持っていることがわかる。そこで、学習者が自己管理できるような学習プログラムがあれば、自分のスケジュールに合わせて、地域日本語教室に参加することができる。できるだけ早く日本語を身に付けたければ、複数の日本語教室を利用し、集中的に勉強するのが効果的である。

また、一つの場面を習得するために復習を重ねた場合、「3 時間以上」かかると思っている人が最も多かった。ところが、地域日本語教室は 1 回の学習時間が 1 時間半程度で、毎回新しい学習をする形を取っている教室がほとんどである。この形を取らず、一つの場面を具体的な 2、3 個のトピックに分けて、着実に習得することを目指して 1 個のトピックごとに学習するほうが効果的ではないかと考える。

(2) 学習内容について

まず、「日常生活のなかで日本語を使うか」という質問に対して、16%の人が「使わない」と回答した。それは調査対象の中で中国人の人数が多いため、中国人のネットワークで生活している人も存在するからと考えられる。しかしながら、このような場合は何とか生活できるという段階にとどまるだけで、日本社会には溶け込むことができないのではないかと推察できる。

次に、生活上の行為の中でぜひとも日本語を勉強する必要がある行為とは何かについて、その優先順位を考えてもらった。それによれば、上位が「買い物、注文など」、「自己紹介と挨拶」、「公的機関で手続きをする、銀行や郵便を利用する」、「旅行、娯楽など」で、その次が、「病院、災害時の避難」、「交通機関の利用、道を聞く」「電話やインターネットを利用する」の順となっている。本学習プログラムはこの結果をもとに、学習項目の内容と順番を決める。

(3) 学習方法について

学習方法については、家での自律学習の方法と日本語教室での学習方法を分けて聞いた。その結果、家では教科書を使って復習できるため、日本語教室ではもっと豊富な教室活動を行い、日本語の練習をしたいと考えていることがわかった。この観点から、地域日本語教室は学習者の自律学習を補助し、勉強した日本語を練習するチャンスを提供する場所であると位置付けたほうが学習者の要望に応えるのではなかろうか。自律学習に有効な方法と言えば、ゼロ初級者は「教科書を利用する」「日本語のアニメやドラマを見て勉強する」、「日本語教室でもらった資料を用いて復習する」、「テレビを見る」と思いつく人が多い。そこで、本学習プログラムではゼロ初級者が使えそうなネット教材や教育ビデオなどを自ら探し、選択できるようにサポートすることを目指す。

また、教室活動の例をわかりやすく説明した上で、「好きになれそうな教室活動」に順番を付けてもらった結果、「実際の体験活動をしながら勉強する」、「模擬練習」、「グループでチームワークする」「先生や友達と日本語でやりとりする」「絵カードや写真を用いて勉強する」の順になっている。つまり、実際に体を動かしながら、日本語の知識を覚えていくことを期待している。しかし、いまの地域日本語教室において、時間と場所の制限がありつつ、ボランティアと学習者の都合によって、実体験活動を実施するのが難しい。そこで、本学習プログラムでは毎回の教室活動が終わった後で、ゼロ初級者に教室外で体験活動をしてもらい、実際に出会った状況がどんなものであるか次回の教室で共有し、そのために必要な表現や語彙を与えて練習する形をとることにする。

そのほかに、地域日本語教室で前回勉強した内容について、「少し時間をかけて復習したほうが良い」と思う人は66%にも達している。週に一回の教室活動では、とくに日本語学習の初心者にとっては、時間が経つと、勉強した内容をすぐ忘れてしまう可能性が高い。そこで、体系的な「予習＋学習＋復習」のプロセスが役に立つに違いない。しかしながら、地域日本語教室は流動性が高いので、次の週も同じペアやグループで学習できるとは限らない。したがって、本研究では学習者がプログラムを持って自分の日本語学習を管理する発想に至った。

2. ゼロ初級者とボランティアへの半構造化インタビュー調査

本調査の第2部分は、アンケート調査では浮かんでこなかった学習者や支援者の実態・希望・困難点などをより明確にするために、中国人を含む非英語話者のゼロ初級者が日本語学習上困っていることや地域日本語教育に対して希望することなどを、半構造化インタビューを通してより明らかにしたものである。このインタビュー調査は、現場でゼロ初級者を支援しているボランティアに対しても行い、それによって支援の実態と問題点を明らかにした。これらの結果をもとに、学習プログラムの作成に取り組んでいく。

本調査は、2016年12月から2017年8月にかけて、東京、大阪、福岡の地域日本語教室に通っているゼロ初級者5人とボランティア5人を調査協力者として行った。半構造化インタビューは調査者・調査協力者ともに単独で、20分から50分をかけて実施し、全て録音した。調査後、録音した内容を全て文字化し、調査協力者別に整理した。使用言語については、筆者と同じ母語を持つ中国人に対しては中国語を使い、中国語以外の言語が母語の学習者に対しては英語を使用し、ボランティアに対しては日本語を使用した。

学習者は全て日本に来て半年も経っておらず、日本の生活にも馴染みがなく、日本語レベルも低い段階にあるゼロ初級者である。職業は、それぞれ異なり、地域日本語教室で求めていることも多少違うと考えられるが、そこからもし共通的なニーズが見えれば、学習プログラムの学習内容に必ず使えろと考える。また、できるだけ地域日本語教室全般の状況を把握したいので、調査対象者は全て異なる日本語教室から選んだ。ボランティアの5人は全部定年退職者であり、また5年以上のボランティア歴があるから、ゼロ初級者への支援の経験も豊富だと考えられる。

インタビューデータの分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、修正版M-GTAとする）を用いた。本研究においては、収集したデータそのものを対象として、深く観察することを重視する。そこで、個人の経験とそれに対する解釈を理解するために、「研究する人間」として筆者の考えを加える必要がある。また、筆者も日本語学習者の中の1人であって、地域日本語教室のボランティアである以上、ゼロ初級者の困っていることやニーズなどを深く理解できると考える。さらに、結果図とストーリーラインを描くことで、ゼロ初級者とボランティアの協働関係が見られ、学習プログラムの開発に役立つと考える。以上の点から、本研究の研究課題に照らして修正版M-GTAが妥当な分析方法だと判断した。

手順については、まず、文字化したデータを繰り返して吟味し、基礎的分析作業を行う道具としての分析ワークシートを作成する。ワークシートは、表3に示したように、「概念」・「定義」・「具体例」・「理論的メモ」の4つの部分から構成され、その1枚につき1つの概念が生成されて、概念名が与えられる。表3はカテゴリー【ゼロ初級グループに対応する困難点】の中の「英語が通じにくい」という概念の生成過程を示している。

表 3 分析ワークシートの一例

概念名	英語が通じにくい
定義	学習グループ全員は英語ができるとは限らないので、英語は使えない場合がある。
具体例	<p>我们一起学日语的朋友，大家日语都很差，英语也不太会，所以只能是比划。还有一个泰国朋友，她说会英文，但是也不是母语，她的英文也不好，所以我们交流的很少。訳：一緒に日本語を勉強している友達はみんな日本語が下手で、英語もできないので、ジェスチャーでやり取りをする。あるタイの友達もいて、彼女は英語できるけど、母語じゃないから、コミュニケーションが取れにくい。(ゼロ初級者 C)</p> <p>说英文，我刚跟这个日本人交流的时候，他的英文我听不懂。訳：英語といえば、最初にこの日本人（ボランティアの人）とコミュニケーションするときに、彼が話している英語がわからなかった。(ゼロ初級者 D)</p> <p>Some teachers speak English, but there are also some cannot. (ゼロ初級者 E)</p> <p>英語がわかる人が媒介語として英語を使うけど、たとえば英語圏の人と中国の人がいる場合は媒介語使えないから、これ（絵とか）しか使えない。(ボランティア D)</p> <p>でも、私は英語ができないので、そういう説明はしませんが。だから、ゼロ初級の人に媒介語がなくて教えるのはとても大変だと思います。(ボランティア E)</p>
理論的メモ	<p>地域日本語教室ではゼロ初級者とボランティアが通じにくいことが窺える。そこから、英語に頼らないで、ニーズをリクエストできるような学習プログラムが求められると考える。</p>

ワークシートを作成した後は、その概念が果たして成立するかということを、具体例の類似例及び対極例を常に見ながら、概念の妥当性を検討することで確認し、完成度を高めていく。その後、生成した概念を個々で比較し合い、何らかの関係がありそうなまとまりとなる概念はどれか、生成した概念と対極的な関係にある概念は何かを考え、データを多角的に解釈する。そして、関連し合う概念をまとめて、カテゴリーを生成した上で、カテゴリーの関係を検討する。表 4 は生成したカテゴリーと概念の一覧である。

表4 カテゴリーと概念の一覧

【ゼロ初級者が困っていること】	「日本語の学習が進みにくい」	<母語を使うから日本語の進歩が遅い>
		<学習時間の不足>
		<勉強した内容を忘れやすい>
	「社会参加に支障がある」	<日本語ができないと自信がない>
		<習慣的な違いが不便を生じる>
		<日本社会に溶け込めない>
		<日常生活で困っている>
【ゼロ初級者の日本語学習】	<学習目標は高くない>	
	<自律学習の可能性>	
【地域日本語教室への希望】	<豊富な教室活動が望ましい>	
	<文化体験活動が役立つ>	
【日本語支援活動の要点】	<五十音から場面シラバスへ>	
	<基礎知識の必要性>	
	<語彙の認識が欠かせない>	
	<教室外で応用する>	
	<学習意欲を大事にする>	
【ボランティア活動の媒介】	<ある程度媒介語を使う>	
	<道具を使って教えている>	
	<教科書を使っている>	
【日本語学習だけではない】	<コミュニケーションも大事>	
	<勉強だけではダメ>	
【ゼロ初級グループに対応する困難点】	<英語が通じにくい>	
	<細かくニーズを聞くことができない>	

理論的飽和に至ったと判断できれば、分析を終了させる。M-GTA における理論的飽和の判断はデータを分析しても新たな重要な概念が生成されなくなった時点で行い、そこで分析を終了する。最後に、概念やカテゴリー間の関連性を提示する結果図を描き、それに基づいたストーリーラインを書く。分析結果を踏まえ、ゼロ初級者とボランティアの協働関係を図1に示す。四角の中にあるのはカテゴリーと概念である。対極関係は両方向矢印で、因果関係は一方向矢印で示す。

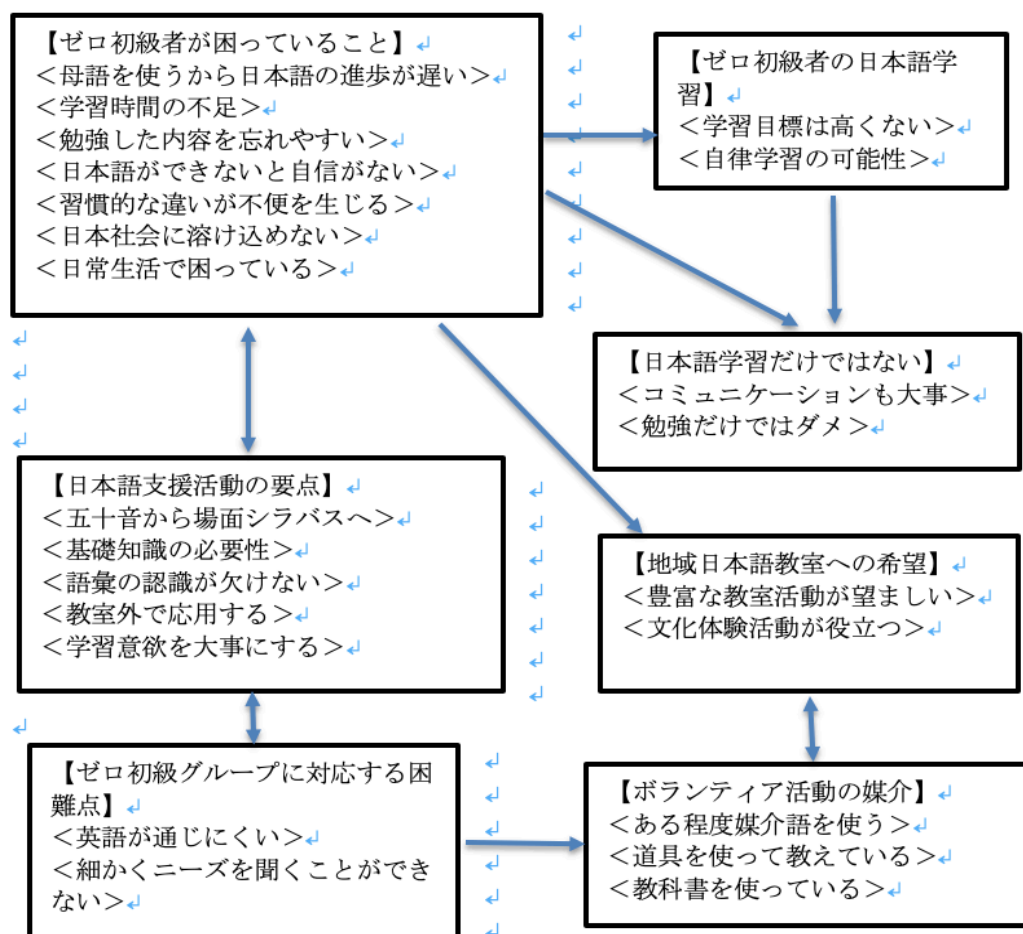


図1 ゼロ初級者とボランティアの協働関係

図1に基づき構成されたストーリーラインを次に書く。

まず、【ゼロ初級者が困っていること】の中には、「日本語の学習が進みにくい」と「社会参加に支障がある」の2つのサブカテゴリーが包摂されている。すなわち、日本語の知識も足りず、日本社会にも馴染まないことがゼロ初級者の生活に不便をもたらしている。

以上の問題を解決するために、地域日本語教室では、日本語学習支援を中心とする【日本語支援活動の要点】を考えて支援活動を行っている。その中で、＜五十音から場面シラバスへ＞＜基礎知識の必要性＞＜語彙の認識が欠かせない＞の3つの概念が基礎知識の重要性を語っている。そして、ゼロ初級者として、勉強した内容を＜教室外で応用する＞ことは重要だが、実際やっていない学習者も多いので、学習内容をなかなか自分の知識にできないという問題もよく出てくる。また、ボランティアはゼロ初級者の＜学習意欲を大事にする＞が、そもそも学習のモチベーションが低い人も存在するので、どのように彼らの興味を引くのかもボランティアが工夫しているところである。

その一方、地域日本語教室の支援活動は【日本語学習だけではない】。ひたすら勉強するだけではゼロ初級者がついていけない場合もあるし、また、「社会参加に支障がある」という問題もあるので、＜コミュニケーションも大事＞にしている。しかし、ゼロ初級者の日

本語知識が不足しているため、様々な活動方法が全部使えるわけではないので、活動は単一になりやすい。そのため、【地域日本語教室への希望】の中で、＜豊富な教室活動が望ましい＞＜文化体験活動が役立つ＞が多く挙げられている。また、＜英語が通じにくい＞＜細かくニーズを聞くことができない＞というような【ゼロ初級グループに対応する困難点】があるため、ほとんどの地域日本語教室ではゼロ初級者に対し、＜教科書を使っている＞。

IV. 考察と学習プログラムの作成

ゼロ初級者の意識やニーズ及び地域日本語教室ではボランティアの対応の仕方については以上の2つの調査によって明らかにした。そこで、地域日本語教室の現状を考慮した上で、先行研究の結果を参考にし、ボランティアが参考にでき、学習者も使えるような学習プログラムを開発する。

岩手県立生涯学習推進センター（2000）によると、学習プログラムは計画の時間的・内容的レベルに応じ、次のように分類することができる。

- ①中・長期事業計画
- ②年間事業計画
- ③個別事業計画（学習計画プログラム）
- ④学習展開計画（学習展開プログラム）

本研究の学習プログラムは③番の分類に属し、目的・主旨に基づき作られる詳細な運営、展開の計画になる。その一方、学習プログラムの構成要素を見てみると、一般に、学習プログラムは、事業名、目的、対象・定員、テーマ、日時、回数、時間、会場、費用、資料、教材教具、学習方法・形態、指導者などから構成される。本学習プログラムはこれらの要素を全部含むのではなく、地域日本語教室のボランティアが活用しやすいことを考慮し、必要な要素だけ具体的に提示することとした。そして、これからさらに現場でゼロ初級者の個人的なニーズに沿ってもっと活用しやすいように改善できればと考える。

まず、ゼロ初級者が勉強したい内容や日本の生活で困っていることを通じて、学習項目を定めた。また、ゼロ初級者のニーズにより、地域日本語教室で使えるような教室活動をトピックごとに提示した。さらに、地域日本語教室でよく見かける5冊のゼロ初級者むけの市販教材およびページ数も項目ごとに添付している。

本学習プログラムはゼロ初級の「生活者としての外国人」が日本で支障なく生活できることを目標にし、復習を含めて、76の学習項目を整理した。項目ごとに学習のねらい、学習内容、時間、学習方法を設定しているため、地域日本語教室のボランティアが指導するときに参考になることができると考える。また、学習者の生涯学習に必要な自律性を育成することを目指し、学習項目を英語、中国語、韓国語に翻訳することで、ゼロ初級者としても使いやすいと考えられる。具体的な使い方を見てみると、教材を持っている場合、学習プログラムに従って、自分で勉強することや、日本語教室に参加し、その場で学習した

い学習内容、活動方法などをボランティアにリクエストすることが挙げられる。また、実体験活動と復習を重ねながら、基礎知識と場面シラバスを織り交ぜた形で行い、勉強した知識を確実に身につけることができると推測できる。表5は学習プログラムの一部である。

表5 学習プログラムの一部

回	学習のテーマ	学習のねらい	学習内容	時間	学習方法	教材・備考
1	あいさつ	・簡単なあいさつができる ・日本語のイメージを理解する	・あいさつのことば ・ひらがなを読む	1.5	・教材（絵がつく） ・やりとり練習	A ³⁾ p. 20-p. 25 ひらがな表
2	自己紹介	・簡単な自己紹介ができるようになる ・日本語のイメージを理解する	・～は～です。 ・国 ・職業 ・カタカナを読む	1.5	・CDを聞く ・やりとり練習	実体験をする C p. 3-p. 4 D p. 6-p. 8 カタカナ表
3	売り場を探す	・買いたいものがどこで売っているのか尋ねることができる	・店舗の事情の概略を知る ・「これ、それ、あれ」「どこ」 ・ひらがな「あ」行	1.5	・スマホ ・店舗の図 ・商品の絵カード ・ロールプレイ	実体験をする B p. 31-p. 35 D p. 14-p. 19
4	復習	1～3の内容を身につける	1～3の内容	1.5	既習の材料を元に練習する	

おわりに

本研究は文化庁（2010）の「標準的なカリキュラム案」、及びそれに基づいた各地域の教材開発や日本語教育実践活動を参考に、その問題点を補いつつ、ゼロ初級者を対象とする学習プログラムを開発するものである。もちろん、ゼロ初級者もそれぞれ状況が違って、ニーズも異なるが、基礎的な研究としてまず日本で生活する上で共通的に必要なニーズに注目し、それに対応でき、「標準的なカリキュラム案」より地域日本語教室で使えそうなものを作ってみた。これをもって、直ちに地域日本語教室で使うことには至らないが、ゼロ初級者に対応する時に参考にしてまた現場で個人的なニーズを考慮しながら、本学習プログラムを加工すれば簡単に使えると考える。また、いままでは日本人ボランティアがゼロ初級者と意味疎通を図るために数多くの時間を無駄にしまうケースが少なくない。こ

の点においては、ゼロ初級者が本学習プログラムを用いれば、学習したい項目やテーマを選び、ボランティアにリクエストできるようになる。そうすると、学習者がゼロ初級者でも、ボランティアが英語などの媒介語ができなくても、学習者のニーズや学習状況の把握が容易になり、すぐ教えることができる。ゼロ初級者も集中的に学習したいニーズがあれば、学習プログラムを持って幾つかの地域日本語教室を回ればニーズを満たすことができる。

言うまでもなく、ゼロ初級者はそれぞれ状況が違ってニーズも異なり、1冊の教材あるいは1つのプログラムで全員のニーズに応えるのは不可能である。しかし、筆者が目指している目標は、できるだけ多くの学習者が使えるような学習プログラムを開発することである。そのため、基礎的な研究として、まず共通的なニーズに対応できるように、「標準的なカリキュラム案」より使いやすいものが必要だと考える。このようなものがあれば、それを参考にして、また現場で個人的なニーズを考慮しながら、簡単に加工して使うことができる。

今後は、さらに研究を進め、現場での応用に注目し、学習者のニーズや状況によって学習者をタイプ分けして、またタイプ別に今の学習プログラムの上に付け加えなければならぬ内容をそれぞれ具体的に提示する予定である。その上で、現段階のプログラムを地域日本語教室で実践しながら、ゼロ初級者にも使ってもらい、その感想や意見をアンケート調査によって収集し、それを元に学習プログラムを修正し、改善していく。その一方で、ゼロ初級者を5つのタイプ⁴⁾に別けて、それぞれの特徴を踏まえ、個別のニーズを聞き出し、追加の学習項目を設定する予定である。また、本学習プログラムの効果の検証について、ポートフォリオ評価を用いて考えたい。

注

* 本稿はCAJLE2018 Proceedingsの原稿「『生活者としての外国人』のための地域日本語教育に関する研究—ゼロ初級に向けた学習プログラム開発の一提案—」を加筆・修正したものである。

- 1) 文化庁が2010年から2013年にわたって開発した『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について』、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集』、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案活用のためのガイドブック』、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育における日本語教育能力評価について』、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育における指導力評価について』のことを指す。
- 2) 半構造化インタビューとは一定の質問に従い、面接を進めながら、被調査者の状況や回答に応じて面接者が何らかの反応を示したり、質問の順序や内容を臨機応変に変えたりすることのできる面接法である(保坂他, 2002)。したがって、何について質問すれば良いかがある

程度は把握できているが、どのような回答が得られるかが予測できない場合に適している。
また、必要があれば、インタビュー中に新たな質問を加えることができる自由度の高いインタビューとなっている。であるから、こうした調査方法は今回の調査に適切であるとする。

- 3) A、B、C、D、Eは地域日本語教室でよく使われている5冊の市販の教科書である。
- A. てくてく日本語教師会（2009）、『Konnichiwa, Nihongo! こんにちは、にほんご!』、ジャパンタイムズ
 - B. できる日本語教材開発プロジェクト（2011）、『できる日本語 初級』、アルク
 - C. 宿谷 和子・天坊 千明（2010）、『いっぽ にほんご さんぽ—暮らしのにほんご教室初級〈1〉』、スリーエーネットワーク
 - D. スリーエーネットワーク（2012）、『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』、スリーエーネットワーク；第2版
 - E. 庵 功雄（2010）、『にほんご これだけ! 1（英語）』、庵 功雄（監修）ココ出版；初版
- 4) 入国管理局による在留資格の分類を見極め、地域日本語教室に来ているゼロ初級者のさまざまなニーズを考慮した上で、ゼロ初級者を長期滞在希望者、家族滞在者、外国人労働者、留学生、短期滞在者に分ける予定である。

参考文献

- 岩手県立生涯学習推進センター（2000）、「学習プログラムのつくり方」『生涯学習ハンドブック』（3）、1-28頁。
- 遠藤知佐（2008）、「地域日本語活動用素材集の作成と検証—外国人住民への生活行動支援と参加者間の交流促進に向けて」『日本語教育』（139）、62-71頁。
- 木下康仁（2003）、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂。
- 国立国語研究所公式ホームページ「『生活のための日本語：全国調査』調査結果＜速報版＞」
http://www.ninjal.ac.jp/archives/nihongosyllabus/research/pdf/seika_sokuhou.pdf（2018年10月6日）
- 公益財団法人 京都府国際センター（2014）、「外国人住民のための日本語教室 オリジナルテキスト」
<https://www.kpic.or.jp/shichoson/nihongo/text.html>（2018年10月3日）
- 法務省ホームページ平成27年末現在における在留外国人数について（2016）、
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00060.html（2018年10月9日）
- 文化庁（2010）、『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について』
- 文化庁（2012）、『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集』
- 文化庁（2011）、『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案活用のためのガイドブック』
- 文化庁（2012）、『「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語教育能力評価について』
- 文化庁（2013）、『「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評価について』

文化庁（2014）、「平成 26 年度 地域日本語教育実践プログラム（A）＜作成教材について＞」

http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h26_nihongo_program_a/index.html（2018 年 10 月 30 日）

文化庁（2012）、「日本語学習・生活ハンドブック」

http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/handbook/（2018 年 10 月 30 日）

松永典子・麻生迪子・季江静・永嶋洋一・新井克之（2012）、「外国人『生活者』のための日本語教育と多文化理解教育の現状と課題—伊都地区から考える多文化化する地域における社会連携モデルの模索」『比較社会文化』18、9-23 頁。

A Study on Regional Japanese Language Education Program for “Beginning Learners as Consumers”

CHEN, Shuai

Abstract

In recent years, Japanese language teaching materials and curriculum for beginners are well developed in local Japanese language education. While each of them has their own characteristics, various deficiencies have also emerged. In particular, in 2010, the Agency for Cultural Affairs announced the "standard curriculum draft" of Japanese language education. However, there are some problems in that, such as there are some parts that cannot be applied to beginners, and it is difficult to apply in the actual regional Japanese classrooms. It is conventional for volunteers to design Japanese language support activities after knowing the needs and checking the Japanese level of the participants at the first time. By this way, it will not only increase a burden on volunteers but also cannot meet learners' needs. Therefore, I focused on the beginners who cannot use intermediary language with less time by arranging their common needs and develop a learning program which refers to the learners and the local Japanese classroom. Hence, in this research, it is clear in the questionnaire survey and the interview survey what the beginning learners participating in the regional Japanese classroom is seeking and how the classroom responds to them. I propose a learning program that can respond to the common needs of beginners and help them to learn the necessary Japanese which required for their daily life.

Keywords : beginning learners, regional Japanese language education, development, Self-management, Learning program

李白の詩作における「洛陽」

黄 婕（河南科技大学外国語学院）

要旨

五万近くの作品を収録している『全唐詩』に、題目或いは内容に「洛」が現れた作品の数は「長安」も超えている。一つの地名が異常に高い頻度で唐詩に現れていることが一つの興味深い文化現象になる。これらの詩作を通して当時の洛陽の都市風景のみならず、文化人にとっての意味を理解することもできる。李白の生涯も洛陽に関する詩を数多く残しているが、描かれた洛陽像は安史の乱を堺に大きく異なっている。李白は洛陽で杜甫など沢山の友人と出会い、放浪自在な日々を過ごしていたので、安史の乱までの詩作における洛陽は繁華な大都市でありながら、人情の溢れるところであった。しかし、洛陽の陥落はこの安楽な都市像を粉々に砕いた。洛陽の嘗て漢文化中心的地位及び悠久の歴史と、異民族の安祿山がここに別の王朝を起こそうとした現実、交じり合っ李白の感情を大きく刺激した。李白の詩作における洛陽のイメージが一転して重くなり、「漢」と「胡」の対立の中、「国」を象徴するようになり、平和時代の安楽像から故国喪失の怒りや偲びになった。この変化を分析することによって、洛陽の持つトposや文化的なアイデンティティを理解するのに役立つと考えられる。

キーワード： 李白、洛陽、唐詩、文化的アイデンティティ

はじめに

詩とは心に感じたことを一定のリズムと形式に当てはめ、言葉で表したものであり、唐代文化の担い手になった。清の初めに刊行された『全唐詩』900巻は五万近くの作品を収録している。「全唐詩庫」のデータベースシステムを利用して地名をキーワードで検索してみると、洛という言葉を含める唐詩の数は首都長安を含め、ほかの有名都市をはるかに超え、異常に高い頻度で唐詩に現れていることが判る¹⁾。唐詩の最高峰の一つと言われる李白は洛陽に関わる作品を数多く残している。これらの詩作を通して当時の都市風景のみならず、文化人にとっての洛陽の意義を理解することもできる。

隋唐時代の洛陽は一時期を除き、殆ど唐の副都として位置付けされた。隋が天下統一を果たした後、隋煬帝は、関東及び江南の地に対する支配力を強化するため、荒廃していた古都洛陽を復興させることを決意し、洛陽に東都を建設した。その方位は各文献に詳細な

記載があり、近年の考古成果にも証明されている。具体的にいうと、「漢魏洛陽古城の西、周代王城の東南にあたり、漣水の兩岸をまたぎ、さらには洛水を城内に取り込むように位置していた。面積は約 47 平方キロ、長安と比べ非常に小規模であった²⁾」。長い間に長安と並び、文化の中心地であった洛陽は、唐代の人々にどのように捉えられ、どのように詠まれているのか。本稿は洛陽と関わり深い李白の作品を取り上げ、異なる時期の詩作における洛陽像に焦点を合わせた。李白詩作における洛陽のイメージの変化を追跡し、唐代洛陽のイメージを探りながら、唐代士人の洛陽に対する認識や洛陽のトポスを探究してみる。

I. 安史の乱までの洛陽

洛陽は唐の初期に「東都」の称が廃止され、唐太宗貞観 6 年 (632) に「洛陽宮」と呼ばれる。高宗 2 年 (657) に、また「東都」とされた。その後、則天武后の時代の「神都」、安祿山の大燕帝国の首都など一連の変遷を経た。李白の出身については諸説があり、近年李白の故郷は唐の東都洛陽にあるという説まで出た³⁾。まだまだ議論する必要があるが、李白と洛陽のゆかりの深さは言うまでもない。

1. 花の都

李白を生まれた時代の唐王朝は、「西アジアに起こったサラセン帝国との貿易が盛大に行われ、西アジアから陸路、長安・洛陽に達した交通路は大運河によって揚州に達し、そこから海へ出て泉州・広州を経て南海、インド洋から西アジアのペルシア湾に至る世界的な循環交通路も完成された⁴⁾」。洛陽も絶好調を迎え、経済の中心地として外国商人が往来し、都市を繁栄させた。店舗、酒楼、伎楼の集まる繁華街になり、花の都と言われるほど、その風景や繁盛ぶりが沢山の唐詩で輝かしいイメージを呈している。李白の詩作に、洛陽の繁盛に裏付ける作品も少なくない。

豪放な李白は特に賑やかなスポットが気に入ったので、よく洛陽陌や天津橋⁵⁾辺りの大変な人出のところで活動していた。例えば洛陽の大通りを颯爽と行く車上の貴公子を詠んだ詩「白玉誰家郎，回車渡天津。看花東陌上，驚動洛陽人」（「洛陽陌」）がある。洛陽の花が昔から有名で、春になると、いろんな花が咲き乱れる絢爛なる風景を描いた詩「天津三月時，千門桃與李」（「古風十八」）なども挙げられる。

賑やかな町で友達と派手に遊ぶことが李白の日常になるほど、作品から洛陽が頻繁に現れた。例えば「共作游冶盤、双行洛陽陌。長劍既照耀、高冠何絶赫」（「君馬黃」）の句は李白と友人が華麗なる衣装と長い剣を持って、きりっとして逞しい姿で洛陽市街をぶらつく情景が躍如として描かれている。また、その後詩人が洛陽を離れても、「風流少年時、京洛事游遨」（「叙旧贈江陽宰陸調」）など詩句を書き出し、当時洛陽での楽しい生活を懐かしく思っている。

李白が洛陽で放浪した青年時代を追憶した詩作の中に、特に有名な一首は「憶舊遊寄譙

郡元参軍」であり、よく李白の生涯や思想を考察するには重要な価値がある作品として扱われる。

憶昔洛陽董糟丘	憶ふ昔 洛陽の董糟丘の ⁶⁾
為余天津橋南造酒樓	余が為に天津橋の南に酒樓を造り
黄金白璧買歌笑	黄金 白璧 歌笑を買ひ
一醉累月輕王侯	一醉月を累ねて王侯を輕んず

—「憶舊遊寄譙郡元参軍」

人が往来する洛陽の一番の繁華街天津橋近くの酒屋で、李白は富貴や王権をからかい、お金を湯水のように使い、豪快に歌を歌ったり、お酒を飲んだりした。この花の都の洛陽の都市性格は、意気盛んでいる詩人にピッタリ合うので、いつもでも李白に愛される。たまには、李白も「長劍復歸來、相逢洛陽陌。陌上何喧喧、都令心意煩（「聞丹丘子于城北營石門幽居中有高風遺跡僕離）」というふうにな文句を言ったことがある。洛陽のうるさいほど賑やかな生活や名利を追求する都市の雰囲気批判を批判して描いているが、「已矣歸去來、白雲飛天津」（「潁陽別元丹丘之淮陽」）など詩句から現われた気持ちは、李白は洛陽を懐かしく思い、何よりも白い雲に乗って天津橋のところに戻りたいというものである。

2. 人情の町

自由奔放な天才詩人李白が、優れた詩作が作れたのは誰よりも豊かな感情を持っているからではないか。彼はよく独立不羈と言われるが、実は家族、友人などいろんな情を重んじる人間に違いない。李白の詩作における「洛陽」は常に人情が溢れる場所であり、この町はいつも彼の情を引き起こしている。

(1) 郷愁を起す風

郷愁とは、他郷にあって故郷を懐かしく思う気持ちだけではなく、広い意味では過去のものや遠い昔などにひかれる気持ちを指す。洛陽と郷愁の組み合わせる伝統が昔からある。『晋書』の「張翰伝」に洛陽の秋風は郷愁を起す有名なエピソードがあり、既に一種の文学的な踏襲となっている。唐詩にも洛陽を郷愁と結ぶ名作が数え切れないほど存在する。張籍の「洛陽城里見秋風、欲作家書意万重（「秋思」）、王昌齡の「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺（「芙蓉樓送辛漸」）、張説の「秋風不相待、先至洛陽城（「蜀道後期」）など傑作が挙げられる。2006年、日本の朝日新聞社はシルクロード紀行シリーズの『洛陽—郷愁の都』という特集さえ発行された。

誰家玉笛暗飛聲	誰が家の玉笛ぞ 暗に 聲を飛ばす
散入春風滿洛城	散じて春風に入りて 洛城に 満つ
此夜曲中聞折柳	此の夜 曲中 折柳を 聞く
何人不起故園情	何人か 故園の情を 起こさざらん

—「春夜洛城聞笛」

李白も名作「春夜洛城に笛を聞く」を残した。李白の故郷はいったいどこなのかまだはきり断定できないが、とにかく宵闇に春風に乗って洛陽城に満ちている笛の音が李白の故郷への感情を呼んだ。松浦は「春夜—洛陽城—玉笛—春風と続く華やかなイメージが、折楊柳—離別—郷愁と続く哀切なイメージと溶け合って、それぞれに陰影を深め、奥行きを増している。この場合、「洛陽」という地名が「長安」でも「金陵」でも「成都」でも表しえない独特のニュアンスをもって、一首全体に作用していることに注意したい」⁷⁾と指摘している。その独特なニュアンスとは、文化の故郷のように文人の心を慰める力であり、歴史と文化から生まれた洛陽ならではのトポスだと考えられる。

(2) 友情が芽生える場

洛陽は李白の生涯の中で重要な地位を占めている理由は、厚い友情が芽生える場だったからである。杜甫も含め、高適、元演、崔成甫、岑参など、李白とお互いに真心をもって深く交わった友人の多くは、洛陽辺りで出会い、そして付き合っていた。

双璧をなす李白と杜甫の出会いには特に注目する値打ちがある。唐詩の最高峰をなした二人は、天宝三年（744）四月、洛陽で出会うようになった。四十四歳の李白と三十五歳の杜甫、初めて洛陽で会ってすぐ意気投合し、一生の友情を結んだ。中国近代詩人聞一多はこの運命的な出会いについて、「中国四千年の文学史上、これほど重大で、これほど神聖で、これほど記念すべき邂逅はない」と感慨深く嘆い、「太陽と月の出会い」と評価した⁸⁾。

友情を重んずる李白は洛陽で親友たちと豪快にお酒を飲み、富貴王権をからかい、放浪する時代を過ごした。したがって、「憶舊遊寄譙郡元參軍」に「我向淮南攀桂枝，君留洛北愁夢思。不忍別，還相隨」の句がある。洛陽にいる友人がどうしても名残惜しく、別れたくない気持ちがありありと現われている。

また、友人と遠く離れ離れになっている時、再び友人と再会する場面を想像する時にも、出会う場所はやはり洛陽の大通りになる。

仆在雁門關。君為峨嵋客。
心懸萬里外。影滯兩鄉隔。
長劍復歸來。相逢洛陽陌。

—「聞丹丘子于城北營石門幽居中有高鳳遺跡」

李白が実際に洛陽に往来している時期は唐の全盛期であり、洛陽城の繁栄の絶頂期でもある。時には権力・名利の象徴たる奢侈な都市生活に対して嫌悪感をもっていたが、洛陽で逢った人を大事にし、その逍遙自在な日々を懐かしく捉えている。

Ⅱ. 安史の乱の渦中にある洛陽

755年に起きた安史の乱は、唐王朝の国威を大きく傷つけ、政治も社会をも大きく変化

させ、唐の変質を齎したと言われている。安史の乱が起きてわずか1ヶ月で、副都の洛陽を陥落させた。安禄山は洛陽で帝位に即き、大燕聖武皇帝と称し、さらに唐の首都の長安へ侵攻を開始し、唐の国軍を破る。これは全国を震撼させ、唐王朝は壊滅の危機になり、民衆も亡国の恐れに直面した。762年まで、洛陽は武力攻防の目標として、幾つかの大きな激戦を繰り返し、李白が亡くなる直前まで史思明の子によって占領されていた。

1. 戦場になった都

五十六歳の李白は洛陽陥落の事を聞いて大いに驚愕した。戦乱中の洛陽を詳しく描写する作品を数多く残している。この時期、李白は多数の作品を通し、繰り返し陥落地としての洛陽の様子や戦争に苦しめられる世の中を述べる。例えば「北上何所苦，北上縁太行。……奔鯨夾黄河，鑿齒屯洛陽。前行無歸日，返顧思舊郷（「北上行」）や「函谷如玉關，幾時可生還。洛陽爲易水，嵩嶽是燕山」（「奔亡道中五首その四」）などがある。これらの詩句から暴れまわる狂った鯨であるかのように安史軍が黄河を越え、悪獣の牙の安禄山は洛陽に居座って皇帝と称していることがよく表れる。人々は避難のため、苦勞して洛陽を逃げ去るしかない。しかし、皆故郷を逃れる時苦しい気持ちで「また生きて戻れるか、いつになったら戻れるか」を自分に聞きながら、戦争前の生活を偲ぶという悲惨な情景を描いた。

かつて李白が大好きな天津橋も繰り返し作品に出ている。「狄犬吠清洛、天津成塞垣」（「贈武十七諤」）の句は夷狄の言葉は犬の吠え声のように洛陽本来の安らかな雰囲気壊し、死者の死体で川がせきとめられる状態という。「洛陽三月飛胡沙，洛陽城中人怨嗟。天津流水波赤血，白骨相撐如乱麻」（「扶風豪士歌」）は三月の洛陽城は胡族に占拠され、怨嗟の声が町中に満ちていて、天津橋の下の水が人の血で赤く染められ、白骨は乱れて生えている麻糸のようになった。このあまりにも写実的な描写は、まるで詩人は自ら現場で見ているような臨場感を与える。

西上蓮花山	西のかた蓮花山に上れば
迢迢見明星	迢迢として明星を見る。
素手把芙蓉	素手 芙蓉を把り
虛歩躡太清	虚歩して 太清を躡む。
霓裳曳廣帶	霓裳 広帯を曳き
飄拂升天行	飄払 天に昇り行く。
邀我登雲台	我を邀えて雲台に登り
高揖衛叔卿	高く揖す 衛叔卿。
恍恍與之去	恍恍として之と与に去り
駕鴻凌紫冥	鴻に駕して紫冥を凌ぐ
俯視洛陽川	俯して洛陽川を視れば
茫茫走胡兵	茫茫として胡兵走る。

流血塗野草 流血 野草に塗まみれ
豺狼盡冠纓 豺狼盡々冠纓。

—「古風五十九首 其十九」

これは詩の前後があまりにも対照的で、書き方が非常に特殊な一首である。西嶽の蓮花山にのぼってゆくと、はるかに明星の仙女や西王母が見え、仙人とともに空の上へ飛んでいることなど、長きに渡って、縹渺たる仙境を營造した。しかし、詩人が仙境に遊んでいる最中に、最後の四句は、逍遙自得な雰囲気から一転、突然悲惨な現実にはピントを合わせ、画面が一時的に止まった。「洛陽のあたりや黄河のあたり、地上を見下ろすと、見渡す限り胡兵が走りまわっている。流された血は野の草にまみれている。山犬や狼の輩がみな冠をかむって、役人となった」というまるで人間地獄のような光景は、人に強い印象を与え、憤りを引き起こす。

この詩は乱軍の横暴略奪の様子、乱離中の庶民の苦しみを鮮明に記録しているため、単なる文学的な空想とは考えにくい。当時李白の所在地は議論の焦点になった。元代の蕭士贇は『分類補注李太白詩』に「この詩はまるで事実を述べる作のように、まさか安祿山は洛陽に入った時に、李白はちょうど雲台山(洛陽周辺の高山)で見っていたのではないか⁹⁾」と注した。

以前李白特有のロマンが溢れる雄大飄然とした詩風と違い、これらの作品から飾り気のない手堅い作風が多く見うけられる。それまでの詩風とあまりにも異なるので、蕭士贇は度々この時期の李白の詩は偽作ではないかと疑っている。この疑いに対して、清代の王琦は詳細の考察を通してこの疑いを覆した。この議論は本稿の目的ではないが、兎に角李白が安史の乱に大きく驚かされ、心が揺れたことは事実には相違いない。

2. 始終心にかける場所

李白が亡くなるまでの生涯及び詩作から見ると、洛陽の陥落は李白に与えた衝撃が非常に大きく、彼の思想転換のきっかけとなっている。安祿山が反乱を起こし、驚異的な勢いで、太原、巨鹿など唐の重要都市を次々に占領し、わずか一か月で洛陽を攻め落とした。唐の両京の一つとしての洛陽の陥落の衝撃だけでも大きかったが、それ以上に大事なのは、いままで君側の奸を除くということを名目にした安祿山は、洛陽に入るやいなや、すぐ帝位に即き、国を大燕と号し、年号を聖武と定めた。これが一番李白が許せないことだったであろう。

いままで気軽な繁華な行楽地のイメージに過ぎなかった洛陽、あまり意識されていない周、漢故都の地位、そして直前の五胡乱華の歴史などの要素が強く機能し、民族的にも文化的にも華夏正統を象徴する意味が異常に効いた。しいて言う、洛陽の陥落は、国（特に文化的な意味の国）が破れたと同じ意味をもっている、自尊心が強く、国や文化に誇り高い李白にとって、その痛みは表現できないほど大きかった。

攬槍掃河洛	攬槍 河洛を掃ひ
直割鴻溝半	ただちに割鴻溝の半
過江誓流水	江を過り 流水に誓ひ
志在清中原	志は中原を清むるにあり

—「南奔書懷」

李白晩年の作品において、洛陽が胡人に占領されることが常に意識されている。それは国の喪失を意味するので、絶対許せないこと。胡人を駆除し、国を回復しようという志は繰り返し表明され、詩人の晩年の悲願になった。

李白が謀反人の永王の幕府に入ったことは、長い間李白の政治的汚点として責められてきた。李白本人もこのせいで入獄され、夜郎の地まで流刑された。この時期の李白は、田中克己によると、「ともかく李白は永王の野心には関係なく、この頃に、安祿山討伐のための永王を将とする軍中に招きに応じて加はったのである。彼の仕事は幕僚の一人として、討伐の檄文を書き、軍中の無聊を慰め、将士の士気を鼓舞するため詩を作るにあった。檄文の方は伝はってゐないが、「永王東巡ノ歌」十一首は後の目的のために作られたものに相違ない¹⁰⁾」。

これを李白が一時的に犯した政治的過ちというより、むしろ李白の愛国心・任侠心からきたものと解釈したい。李白の豪放洒脱、自由でロマン溢れる感情の裏に、強い自尊心と愛国心が隠されている。これは唐代の知識人の特徴と風貌とも言えよう。安史の乱は彼らを国や民族存亡の危機に直面させる。李白は敵の安祿山を破り、功を立て、国恩に報じようという期待で永王に随ったと考えられる。この情熱は下記の引用から容易に察することができる。

二帝巡遊俱未回	二帝巡遊して俱に未だ回らず
五陵松柏使人哀	五陵の松柏人をして哀しましむ
諸侯不救河南地	諸侯は救はず河南の地
更喜賢王遠道來	更に喜ぶ賢王の遠道より來るを

—「永王東巡の歌」

皇帝も上皇も都を離れて巡遊され、まだ帰ってこられない、五陵の松柏がさびしげに見える、諸侯は誰も河南の地の乱を平定する気がないが、喜ぶべきことに賢王が遠くからやってこられた。特に「諸侯不救河南地」の一句は、戦乱中に誰もが洛陽の陥落を放っておくことに対して、失望、怒り、痛み、そして自分の無力を感じる無念などが含まれる。この時点で、李白は永王が洛陽の反乱軍を破り、国を救うことを信じて身を寄せたことが判る。更に言うと、前述したように安史の乱時期の洛陽は李白にとって、国を象徴する重大な意味を持っている所である。李白は洛陽の回復にこだわり、永王に期待し、自分も自ら作戦に力を尽くすつもりであった。

この熱望はその他の一連の詩作から見出すことができる。例えば「在水軍宴贈幕府諸侍

禦」という作に「胡沙驚北海，電掃洛陽川」、「願與四座公，靜談金匱篇。齊心戴朝恩，不惜微軀捐」などの句は、異族が洛陽を占めたことに対する憤慨をむき出しにし、戦死の覚悟を持って洛陽を奪い返そうと宣告した。

3. 悲願達成できぬ洛陽回復

洛陽の次に長安も陥れた安祿山は、もはや四川乃至江南へ兵を派する意志も余力もなく、安心に洛陽で皇帝の生活を楽しもうとして。長安の府庫、兵甲、文物、図書のみならず、後苑中に飼養されている珍獣、後宮の美人、玄宗、楊貴妃のために清平調を奏した梨園の弟子たちもすべて洛陽に移動させ、諸官の捕えられて降った者もみな洛陽に赴かせて偽官に任じた。

これに対して、李白は「想像晉末時，崩騰胡塵起。衣冠陷鋒鏑，戎虜盈朝市」（「贈張相鎬二首 時逃難在宿松山作」）や、「秦人半作燕地囚，胡馬翻銜洛陽草」（「猛虎行」）などの句を書き、苦悶や怒りに満ちた心情を述べ表した。洛陽に対する思いはなかなか実現できず、「撫劍夜吟嘯，雄心日千里。誓欲斬鯨鯢，澄清洛陽水」（「贈張相鎬二首 時逃難在宿松山作」）という句を通し、強い感情は詩に寄せるしかなかった。

上記の一連の詩作、どちらも重圧感を覚える。題目から分かるように、ほとんどが李白の逃亡生活中の作である。詩人が困窮した悲惨な晩年生活を送っているが、自分の身よりも洛陽や国のことを心配した。反乱の罪で入獄された時も、「胡馬は洛水を渡り、庶民が苦しんでいるよ」と嘆き、流浪生活の中でも、「鯨鯢を殺すことを誓い、洛陽の水を清くさせる」という大志を持っていたので、いかに洛陽を重んじる詩人の心が伝える。李白は既に六十近くの年になったにもかかわらず、洛陽の混乱した局面を一掃する壮志を終始抱いていた。

ようやく流刑地から恩赦される時に、「流夜郎半道承恩」の謝恩の詩を作る時も洛陽の言及がある。757年に念願の洛陽回復の知らせを聞き、すぐその喜びを「旋收洛陽宮」で示した。しかし、残念ながら、この回復は一時的なものに過ぎず、759年史思明は大燕皇帝を称し、再び洛陽を陥れた。761年、李光弼は洛陽の北で反乱軍と壮絶な戦いをしたが、大敗した。この時、江南の金陵にいる李白は他人の仕送りで生活を維持しているが、依然として洛陽に重大な関心を払っている。どうしても洛陽を胡人の手から奪い取りたいようで、李白は六十一歳の高齢で自ら進んで李光弼の幕府に入ろうとした。李白の洛陽の地を取戻し、元の唐王朝に復する念願は、驚くべき執念とも言えよう。

しかし、李白は李光弼の幕府に向う途中で病気のため、やむを得ず戻った。洛陽がようやく唐に回復されたのは翌年十月になり、李白が亡くなる一か月前の事であった。詩作が残されないのも、詩人がこの世を去る前に一体この勝報を知られるかどうかが謎のままになる。

Ⅲ. 作品における洛陽から見た李白の心情

安史の乱が李白の詩風、思想、人生に至るまでの重要な転換点となり、詩人の心境が如何に変化したかを考える時、洛陽は李白の心の履歴の変化を理解するのに重要なキーワードである。

一般的に、李白の詩作は明るくて自由奔放なイメージがある。安史の乱の十年ほど前、李白はしばらく長安の玄宗のもとで、文書を起草したりする翰林供奉を勤めていた。しかし、自由不羈とした性格が宮廷と合わず、長安を去らざるをえなくなった。長安の政界の現状を目にして絶望を感じる李白は、各地歴遊の旅に立った。この時期李白は洛陽周辺の山水や華やかな町生活を気に入った。特に意気投合した友人とお酒を飲んだり、道を論じたり、詩を作ったりした場所として、詩作から楽しめる懐かしいイメージを示していた。吉川幸次郎は「李白の詩は杜甫と反対に、人間の快樂を歌うのにいそがしい¹¹⁾」という評価があるが、それが安史の乱以前の李白だけに適用する。

李白晩年の詩作は、早期の世俗を超越したロマンチックと全然違う詩風になった。作品における洛陽は、いつも亡国の怒りや昔の国の中心地が胡人に乱暴されることに対する憤慨など感情につながっている。もともと李白の中に二つの気持ちがあった。それは国のために力を尽くす気と、俗を越えて神仙を憧れる気であった。長安での官途の挫折で、天子を補佐して理想の政治を実現するという道を打ち砕かれたので、李白は出仕を諦め、情を山水に託した。そのままであれば、隠遁して修行する可能性もあるだろう。しかし、安史の乱は李白に大きな刺激を与え、詩人の愛国心を引き出した。

乱世のなかに、李白はかえって積極的に政治にも関与し、俗世界に身を投じる道を選んだ。李白は自ら五十九首の詩を「古風」と名付けたのは、小川環樹が指摘したように、世の中にはびこっている安易な沈滞した空気を一掃し、建安年間の逞しい精神を復興させよう、「その責任は彼自身に負わされている、という強烈な使命感がそこにある」¹²⁾。

時に仙人に憧れる李白は、見た目は自由奔放であるが、実は強い愛国心の持ち主である。最初洛陽は李白にとって、友情の溢れる繁華な大都市に過ぎななかつた。しかし、安史の乱は洛陽のこの安楽な都市像を粉々に砕き、むしろ李白の中の「国」の象徴になってしまった。李白の洛陽に対する気持ちは、一気に強くなり、転々して生涯を終えるまで、洛陽の回復を待ち続けていた。

おわりに

盛唐と呼ばれる栄光の時代に生まれた詩人李白の詩作における洛陽のイメージが、安史の乱を堺、大きく異なる。これは李白を代表とする唐代文化人の洛陽に対する認識や気持ちの変化を意味する。政治中枢としての長安を離れ、李白は「客」としてしばしば東京洛陽で暮らしていた。その時の洛陽は気軽に友人と楽しく放浪できる華やかな大都市であった。しかし、安史の乱の勃発によって、洛陽は「漢」と「胡」の対立の中に「国」を象徴する

ようになった。それまで持っていた「天下の中」や「華夏正統」など文化的ナショナルアイデンティティ要素は、安史の乱のような非常事態によって、より一層際立ち、李白の中の洛陽のイメージが一転して重くなった。

アイデンティティというものは自分の中で作られるものではなく、周りとの関係性の中に作られるものである。洛陽の嘗て漢文化の中心的地位及び悠久の歴史と、異民族の安祿山がここに別の王朝を起こそうとした現実、交じり合っ李白を含める唐代文化人の感情を大きく刺激した。李白の詩作における洛陽は、平和な時代の安楽像から一転し、故国喪失の怒りや偲びになった。詩人の心境変化は意識的にせよ無意識にせよ、詩の作成に際して不断に行われ続けていた。李白の詩作における洛陽を分析することによって、洛陽の持つポスや文化的なアイデンティティを理解するのに役立つと考えられる。

注

- 1) 鄭州大学が開発したデータベースシステム「全唐詩庫電子検索システム」
(<http://www3.zzu.edu.cn/qts/>) で検索した結果、詩のタイトル或いは内容に「洛」という言葉が出た詩作の数は 1215 首に上る。他の有名都市（例えば「長安」694 首、「揚州」116 首、「金陵」114 首）に比べ、洛陽という名は異常に高い頻度で唐詩に現れていることが分かる。
- 2) 楊寛著、西嶋定生監訳（1987）、『中国都城の起源と発展』学生社、186 頁。
- 3) 王元明（2000）、『中国唐代詩人研究—李白新論』（シンガポール新社）などは李白の出身は洛陽だと主張している。
- 4) 宮崎市定（1988）、『大唐帝国』中央公論社、378 頁。
- 5) 唐・李吉甫撰『元和郡県図誌』巻第五《河南道一》によると、「河南府洛州、東都。天津橋、県北四里に在る。隋煬帝大業元年にこの橋を作る」という。
- 6) 本稿の李白詩作の日本語書き下しは下記の HP を参照した。李白：漢詩と中国文化
<https://chinese.hix05.com/Libai/libai.index.html>。
- 7) 松浦友久（1980）、『唐詩の旅—黄河編』社会思想社、117 頁。
- 8) 聞一多（1956）、『聞一多全集選刊之三 唐詩雜論』古籍出版社、47 頁。
- 9) 張佩（2015）、『楊斎賢、蕭士賛「分類補注李太白詩」版本系統研究』首都師範大学出版社、269 頁。
- 10) 田中克己（1944）、『李太白』評論社、電子版
<http://libwww.gijodai.ac.jp/cogito/tanaka/sanbun/rihaku11.html>。
- 11) 吉川幸次郎（1976）、『中国文学入門』講談社、47 頁。
- 12) 小川環樹（1977）、「「古風」の宣言」（『小川環樹著作集』第二巻）筑摩書房、360 頁。

参考文献

郁賢皓（1997）、『天上謫仙人の秘密—李白考論集』台湾商務印書館。

笥久美子（1988）、『李白』角川書店。

The Study of Luoyang in Li-Po's poems

HUANG, Jie

Abstract

There are nearly fifty thousand poems in Complete Poetry of the Tang. The number of poems that appear in the title or content of Luoyang is even greater than Chang 'an. It is a cultural phenomenon worth pondering that Luoyang appears so frequently in Tang poems. Through these works, we can not only see the scenery of Luoyang at that time, but also understand the significance of Luoyang to the literati at that time. Li-Po left many poems about Luoyang in his life. But the description of Luoyang was very different from Anshi's Rebellion. Li-Po met Tu-fu and many other good friends in Luoyang and had a good time. So in the poems, Luoyang was not only a prosperous city but also full of human feelings before Anshi's Rebellion. But with the fall of Luoyang, the impression of Luoyang in Li-Po's works was completely shattered. An-lushan planned to establish an alien dynasty in Luoyang which city with a long history and was once the center of Han culture. It was a great stimulus to Li-Po and changed his poetic style. The image of Luoyang turned into heavy and became a national symbol in the confrontation between Hu and Han. It was all very sudden that Luoyang in Li-Po's poems from a cheerful image in peacetime turned into nostalgia for the old country. Through analyzing the changes of Luoyang in Li-Po's poems, it is helpful to understand the cultural identity and the topos of Luoyang.

Keywords : Li-Po , Luoyang , poetry of the Tang Dynasty , Cultural identity

サルトルの「全体小説」と野間宏の創作実践

李 先瑞（浙江越秀外国语学院）

要旨

野間宏はサルトルの哲学思想から影響を受け、実存主義の作品を創作した。また、サルトルの文学理論を参考にし、理論と実践の両面で「全体小説」を発展させたのである。サルトルは、哲学においては実存主義者であり、マルクス主義者でもあった。野間宏がサルトルの哲学思想と文学思想から影響を受けたことは否定できない。サルトルの主張した「全体小説」はサルトルの小説論で、『自由への道』がその実験的作品である。野間宏はこの理論を独自に発展させ、自己の長編『青年の環』において人間を心理面、生理面、社会面などから描写することを通じて人間を全体的にとらえることを実現した。そして、『青年の輪』においては、心理面、生理面と社会面の三つが絡み合い、総合的に社会の全体像を浮き彫りにした。

キーワード： 野間宏、サルトル、全体小説、『青年の輪』

はじめに

野間は自分の長編小説が志向するものを「全体小説」の名で呼んでいる。もともと、この「全体小説」という言葉はサルトルが用いた「ロマン・トータル」というフランス語の翻訳名である。「全体小説」はサルトルが提唱した小説の方法で、人間の生きている世界をトータルなままで、ひとつの文学作品として表出しようとする試みである。

『文芸用語の基礎知識』の定義によると、「全体小説」は「サルトルの主張した小説論で、『自由への道』がその実験的作品である。日本で野間宏がこの理論を独自に発展させ、『サルトル論』で論じた上で、自己の長編『青年の環』で実現した。人間の生きている総合的な現実をトータルなままで一つの文学作品として表そうという試みである。」¹⁾。人間を全体的にとらえるとは、人間の心理面、生理面、社会面を全面的に描写することである。たとえば、人物が何を考えているか、経済的な環境はどうなのか、その時の社会や政治はどうなっているか、ということを書くわけである。竹内泰広は「それは第二次世界大戦をほとんど第一線ですごし、それまでの知的・文化的・社会的経験や思想が戦争のもたらす物質的・肉体的状況によってくつがえされるのを体験した日本の戦後派作家やサルトルなどの世代の文学者によって最初に主張された。（中略）かれらが戦争を通過する

ことによって知った外的世界をも総合して歴史の意味そのものに迫りうるような小説をもくろんだといえるだろう。」²⁾と指摘している。

サルトルは哲学者であり、また文学的才能もあった。初期の傑作と言われる『嘔吐』などは彼の哲学思想を小説に書き直した作品である。彼は小説を通じて哲学思想を具現化させた。「サルトルは、人間はローム・トタルだと言う。つまり人間は全的な存在であって、人間は単に外部からとらえることもできなければ、また単に内部からとらえるということもできない。人間は外部と内部から同時にトータルに、内的に規定されるものとして人間をそのままとらえなければならないのである」³⁾と野間は『世界文学の課題』の中で、サルトルの文学思想について述べている。

これについて、澤田直は「サルトルが人間をすっかり全体的にとらえようという立場で文学にとり組んでいることを踏まえて、野間はサルトルとの関連で自分自身もそういうことを考えていこうということです。」⁴⁾と指摘している。この節からみると、サルトルの「全体小説」思想が野間の文学創作に影響を与えたのは確かなことである。

日本側では野間宏が「全体小説」から受けた影響については、澤田直は「野間にとってサルトルというのはまず長編小説『自由への道』という全体小説の作者として、自らの創作にとって重要な対話の相手となるということが言えると思います。……サルトルに関する野間の関心は小説、特にその全体小説に尽きるわけです。」⁵⁾と述べている。中国側では野間宏の「全体小説」について、莫琼莎は「日本近代写实主义传统的突破——论野间宏《骰子的天空》中的“新写实主义”」の中で野間宏の「全体小説」について『『青年の輪』は野間宏の全体小説の巨著である」⁶⁾と述べている。張偉は「野間宏的“全体小说”与西方现代主义文学」の中で次のように述べている。「野間宏の作品は、主体を強化し、客体を希薄化する側面を表している。上述の二側面が融和し、沈殿した結果、野間宏の全体小説の一側面を構成した。この側面はモダニズム文学と多くの共性を有するのである。」と⁷⁾

I. 『サルトル論』と野間宏の「全体小説」の創作

『サルトル論』は野間が三十年近くの創作過程において、「全体小説」を実現するために、日本近代文学理論と西洋文学理論を選別して完成した文学理論の作品である。サルトルはその「全体小説」——『自由への道』が未完に終わっている。野間は長編小説『青年の環』を通じて「全体小説」を实践しようとしたのである。

『サルトル論』は、野間が『青年の環』を完結させるために不可欠なものである。これについて、野間は「この『サルトル論』は、私が『青年の環』を完結するためにどうしても必要な仕事だったのであって、私はこの仕事を果たすことなくしては、私の長編を完結させることはむしろ不可能だったに違いないのである。」⁸⁾と述べたことがある。

野間宏は『小説論Ⅰ』と『小説論Ⅲ』の中で自分の追求する小説の創作方法をはっきりと述べた。「一人の人間を描くためには、もはやその人間に働く国際的な関係の力を無視す

ることは出来ない。……さらにまたその国内の経済的なものの影響を測定しなければならない。その人間を取りまく地方の影響、家の影響、過去の影響、生理的条件、心理的条件、等々が明らかにされなければならない。」⁹⁾

「そのサルトルが、戦争をとおして、はっきり外部というものを認識した。即ち外部とは単に生理とか自然などだけでなく、社会であり、しかも、その社会は資本主義社会と規定されなければならないと知ったのである。……つまり一人の人間を把えるためには、その社会的条件、生理的条件、心理的条件を明らかにし、生理的・心理的・社会的存在としての像をつくり上げなければならないのだ。」¹⁰⁾

この二節からみれば、野間は内心世界から人物を描くプルーストやジョイスの方法及び外部条件から人物を描くバルザックやスタンダールの方法を超えて融合したいと思っているのである。野間宏は日本近代の文学方法では自分の戦争体験と戦後の日本社会と日本人の精神世界を反映することができないと思っている。戦争は人々の位置する外部世界だけでなく、内在的精神世界も破壊してしまった。この文学創作の要求から、野間は自然にサルトルのいう「全体小説」に向かうようになった。

サルトルは人間存在の本義を探索を目標とし、自由への道を追求する。サルトルの作品における登場人物が自由であり、その中に人間の「自由選択」という実存主義思想がある。しかし、サルトルの小説『自由への道』は未完に終わった。当時のサルトルは野間とほぼ同じ問題に直面しているといえる。第二次世界大戦後の欧州社会で、サルトルは文学創作をする過程に、目の前の世界という「全体」と直面するとき、自分の創作を支える方法論が見つけれなかった。戦争を体験した野間とサルトルの直面している社会状況と時代問題は非常に似ている。だから、野間がサルトルの創作方法を取り入れたのは当然のことになる。

Ⅱ. 「全体小説」創作の前期準備

1. 理論原形——『総合小説論』

「全体小説」という言葉を使う前に、野間は既に「総合小説」という言葉で同じ問題にとり組んでいた。野間は『小説論Ⅲ』の中で、その「総合小説」について、このように述べている。「一人の人間をとらえるためにはその社会的条件、生理的条件、心理的条件を明らかにし、心理的、生理的、社会的存在としての像をつくり上げなければならない」¹¹⁾と言っている。

野間によれば、一人の人間を把握するためには、生理的、心理的、社会的に限定しなければならない。そうして、人間の真実の姿が眼の前に明らかにされるはずであるという。

「総合小説」という形は「全体小説」と類似するところがあり、「全体小説」の萌芽とみなすことができる。「総合小説論」はまだ未熟な理論体系であるが、野間のその後の文学創作

に一つの方向を示したといえよう。

2. 初期作品における生理と心理の結合

野間が「全体小説」の世界に入る前に、まず肉体問題を書き、生理面から心理面と社会面へと深化していくという歩みが見られる。肉体の欲求は人間性の根源的な要求である。肉体の問題は野間の「全体小説」の原点である。野間は自らの初期の作品の中で、人間の生理的な部分に焦点を当てている。肉体の描写は作品『二つの肉体』『崩解感覚』等において緻密になされている。

彼（由木修）の思想が彼女（光恵）の肉体を重荷にし始め、彼女の肉体を彼の肉体から遠ざけようとしているのをこの彼女の肉体は感じ取っている……それを彼は感じる。彼は内に向けた彼の視線に力を集めた。すると彼の肉体の中で、皮膚にそうて肉体の眼が大きく開き、彼に触れている彼女の肉体のほうに眼を向けるのを彼は感じた。そして彼の向かい合っている彼女の肉体の中でも同じように彼女の肉体の眼が大きく開いて、二つの肉体の眼が二人の皮膚と皮膚との間でみつめ合っているのを彼は感じた。¹²⁾

この男女の肉体の描写からは明らかに主人公の赤裸々な肉体的欲求を見ることができる。この二人の男女の結合は愛情ではなく、ただ動物の本能としての欲求である。主人公の肉体と精神は分裂の状態にある。主人公は肉体の自由を通じて精神の解放を求める。野間の肉体問題は一般の「肉体文学」と違い、人物の肉体を描写して人物の内心活動を発見するものである。つまり、肉体問題の描写を通じて人物の矛盾する内心世界を探求するのである。「私の場合、心理の追究はもっと深く、それが結びついている人間の生理にも向けられねばならなかった。心理をただ精神の現象と考えずに、それを肉体生理に結び付けて考える一、生理との交合において考えようとしたのである。」¹³⁾

この節からみれば、野間の初期作品には一つの特徴がある。それは、心理現象と生理現象を結合して描写し、生理現象を人物の内在心理の一つの現れとして分析することである。つまり、生理と心理の結合である。

Ⅲ. 「全体小説」の創作実践—『青年の環』

野間は『青年の環』によって生理・心理・社会という人間の三つの要素を統一し、サルトルの「全体小説論」を実践した。『青年の環』以前に書かれた作品、例えば『暗い絵』『崩解感覚』などでは、生理・心理面の探求はすでに実現されていた。『青年の環』では、生理・心理面だけでなく、社会面の描写も多く見られる。そして、この三つの方面は独立したものではなく、お互いに影響して融合されたものになっている。『青年の環』は「戦争」という社会状況の中で、登場人物の行動を描き、社会の状況が個人に与えた影響を示している。『青年の環』がサルトルの提唱する人間を「心理・生理・社会」という三つの視点から同時にとらえる方法論の実践なのである。

『青年の環』を書き終えた時に野間は、この小説に未解放部落の問題、戦争の問題、家の問題、性の問題、生死の問題などさまざまな問題が含まれていると述べている。『青年の環』の中で、野間は登場人物の生理、心理、社会という多層の描写を通じ、矢花正行と大道出泉という二人の人物の造型に成功した。『青年の環』で、1930年代後期の日本ファシズム政府の政治動揺、革命闘争、宗教信仰および部落問題を有機的に一つの「全体」に結合させ、多様な方法で人物の内心世界を全面的に描写した。『青年の環』はまさにサルトルの提唱する「全体小説」の完璧な実践といえる。

では、「全体小説論」の三つの要素（生理・心理・社会）が、作品の中でいかに実践されたのかを考察していこう。

1. 生理面において

まずは生理面においてである。野間は初期作品の中で人間の本源である生理的な部分に注目している。肉体の描写は、前も述べたように、『青年の環』以前の作品『暗い絵』『肉体は濡れて』等においても緻密に描かれている。『青年の環』の第一部第一章「華やかな色彩」には矢花正行の元恋人である大道陽子の細かい肉体描写がある。

矢花正行は彼女がそうして姿勢を正している間、じっと彼女に注目の眼を向けていた。彼女が少し前かがみになって身を揺るごとに、彼女の腰や胸の上の真白いふくらみが輝くように揺れて、彼の眼の前に鮮やかなまぶしい色を広げた。彎曲した右の脇腹のところに、柔らかい肉の感触が浮き出ている。裾から三分の一ほどのところで強くびれを入れて後ろにはね上げている髪の毛の横から形のいい冷たい耳が覗いていて、その下の頸の肌に幾分上気した血潮のあとがほの赤く透いている。彼の眼はじっとその肌の上にとまった。その肌の表から、彼女の体のうちに動く何か不思議な力がもれ出てくる。彼の眼の中を先程舞台でみた彼女のほとんど裸に近い体がひらめくように動くと、彼の体の中でその裸に近い彼女の体に向かって無理にかけ寄ろうとする烈しい欲望が動き、彼の全身をつらぬくのを感じた。¹⁴⁾

大道陽子の肉体がこのように細かく描写されている。サルトルは、人間の性欲を性的行為に限定しなく、他人の身体に関わるものだと考えている。人間の行動は心の奥底にある性欲を見せる。野間は、『青年の環』の創作に、まずこの生理面のことを描写して「全体小説」の実施に向かっていく。

2. 心理面において

野間は生理面だけでなく、心理面をさらに追求する必要があると主張している。野間は『人間要素の分析と総合』の中で、心理面の追求について次のように述べている。

人間の意識をとらえるといっても、それを固定させてとらえるのではなく、意識が動いているままに、その内側にはいつて、内からとらえるのである。私はこの小説を戦争

中計画し、かきはじめたが（完結しなかった）、私が意識追求を先ず最初にはたさなければならなかったというのは、もちろん軍国主義の圧迫の下に行動を失い、どうしても自分の内側にとじこもらざるを得なかった人間を追求するのにもっとも必要であり、もしそれに成功すればそれによって意識内面にとじこもっている人間の解放が可能となると考えたからである。¹⁵⁾

このように野間は心理の追求を自分の方法に取り入れようとした。また、心理面の追求は単独なことでなく、生理面と結合しなければならないと主張している。この二つの関係について次のように言及している。

人間の規定は内部の面からの規定だけではだめなのである。例えばジョイスは意識の流れを次々と深く追求していく、そしてその最深部において、ディアローグ的に渦巻いている欲望と肉体の間の無意識層を、人間事象の決定因として規定する。しかし人間は、決してそのようなもののみによって動かされているのではない。また、無意識層というものにしても、その後の医学の発達によって、それが、血液、体液、組織液、ホルモンなどのような要素によって決定されることが明らかにされている。……しかし心理と生理の関係を、ゾラのように生理を基調として把えず、しかしまた単に心理を基調として把えるのでもない、二つを結合する高い立場を求めなければならないのである。¹⁶⁾

このように、野間の『青年の環』において、生理面と心理面がお互いに影響し、生理面あるいは心理面だけでは人間を全面的に把握することができない。生理面は心理に影響を与える重要な要素である。『青年の環』にはジョイスのいう「無意識層」の描写もある。生理面の現象は実に奥深いところにある心理面の影響を受けている。この無意識層の描写も心理面の追求であり、登場人物の行動に影響している。たとえば、『青年の環』の第三部第一章「舞台の顔」における「二本の指」が勝手に動く場面である。

彼は手すりの上に置いた右手の指が不意にぴくり動くかのように感じて、そこに立ちすくんだ。二本の指はその手すりの上から彼に向かって何か訴えているのである。くだらないこと言うなと彼はその二本の指に向かって、あわてて言葉を投げたが、それはそのようなこと言うことをききはしないのである。¹⁷⁾

二本の指は登場人物の生理的行動である。この外部の行動は、実は彼の奥底にある心理面の声である。大道陽子に対する性的欲望が行動の中で現れるのである。しかし、それが大道陽子に対する性的欲望であるとは彼自身は気づいていない。視覚的なものが、しだいに心理に浸透し、彼の行動を支配している。心の深いところに欲望があるので人間が特定の行動をとるようになる。登場人物は最初に自分の欲望に気づかないが、やがて意識を追及する過程の中で自分の肉体が何を欲していたのかが明らかになる。このように、野間が生理面と心理面を結びついて人間をとらえ、彼の「全体小説」を創作する目標にもっと近づくようになった。

3. 社会面において

最後は社会面においてである。『青年の環』以前の作品には、生理面と心理面の追求が多く表れたが、社会面については、『青年の環』からはじめて野間の重要な文学課題になって意識的に取り入れられた。このことについて、野間は次のように述べている。「この二つ（生理・心理面を指す。）を結合した高い立場というものも、なお人間を人間の内側からとらえるものにすぎないのであって、人間はさらにその外部の社会との関連が明らかにされる立場にたたなければ、ほんとうにはっきりとその全体をとらえることはできないのである。そして人間の内部の要素としての生理、心理、人間の外部の要素としての社会、その三つの人間の要素を統一してとらえるようなところに出て行くということが、次に私の文学の課題となったのである。私はこの課題をもって『青年の環』という小説に立ち向かった。」¹⁸⁾ つまり、野間は『青年の環』から積極的に社会情勢や時代を意識して取り入れようとしたのである。

この社会面の追求について、野間は『サルトル論』の中にも触れたことがある。サルトルの小説『自由への道』において、「戦争」という社会状況を設定した。登場人物マチウの行動が戦争の状況と密接に関係している。野間もサルトルから影響を受け、社会状況が個人に与える影響を強調した。

『青年の環』の時代背景は第二次世界大戦の前夜に設定されている。具体的にいえば、一九三九年の梅雨時からポーランド侵入までの約三ヶ月の時期である。『青年の環』の中で、時代背景や社会運動などの「社会状況」が作品のところどころに見られ、小説を通貫している。

そして彼は階段を上りながら後につづく正行の方に長い体をすりよせ小さい声で言うのであった。「大体君が来るまでに一通り相談することはやったんやが、矢花、どうも敵は間近にせまってきたらしいぞ。」¹⁹⁾

これは『青年の環』の第一部第二章「現実嫌悪」において、教師の今村芳文が矢花正行に対して語る場面である。今村芳文は大阪左翼グループの責任者であり、矢花と同じく運動家の一人である。この「敵」というのは特高警察である。今村芳文は京都の友人が検挙されたことを知り、矢花に忠告している。

部屋の中の人たちはすでに京都の事件については一通り論じおわったところであったとはいえ、まだ何の結論にも対策にも、達していないのだということを彼は感じとった。……そこには青年達が集まればすぐさま流れはじめるこの生々した空気の弾み、さらに言えば、すでに閉塞された社会情勢に出会った青年達がそれに抵抗しながら各自の体からはき出す息苦しい呼吸といったものさえなかった。……京都の事件は、いまや、すべてのひとの頭上におちているのだ。²⁰⁾

これは、矢花と人民戦線運動の大阪地方グループの仲間が、今村家の二階で京都の事件の情勢について相談する場面である。大阪における犠牲を最小限度にとめるために、対策

をたてようとしたのである。この節に京都の事件という具体的な社会状況が描かれた。

当局の何よりも恐れていたのは、学生の自治組織である学友会組織を官僚統制の方式に従って学校生徒課に収めとろうとする文部省の動きに対して開始された反学運動が、反戦運動に移るということであった。が、それは学校配属将校が軍事教練時間中に一人の学生を殴打負傷させた事件によって、すでに開始されはじめたのである。²¹⁾

この一節に、政府、学友会組織、反学運動、反戦運動、学生を殴打負傷させた事件など社会の具体的な状況があり、当時の時代背景や社会情勢を如実に反映したのである。

第六部第三章「炎の場所（一）」において、大道出泉は次のセリフを言ったのである。「しかし世界戦争が起こるよ。ポーランド国境に集結しているソヴィエト軍は、どうやら近いうちにポーランドに軍を出すらしいのや。ポーランドにぐんぐん侵入しているナチと対陣することになるのやないか。俺の父親の方に入ったニュースで、まだ、新聞社辺りにも、入ってんようやが、いずれそのうちに入ってくるやろう。世界戦争が始まるのやないか。大世界戦争やぜ。」²²⁾ このセリフには第二次世界大戦という時代背景あるいは社会状況が表されている。このような社会状況についての描写は『青年の環』の中にたくさんある。

「サルトルはある時期から全体ということに非常に関心を持つわけです。これは特に戦争体験を通じてということが言える……」²³⁾ と澤田直は述べている。戦争という社会状況が登場人物の行動に影響を与えている。野間は登場人物の視点を借りてこの影響を客観的に描写した。野間は小説の中で社会状況という元素を意識的に組み込んでいるといえる。

IV. 社会環境が人物の生理、心理に与えた影響

野間宏の言うように「一人の人間を描くためには、もはやその人間に働く国際的な関係の力を無視することは出来ない。……さらにまたその国内の経済的なものの影響を測定しなければならない。その人間を取りまく地方の影響、家の影響、過去の影響、生理的条件、心理的条件、等々が明らかにされなければならない。」²⁴⁾

人間は社会性をもつ動物である。社会環境は人間の生理と心理に何らかの影響を与えずにはおかない。『青年の輪』の主人公である矢花正行が直面している社会環境は最悪の環境だと言ってよい。20 世紀 30 年代の日本は軍国主義国家へ歩む途中であり、思想と文化の統制を強化し、治安維持法などを通して言論の自由を取り締め、身体的自由も阻害した。人々は危機感を抱きつつ暮らしていた。『青年の輪』においては、国家面の社会環境は戦争という背景があるが、個人の社会環境は主人公の勤めている会社、役所などがある。作品では戦争を前にして個人がいかに小さな存在であるかということを描いた。例えば、学生時代に京都の左翼団体に参加した矢花正行は団体の人とは連絡を保っているが、政府の弾圧で、左翼運動は生気を失い、同志達が面会しても、情報を交換するだけであり、そしてその行動は特高警察の監視下に置かれている。また、政府で部落民関係の仕事をしている矢花正行は部落民のために何かをしようとする意欲があっても、軍隊と警察の弾圧を考え

ると、彼は絶望を感じずにはいられなかった。つまり、社会環境は人間の心理に大きなプレッシャーをかけたのである。また、矢花正行が大道陽子と別れたのも社会環境によるものだと思われる。

作品は作者の思想の現れるところである。『青年の輪』では、主人公矢花正行は部落の指導者である島崎にひどく敬服している。それは、島崎が1938年7月7日に訪ねてきた憲兵をけんもほろろに追い払ったからである。矢花正行が島崎に敬服したという気持ちは作者の気持ちの表れではないかと思われる。周知のように、野間宏は刑務所、憲兵や治安維持法に対して深い恐怖を抱いている。それだけに、野間宏はそれらを歯牙にもかけぬ人間の存在に心から敬服し驚嘆したのである。

社会環境が人間の生理に与えた影響を考える場合、大道陽子の兄である大道出泉のことに触れずにはいられない。大道出泉は学生運動で挫折に会い、プロレタリア運動から離脱した。その後大道出泉は自暴自棄し、退廃した生活を始めた。大道出泉の父大道敬は部下の田口吉喜にしっぽを掴まれたので、田口は大道家から多額のお金を詐欺した。大道出泉は邪魔者の田口吉喜を殺し、大道出泉自身もピストルで命を絶った。大道出泉の自殺も田口吉喜が殺されたことも悪い社会環境によるものであろう。つまり、大道出泉は暴力で悪を制したが、彼自身も暴力の犠牲者になった。社会のプレッシャーに直面して大道出泉が取った行動は作者野間宏の弱い一面を代表できないかと思う。

終わりに

野間は小説の方法に強い関心を示していた。小説を書きながら『小説論』などのエッセイも書いた。野間は自分の文学創作を探究の一步一步と考えていた。その探究の歩みの最終目標は、人間を「心理・生理・社会」の三つの方面から同時にとらえることであった。渡辺広士は「その要求から、(野間宏が) サルトルに注意が向けられるのは当然であった。サルトルもまた、もっとも明確に「戦後」と取り組んでいた文学者だったし、全体小説を目指していたから。」²⁵⁾と解説している。『青年の環』は、当時の日本社会の状況を強調し、人間の生理面、心理面と社会面を有機的に一つの「全体」に結合させ、サルトルの提唱する「全体小説」を実現したのである。

注

- 1) 長谷川泉・高橋新太郎(1988)、『文芸用語の基礎知識』至文堂、第446頁。
- 2) 竹内泰広(1976)、「生と歴史の磁場」(渡辺広士編、『野間宏研究』)筑摩書房、第295頁。
- 3) 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第14巻)筑摩書房、第50頁。
- 4) 澤田直(2006)、「日本におけるサルトル論争」(『野間宏の会会報』第13号)藤原書店、第16頁。
- 5) 同4)、第12頁。

- 6) 莫琼莎(2013)、「日本近代写实主义传统的突破—论野间宏《骰子的天空》中的“新写实主义”」(『北方工业大学学报』第六期)、第 101 頁。
- 7) 張伟(1987)、「野間宏の“全体小説”と西方現代主義文学」(『外国問題研究』第四期)、第 27 頁。
- 8) 武田友寿(1980)、『戦後文学の道程』北洋社、第 90 頁。
- 9) 同 3)、第 29 頁。
- 10) 同 3)、第 39 頁。
- 11) 同 3)、第 29 頁。
- 12) 野間宏・武田泰淳(1972)、『野間宏・武田泰淳集』筑摩書房、第 43 頁。
- 13) 同 3)、第 280 頁。
- 14) 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 7 卷)筑摩書房、第 18 頁。
- 15) 野間宏(1991)、「人間の要素の分析と総合」(小笠原克・吉田永広編、『鑑賞日本現代文学 24 野間宏・開高健』)角川書店、第 156 頁。
- 16) 同上、第 159 頁。
- 17) 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 11 卷)筑摩書房、第 5 頁。
- 18) 同 15)、第 160 頁。
- 19) 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 1 卷)筑摩書房、第 125 頁。
- 20) 同上、第 126 頁。
- 21) 同上、第 127 頁。
- 22) 同 17)、第 618 頁。
- 23) 同 4)、第 16 頁。
- 24) 同 23)。
- 25) 渡辺広士(1976)、「解説」(渡辺広士編、『野間宏研究』)筑摩書房、第 389 頁。

参考文献

- 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 1 卷)筑摩書房。
- 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 7 卷)筑摩書房。
- 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 11 卷)筑摩書房。
- 野間宏(1970)、『野間宏全集』(第 14 卷)筑摩書房。
- 野間宏・武田泰淳(1972)、『野間宏・武田泰淳集』筑摩書房。
- 武田友寿(1980)、『戦後文学の道程』北洋社。
- 長谷川泉・高橋新太郎(1988)、『文芸用語の基礎知識』至文堂。
- 澤田直(2006)、「日本におけるサルトル論争」(『野間宏の会会報』第 13 号)藤原書店、12-16 頁。
- 竹内泰広(1976)、「生と歴史の磁場」(渡辺広士編、『野間宏研究』)筑摩書房、290-298 頁。

野間宏（1991）、「人間の要素の分析と総合」（小笠原克・吉田永広編、『鑑賞日本現代文学 24 野間宏・開高健』角川書店）、155-161 頁。

张伟(1987)、「野間宏的“全体小説”与西方现代主义文学」（『外国問題研究』1987 年第四期）、26 -29 頁。

Sartre's whole novel and Hiroshi Noma's creative practice

LI, Xianrui

Abstract

Hiroshi Noma was influenced by Sartre's philosophical thought and created an existential work. He also referenced Sartre's literary theory and developed the 'whole novel' on both sides of theory and practice. Sartre was an existentialist and a Marxist in philosophy. It cannot be denied that Hiroshi Noma was influenced by Sartre's philosophical thought and literary thought. "the whole novel" maintained by Sartre is Sartre's novel theory, and "The way to freedom" is its experimental work. Hiroshi Noma developed this theory independently, and realized the whole person through the description of the human being from the psychological aspect, the physiologic aspect, and the society side in the novel "the ring of youth". In the "ring of youth", the psychological aspect, the physiologic aspect, and the society were intertwined, and the whole image of the society was integrated.

Keywords : Hiroshi Noma, Sartre, The whole novel, The ring of youth

朝鮮半島における平和構築と日中韓3か国の対朝鮮開発援助協力

李 鋼哲（北陸大学）

要旨

昨年（2018年）春より、朝鮮半島をめぐる国際情勢は劇的に変化した。韓国平昌冬季オリンピックを契機に南北緊張関係が急速に緩和し、4月27日には南北首脳会談が10年ぶりに実現、引き続き6月13日には史上初の米朝首脳会談が行われた。朝鮮戦争停戦以来、75年間続いた南北対立および米朝対立の歴史に終止符がつく可能性が生まれた。

朝鮮半島では平和定着の機運が高まると同時に、未来に向けて朝鮮の経済開発および南北経済圏構築、そして北東アジア経済圏構築など重要な課題が再び浮かび上がって来た。朝鮮が中国やベトナムのように改革・開放政策への舵を切る場合に、経済開発に必要な開発資金や技術は如何に調達されるのか、が重要な問題として提起される。

本稿では、先進国日本と韓国からの政府開発援助（ODA）、そして世界第二位の経済大国で朝鮮と良好な関係の中国からの開発援助の可能性について分析し、その際に、各国それぞれの開発援助する場合でも、朝鮮と近隣で関係性の深い日中韓三カ国が如何に協力して開発援助の経験を共有し、開発効果を高めるのか、その可能性について問題提起をした上で、今後の課題について検討する。

キーワード： 朝鮮半島、南北和解、平和構築、開発援助、日中韓協力

はじめに

ここ十数年、朝鮮民主主義共和国（DPRK、以下「朝鮮」と略す）の核開発やミサイル開発を巡って、東アジア地域、または北東アジア（「東北アジア」とも言う）地域では、米朝対立を軸に緊張関係がエスカレートし、戦争危機まで煽られていた。ところが、昨年2月の韓国平昌（ピョンチャン）冬季五輪開催を契機に、南北共同チームの編成、北の高官が開幕式に参加し、大韓民国（ROK、以下「韓国」と略称）大統領と会談するに至り、南北朝鮮間での和解の機運が急に生まれた。その結果として、4月27日には南北首脳会談が板門店で開催、「共同宣言」が発表され、その後も2回の首脳会談が異例の頻度で相次いで開催され、様々な成果が得られた。

さらに、画期的な事件として、その南北和解ムードの流れに乗る形で、米朝首脳会談が6月12日にシンガポールで開催されたことである。これは朝鮮戦争休戦以来、敵対し続け

てきていた両国の史上初めての首脳会談であるだけに、世界を震撼させ、全世界のマスコミの注目を浴びることになる。引き続き、今年2月27-28日にはベトナムの首都ハノイで約8か月ぶりに2回目の首脳会談が行われた。懸案の交渉は進展が見られないとはいえ、年間2回も首脳会談が行われたことは、戦争や武力ではなく対話による問題解決に意欲を示した両国首脳の強い決意だと評価されるべきだろう。さらに、去る6月30日には、トランプ大統領が板門店の停戦ラインを超えた後、金正恩委員長と韓国側に渡って50分に及ぶ第3回首脳会談が行われ、もう一度世界を驚かせた。これにより、朝鮮半島では南北分断と朝鮮戦争停戦以来、65年間に及ぶ南北対立および米朝対立の歴史に終止符をつける流れが生まれたのだ。もちろん、朝鮮半島の非核化と米朝を含めた朝鮮戦争当事者による「終戦協定」から「平和協定」への転換など重大な課題は残っているが、方向性としては画期的な歴史転換であることには間違いない。

朝鮮半島に平和定着の機運が高まるにつれ、朝鮮の経済開発問題、および南北経済圏構築の問題が改めて大きな課題として浮上し、さらに、北東アジア経済圏構築の可能性が改めて高まっている。もし、朝鮮が本格的な経済開発への政策転換に舵を切った場合に、膨大な開発資金を如何に調達するのか、という現実的な課題が突き付けられている。

筆者はかつて東京財団（日本のシンクタンク）の研究プロジェクト（研究チーム）の研究成果をまとめ日本政府に対して、「北東アジア開発銀行」設立に関する政策提言を行ったことがある。その提言は、朝鮮を含む北東アジア地域の社会インフラ開発と経済発展を強力に推し進めるためには、日本主導で北東アジア諸国のみならず米国・EUなども巻き込んだ開発銀行を新たに設立し、多国間協力による地域経済発展と平和で繁栄した「北東アジア共同体」を目指していくべきという趣旨であった¹⁾。

また、3年前の2016年に筆者は「国際開発協力におけるアジア・モデル構築に向けて」を題に、日中韓3か国の開発援助に関する比較検討を行った²⁾。本稿は、昨年9月に第1回「東アジア日本学研究学会」（創立大会）の分科会にて報告した内容を基に、国際開発経済または国際開発金融の視点から、近い将来訪れてくるだろうと予想される朝鮮の本格的な改革・開放政策の展開とともに、北東アジア地域経済の活性化に向けた日中韓3か国の国際開発援助の役割および開発援助におけるコラボレーションの可能性を探るものである。アジアの先進国日本と韓国からの政府開発援助（ODA）、そして世界第二位の経済大国中国からの政府開発援助³⁾が大きく期待されると想定され、その際に、如何にして日中韓3か国が協力して開発援助の経験を共有し、朝鮮の経済開発および朝鮮経済のグローバル化した国際経済とのリンケージを実現していくのか、について問題提起をした上で、今後の課題について検討したい。

I. 朝鮮半島は平和構築プロセスの新段階に来ているのか？

周知の通り、昨年2月以来、朝鮮半島では緊張緩和のムードが漂い始め、そのきっかけ

は、第23回平昌五輪大会ということは前にも触れている。開催を前に、南北政府間の水面下の交渉により、南北共同チームの形成（部分的項目）に合意し、開幕式で南北共同チームの入場式が決定され、国際オリンピック委員会（IOC）により後押しされることになり、朝鮮半島では和解ムードが生まれた。

1. 朝鮮の戦略と方針の転換

一昨年まで緊張が続く朝鮮半島情勢に、緊張緩和に向けて最初にボールを投げてきたのは朝鮮側だった。2018年1月1日、最高指導者金正恩（キム・ジョンウン）委員長は「新年の辞」において、平昌冬季五輪に朝鮮代表団を派遣する用意があるとの声明を出した⁴⁾。これを受けて1月9日にも南北閣僚級会談が早速行われ、朝鮮が参加することが正式に発表された⁵⁾。朝鮮の競技参加については、南北閣僚級・次官級実務会談においてアイスホッケー南北合同チーム結成することが合意された。IOC トーマス・バッハ会長は南北合同チームに非常に前向きであるとされ、韓国政府の決定にも影響があったとされる。実は2017年5月の大統領選挙で革新派の文在寅氏が大統領に選ばれることにより、それまで約9年間に渡り保守党韓国党政権時代に冷却していた南北関係に改善のチャンスが訪れていたのである。朝鮮は核実験やミサイル発射実験を理由に国際連合安全保障理事会の決議で制裁を受けていたが、韓国もこの安保理制裁決議に基づいて、日本などと同じく貨客船「万景峰（マンキョンボン）92」の入国禁止などの対朝鮮独自制裁を行っていた。しかし、冬季五輪期間中は「例外」として、北側の文化交流事業団「三池淵管弦楽団」人員を載せた「万景峰92」の韓国入国を許可した。その後のプロセスはマスコミで伝える通り、平昌五輪という平和の祭典に乗っかり、南北間の和解ムードが急進展した。

(1) 朝鮮側の方針転換の真意

それでは、朝鮮側はなぜ急遽に方針転換したのか？

この問いについて、国際社会では様々な憶測や分析がなされている。日本やアメリカなどでの代表的な世論としては、米国中心の国連経済制裁により経済や物資が困窮して、金正恩氏は頭を下げて対話に乗り出したという説が主流を占めている。

しかし、果たしてそうだろうか？ 筆者の考え方はそれとは異なる⁶⁾。確かに、国連の経済制裁に中国までが賛同し、朝鮮経済の命綱とも言える中国との経済交流が閉ざされて困っていることは事実である。しかし、それだけの原因で頭を下げるような朝鮮ではないということが「国際社会」では十分理解されていないと筆者は思う。なぜかというと、朝鮮戦争停戦以来、米国を中心とした国際社会は長い間朝鮮に経済制裁や圧力をかけてきたにも関わらず、それにより朝鮮側が対話に出てきたことは一度もなく、あくまでも朝鮮の対外戦略と政策の判断によるものだということが重要なポイントである。ましてや「主体思想」⁷⁾を国是としている北側の当局や国民は、強国米国とは常に対決姿勢を繰り返してき

たのは周知の通りである。

実は、2006年10月9日、朝鮮の実施した核実験に対する国際連合安全保障理事会決議1718号が初めて実施されて以来、2018年8月までに計11回の経済制裁が実施され、その都度朝鮮の経済や国民生活状況は厳しさを増してきた。当初はまだ金正日時代であったが、2011年末に金正恩氏が父の死亡後に権力を継承して以来、一度も経済制裁に腰を曲げることはなく、引き続き核とミサイル実験を繰り返してきたことも周知の事実である。逆に、朝鮮の核とミサイル開発能力向上で、米国の本土まで届く可能性があるということで、米政権やトランプ大統領は強固な立場を取りながらも、17年の5月頃に金正恩氏と対話する用意があるとのメッセージを発信したのである。

（2）国連の経済制裁は本当に効いていたのか？

果たして制裁の効果はあったのか。国連安全保障理事会の朝鮮制裁委員会専門家パネル委員を4年半務め、2017年12月に『北朝鮮-核の資金源「国連捜査」秘録』（新潮社）を刊行した古川勝久は、それに対して否定的な考え方を述べている。「制裁の目的は北朝鮮の核やミサイル、大量破壊兵器などに関係する人・モノ・カネ・技術の移動を阻止すること。そのためには国連加盟国がそれぞれ丁寧に法律を作り、制裁違反の防止や懲罰のための法執行体制の整備が必要だが、ほとんどの国がそれをやっていない。結局のところ、効果は非常に大ざっぱな中国のマクロ的圧力によるところが大きい」と指摘する。

経済制裁は確かに要因の一つではあるが、決定的な要因ではないことを筆者は強調したい。その一つの理由として、筆者は2017年8月に延辺大学での国際シンポジウム終了後のフィールドトリップで朝鮮を訪問し、羅先（ラソン）市に拠点を置いてある国際貿易会社（本社は延辺に拠点を置いた日本企業の支社）の安成男支社長にお会いしてインタビューをしたことがある。安氏は流暢な日本語で自分たちが置かれた状況について説明してくれた。彼の話によると、朝鮮では経済再建のためにいろんな政策を打ち出して頑張っているのに、国連制裁により朝鮮経済やビジネスは大きな影響を受けていることを認め、それに対しては、「我々は戦争するか対話するか、何とか早く決着つけてほしい。いくら制裁して状況が厳しくても、かつて90年代中盤の【苦難の行軍】時代を乗り越えてきた朝鮮人民は頭を下げることは絶対にない」と強く訴えていたことが印象に深かった。つまり、朝鮮側が対話路線に乗り出したのは、経済制裁が効いて頭を下げてきたというのは、米国や日本などの政治家たちが自分に都合のいい成果のアピールに過ぎないと筆者はみている。事実判断の誤りだということをここで強調したい。

（3）対話路線に舵を切る現政権

そこで、筆者の分析では、以下の理由により、金正恩氏が対話路線に転換したと考えている。

一つの理由は、朝鮮側は核とミサイル開発に成功し、国家安全保障の面で米国の軍事的脅威に対応できる自信がついてきたというのが最重要なポイントであろう。核武装は金日成時代からの朝鮮の宿願であり、国際社会で孤立し、米国はじめ巨大な軍事力による脅威にさらされている国として堂々と対決姿勢を貫く、理にかなった考え方だと見ることができる。もちろん、筆者は朝鮮当局や核開発を支持する立場ではないことを断っておきたい。

二つ目の理由は、国家安全保障問題で自信がついたのだから、今後は安心して経済建設に総力を投入できるという金正恩氏や当局の判断があると見られる。経済や国民生活は金正恩時代になってかなり改善されているという事実に対して、いろんな報道で取り上げられている。しかし、そこでさらに経済建設を前に進めたいと思っても、ネックになっているのは経済制裁の解除問題であった。つまり、対外経済を展開するには経済制裁の解除が不可欠であると、当局は判断しているだろう。

三つ目の理由は、金正恩氏自身の考え方とも関係ある。彼は年齢が若く、かつてヨーロッパで数年間留学した経験があるため、資本主義世界に対してある程度理解しているはずである。また、自分の国が置かれた孤立状態では経済強国の建設は推進できないと判断しているのではなかろうか。おそらく金正恩氏周囲のお祖父さんやお父さんの世代の長老たちは、外部の世界を体験したことがなく、長い間社会主義体制に慣れていて、考え方が硬直し、改革・開放への舵きりには反対しているといわれている⁸⁾。金正恩氏はそれを転換したいと決意していると見てよからう。

2. 南北首脳会談とその成果

前述の通り、昨年4月の首脳会談では、『朝鮮半島（韓半島）の平和と繁栄、統一のための板門店宣言』（略称『板門店宣言』）が発表されたが、合意内容には以下のような事項が盛り込まれた⁹⁾。

宣言では、朝鮮半島の完全な非核化を南北の共同目標とし、積極的に努力をすること、休戦状態の朝鮮戦争の終戦を2018年内に目指して停戦協定を平和協定に転換し、恒久的な平和構築に向けた南・北・米3者、または南・北・米・中4者会談の開催を積極的に推進すること、過去の南北宣言とあらゆる合意の徹底的な履行、高位級会談、赤十字会談など当局間協議の再開、南北共同連絡事務所を朝鮮の開城に設置、南北交流、往来の活性化、鉄道、道路の南北連結事業の推進、相手方に対する一切の敵対行為を全面的に中止し、まずは5月1日から軍事境界線一帯で実施する、黄海の北方限界線一帯を平和水域にする、接触が活性化することにより起こる軍事的問題を協議解決するため、軍事当局者会談を頻繁に開催などである。

その後、5月26日には約1ヵ月間ぶりに、両首脳は2回目の首脳会談を今度は板門店の北側施設「統一閣」（前回韓国側の「平和の家」）で行った。この会談は異例で極秘裏で行われた。その後、周知の通り米朝第1回首脳会談が6月12日開催され、またその約3

か月後の9月18-20日に、今度は文大統領が平壤を訪問し、南北首脳会談を行い「共同宣言」が出された。金正恩委員長は文大統領を歓待し、空港で閲兵式典が行われ、その後は北側の心臓部である朝鮮労働党庁舎にお招きしたのである。そこで出された南北「共同宣言」には、鉄道・道路の連結や人的交流のほか、金正恩氏のソウル訪問も盛り込まれた。南北融和の面では豊富な成果があったと報道されている¹⁰⁾。この1年間、南北の緊張関係と戦争の危機は急低下し、和解プロセスは急速に進展したのである。

3. 米朝首脳会談

周知の通り、米国（アメリカ合衆国の略称）大統領ドナルド・トランプと朝鮮の金正恩國務委員長は、史上初の首脳会談を2018年6月12日、シンガポールで開催した。両首脳は、新たな米朝関係や朝鮮半島での恒久的で安定的な平和体制を構築するため、包括的かつ誠実な意見交換を行った。トランプ大統領は朝鮮に安全の保証を与えると約束し、金正恩委員長は朝鮮半島の完全な非核化に向けた断固とした揺るぎない決意を表した。

両首脳は、新たな米朝関係の構築は朝鮮半島と世界の平和と繁栄に寄与すると信じるとともに、相互の信頼醸成によって朝鮮半島の非核化を促進すると認識し、「共同宣言」に署名した。その内容は、(1) 両国は平和と繁栄を求める両国国民の希望に基づき、新たな米朝関係の構築に取り組む、(2) 両国は朝鮮半島での恒久的で安定的な平和体制の構築に向け協力する、(3) 4月の「板門店宣言」を再確認し、朝鮮は朝鮮半島の完全な非核化に向け取り組む、(4) 両国は朝鮮戦争の捕虜・行方不明兵の遺骨回収、既に身元が判明している遺体の帰還に取り組む、という4項目であった。両首脳は、「史上初の米朝首脳会談が、両国の数十年にわたる緊張と敵対を乗り越える新たな未来を築く重要な出来事であった」と認識し、この共同宣言の内容を「完全かつ迅速に履行すること」を約束した。

この会談後、両国は朝鮮半島の非核化に向けた交渉を実務レベルで進める一方、朝鮮は約束通りに米軍遺骸の一部を米国に渡し、米国側は米韓共同軍事演習を一時ストップした。ただし、その後の非核化に向けた交渉は思う通りに進んでいなかったことも事実である。

そこで、世界で注目されたのは第2回の米朝首脳会談（2019年2月27-28日、ハノイ）であった。国際世論はこの会談で大きく一步を踏み出す予測であったが、残念ながら非核化をめぐる双方の条件が食い違って決裂し、合意文書は調印されなかった。その理由について米国側は「朝鮮が全面的な制裁解除で譲らなかったからだ」と主張したことに対して北側は「部分的な制裁緩和のみ要求した」と反論した。朝鮮は、米国の査察のもとで寧辺（ヨンビョン）核施設を完全に廃棄するなど、実質的な措置を講じたと主張し、その見返りとして、民間の経済と国民の暮らしを妨げている制裁のみを解除するよう求めたのだと述べた¹¹⁾。

そして、今年6月30日、日本の大阪でG20首脳会議終了後、韓国を訪問していたトランプ米国大統領は、突如38度線のDMZ（非武装地帯）の視察後、朝鮮の金正恩委員長にお会

いし、米国の大統領としては初めの板門店の国境線を超え、朝鮮領土内に入り、その後は韓国側に戻って首脳会談を行う、という異例中の異例の行動を取り、世界を驚かせた。この会談を通じて、米朝両国は首脳間の信頼関係をアピールし、今後2～3週間で実務者協議をスタートさせると発表した。今後の米朝会談および非核化問題がどのように進捗するのか、深い関心を持って見守りたい。

4. 中朝首脳会談

中国は朝鮮の外交的な友好国で、貿易相手国としても支援元としても主要な国の一つである。金委員長は2011年末に最高指導者となってから6年以上、中朝首脳外交は途絶えていたが、2018年には南北首脳会談や朝米首脳会談を前後に中国を3回も訪問し、習近平主席との親密ぶりをアピールした。BBCのローラ・ビッカー・ソウル特派員によると、昨年の訪中のうち米朝首脳会談と南北首脳会談の直前に行われた2回は、戦略調整の機会だったと見る向きもある。また、今年の1月、4回目の訪中を行った。新華社通信は、1月10日、習近平（シ・ジンピン）国家主席と金正恩委員長が8日に北京で行った首脳会談の内容を報じた。金正恩氏は会談で、朝鮮半島の非核化を目指す立場を堅持し、トランプ米大統領との2回目の首脳会談に意欲を表明した。習氏も支持する考えを伝え、中朝の結束をアピールした。1年間に4回も中国を訪問した金正恩氏の行動も異例中の異例であった。その裏には、米国との首脳会談に向かって、中国を戦略的に味方につけて有利な立場を勝ち取る思惑があったのだろう。そして、中国も金正恩氏のアプローチを断る理由はなく、朝鮮半島の非核化を主張し続けてきた中国からすれば北側の驚くほどの変化であり、歓迎すべきことであっただろう。

II. 朝鮮経済は国際社会への復帰を如何に実現されるか。

1. 朝鮮の経済・社会はどうなっているのか？

ここ十数年、日本での「北朝鮮問題」に関する報道はそのほとんどは核開発やミサイル開発問題、拉致被害者の帰還問題、そして経済的な困窮などネガティブな情報に偏っていると考える。そのおかげで、日本国民は朝鮮の経済社会事情について基本的に知らないか、知ろうとはしないのが現状であろう。ここでは、まず朝鮮の経済社会がどんな状況なのか、について簡単に説明する必要がある。

韓国政府統計庁が2018年に発表した資料¹²⁾によると、2017年度末の時点で、朝鮮と韓国の人口はそれぞれ2,510万人、5,144万人、出生率は1.94と1.33となっている。朝鮮の経済規模を見ると国民総所得(GNI、名目)は2017年36兆3730億ウォン(約3.8兆円)、1人当たりGNIは146万ウォン(約15万円)水準である。韓国はそれぞれ1639兆ウォン(約172兆円)、3198万ウォン(約336万円)、単純計算で朝鮮の一人当たりの国民所得

は韓国の22分の1である。ところが物価水準が違うため単純比較はできない。経済的な困難があることは確かであるが、90年代のように餓死者がでるような状況からは脱出していると筆者の訪問や調査で確認された。筆者が1997年に羅先市を訪問した時には食糧難が相当厳しいことを実感した。そして、2002年4月に平壤を訪問した時も食糧難で子供たちが順調に成長していないことも確認した。それが2017年8月に羅先市を訪問した時には食糧難がかなり解消されていること様子が見られた。自由市場にも食料や海産物、野菜などが豊富であったし、町の住民の様子を見てもそれほど貧困している様子は見られなかった。

教育を見ると、小学校4,800校（5年制、学生数117万人）、韓国6,001校（6年、学生数267万人）。中学・高校4,600校（3+3年、学生数190万人）、韓国5,562校（3+3年、学生数321万人）、単純に人口比で見ると、北は南より学校数も学生数も多いのが分かる。大学は490校（4-7年、学生数75万人）、韓国1,532校（4-6年、学生数313万人）で、南が北より多いことが分かる。

朝鮮は社会主義制度を取っているため、市場経済の国とは違う様相がある。例えば、朝鮮では税金がなく、その上教育無料、病院無料、住宅無料（国による配分）の3無料システムを取っている。教育は幼稚園から高等教育まで無料である。かつて、1980年代頃までの中国でも同じような社会主義計画経済体制を取っていたので、筆者は実体験でそれが分かる。小学校から大学まで無料で勉強することができたのである。

だからと言って、かつて朝鮮が謳っていた「社会主義楽園」ということとは程遠い。何故かという、社会主義計画経済体制では、生産におけるインセンティブ・システムや競争が排除されているために、経済発展は市場経済国に比べて低開発の状態である。現実的に、冷戦崩壊とともにソ連が崩壊し、中国やベトナムなど社会主義国では計画経済体制を放棄し、市場経済と競争を導入して、かつての社会主義国同士のバーター貿易ができなくなり、朝鮮の対外経済環境は相当厳しくなっている。

したがって、南北関係が改善し、米朝関係が改善したとしても、今のままの計画経済体制を改革しない限り、朝鮮経済の発展は限界があるといわざるを得ない。朝鮮が本格的に中国のような改革・開放政策を実施するのかどうかについて、筆者は25年間も追跡研究を重ねてきたが、未だに朝鮮は社会主義計画経済体制を放棄していない（李、2003、2008）のも事実である。

2. 朝鮮の経済発展の潜在力

朝鮮経済が発展して国民が豊かになるためには、外部環境として南北関係、米朝関係を含めた周辺国との関係正常化が不可欠な条件と言える。それと同時に、国内における経済体制の転換や改革も同様に必須条件だと思われる。そのモデルは中国やベトナムではなかろうか。

もう一つの経済発展の重要な条件は国内資源がまた必須条件になる。国内資源の面では、

朝鮮は有利な条件がそろっていると言える。まずは、労働力人口が多い。若手人口が多く、人口ボーナスを実現することは可能であろう。次には工業と農業基盤が整備されている。工業においてはかつて植民地時代に日本により建設された工業基盤とインフラが残っている。たとえば、朝鮮の最大の発電所である水豊ダムと発電所は日本統治時代に建設したもので、現在でも活用されている。

また、労働力が多いだけではなく質が高い。それは教育水準が高い（識字率 100%）からである。国連の人間開発指数（HDI）は世界で 75 番目（韓国は 18 番目、日本は 17 番目、中国は 90 番目）である。また、豊富な鉱物資源は朝鮮の外貨獲得の主要な源泉になる。

朝鮮経済の発展における外部経済環境も整っており、先進国韓国と日本との関係正常化が行われれば経済協力の潜在力は高い。また経済大国の中国や資源大国のロシアとも緊密な関係にあり、将来は大きな市場としても活用できる。周辺国の経済支援（日中韓中心）も視野に入っており、周辺国企業は対朝鮮投資の機会を狙っているものも少なくない。

3. 対外開放に向けた朝鮮の経済政策の変化

世界的な冷戦が崩壊し、経済グローバル化が進む中で、朝鮮はそれに積極的に対応しようという試みは何度もあった。1991 年 9 月に、冷戦崩壊のうねりのなかで、南北朝鮮が国連に同時加盟した後、朝鮮は日本や米国との国交正常化を積極的に推進してきた。それがもし順調に進んでいたら、現在のような朝鮮半島の危機は起こらなかったかも知れない。

一方、90 年代初頭に図們江（南北朝鮮では「豆満江」）国際開発計画が浮上し、北東アジア諸国と国連 UNDP によって進められるときに、朝鮮当局（金日成時代）も前向きに対応し、1991 年 12 月には早速「羅津・先鋒自由経済地帯」を設置し、そこへの外国企業の投資を奨励する法律整備を進めて来た。当時は日本からも民間レベルで専門家たちが朝鮮に出向いて法律整備の仕事に協力した経緯もある。しかし、その後、94 年から核開発疑惑をめぐる国際関係の緊張状態の中で、朝鮮の対外開放政策は順調に進められなかった。また、朝鮮経済は自然災害などにより深刻な食糧不足に陥ってしまったのである。

金日成主席が 94 年に亡くなり、金正日総書記が政権を引き継いでいたが、核開発は継続しながらも、国内経済政策は計画経済体制が維持できなくなり、自由市場を認めたり、2002 年には「経済管理改善措置」を発表したりしたが、それらの措置では経済開発が一向に進んでいなかった。そして 2011 年末に金正日氏が亡くなると、現在の金正恩時代が変わった。

金正恩時代になってからは開発政策を積極的に推進し、国内に 15 の経済開発区を指定するなど経済をもっと重視するようになった。しかし、核開発とミサイル開発は継続的に進め、2017 年末までに朝鮮半島では緊張が続いてきた。

ところが、昨年度になって金正恩氏の対外政策は急激に変化してきた。朝鮮側の論理で見ると、「我々はすでに核兵器の保有国になり、ミサイルで米国まで攻撃できるようになったので、核の抑止力を保持することにより、米国からの攻撃や侵略は抑止できるので、

これからは本格的に経済建設ができる」という。金正恩氏の政策転換により、周知のように南北首脳会談では、南北統一経済圏（開城経済特区、金剛山観光特区など）形成に向けての合意に達した。また、中朝関係も回復基調にのり、中国が推進する「一帯一路」開発戦略に組み入れる可能性も高くなった。

Ⅲ. 朝鮮半島経済圏構築は可能か？

1. 南北首脳会談と和解への模索

南北は朝鮮戦争休戦以来、冷戦構造の中で厳しい対立が続いてきたが、和解が模索され続けたことも紛れもない事実である。1970年代や80年代にもそのような動きがあったが、1997年に韓国大統領選挙で金大中氏が大統領に当選（1998-2003年任期）すると、彼は積極的な対北政策、所謂「太陽政策」を展開した。「太陽政策」とは、今まで「氷」みたいに凍ってしまった北に対し太陽の光を当て、その変化を促すというものであった。2000年6月13～15日、金大中氏は韓国大統領として初めて板門店を超え平壤を訪れ、金正日国防委員長と会談した。そこで「6.15南北共同宣言」が発表され、朝鮮半島に新しい暖気流が流れていたのである。南北二分して以来、両国の首脳会談は史上初であり、金大中大統領による対北宥和政策（太陽政策）の結実とも言える。金大中氏はこの功績により2000年に「ノーベル平和賞」を受賞した。この時期、朝鮮半島では和解ムードが漂っていた。

そのムードは韓国の次の大統領盧武鉉時代（2003-07年）まで続いていたが、保守党の李明博が大統領になってから、「非核・開放・3000」¹³⁾という政策を掲げ、それが北の自尊心を傷つけ全く受け入れられなくなり、南北関係はまたも冷却してしまった。そのような状態は朴槿恵大統領時代までも大きく変化することがなかった。

そして、2017年5月に、文氏が大統領に当選されると、対北政策の転換を図り、大統領としての朝鮮半島政策ビジョンを示したのである¹⁴⁾。

2. 文政権の朝鮮半島の未来に関する政策ビジョン

文大統領の朝鮮半島政策およびビジョンは下記の通りである。

- 政策ビジョン：①平和共存、②共同繁栄。
- 三大目標：①北朝鮮の核問題の解決と恒久的な平和定着、②持続可能な南北関係の発展、③韓半島の新経済共同体の実現。
- 四大戦略：①段階的・包括的アプローチ、②南北関係改善と核問題解決の並行推進、③制度化を通じた持続性の確保、④互惠的協力を通じた平和的統一基盤の構築。
- 五大原則：①韓国主導による韓半島問題の解決、②強固な安全保障による平和維持、③相互尊重に基づく南北関係の発展、④国民との意思疎通と合意の重視、⑤国際社会との協力による政策の推進。

文政権は、このような政策ビジョンをもとに、南北統一経済圏構築を目指している。文氏は2018年8月15日、光復節73周年祝辞を通じて、南北関係はもちろん北東アジアの安保体制などを包括する大きな枠組みの外交安保構想を明らかにした。南北関係発展を通じた朝鮮半島の非核化促進、「南北経済共同体」建設、「東アジア鉄道共同体」などの提案で、それには南北関係発展の中長期ビジョンが網羅されている。文大統領は2017年7月にベルリン訪問中に行ったスピーチの中で、「朝鮮半島平和構想」について説明した。そこでは「北の崩壊を望まない、吸収による統一を追求しない、人為的な方法による統一を追求しない、求めているのは平和だけだ」と表明した。文大統領は今後30年間、南北の経済協力効果は最小170兆ウォンとし、開城（ケソン）工業団地と金剛山（クムガンサン）観光再開、鉄道連結、一部地下資源開発を加えたものだと示した。

一方、南北統一に要する費用については、世界銀行などの試算によると、約2兆ドル～3兆ドル（日本円にして約204兆円～306兆円）、これは韓国GDPの約3倍にも相当し、韓国の経済力だけでは困難であることは明らかである。去る3月26日、韓国ソウルで開催された「ユーラシア韓半島経済協力フォーラム」で報告された韓国建設産業研究院ベン・ジェイク博士の「韓半島平和時代の北朝鮮インフラ開発の財政支援方案」での試算によると、北東アジア経済共同体構築の視点で、朝鮮の経済インフラ開発に必要な資金は約730億米ドル（約7兆3千億円）だという。北東アジア諸国と連結するインフラ施設は5つの面で推計され、①鉄道と道路連結インフラ構築事業で約400億ドル、②北東アジア国際協力都市の建設事業で約2.4億ドル、③朝鮮半島—ロシア間エネルギー協力事業（天然ガスパイプライン建設に約30億ドル、南北・ロシアの電力ネットワーク構築に約2億ドル、④港湾施設の近代化事業で約120億ドル、⑤発電および送電施設の拡充事業に約167億ドル、それぞれ必要とされる。

しかし、経済開発には費用は掛かるのだが、それによる経済効果も大きいことも考えられる。朝鮮半島で平和が実現された場合の「平和配当」という利益は計り知れないものがあるはずである。まず、南北朝鮮の軍事費および日本や米国の軍事費が削減される可能性は高い。その上に朝鮮が北東アジア経済圏に確実に組み込まれている場合には、北東アジア市場統合により計り知れない経済的な効果が予測される。したがって、経済学的に考えると「費用対効果」を客観的に分析する必要がある。

IV. 日中韓3カ国は朝鮮への開発援助で、如何に協調・協力をすべきか？

朝鮮半島の真の平和が訪れる際には、北東アジア地域の平和と繁栄に大きな転機が来るに違いない。朝鮮のインフラ開発需要および経済開発により、周辺の国には大きなチャンスになるだろう。平和配当による利益を最も享受する国は言うまでもなく南北当事国であり、関係国である日本や中国、そしてロシアや米国にも平和配当の利益が大きいといえよう。

したがって、朝鮮の開発に対する国際社会の援助、とりわけ本論では政府開発援助について取り上げるが、相当な援助資金が朝鮮に与えられることは間違いないだろうと予測する。朝鮮が本気で非核化を推進し、国際社会からの経済制裁が解除される際には、国際社会からの経済援助も視野に入るだろう。とりわけ、近隣の当事国韓国や北東アジア諸国の対朝鮮経済援助が実施されることになるだろう。ここでは主に韓国と中国、そして日本の対朝鮮援助の可能性と3ヶ国が如何に開発援助で相互協力できるかについて検討する。

1. 南北関係と韓国の経済支援

対朝鮮経済援助で最も大きな役割が期待されるのは言うまでもなく韓国になるに違いない。なぜかという、分断国家として長期的に民族統一を目指す南北政権であるが、韓国は先進国（世界でGDP12番目の経済大国）としても当然のことながら開発援助を行うことになる。

韓国政府は、1995年頃から対北支援をしてきた。最初は朝鮮の90年代の食糧難に対する人道支援が中心になっていたが、金大中政権時代（1998-2002年）になると、積極的な対北経済支援を推進してきた。政権が代わり、盧武鉉政権（2003-07年）になっても前政権の政策を継続し、2007年10月には盧武鉉大統領が平壤を訪れ南北首脳会談を行うとともに、経済支援を拡大してきた。韓国統一部の資料によると、1995年～2007年まで、食料借款約80億ドルを含めた経済支援は合計110億ドルに達しているという。

2017年5月に民主党の文在寅氏が大統領になり、かつての金大中、盧武鉉政権時代の政策に復帰、対北対話路線に転換し、経済支援と南北統一経済圏構想を打ち出した。しかし、当面は国連経済制裁が解除されておらず、韓国は本格的な対北支援ができない状況にあり、何れ制裁が解除される時には積極的な対北支援が再開されることが予想される。いつ、その国連経済制裁が解除されるかは、今のところ予測できないが、米朝首脳が3回も会談を行い問題解決に取り組んでいることで、希望を持ってもいいだろう。

2. 中朝関係と経済支援

新中国が成立後の長い間、中国は対朝鮮経済援助では旧ソ連に次ぐ援助大国であった。とりわけ、朝鮮戦争では志願兵100万人を含む大規模な援助をしており、停戦後も引き続き支援してきた。冷戦が崩壊し、1992年9月に中国が韓国との国交を樹立すると、平壤は中国に決定的な不信感を持つようになり、したがって、両国関係の悪化により中国からの経済支援も先細りになりつつあった。しかし、原油や食糧支援は続いており、朝鮮が国際社会で孤立している中で、中国はその命綱のような役割を果たしてきた。実は1980年代半ばに、中国の改革開放路線への転換で、両国のイデオロギー面にも亀裂が生じ、平壤は中国を「資本主義への道」を歩むと強く批判してきた。

一方中国でも、米国との対立構造の中で、朝鮮は「緩衝地帯」としての戦略的な価値が

あり、朝鮮をサポートしてきたが、90年代後半より中国外交にとって朝鮮は「お荷物」との認識が広まっている一方で、中国はソ連崩壊後の朝鮮の最大貿易相手となり、中国東北3省を中心に企業および個人は朝鮮との貿易や投資を行ってきた。中国は高度経済成長で支援する余力が大きくなり、一定の支援をしながら朝鮮経済の自立と対外交流の拡大を促進することにより、その対外政策の柔軟化を図ってきた。朝鮮の対中国貿易は持続的に拡大し、周辺の韓国や日本の対朝鮮貿易が先細るなか、対中国依存度が高まり、ピーク時は対外貿易全体の約9割を中国が占めていた。

朝鮮が核実験とミサイル実験を繰り返し実行することで、中国は国連経済制裁（本格的な制裁は2017年8月より実行）に加わらざるを得なくなり、それにより対朝鮮貿易は急激に縮小し、朝鮮に投資した中国企業も中国政府の圧力で撤収を余儀なくしたことを筆者の羅先市の訪問で目撃、確認した。

中朝関係は、金正恩氏が権力を握る2011年末から約7年間首脳外交の空白になっていたが、昨年の南北首脳会談、米朝首脳会談の実行を前後に、金正恩氏の今年1月まで年間連続4回の訪中し、習近平主席との会談を通じて、両国関係を正常な関係、または、「伝統的な友好関係」に戻すことができたのである。中国の習近平国家主席も今年6月19-20日中国首脳としては8年ぶりに平壤を公式訪問、両国関係の緊密化を図っている。

今後、中国は自国の戦略的な利益（米国との戦略的対立において朝鮮が「緩衝地帯」になる）から考えると、朝鮮が非核化を実行し、経済政策を転換した際には、大きな援助ドーナになるだけでなく、「一帯一路」の開発計画に朝鮮を組み込む可能性も大きいと思われる。

3. 日朝関係と経済支援問題

日本は、戦後の1965年に韓国とは国交正常化を実現し、対韓国経済支援（無償援助3億ドル、有償援助2億ドル、民間借款3億ドル、合計8億ドル）を行ったが、朝鮮とは現在に至るまで植民地支配した歴史に未だに決着を付けられず、国交正常化が実現されずにいる。

1991年の南北朝鮮の同時国連加盟をきっかけに、日朝国交正常化への動きも一時期活発化した。92年に「金丸訪朝団」が平壤を訪問し、その後国交正常化交渉を続けてきたが成果は得られなかった。また、2002年9月に小泉純一郎首相が日本首脳として初めて平壤を訪問し、「平壤宣言」を発表した。そこでは拉致問題の解決、日本の対朝鮮経済支援を約束し、国交正常化交渉を開始したが、その後の北の核開発疑惑が取りざたされるとともに、日本国内での拉致問題への批判が白熱化することにより交渉は中断した。

現在の安倍晋三政権は、対米一辺倒政策および対朝鮮圧力一辺倒政策を実施し、対話するチャンスもチャンネルも不十分であり、日朝関係は敵対関係が続いている。最近南北と米朝の首脳会談の流れの影響を受け、安倍首相も日朝首脳会談に前向きな姿勢をとり、

その時期を模索しているようである。

「日本は、今後日朝国交正常化とともに、対朝鮮戦後補償の代わりに経済支援を約6000億～1兆円規模で行うことになるだろう」と、野中廣務・元小渕内閣の官房長官・自民党国会議員は某研究会で語っていた¹⁵⁾。その根拠は、1965年に日韓国交正常化の時に日本が韓国側に提供した経済支援が有償・無償合わせて8億ドルであったことを、現在の物価や為替水準で推計されたものと説明していた¹⁶⁾。

4. 日中韓3カ国の対朝鮮経済援助における協力の可能性

朝鮮が本格的に改革・開放政策に舵を切る場合、国際社会はその経済的開発に向けた経済的支援をするだろうが、その主体は朝鮮の近隣で同胞の国である韓国、そして近隣の経済大国の中国および日本である。なぜかという、この3カ国は朝鮮との経済的な関係が最も密接なステーク・ホルダーであるから。もちろん3カ国はそれぞれの国益から経済支援に取り組むことになるだろう。しかし、お互い協力することにより、大きな相乗効果を期待できるだろう。

韓国は南北統一に取り組む一環として鉄道、道路などの連結およびその他インフラ整備において中心的な役割を担うことになる。そして今まで実際に鉄道連結や開城公団の建設などで経験の積み上げがある。中国は長い間友好国として朝鮮に対して経済支援や貿易の面で多くの実績と経験がある。日本は朝鮮との国交正常化に際して大規模な経済支援を行うことが見込まれているが、朝鮮との経済協力の実績や経験に乏しい。3カ国がそれぞれ持っている資源や知見を共有し、インフラ開発などの事業で協力した場合、その相乗効果は大きいはずである。

例えば、前述で紹介したように、2002年に7月に筆者は「北東アジア開発銀行」設立と日本の対アジア協力政策のあり方について研究し、小泉純一郎首相に政策提言を行ったことがある。その内容は国際的開発金融の協力メカニズムを構築することにより、日中韓3カ国はじめ米国やEUなどからの国際資本を多国間開発銀行という枠組みを作ることで、政府が保証する呼び水の資金をもとに、国際資本市場からの民間資本を引き出して、インフラ開発を行う有効な手段として活用するというものであった。

実は、日中韓3カ国は1999年よりASEAN+3首脳会談をきっかけに3カ国協力メカニズムを構築し、2008年からは3カ国持ち回りで首脳会談や閣僚級会談を毎年行ってきた。そして、2011年には日中韓3カ国協力事務局を初めての国際機構として立ち上げ、ソウルに本部を置き、3カ国の協力に関する事務的機能を担っている。

同機構は「3者間の潜在的な協力案件を探求、提示、採択できるよう関連する協議の枠組」としての役割を担っている¹⁷⁾。現段階では朝鮮の経済開発に向けた現実的な課題は検討されていないが、朝鮮半島の情勢が平和に向けて変化した際には、そのような議題が取り上げられる可能性が急浮上するだろう。

むすびにかえて

今年に入って、南北首脳会談と米朝首脳会談が今までの朝鮮半島における対立の終焉と平和構築への流れを作り出しつつある。平和構築に伴って、朝鮮の経済開発及び国際経済社会への復帰が喫緊の課題となっている。

日本と韓国は戦後いずれも開発援助を受けながら先進国入りを果たし、中国も先進国とわりわけ日本からの ODA 援助を受けながら経済大国になった経験があり、3 か国の開発援助政策は共通するものが多く、それぞれの積み上げた経験も豊富で、それらの経験の補完関係を構築することができるだろう。3 カ国の対外援助の共通点（特徴）として、①内政不干渉を重視すること、②援助・貿易・投資の「三位一体」を基本特徴とすること、③自助努力と被援助国の自立を重視することなどが取り上げられる。このような開発援助政策の下に、朝鮮経済開発への支援における相互協力と調整により、いち早く朝鮮経済の復興と発展、そして北東アジア経済圏構築の新しい時代を迎えることになる。

朝鮮が真の非核化を実現し、開放経済に向かう場合には、日中韓 3 カ国、さらに国際社会の支援と投資により、近い未来に経済成長が加速し、南北統一も実現されることに繋がるのであろう。

注

- 1) 2001 年 4 月より 1 年半をかけて、東京財団の研究員として『北東アジア開発銀行（NEADB）の創設と日本の対外協力政策—21 世紀型のモデルを目指して—』を題とする研究プロジェクトのコーディネーターを担当し、専門家研究チームによる政策提言を作成し、当時の小泉純一郎首相宛に政策提言、2002 年 7 月 29 日内閣府にて福田康夫官房長官に面会ブリーフィングを行った。
- 2) 筆者が関わっている渥美国際交流財団と韓国の未来人力研究院が共同主催第 16 回「日韓アジア未来フォーラム」（共通論題：「日中韓の国際開発協力—新たなアジア型モデルの模索」）にて報告。
- 3) 中国は先進国クラブと言われる OECD 加盟国ではないため、ODA (Official Development Assistance) という用語は使用しない。
- 4) 『産経新聞』2018 年 1 月 2 日。
- 5) 注 4) に同じ、2018 年 1 月 10 日。
- 6) 筆者の専門は北東アジア地域開発であり、そのために 1994 年より朝鮮の経済開発問題の研究に携わり、5 回ほど朝鮮を訪問・視察、そして朝鮮側の研究者や幹部たちと交流したことがある。
- 7) 「主体思想」とは、金日成主席がかつて唱導した思想で、金正日氏が体系化したもの。その内容は、思想や政治的に自主、経済的に自立、国防の自衛となっている。
- 8) かつて鄧小平氏が 1978 年に中国で改革・開放政策を打ち出しているときも、周囲の長老保

守派たちの猛反対に遭った経緯があり、その経験からも類推できる。

- 9) 韓国政府の南北首脳会談公式サイト (<https://www.koreasummit.kr/>), 2018年4月27日閲覧。
- 10) 『朝日新聞』社説 2018. 9. 20。
- 11) BBC『NEWS』Japan2019. 3. 1 <https://www.bbc.com/japanese>。
- 12) 韓国統計庁 HP サイト「北韓統計」: [http://kosis.kr/statisticsList/\(2019. 3. 31\)](http://kosis.kr/statisticsList/(2019. 3. 31))
- 13) 李明博大統領の「非核・開放・3000」政策とは、「北側が核を放棄し、開放政策を取れば、韓国は朝鮮の国民所得(一人当たり)を3000米ドルまでに引き上げてくれる」というもの。
- 14) 韓国統一部 HP サイト資料:『文在寅の韓半島政策』2018年1月
<http://unibook.unikorea.go.kr/libeka/elec/20180100000000057.PDF>
- 15) 『環日本海総合研究機構 (INAS) レポート』2002年第4号。
- 16) 韓国中央日報日本語版(2018. 7. 19)『「対北朝鮮支援は1兆円ほどか」…計算機たたく日本』。
- 17) 日中韓三国協力事務局 (Trilateral Cooperation Secretariat, TCS) Website.
http://jp.tcs-asia.org/?g_country=jp

参考文献

- 東京財団 (2003) 『「北東アジア開発銀行 (NEADB)」の創設と日本の対外協力政策』東京財団モノグラフ・シリーズ Vol. 7。(共著)
- 古川 勝久 (2017年) 『北朝鮮-核の資金源「国連捜査」秘録』、新潮社。
- 李 鋼哲 (2003) 『岐路に立つ北朝鮮、変革への道筋と国際協力』笹川平和財団、第5章、88-108頁。(共著)
- (2008) 「移行経済期における朝鮮の改革・開放—中朝関係の視点から—」『北陸大学紀要』第31号、79-98頁。

Title: Establishment of Peace in Korean peninsula and cooperation of Japan-China-South Korea for aid to North Korea's Economic Development

LI, Kotetsu

Abstract

Last year (2018), in the Korean Peninsula had have a dramatic change. The North and South Korea summit was realized on April 27, and the first summit of the United States and North Korea was performed sequentially on June 13. The Korean Peninsula will into peace making mood.

There will rise a big issue what is how to promote the North Korea's economic development and how to construction a Korean Peninsula economic zone and how to construction a North East Asia economic zone. When the North Korea to take a reform and opening policy like China or

Vietnam, it is brought up how a development fund and the technique necessary for economic development are raised as an important problem.

In this paper, I analyze it about possibility of ODA from developed country Japan and South Korea and the development assistance from China having a good relation with North Korea consider about a future problem on this occasion after a problem brought up whether deep Japan, China and South Korea three countries of the relationship cooperate how in North Korea and a neighborhood and share experience of the development assistance when you do development assistance of each country each, and you raise a development effect about the possibility.

Keywords : Korean peninsula, Peace building, Development assistance, Japan-China-Korea Cooperation

後藤朝太郎と西川一草亭の茶道認識 —お茶に関する中日対照の目線から—

周 堂波（武漢理工大学）

要旨

本論では、本誌創刊号の拙論の考察を補うため、後藤朝太郎自身の言説によりつつ、庭園と密接な関わりのあるお茶の世界から、近代中国のお茶と日本のお茶との異同を考察することとする。それを考察する際に見逃せないのが、昭和初年発刊の『瓶史』に掲載された「お茶の湯の座談会」における後藤の発言である。また、『瓶史』と後藤について考察する前に、『瓶史』と最も深い関係を持つ西川一草亭という人物を離れては話にならない。

キーワード： 後藤朝太郎、西川一草亭、瓶史、お茶

はじめに

西川及び『瓶史』に関する研究はいくつか散見される¹⁾が、主に西川と藤井厚二、武田五一、堀口捨巳ら建築家との繋がり、西川と西堀一三との茶道認識の異同、西川とその門下生との関係（例えば九条武子）などが見られる。注目されるのは、紅野敏郎（2009）「逍遙・文学誌(214)随筆雑誌『文体』（下）万太郎・秋庭俊彦・瀧井孝作・西川一草亭・松根東洋城・蛇笏ら」と和田積希（2014）新出の「野分文庫について：浅井忠の図案とその作品化をめぐる」において、それぞれ文学と工芸品の視点から西川およびその周辺との関係を考察したものである。しかしながら、これらの考察もまだ不十分だと言える。その中で宮地功と松本静夫両氏が出した（2004）「『瓶史』に記述された座談会と出席者についての考察」、同（2006）「『瓶史』に記載された座談会についての考察」という二つの論文は本論と関係があるものの、より踏み込んだ考察の必要がある。稿者の調査では、熊倉功夫ほか編著した『花道去風流七世 西川一草亭 風流一生涯』²⁾が、その論説から資料に至るまで最も詳しく纏められていると考える。熊倉の「西川一草亭論」においては、西川の家元である西川一草亭が残した日記『花うり記』、夏目漱石との付き合い、去風洞社報から『瓶史』へ至る道、茶の湯と風流などについて綿密に論じられている。日本いけばな文化研究所主宰の工藤昌伸による「西川一草亭の花」においては、西川の生花ならびにその社会背景などを論じた。奈良教育大学の赤井達郎は『『小美術』の周辺』において、西川の実弟である津田青楓、元京都高等工芸学校教授の浅井忠らとの葛藤、『小美術』の誕生から廃刊まで

の経緯、『小美術』と西川の文化史上における歴史的地位などについて論じている。文化環境計画研究所代表の中村利則は「西川一草亭の作事」において、流祖去風ゆかりの一時庵再興、1930年代の社会的背景にも多少触れており、西川の庭園観に触れた部分はあるものの、そこまで深いものとは言えない。ここには西川の生花図巻、書画作品、建築・庭園など多分野に渡る図版、日記の『花うり日記』、著書の『喫茶余筆』と『生花の話』、一草亭年譜など豊富な資料が載せられている。

しかし上記のように、雑誌『瓶史』と後藤との関係、また後藤と西川との庭園観の異同に関してはまだ考察する余裕が残る。したがって、まず西川一草亭と雑誌『瓶史』について見ていく。

I. 去風流と西川一草亭

生花の去風流は、今から300年余り前、江戸時代の元禄14年（1701年）、京都に誕生した一代目の去風を流祖とする。西川家は、元々米穀商を営んでいたが、流祖は風流に憧れ、祖業を弟に譲って商売を諦め、自らは尺八を好み、号を一時庵と名付けた。明和版の『京羽二重』に「去風 京都堺町御池」として尺八家の中に登録されている。³⁾ 一時庵が尺八を伝授する席の飾りを生かし、生花の研鑽に励んだのが、去風流の濫觴であった。当時は、派手で複雑な技を考究した生花がブームであったが、彼はそれとは全く逆に、質素な花形の中に大自然の美を再現しようとした。それが却って技巧に飽きた世の人々に気に入られ、去風流という一つの生花の流派となり、やがてその生花の流儀は、二代目去風に継承されていく。二代目去風以降、去風の名が一変し、一の字を頭文字として、一峰、一風、一道、一葉、一草などとなっていった。西川一草亭は1878年（明治11年）、京都上京区に生まれ、第7代家元を引き継いだ。「私の一草はもと父が一叢と付けて呉れたのを、叢の字が劃が多くて嫌いだったから、どこかで群山一草亭という山陽の額を見て、勝手に一草亭と変えてしまったのである。」⁴⁾ という由縁で原名の一叢が一草亭に変わったものである。2歳年下の弟・津田青楓⁵⁾と4歳年下の妹・西川うたとの五人家族である。1895年（明治28年）、17歳になってから、漢学者山本章夫に漢学と本草学を学ぶ。20歳前後には父から茶道を習い、隣家の土田友湖や去風流の門人達からも茶を学ぶ。

1911年、津田の紹介で夏目漱石と初めて面識を持ち⁶⁾、1916年に漱石が亡くなるまで友情を育んだ。花道、漢学・漢詩、茶道に限らず、美術、工芸、庭園、茶室など様々な分野にわたり、その活躍が見られる。『日本の生花』、『風流百話』、『茶心花語：茶の話・華の話』など風流満載の著書を残している。また1930年（昭和5年）1月から亡くなるまで、雑誌『瓶史』を営んでいた。

II. 雑誌『瓶史』

『瓶史』の前身は『去風洞社報』である。大正6年から昭和4年まで、年一回発行のこ

の社報について、上述の熊倉は、社報の構成、門弟数の推移、会費収入などから、「大正年間に去風流はほぼ完成していた」との結論を出している。更に大正13年、大阪稽古所に加えて東京稽古所の増設、大正15年には花堂一時庵の再興と規模が大きくなっていき、西川自身の生花に対する認識も深まるなど、主要な要素が練り合わさり、「同門誌に過ぎぬ『去風洞社報』では不十分である。一挙にそのスタイルを改め、一大飛躍をとげる日がやってくる。それが『瓶史』の誕生であった。(中略) 社報刊行の過程ではほぼ完成をみた一草亭の思想を、社会的に実践するためのメディアの創出という、一草亭の期待が働いていたのである」と、西川の思想変化なども踏まえながら『瓶史』への変遷メカニズムを考察している。なぜ『瓶史』⁷⁾ という名前に変えたのであろうか。それは中国の袁宏道が著した挿花書『瓶史』に鑑み、細川吾園が明治10年に記した『瓶花挿法』の発刊が、明治後年になってくると多大な影響を与えたようである。細川とその書『瓶花挿法』について、「とくに袁宏道の『瓶史』に傾倒をしながらも、アメリカでみたイモータル・フラワーに大きな興味を示し、日本の枯れものの花材に言及をし、生花は生活美術だとするなど、当時としてはかなり進歩的な意見の人物であり、後年、一草亭が『瓶花挿法』に興味をもち影響を受けたのは、この開明的な進歩性にもあるのかもしれない」と上述の工藤は指摘している。それも「瓶史の名は支那明代の文人袁石公の『瓶史』から取ったのである。袁氏は瓶史の中で、『自分の如きは真に花を愛する者とは言えない』若し真に花を愛する者なら豈人間塵土の吏たらんやと説いている。此一句で袁氏が如何に花を愛していたか、自然の美を如何に深く知っていたかを知る事ができると思う。去風洞に集まる人達がどの程度に自然の美を解しているか知らないが、単に挿方の巧拙を論ずるだけでなく、豈人間塵土の官たらんやの意気をもつ程度に其美を知っていたかと思う。」⁸⁾ との編集後記からも分かる。雑誌『瓶史』についてより理解を深めるため、少し長編であるが、次に昭和6年4月1日発刊の『瓶史』陽春号における巻頭語を引用してその時代的な使命について考えてみたい。

我々は一面私達の父や祖先の知らなかった生活苦を嘗めているかもしれないが、その一面に祖先の知らない便宜な愉快な生活を実現しつつあることも事実である。(中略) 私達は一方にスチームの通った暖かい洋室に寝起きすることの愉快や、軽快な交通機関を利用して東西に馳駆する快適を思うと同時に、一方に青畳の上に座って、開け放った障子の外に美しい庭を眺めたり、丸太を組合して土壁を塗った原始的な建物の中で、心静かに窯の煮音を聞いて、一枝の梅や一二輪の椿の花の生かっているのを見る気持ちを容易に忘れ得ない。(中略) しかもこの二つの異なった生活は互いに両立を許さないで、新しい文化は祖先の生活を踏みにじって、祖先の生活に喜びを感じずる者に憎悪の感を与え、新しい文化に生きる者は伝統の生活を持て余して、片足に靴を、片足に下駄を履いたような不愉快な気持ちを感じている。(中略) 我々はこの祖先の遺した生活遺産を新しい文化の中にどう生かして、特殊な国の特殊な美をどの程度に

味わい楽しめばよいのか、それを研究するために同人と共にこの風流雑誌『瓶史』の刊行を企てた。『瓶史』は単に我々同人が插花を研究する機関雑誌であるばかりでなく、同じ根底から生まれた庭園、茶の湯、日本建築のすべてを通じて、それを現代に生かす方法を講ずる事に一つの使命を持ちたいと思う。

以上の巻頭語からは、昭和初年の日本における新しい生活と伝統的生活との矛盾が窺える。どのようにその二種類の生活を両立させていくのかを、西川が『瓶史』を通じて模索していく姿勢も垣間見える。また西川の考えでは、生花だけに止まらず、日本の庭園、茶の湯、建築すべてには根底に通じるものがあるという。そもそも、日本の庭園を考察する場合、茶室や路地はその要素において、非常に重要な位置を占めている。そのため、「茶の湯の座談会」では後藤と西川のお茶に関する異同点が垣間見えると言える。

Ⅲ. 茶の湯座談会と後藤朝太郎

『瓶史』には、昭和7年新年号⁹⁾に載せられた「掃花寮茶話」を皮切りに、昭和13年春号の「『宗湛日記』を読む」まで、全部で24回（表11）にわたる座談会形式の集まりがあった。16回目までは集まりの日時と場所が記録されているが、17回目以降は、23回目と24回目の場所の記載があるのみで、その他の日時・場所は不明である。下記の表が示すとおり、昭和7年に2回、昭和8年に3回、昭和9年に3回、昭和10年に7回、昭和11年に4回、昭和12年に4回、昭和13年に1回と、計24回の開催となる。季刊誌であるため、掲載日時はほとんどが開催日時に比べて遅いものとなっている。開催場所を見ると、京都が10回、東京が8回、不明が6回となる。京都では、去風流の掃花寮で5回、南禅寺（あるいは無隣庵）近くの料亭・瓢亭で3回、西王寺、山端平八でそれぞれ1回行われ、東京では、赤坂山王星ヶ岡茶寮で5回、赤坂あかね、芝公園浪花屋、築地藍亭で各1回行われている。座談会のテーマは、「『仙伝抄』を読む会」が2回、「『槐記』を読む会」が4回、「『宗湛日記』を読む会」が7回と多くを占めている。他に、「発見された（堀口捨己に）信長の茶会記を読む会」が1回あり、残りはすべて花道、茶道、庭を話題の中心とし、それに繋がる書、絵画、石灯籠などが主題となっている。ちなみに『仙伝抄』、『槐記』は花道、『宗湛日記』は茶道に関する古書である。後藤は2回目の「茶の湯座談会」に招かれている。誰に誘われたかは不明であるが、津田の可能性が高い。その経緯と、星ヶ丘茶寮を舞台としての文化交流については別論に譲る。次に、後藤が唯一参加したこの「茶の湯の座談会」について見てみよう。

雑誌『瓶史』の合計36号（1930～1939）より稿者が作成			
回数	雑誌号数	座談会	参加者
1	昭和七年新年	掃花寮茶話	狩野直喜、西田幾太郎、和辻哲郎、津田青楓、西川一草亭
2	昭和七年夏	茶の湯座談会	板垣鷹穂、長谷川如是閑、西村一草亭、堀口捨己、外狩素心庵、茅野蕭々、谷川徹三、津田青楓、野上豊一郎、後藤朝太郎
3	昭和八年春	花道の古書『仙伝抄』を読む会	井川定慶、池田源太、西堀一三、徳重浅吉、山根徳太郎、牧野信之助、藤直幹、柴田實、西川一草亭
4	昭和八年夏	仙伝抄を読む会（第二回）	井川定慶、藤直幹、西堀一三、柴田實、徳重浅吉、肥後和男、山根徳太郎、西川一草亭
5	昭和八年夏	掃花寮座談会	志賀直哉、和辻哲郎、津田青楓、西川一草亭
6	昭和九年夏	槐記を読む会	藤井乙男、新村出、栗野秀穂、山根徳太郎、西川一草亭
7	昭和九年夏	瓢亭夜話	新村出、濱田青陵（耕田）、西田直二郎、高原慶三、武居巧、西川一草亭
8	昭和九年秋	槐記を読む会	新村出、濱田青陵（耕田）、栗野秀穂、西川一草亭
9	昭和十年新年	庭を語る座談会	室生犀星、金原省吾、谷川徹三、堀口捨己、板垣鷹穂、西村一草亭、吉川元光
10	昭和十年新年	槐記座談会	濱田青陵、武居巧、貴志彌右衛門、山根徳太郎、栗野秀穂、西川一草亭、高原慶三、武居巧、西川一草亭
11	昭和十年春	春宵茶を語る座談会（茶の湯の伝統と現代）	幸田露伴、有島生馬、板垣鷹穂、堀口捨己、中村武羅夫、吉川元光、富永半次郎、吉田鐵郎、西川一草亭
12	昭和十年春	槐記座談会	栗野秀穂、猪熊信男、江崎信男、武居巧、瀧住職、西川一草亭
13	昭和十年夏	「宗湛日記」を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、堀口捨己、西川一草亭
14	昭和十年夏	石燈籠を語る座談会	天沼俊一、江崎政忠、川勝政太郎、武居巧、西川一草亭
15	昭和十年秋	発見された信長の茶会記を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、西川一草亭
16	昭和十一年新年	「宗湛日記」を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭
17	昭和十一年夏	風土と文化	和辻哲郎、安倍能成、谷川徹三、茅野蕭々、茅野雅子、西川一草亭
18	昭和十一年夏	宗湛の研究を読む（宗湛日記）	正木直彦、秋山光夫、相見香雨、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭
19	昭和十一年秋	宗湛日記を読む座談会	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭
20	昭和十二年新年	書と書と庭園を語る座談会	志賀直哉、里見淳、室生犀星、谷川徹三、西川一草亭
21	昭和十二年夏	造園雑話	茅野蕭々、茅野雅子、龍居松之助、津田清楓、西川一草亭
22	昭和十二年夏	「宗湛日記」を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭
23	昭和十二年秋	「宗湛日記」を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭
24	昭和十三年新年	「宗湛日記」を読む	正木直彦、相見香雨、秋山光夫、肥後和男、堀口捨己、西川一草亭

茶の湯座談会

昭和七年四月二十四日 赤坂山王星ヶ岡茶寮に於て

出席者（イロハ順）

板垣鷹穂 ¹⁰⁾	長谷川如是閑 ¹¹⁾	西川一草亭	堀口捨己 ¹²⁾	外狩素心庵 ¹³⁾
茅野蕭々 ¹⁴⁾	谷川徹三 ¹⁵⁾	津田青楓	野上豊一郎 ¹⁶⁾	後藤朝太郎

座談会の内容としては、新しい時代の到来に際し、どのようにお茶を改革していくのかをめぐり話し合っていたのである。具体的に言えば、お茶の大衆化はできるのかどうか、伝統のお茶の形を維持していくのはいいことなのかどうか、茶器を現代工芸品に変えてよろしいかなど、お茶とその周辺について様々な交流が行われた。発話の頻度¹⁷⁾ から見れば、西川が主役という身分であったことは明白であろう。座談会の参加者からの質問や

討論に一々回答している。その中で注目されるのは、座談会の途中、外狩素心庵が西川の茶道改革ならびに業績について次のように肯定している点である。

活動写真は誰でも直ぐに飛びつける。又必ず時代の或る一般意志に先駆した処があって、理屈なしに誰にもわかって面白い、然しお茶はそうはゆかないと思うが——然し西川さんのやられる様な具合に巧みにこれを今の時代、今のインテリに喰いつきのいいようにこれを消化してやってゆけばいいと思います。最もここで問題は、いや余り強く威張らないのは、今のお茶人、宗匠といった人々が本当にお茶を知っていないことです、それこそ怪しからぬほどお茶を無茶なものにさせて行っています、茶道革命！これが寧ろ先決条件かもしれません。

西川の茶道論がどのようなものであるかはここでは触れないが、まず彼と後藤との会話から見てみよう。座談会が始まり、開口一番、二人には次のような会話が見られる。

西川：そこで、今日の茶会は皆さん面白いと思われましたか？

後藤：そうですね。ああいう部屋は非常に懐かしい。私などは目分でルンペンの積りでいますからお茶とか禅が一番好きです。

西川：そうですね。歴史的にいますと、「和敬静寂」と説いています。……

後藤：つまり渋くする、さびさせる——お茶は渋みをつけるというのから、寂しくもなり落ち着きを持たせるというのかな。

会話内容から見れば、座談会前にメンバーたちがどこかの茶室に集まり、西川からお茶に招待されたことが見て取れる。そのお茶の雰囲気には伝統的要素である「和敬静寂」、「さび」、「渋み」などが揃っているとあるが、ここからも後藤が日本のお茶の「わび」、「さび」をよく理解していたことが分かる。この点からすると、前述の中国庭園に関する夥しい言説において、一切「さび」に触れていなかった点は対照的であると言える。ところで、会話の中に「禅」という概念が出てくる。後藤から見た中国の「茶禅」とはどのようなイメージだったのであろうか。次の文を見てみよう。

支那で書道が別段職業的になっているところのないのと同じように茶も禅も職業化していない。老いも若きも、貧も富もすべてがその平凡な日常生活のうちへ茶禅を取り入れてしかも平気でやっているように見えるのである。禅にしても特にそれを研究して佛書に精しいとか哲理を典籍によって闡明するとか色々の事をいって専門ぶる事はしない。また世間でもそれにとにかく言う事をしない。¹⁸⁾

この文から見れば、中国の茶禅が職業としてではなく、一般庶民が日常生活において味わ

うことのできるその呑気さ、のんびり悠々たる精神状態が強調されており、経を読んだり茶禪の専門書などを専攻したりする日本の茶禪とは明らかに異なっていることが分かる。「茶禪」にしても、「さび」にしても、強いては「幽玄」にしても、後藤はそれらをめぐる中国庭園の事情を発信することにより、日本の庭園界あるいは他の文化界の人々に、一つの鏡のように、当時の中国庭園およびそれに関連するものをはっきりと映し出してあげていたのである。中国庭園の「さび」と「幽玄」については別論で考察する。引き続き、座談会の会話を見てみよう。

後藤：支那では、プロというか職工というか四時半から五時になると茶館に行くんですな。皆蓋のある奴で飲むんです。金のある者は自分で茶をポケットに入れて来てそれを飲んでる。その時、いつも決まって床間の所に座っている奴がいるんですね。聞いてみると釜たきの組長というもので、それが仕事の順序を立てるんだそうです。この支那の茶館などは別に文化とか芸術という名は使わないが皆非常にいい気持ちでやっているな。左様、人数は百人か八十人もいるかしら……。

長谷川：ハハ……随分いますな。何かお菓子でもあるんですか。

後藤：いや、何もない。

西川：それで、うまいですか？

後藤：うまいんですな。

西川：ただ、うまいだけでなく、気分がいいんですか。

後藤：そう、うまいと共に気持ちがいいですね。

西川：そういう人達は、平生の食物はかなり低いものでしょうね

後藤：それは低いものです。朝の七時か八時になると一杯になりますよ。その茶を飲む気持は、やはり我々が茶を飲む時と同じなんだが……。兎に角「茶会に行くある」嬉しいんだね。

西川：その部屋の気分はどうですか？

後藤：左様、額には「群賢」と書いてありますよ。

野上：「群賢」とは、つまりプロレタリアだろうね。

後藤：プロレタリアだよ、ああいうのがあったと助かりますな。ハハ……（笑声）

長谷川：然し、上海なんかは女がいるじゃないか？……

後藤：ハハ……

上文の会話から見ると、中国において、お茶を飲む人の身分（民衆）、飲む時間（四時半から）、人数（八十か百）、お茶の茶具（蓋がある）、お茶の入れ方（ポケットに入れるものもある）、床の間、茶師の仕事（釜炊きの組長）、お茶付きのお菓子と料理、お茶を飲む雰囲気

気、茶室の飾りと周囲への配慮など日本とまったく違っていることが分かる。特にお茶の魂と言えるお茶の精神性、お茶に含まれる文化や芸術などは一見するとなさそうである。後藤が中国のどの辺りの茶館について述べたのかは不明であるが、彼が見た中国のお茶は全くその通りのものである。ただし、中国の茶館も地域によって著しい差異があり、例えば、茶館で劇を演じたり、噺家が話したり、麻雀、賭け事などで遊んだりする中国文化の代表的な場所である点については看過されている。とはいえ、お茶にはいくら中国文化があっても、それはやはり日本とは全く違うものであるというところが後藤と西川の会話から窺える。

もう一つは、野上豊一郎の「群賢」に対し、後藤が「ああいうのがあると助かりますな」と答えている点である。ここも後藤の中国庭園に関する独特な審美がある。確かに後藤の言うとおりの「群賢」のような文字あるいは文学的手段は、庭園だけに止まらず、建築などの名称にも影響してくるのが中国であり、このような名称や対聯などは、見た者や観光客の知的レベルにより、それぞれの脳裏で自分なりの想像上のものが作り上げられるのである。この点については、18 世紀のチェンバース¹⁹⁾も同様の観点を持っている。こうした文字上の理解は後藤の得意な分野であり、他の日本人とは異なる視点であると言えよう。

おわりに

上文の考察により、後藤から見た中国茶と西川から見た日本茶とでは全く異なっていると窺えられる。また、西川は後藤の中国趣味とは一線を画している。もう一つは中国のお茶と庭園との関係は、日本のそれほど一体性がないという点で、これも無視できない。それは雑誌『瓶史』における総計 24 回にもわたる座談会において、後藤がたった一度しか招かれなかった点からも明らかである。上文でも触れたが、西川は生花の去風流家元というだけでなく、庭園にも長じていると公認されている。後藤と西川の庭園観にはどのような違いがあったのかについての論証は、別論に譲る。

注

- 1) 籠谷真智子（1985）「九条武子文芸の研究-1-上村松園・西川一草亭宛の手紙より」『仏教文化研究所研究紀要（15）』、pp. 27-58；谷晃（2002）「茶書逍遙(8) 西川一草亭『風流生活』と西堀一三『日本茶道史』」『茶道雑誌 66(9)』、pp. 68-74；戸田穰（2003）「堀口捨己の戦前期における理論と活動(その2)：堀口捨己の建築外的背景・雑誌『瓶史』を中心に(建築歴史・意匠)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II（73）』 pp. 465-468；宮地功・松本静夫（2003）「藤井厚二研究：藤井家および藤井厚二を巡る人々」『福山大学工学部紀要 27』、pp. 105-110；宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』にみられる武田五藤井厚二、堀口捨己と西川一草亭 その1」『日本建築学会中国支部研究報告集 27』、pp. 925-928；松本静夫・宮地功（2004）「『瓶史』にみられる武田五一、藤井厚二、堀口捨己と西川一草亭 その2」『日

- 本建築学会中国支部研究報告集 27』、pp. 929-932；宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』に記述された座談会と出席者についての考察」『学術講演梗概集・F-2, 建築歴史・意匠』、pp. 427-428；片柳草生・籠谷眞智子（2006）風流道場—花人、西川一草亭の生涯（特別企画 京都 千年都市の美と形）『季刊銀花（145）』、pp. 90-107；宮地功・松本静夫（2006）「『瓶史』に記述された座談会についての考察」『学術講演梗概集・F-2, 建築歴史・意匠』、pp. 561-562；宮地功・松本静夫（2007）「藤井厚二研究：藤井厚二の経歴と人脈」『福山大学工学部紀要 31』、pp. 147-152；紅野敏郎（2009）「逍遙・文学誌(214)随筆雑誌『文体』（下）万太郎・秋庭俊彦・瀧井孝作・西川一草亭・松根東洋城・蛇笏ら」『國文學：解釈と教材の研究 54(5)』、pp. 142-147；井上治（2009）「近代日本の花道思想における『宗教』と『芸術』——西川一草亭と山根翠堂」『ノートル・クリティーク(2)』、pp. 20-35；井上治（2009）「花道の近代(3) 西川一草亭の花と風流」『京の発言(12)』、pp. 69-71；和田積希（2014）新出の「野分文庫」について：浅井忠の図案とその作品化をめぐる『Museum (650)』、pp. 7-43；中村利則（2016）「風流道場主・西川一草亭（特集 近代和風住宅のプロデューサーたち）」『家具道具室内史：家具道具室内史学会誌（8）』、pp. 26-33。
- 2) 熊倉功夫ほか（1993）『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社。
 - 3) 熊倉功夫ほか（1993）『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社、p. 58。
 - 4) 西川一草亭（1937）『一葉瓶花集。回想の父』、p. 1。
 - 5) 幼名亀吉、のちに母親の家を継いで津田と改姓した。熊倉功夫ほか（1993）『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社、p. 58。
 - 6) 熊倉功夫ほか（1993）『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社、p. 65。
 - 7) 明末の文人袁宏道（1568—1610）が 32 歳の時に著したものである。日本に伝わってから、江戸時代に人気となり、袁宏道派という流派まで生むなど、日本の花文化に大きな影響を与えた。「わが国のいけばなの歴史に登場する文人花はすべて『瓶史』の花論をその本旨としている」と工藤昌伸はその名著『江戸文化といけばなの展開』で評した。ところで、袁宏道の『瓶史』に関する研究は充実している。村山吉廣（2001）「龜田鵬齋と『瓶史』」『中国古典研究（46）』、pp. 106-110；川田健（2001）「袁宏道『瓶史』と『瓶史國字解』 付『瓶史國字解』 龜田鵬齋序譯注」『中国古典研究（46）』、pp. 111-119；顧春芳（2007）「袁宏道の『瓶史』中——花的品評」『言語と文化 6』、pp. 109-116；有澤晶子（2016）「袁宏道『瓶史』考：座右に清玩」『アジア文化研究所研究年報（51）』、pp. 1-18；有澤晶子（2017）「日本における袁宏道『瓶史』受容考」『文学論藻（91）』、pp. 85-104。
 - 8) 西川一草亭（1930）「編集後記」『瓶史』（去風洞社報改題）、p. 13。
 - 9) 『瓶史』の刊行は昭和 5 年 1 月改題以降、当年一期しか発行されなかったが、昭和 6 年以降は年に四期（新春、春、夏、秋）発行された。春号は「陽春」、「新春」、「新年」など名称がばらばらであったが、本論では統一して「新年号」とする。
 - 10) 板垣鷹穂（1894-1966）は、東京生まれ、大正・昭和時代の美術評論家、美術史家。大正 11 年「新カント派の歴史哲学」をあらわす。ヨーロッパに留学後、西洋美術、のち建築・映像な

どの分野で評論を展開した。戦後は早大、東京写真大の各教授。上田正昭・西澤潤一など（2003）『日本人名大辞典』講談社、p. 166。

- 11) 長谷川如是閑（1875-1969）は、明治・大正・昭和三代を生きた日本の代表的ジャーナリスト、思想家。本名山本萬次郎。現実主義、合理主義、庶民感覚、ユーモアなどを重んじるイギリス思想と相似た職人気質が脈々と流れている。同 p. 1494。
- 12) 堀口捨己（1895-1984）は、日本の建築家、ヨーロッパの新しい建築運動に心惹かれ、東大同期生らと従来の様式建築を否定する分離派建築会を結成した。後に日本の数寄屋造りの中に美を見出し、伝統文化とモダニズム建築の理念との統合を図った。論文「利休の茶」で北村透谷賞を受賞した。また歌人として、さらには日本庭園の研究家としても知られる。同 p. 1698。
- 13) 外狩素心庵（1893-1944）大正・昭和時代前期の美術評論家。大正2年中外商業新報社にはいり美術記者となる。学芸部長、参事を歴任。古美術にくわしく、書道、文人画をよくした。同 p. 1287。
- 14) 茅野蕭々（1883-1946）は明治から昭和時代にかけての歌人、詩人、ドイツ文学者、本名は儀太郎である。同 p. 1214。
- 15) 谷川徹三（1895-1989）は、愛知県生まれ、京都帝国大学哲学科を卒業し、日本の哲学者、法政大学総長などを務めた。日本芸術院会員である。ジンメル、カントの翻訳や、文芸、美術、宗教、思想などの幅広い評論活動を行った。同 p. 1188。
- 16) 野上豊一郎（1883-1950）は、大分県臼杵市に生まれ、臼川と号する。臼杵中学、第一高等学校を経て1908年に東京帝国大学文学部英文科を卒業し、同級生に安倍能成・藤村操・岩波茂雄がいて、共に夏目漱石に師事した。日本の英文学者、能楽研究者であり、法政大学総長を務め、能研究の発展にも多大な寄与をした。同 p. 1463。
- 17) 板垣鷹穂（1回）、長谷川如是閑（17回）、西村一草亭（38回）、堀口捨己（6回）外狩素心庵（15回）茅野蕭々（4回）谷川徹三（4回）津田青楓（13回）野上豊一郎（5）後藤朝太郎（14回）。
- 18) 後藤朝太郎（1938）「支那大陸の茶禅」『瓶史』（昭和十三年秋の号）、p. 69。
- 19) 拙論「大正後期日本における『支那庭園』論の特色を参照。

参考文献

- 籠谷真智子（1985）「九条武子文芸の研究-1-上村松園・西川一草亭宛の手紙より」『仏教文化研究所研究紀要（15）』、pp. 27-58。
- 谷晃（2002）「茶書逍遙(8) 西川一草亭『風流生活』と西堀一三『日本茶道史』」『茶道雑誌 66(9)』、pp. 68-74。
- 戸田穰（2003）「堀口捨己の戦前期における理論と活動(その2)：堀口捨己の建築外的背景・雑誌『瓶史』を中心に(建築歴史・意匠)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II (73)』 pp. 465-468。
- 宮地功・松本静夫（2003）「藤井厚二研究：藤井家および藤井厚二を巡る人々」『福山大学工学部紀要 27』、pp. 105-110。
- 宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』にみられる武田五一、藤井厚二、堀口捨己と西川一草亭 その1」『日

- 本建築学会中国支部研究報告集 27』、pp. 925-928。
- 松本静夫・宮地功（2004）「『瓶史』にみられる武田五一、藤井厚二、堀口捨巳と西川一草亭 その2」『日本建築学会中国支部研究報告集 27』、pp. 929-932。
- 宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』に記述された座談会と出席者についての考察」『学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠』、pp. 427-428。
- 片柳草生・籠谷眞智子（2006）風流道場—花人、西川一草亭の生涯（特別企画 京都 千年都市の美と形）『季刊銀花（145）』、pp. 90-107。
- 宮地功・松本静夫（2006）「『瓶史』に記載された座談会についての考察」『学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠』、pp. 561-562。
- 宮地功・松本静夫（2007）「藤井厚二研究：藤井厚二の経歴と人脈」『福山大学工学部紀要 31』、pp. 147-152。
- 紅野敏郎（2009）「逍遙・文学誌(214)随筆雑誌『文体』（下）万太郎・秋庭俊彦・瀧井孝作・西川一草亭・松根東洋城・蛇笏ら」『國文學：解釈と教材の研究 54(5)』、pp. 142-147。
- 井上治（2009）「近代日本の花道思想における『宗教』と『芸術』——西川一草亭と山根翠堂」『ノートル・クリティーク（2）』、pp. 20-35。
- 井上治（2009）「花道の近代(3)西川一草亭の花と風流」『京の発言(12)』、pp. 69-71。
- 和田積希（2014）新出の「野分文庫」について：浅井忠の図案とその作品化をめぐる『Museum (650)』、pp. 7-43。
- 中村利則（2016）「風流道場主・西川一草亭（特集 近代和風住宅のプロデューサーたち）」『家具道具室内史：家具道具室内史学会誌（8）』、pp. 26-33。
- 熊倉功夫ほか（1993）『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社。
- 西川一草亭（1937）『一葉瓶花集. 回想の父』、p. 1。
- 西川一草亭（1930）「編集後記」『瓶史』（去風洞社報改題）、p. 13。
- 後藤朝太郎（1938）「支那大陸の茶禅」『瓶史』（昭和十三年秋の号）、p. 69。

Tea ceremony recognition of Goto Asataro and Nishikawa Issotei: From the perspective of Chinese-Japanese contrast on tea

ZHOU, Tangbo

Abstract

In this paper, in order to supplement the discussion of the theory of the first issue of this magazine, it is necessary to consider the difference between modern Chinese tea and Japanese tea from the world of tea closely related to the garden while making use of the discourse of Goto Asataro. What can not be overlooked when considering it is Goto's remarks at the Oyu Round-table Discussion published in the first year of the

Showa edition, “Bottle History”. In addition, before discussing “Bottle History” and Goto, I will not talk about leaving the person named Nishikawa Issotei, who has the deepest relationship with “Bottle History”.

Keywords: Goto Asataro, Nishikawa Issotei, bottle history, tea

日本の働く女性の育児不安の実態及びその影響要因 —大阪での調査を中心に—

李 東輝（大連外国語大学）

要旨

日本において、少子・高齢化問題が深刻になっている。特に、女性の社会進出が進んでいる現在、働く女性の育児支援が社会的な課題になっている。本稿では、大阪市で行った調査から得られたデータに基づいて、日本の働く女性の育児不安の現状とその影響要因を考察した。

まず、育児不安の現状について、働く女性は、職場役割と家庭役割という多重役割のもとで、生活が充実していると感じていると同時に、身体的には疲労感を感じている人が7割近くになっている。それに、精神的な方には、イライラ状態、育児不安徴候がある人は、5割以上を占めている。育児不安の中で、育児と自分の価値の実現が両立できない不安感が高い。また、「育児や子どもに対するストレスや不安の感情」も強い傾向がみられた。

育児不安に影響を与える要因として、①夫との葛藤、実母との葛藤と義母からの支援の有無などの家庭的な要因の影響、②育児施設サービスの不備の影響、③「三歳児神話」などの育児規範意識の影響が挙げられる。

キーワード：育児不安、三歳児神話、多重役割、良妻賢母

はじめに

日本において、高齢化社会の進行にともなって、少子化問題も深刻になっている。厚生労働省の人口動態統計により、合計特殊出生率が2017年1.43まで落ち込んだ¹⁾。子どもの数が少なくなれば、社会経済の発展にマイナスな影響をもたらす、高齢者負担を担う若年人口の減少につながっている。少子化の原因について、先行研究では「女性の社会進出」に結びつけてしまう傾向がある（山田, 2008）。但し、女性の社会進出が進んでいる一方で、女性が家庭の主な担い手であることは変わっていない。特に育児期には、育児行為そのものが重労働に相当し、身体的な負担だけではなく精神的な負担が含まれる子育てに関する負担感や不安感などは、子育てをする母親であれば誰もが感じるだろう。それが募ると育児ノイローゼや子どもの虐待といった「家族の病」といわれる問題が社会に注目されている。したがって、乳幼児を持ち、働いている女性の心理状態とする不安感やストレスなど

を究明することは、女性の身心健康や職場・家庭の両立に役立つだけではなく、少子化問題の解決の一助になると言える。

本研究の目的は次の2つである。一つ目は、乳幼児を育てながら働いている日本女性の育児不安の実態を明らかにすること、二つ目は、育児不安が生じた要因を探ることである。

I. 先行研究の概要

1. 働く女性の役割と育児への支援

(1) 母親への期待の変容

「良妻賢母」が、女性のあるべき姿とされ始めた明治時代以降、家族の世話をするのは女性の役目であるという「常識」は存在し続けている。良妻賢母は、夫に対する態度を規定する「良き妻」と子供に対する態度を規定する「賢い母」という2つの意味からなり、特に明治期は「良妻」であることより「賢母」であることのほうが強調され、明治20年代後半から女性教育の理念になった。この賢母思想の狙いは育児にあり、賢母となって子供の教育を通じて女性は国家に関わっていくことが奨励された。言い換えれば、男は天下国家を論じて直接政治にかかわり、女は子供を産み育てることを通して国家にかかわっていくという形での男女役割分業化が国家の狙いであった（東洋・柏木恵子, 1999）。

戦後、産業構造の変化により家庭と職場の分離が先鋭化し、高度経済成長期においては、父親の長時間労働を支えるために家事や育児を一手に引き受ける「専業主婦」の存在が要請された。そこでは、女性の産む性、育てる性が強調され、子供の世話や子供への愛情は女性に備わった「本能」であるという「母性神話」、さらには子供にとって3歳までは母親に育てられることが最も重要であるという「3歳児神話」が強調されるようになった。一方で、戦後、特にオイルショック²⁾以降、女性たちは、主にパートタイムの雇用労働者として、家庭外で働く傾向が強まった。その結果、家庭では家事・育児・仕事などの多重役割によって引き起こされた心理的抑鬱、不安、ストレスなどは、母親自身にとっても、子供にとっても望ましいとは言えない。

(2) 働く女性の育児への支援

日本において、働く女性への支援の重要な措置として、1963年から働く女性のための出産休暇を180日間とし、有給休暇を取得できる。1974年には男女を問わず育児休暇が240日取得できるようになった。その後、何回か改正され、現在は出産前から合わせて450日の有給休暇がある。また、父親は出産休暇とは別に10日間の出産介護休暇が保障され、男女とも12歳以下の子供一人につき年間60日間の病気介護休暇が取れる。さらに、女性が働き続ける権利を保障することと、働く女性の出産を促すために、1992年に全職種、男女ともに適用される「育児休業制度」が実施された。育児休暇の請求権が女性だけではなく

男性にも認められたことは一つの前進と言えるが、休業中の給与保障がないこと、代替要員の確保や休業後の職場復帰に関する規定、罰則がないなどのいわゆるざる法であり、現実には男性が取得する可能性はきわめて少ないといわざるをえない（橋本, 1996）。

「1.57 ショック」³⁾といわゆる戦後日本史上最低の合計特殊出生率は、各界に大きな波紋を投げかけ、最初の少子化対策ともいえるエンゼルプランが策定された。その目玉は緊急保育対策等5ヶ年事業(1995年度～1999年度)という保育園を充実させることであった。ちょうど1986年の男女雇用機会均等法施行以降、働く女性が増え、総合職などで採用された女性たちが、仕事か出産かで迷う年代にさしかかっていた頃でもある。そこで、子どもが育てにくい要因には「仕事と子育ての両立」が難しいことであるため、保育園の整備が必要だということになった。だが、エンゼルプランが始まって少子化が止まることはなかった。その後、2000年から2004年にかけて新エンゼルプランが施行されていた。この新エンゼルプランの計画に沿って認可保育園整備を中心に据えている。保育園は増えているが、それを上回る入園希望者が増え、待機児童の問題はまだ解決できていない。特に、育児休業明けの1歳児たちは保育園に入るのは非常に難しい。保育園の受け入れ枠を増やしてもニーズの増大に追いつかない状況なのである（前田, 2003）。

そのほかに、女性の外役割をサポートしようとする法律と制度を整備しながら⁴⁾、他方で女性を内役割に押し戻そうとする動きが⁵⁾、平行して進むことになった。かくして、いまだに根強く残る“性別役割分業”のもと、相変わらず大きな負担を背負い続けなければならない内役割と「男並平等」に動かなければならなくなってきた外役割のはざまで、両役割を持つ女性は、“負担の不平等”に苦しまなければならなくなった。そして、仕事を続けることと出産・育児が両立せず、どちらかの選択を迫られる場面が出てくる。子供をとるか、仕事を続けるか、二者択一を迫られることになる。女性が外役割と内役割を無理なく両立させることが極めて難しいと言える。

2. 働く女性の育児不安に関する研究

(1) 育児不安の概念

育児に対する負担感や不安感は、“育児不安”或は“育児ストレス”という用語で概念化されている。育児不安の概念について、日本の研究者たちがさまざまな視点から論じている。

牧野カツコは「育児行為の中で一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し蓄積された不安」と定義している（牧野, 1982）。心理学的ストレス研究から育児の問題にアプローチした佐藤達哉らは、育児ストレスを「子供や育児に関する出来事や状況などが、母親によって脅威であると知覚されることやその結果母親が経験する困難な状態」と考えている。

上述のように、育児不安、育児ストレス、または育児ノイローゼなど多様な用語が提案

され、尺度内容も研究者によって異なるなど、現段階では必ずしも一致した見解は得られていない（東洋ら, 1999）。本稿は、牧野カツコの“育児不安”概念を採用する。

（2）「育児不安」を生じる要因

育児不安に影響を与える要因について、先行研究では、①夫のサポートと夫婦間のコミュニケーションの不足（石ら, 2006）、②家族形態と年齢などの影響（太田ら, 2018）、③母親の意識とネットワークから育児不安との関連（牧野, 1982、1983、1988；草野ら, 2010）、④働く母親の職場環境・仕事での評価の低さなどの影響がある、と指摘された（久保, 2015）。

子育て期にある就労女性の生活の特徴としては、①地域ネットワークが専業主婦の場合と比べて乏しい、②職場の友人や保育園の保母等との付き合いの状況、③都市部フルタイム就労は育児施設と祖父母からの援助の有無との関連があり、多様なソーシャルサポートが育児不安を軽減することを明らかにしてきた（牧野, 1982；落合, 1989；関井他, 1991；太田ら, 2018）。

今までの先行研究を見ると、家族、職場生活、地域にそれぞれ注目して研究していたが、家庭・職場・地域の三者を同時に検証するのが少ないと言える。

Ⅱ. 日本で働く女性の育児不安の現状

1. 調査概要

大阪府は都道府県の一つで、日本のほぼ中央部に位置している。府内は更に 33 の市、9 の町、1 の村に分かれている。大阪市はその中の一つの市であり、人口は約 271 万 3157 万人（平成 29 年 10 月）と全国の 1 億 2464 万 8471 人の 2.2% しかない（厚生労働省, 2017）。また 2015 年特殊出生率が 1.26 で全国の 1.45 より低く⁶⁾、少子化が進んでいる地域だといえる。

本稿で使ったデータは 2016 年 9 月上旬に大阪市内の 7 ヶ所の保育園で行った調査から得られたものである。調査は知り合いの紹介で、保育園の園長を通して、保育園を利用している母親を対象にして調査票を配布し、二週間後に回収するという方法で調査を行った。配布した調査票は 803 票、回収したのは 468 票、有効票は 390 票、有効回収率は 48.6% である。

調査は主に、個人の属性、育児規範と育児に関する意識、育児不安の状況と育児サポート（職場サポート、保育園などのサポート、家族のサポートなどの状況）などのことについて回答してもらった。

2. 調査対象者の属性

表 1 調査対象者の属性 (N=390 単位 : %)

項目	内容	割合	項目	内容	割合
年 齢	14～19 歳	1.0	子 供 の 数	1 人	31.3
	20～24 歳	3.3		2 人	43.8
	25～29 歳	12.8		3 人	20.0
	30～34 歳	33.8		4 人以上	4.9
	35～39 歳	33.1	子 ども の 年 齢	1 歳以下	29.7
	40～44 歳	13.8		2 歳	20.0
	45～49 歳	1.8		3 歳	15.1
雇 用 形 態	正社員	33.1		4 歳	13.3
	派遣・パート・アルバイト	55.4		5 歳	11.8
	自由・自営	11.5		6 歳	7.2
収 入	50 万円未満	13.6	学 歴	中学校	5.9
	50～129 万円	36.2		高等学校	36.7
	130 万～299 万円	20.3		短大・高専	39.0
	300 万～499 万円	15.9		大学・大学院	16.7
	500 万円以上	3.1			
	未回答	6.9			

調査対象者の属性について、表 1 に示されたように、対象者の年齢は最も若い母親で 19 歳、最高が 49 歳である。そのうち、25～29 歳 (12.8%)、30～34 歳 (33.8%)、35～39 歳 (33.1%)、40～44 歳 (13.8%) の人が比較的多い。

雇用形態をみると、調査対象者の中で、正社員 33.1%、派遣・パート・アルバイト 55.4%、自由・自営業 11.5% である。すなわち、半分以上の調査対象者が非正規雇用者である。これは日本の社会実情と一致している。

現在いる子どもの数をみると、2 人が一番多く、43.8% を占めている。あとは、1 人 31.3%、3 人 20.0%、4 人以上 4.9% である。子供の年齢は、0 歳～6 歳が中心で、そのうち、2 歳以下の子どもの多い。

収入に関しては、50 万円未満 13.6%、50～129 万円 36.2%、130～299 万円 20.3%、300～499 万円 15.9%、500 万円以上 3.1% で、300 万円以下に集中している。

学歴をみると、中学校 5.9%、高校 36.7%、短大・高専 39.0%、大学・大学院 16.7% である。短大以上の教育を受けた女性が 55.7% で、日本の教育レベルが高いことがうかがえる。

3. 働く女性の子育て意識とサポート実態

(1) 働く女性の子育て意識

調査対象者の「子育て規範」、就労意欲、両立感という三つの意識を、表 2 に示した尺度に基づいて考察する。各項目を「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」まで 5 段階で尋ねた。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」との合計を否定率とする。「ややそう思う」と「非常にそう思う」との合計を肯定率とする。

表2 働く女性の育児意識などに関する調査内容

意識項目	内 容
子育て規範	① 子どもが3歳ぐらいになるまでは、母親は仕事をもちにそばにいた方がよい
	② 子どもが小学校入学前に母親が働いていると、子どもに悪影響を及ぼすことがある
就労意欲	③ より長時間働きたいと思う
	④ もっと仕事に自分の時間やエネルギーを費やしたい
	⑤ 仕事はできる限り長く続けたい
	⑥ 仕事にあまりエネルギーを投入したくない
両立感	⑦ 子育てと仕事の両立は簡単だ

図1に示されたように、「育児規範」という項目に、「三歳児神話」の肯定率は46.4%占めている。1998年ベネッセ教育研究所が行った子育て生活基本調査によると、「子どもが3歳くらいまでは母親が育てたほうがよい」に支持率が74.3%に達している。それと比べて、「三歳児神話」という社会的通念は弱くなってきている傾向が見られるが、5割近くの方が賛成しており、この意識が根強く存在していると言える。また、「子どもが小学校入学前に母親が働いていると、子どもに悪影響を及ぼすことがある」の肯定率を見ると、5.1%しか占めていない。

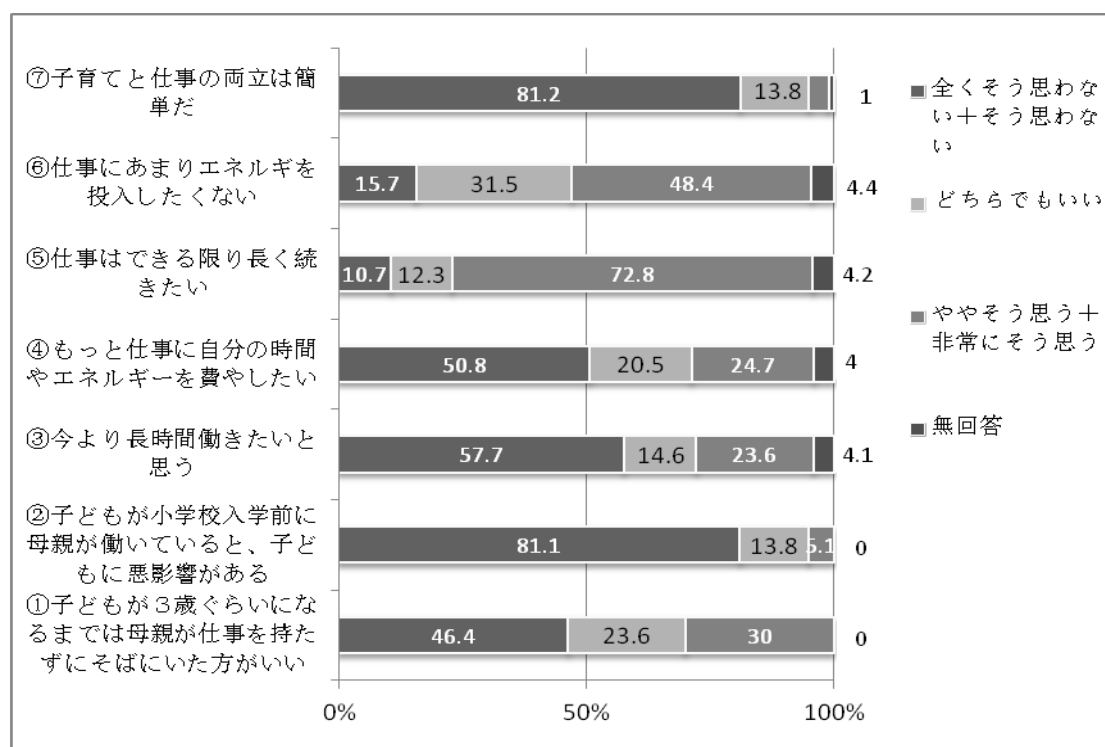


図1 働く女性の育児及び就労などの意識に関する調査結果 (N=390)

女性の就労意欲について「今より長時間働きたいと思う」と「もっと仕事に自分の時間

やエネルギーを費やしたい」との否定率がそれぞれ 57.7%、50.8%、5 割以上を占めている。一方、「仕事はできる限り長く続けたい」と思う方は 72.8%である、この結果から子育てしながら働いている女性は時間的な制約が見られる。「子育てと仕事の両立は簡単だ」の否定率は 81.1%に至っている。

(2) 職場でのサポート実態

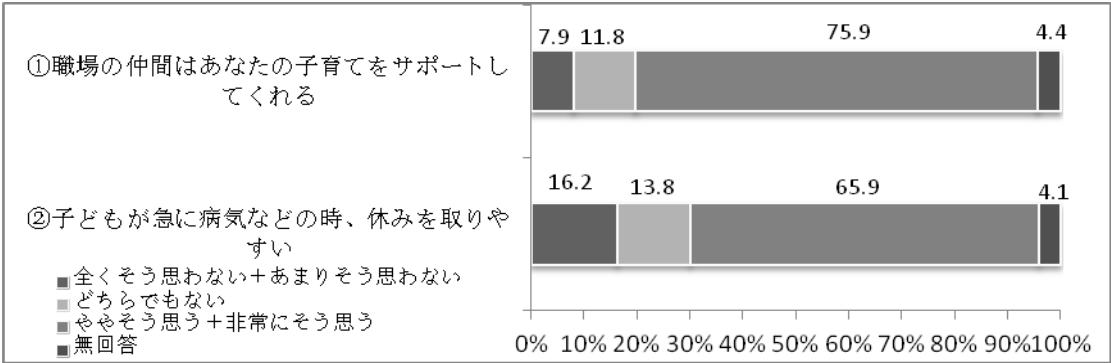


図2 職場での支援実態に関する調査結果 (N=390)

調査対象者の職場支援について、ここでは職場同僚の支援と職場制度の支援という二つの面から考察する。「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」まで5段階にわけて尋ねた。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」との合計を否定率とする。「ややそう思う」と「非常にそう思う」との合計を肯定率とする。「職場の仲間はあなたの子育てをサポートしてくれる」と「子供が急に病気などの時に休みを取りやすい」との肯定率がそれぞれ 75.9%、65.9%占めている (図2)。

(3) 育児施設からの支援状況

表3 保育園や幼稚園支援に関する調査内容

項目	具体的な内容
数量	① 保育園や幼稚園の数が不十分だと思う
	② 保育園や幼稚園以外に子どもを預ってもらえるサービスが不十分である
質量	③ 保育園や幼稚園の建物はきれいで子どもが安全に遊べる
	④ 保育園や幼稚園で子どもはきめ細かく面倒を見てもらっている
費用	⑤ 保育園や幼稚園の費用が家計の負担になっている
	⑥ 保育園や幼稚園の費用は高すぎると思う

調査対象者の保育園や幼稚園の支援について、表3に示したように、保育園や幼稚園の数量、質量、費用の3つの面から考察した。具体的な尺度は下記の通りである。「まったく

「そう思わない」から「非常にそう思う」まで5段階でどの程度あるかを尋ねた。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」との合計を否定率とする。「ややそう思う」と「非常にそう思う」との合計を肯定率とする。

まず、育児施設の数量に関して、図3に示されたように、「保育園や幼稚園の数が不十分だと思う」の肯定率が44.6%、5割近く占めている。「保育園や幼稚園以外に子どもを預ってもらえるサービスが不十分である」の肯定率が54.6%、5割以上占めている。

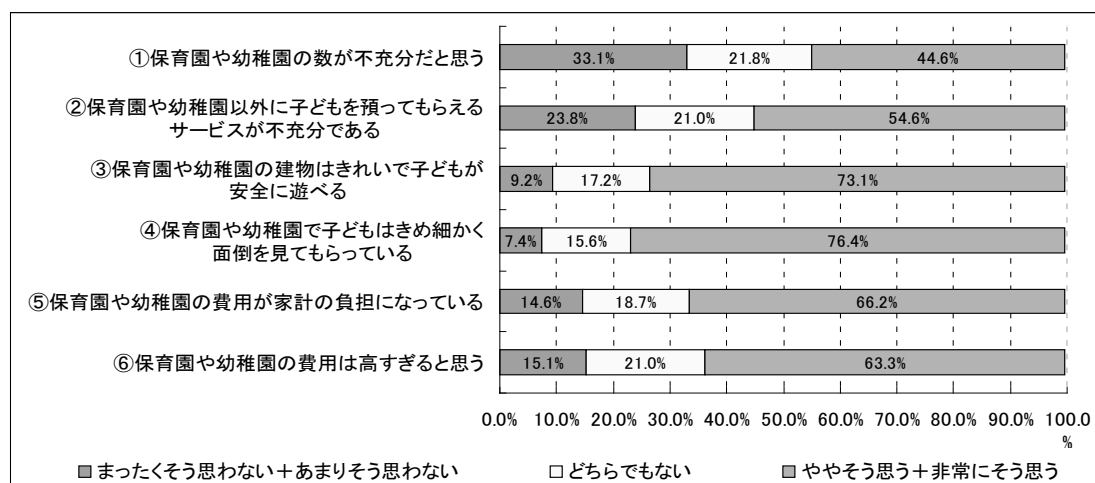


図3 保育園や幼稚園などの育児施設の援助実態 (N=390)

次に、育児施設の質から見ると、「保育園や幼稚園の建物はきれいで子どもが安全に遊べる」ハードウェア、「保育園や幼稚園で子どもはきめ細かく面倒を見てもらっている」ソフトウェアに関して、肯定率がそれぞれ73.1%、76.4%、70%以上占めている。すなわち、育児施設の質に関して、働く女性に認められていることがわかる。

育児施設に預ける時にかかる費用に関して、「保育園や幼稚園の費用が家計の負担になっている」と思っている方の合計は66.2%で、「保育園や幼稚園の費用は高すぎだと思う」と思う方の合計は63.3%と、どちらも6割以上で、検討すべきであると言える。

(4) パーソナルサポートと葛藤の実態に関する調査結果

調査対象者のパーソナルサポートと葛藤について、本研究ではPierce, Sarason & Sarason 1991年に開発された特定関係サポート尺度 (Quality of Relationship Inventory) の日本語翻訳版を使用した。具体的な尺度は表4に示したとおりである。

調査内容について、「まったくない」「あまりない」「時々ある」「よくある」という4段階でどの程度あるかを尋ねた。誰にしてもらえるかについての調査結果は図4に示したとおりである。

表4 パーソナルサポートと葛藤に関する調査内容

項目	内 容
支援	① 子育てのことで何か心配事や悩み事がある時、どの程度相談に乗ってもらえますか (情緒的サポート)
	② 子育てのことで、何か困ったことがある時、どの程度子供の世話をしてもらえますか (手段的サポート)
葛藤	③ あなたは子育てのことで、意見が分かれることがどれくらいありますか
	④ あなたは子育てのことで、どれくらい妥協しなければなりませんか

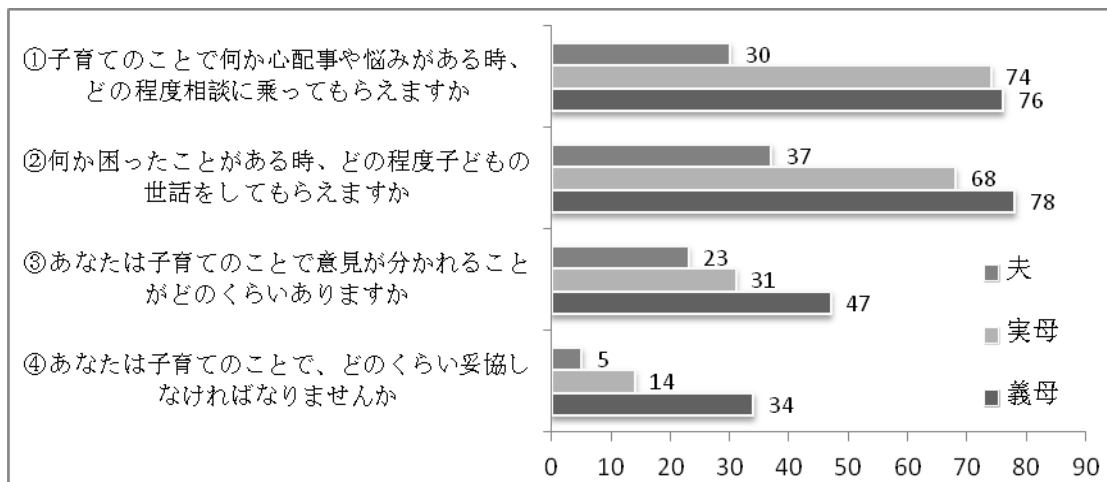


図4 パーソナルサポートと葛藤に関する調査結果 (N=390 単位: %)

図4に示されたように、してもらえた情緒的サポート(74%)、手段的サポート(68%)どちらも義母より実母のほうが多い。一方、葛藤の方から見ると、③意見の分岐は夫、実母、義母の順番になっているが、④妥協するのは実母より義母のほうが高いことがうかがえた。またサポートと葛藤という2つの面から見ると、どちらも夫が一番高い割合を占める傾向がある。即ち、よくサポートをしてもらっていると同時に、夫との子育て観の相違も少なくないと考えられる。

また、パーソナルサポート源(夫、実母、義母)との居住関係について、夫と同居する割合が81%占めているが、実母と義母の両方とも、同居(6%、38%)、近居(3%、31%)よりも遠居(46%、48%)のほうが高い割合を占めていることが分かる。ここから、核家族が主な家族形態であることが推測できる。

4. 働く女性の育児不安の実態に関する調査結果

働く母親の育児におけるストレスや不安の傾向について、本研究では、牧野カツコと岩田美香の「育児不安尺度」を採用した。具体的内容は表5に示したとおりである。

表5 育児不安尺度の内容（注：Nは否定的な感情、Pは肯定的な感情）

育児不安を考察する項目	調査内容	感情
1. 一般的疲労感を測定する項目	⑩毎日くたくたに疲れる	N
	①朝、目覚めがさわやかである	P
2. 一般的気分の低下を測定する項目	⑪毎日はりつめた緊張感がある	N
3. イライラの状態を測定する項目	②子供がわずらわしくて、イライラしてしまう	N
4. 育児不安徴候を測定する項目	④子供のことで、どうしたらよいか分からなくなることがある	N
5. 育児意欲の低下を測定する項目	⑤自分一人で子供を育てているのだという圧迫感を感じてしまう	N
	⑥子供を育てるために我慢ばかりしていると思う	N
6. 離反の感情を測定する項目	③子育てが楽しく毎日が充実している	P
	⑦子供が好きではない	N
	⑧子供が足手まといに感じられる	N
7. 育児による犠牲感を測定する項目	⑨子供にかまけてばかりで、自分の能力や意欲を生かしているという充実感がない	N

表5に示したように、育児不安を7つの方面で、合計11の各項目で考察した。各項目について「まったくない」「あまりない」「時々ある」「よくある」の4件法による回答を求め、「まったくない」プラス「あまりない」の合計と、「時々ある」プラス「よくある」の合計は図5に示したとおりである。

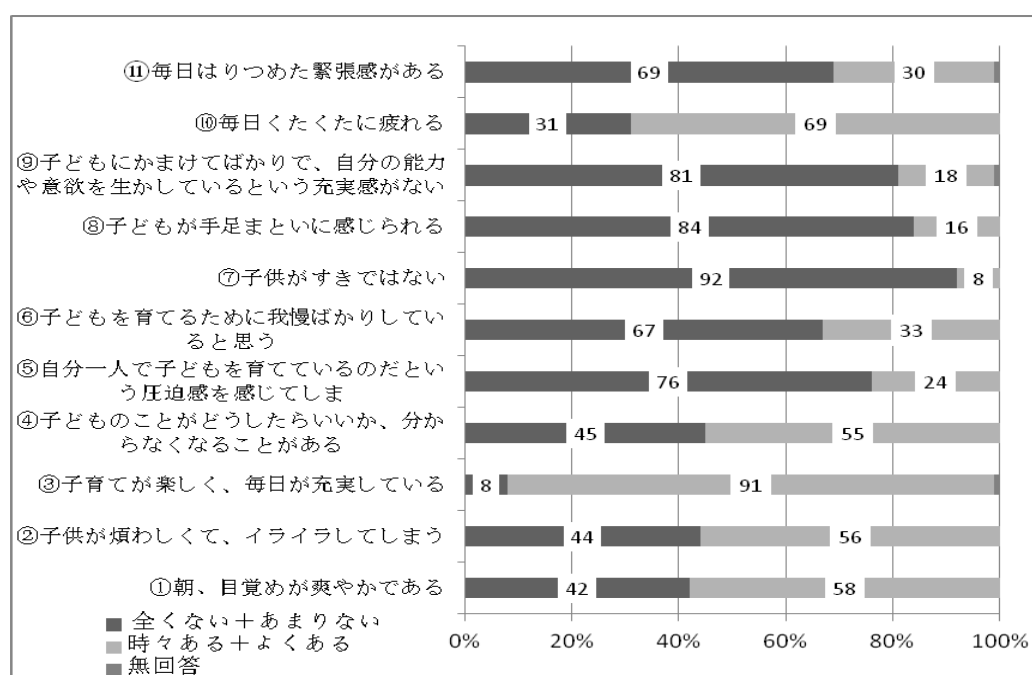


図5 育児不安の実態に関する調査結果 (N=390)

働く女性は、職場役割と家庭役割という多重役割のもとで、生活が充実しているが、図5に示されたように、「子育てが楽しく毎日が充実している」(③)に関して、調査者が圧倒的に多い(91%)と肯定していると同時に、身体が「毎日くたくたに疲れる」(⑩)と疲

労感を感じている人が69%を占めている。精神的な方には、イライラ状態、育児不安徴候を表している②④肯定率は、両方とも5割以上を占めていることが分かった。

さらに、育児不安の状態を明らかにするために、因子分析を使って育児不安を三つの因子に抽出した。

表6 育児不安の因子分析

育児不安の項目/抽出した因子	因子1	因子2	因子3
	充実感欠如	育児不安	生活疲労
⑥子供を育てるためにがまんばかりしていると思う	0.671	0.197	0.186
⑤自分一人で子供を育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.642	0.178	0.209
⑨子供にかまけてばかりで、自分の能力や意欲を生かしているという充実感がない	0.507	0.288	0.126
④子供のことで、どうしたらよいか分からなくなることがある	0.400	0.222	0.212
⑦子供が好きではない	0.231	0.58	-0.073
⑧子供が足手まといに感じられる	0.462	0.569	0.042
③子育てが楽しく毎日が充実している	0.092	0.488	0.115
②子供がわずらわしくて、イライラしてしまう	0.325	0.476	0.073
⑩毎日くたくたに疲れる	0.215	-0.002	0.641
⑪毎日はりつめた緊張感がある	0.362	-0.033	0.590
①朝、目覚めがさわやかである	-0.015	0.309	0.389
因子寄与	1.839	1.425	1.075
寄与率	16.720	12.950	9.780

因子分析について、①と③のポジティブ項目については逆転した。育児不安の因子分析（最尤法、パリマックス回転）を行い、表6に示されたように3つの因子が抽出された。このうち第1因子は、因子負荷量の高い順に、「⑥子供を育てるためにがまんばかりしていると思う」、「⑤自分一人で子供を育てているのだという圧迫感を感じてしまう」、「⑨子供にかまけてばかりで、自分の能力や意欲を生かしている」という充実感がない」、「④子供のことで、どうしたらよいか分からなくなることがある」の4項目が推定され、「育児のために自分が犠牲となって、やりたいことができず、充実感を感じられない状態」を表している因子と解釈される。したがって、「充実感欠如の因子」とする。

また、第2因子は、「⑦子供が好きではない」、「⑧子供が足手まといに感じられる」、「③子育てが楽しく毎日が充実している」、「②子供がわずらわしくて、イライラしてしまう」の4項目が推定され、「育児や子どもに対するストレスや不安の感情」の因子と解釈された。したがって「育児不安の因子」とする。

第3因子は、「⑩毎日くたくたに疲れる」、「⑪毎日はりつめた緊張感がある」、「①朝、目覚めがさわやかである」の3項目が推定され、内容から「育児や生活に対する疲労感」を表している因子と解釈され、したがって「生活疲労」とする。

抽出された三つの因子をみると、調査対象者の中で、育児不安を感じている人が少ないと言える。

Ⅲ. 働く女性の育児不安に影響を与える要因

働く女性の育児不安に影響を与える要因として、本稿では主に、家族的な要因（「子育ての意識」、「パーソナルサポートと葛藤」）、地域的な要因（「職場支援」「保育園や幼稚園の支援」）、社会的な要因から考察する。

1. 家族的・地域的な要因の影響

(1) 夫からのサポートとの関連

表7 パーソナルサポート・葛藤と育児不安との関連

サポート源	変数名	相関係数
夫	夫からのサポート	-.24(**)
	夫との葛藤	.36(**)
実母	実母からのサポート	-.08
	実母との葛藤	.17(**)
義母	義母からのサポート	-.14(*)
	義母との葛藤	.05

注：* P<0.05 ** P<0.01

二変数間の相関分析によって、個人属性と育児不安との関連について、「年齢」「雇用形態」「子供数」「子供の年齢」「収入」「学歴」いずれも育児不安との関連が見られないが、夫からのサポートと葛藤が両方とも育児不安との有意な関連が見られた。すなわち、夫からサポートが多ければ多いほど、妻の育児不安が低くなり、夫との葛藤が多いほど妻の育児不安が高くなる（表7）。草野ら（2010）によると、育児ストレスの要因は、親自身また子供自身にかかわることや、夫や家族の協力といったような「個別育児環境要因」について指摘されたことが多いが、本研究では育児ストレスと夫との葛藤との関連を明らかにした。

(2) 両親のサポートとの関連

働く女性の育児不安と両親からのサポートとの関連をみると、実母のサポートと有意な関連がみられないが、義母とのサポートと負の関連がみられた。すなわち、義母からの支援が多いほど育児不安を緩和する効果がある。

また、実母との葛藤と有意な関連がみられた。すなわち、実母との葛藤が多いほど、育児不安が強くなる。

先行研究では母親の育児ストレスは家族の協力の有無に関わることが多いが、具体的な分析についてはまだ行っていない。本研究では義母からの支援のプラス効果と実母との葛藤とのマイナス効果があることを明らかにした。

(3) 地域育児施設の質との関連

表8 育児不安に影響を与える要因に関する重回帰分析の結果

変数名	内容	ベータ	有意確率
意識	子育て規範	0.093	0.092
	就労意欲	0.099	0.067
	両立感	-0.203	0.000
保育園および幼稚園のサポート	数量	0.057	0.281
	質	-0.106	0.049
夫	サポート	-0.118	0.048
	葛藤	0.227	0.000
実母	葛藤	0.134	0.013
義母	サポート	-0.032	0.566

上記の分析を通し、有意な関連がある変数だけを独立変数とし、育児不安の平均値を従属変数とし、再度重回帰分析を行った結果は、表8に示したように、ハイライト部分は、有意確率が<有意水準 0.05 の変数であり、ベータ欄を見ると、育児不安に一番影響を与えているのは、夫との葛藤である。次は、両立感、実母との葛藤、夫のサポート、保育園の質の順になっている。

2. 社会経済的・文化的な要因の影響

(1) 産業構造の変化

農業を中心とした第1次産業から第3次産業へと日本の産業構造が変化したことによって、親が雇用者化し、労働の場が家庭から離れた。その結果、夫婦がともに労働や育児の現場にいる、ということはほとんどまれになり、それまで子育てをサポートしてきた祖父母や親の姉妹たちは別世帯を構成するようになった。都市化にともない近隣同士の関係も希薄になり、地域から育児援助支援を得られにくくなり、母親の育児による拘束感や不安感を高めた一要因であろう。

(2) 「父親不在」という社会環境の影響

家の中でもっとも頼りたいのは夫であるが、実はいくつもの理由が重なって夫が家庭の中で十分に機能できない現実がある。一つには、雇用者化と住居の郊外化によって、父親たちは遠距離通勤を強いられることになった。また、長期的に続いている不況による倒産やリストラを免れるための長時間労働によって、父親たちが家庭にいられる時間は極端に少ない。2016年の日本総務省の「社会生活基本調査」によると、6歳未満の子供を持つ夫の育児・育児関連時間は2011年から16分増加し、83分になった。2006年の結果と比較すると、10年間で23分、1996年の結果と比較すると、20年間で45分⁷⁾増加しており、上昇している傾向が見られるが、大きな変化が見られなかった。こうした要因に加えて、明

治期以降社会に深く浸透している「男尊女卑・良妻賢母・男は仕事、女は家庭」等の伝統的な性役割観は、社会制度にも個人の意識にも有形・無形の影響を与え、父親の育児参加をさらに難しくしている。

(3)「三歳神話」の子育て規範などの影響

仕事と育児との両立が困難な現状では、そのどちらかを選択し、他方を放棄せざるをえない。そこには母性神話ともいえるべき日本社会特有の母性観の存在が指摘できると考える。「子どもが3歳ぐらいになるまでは、母親は仕事を持たずにそばにいた方がよい」という社会的通念は通称三歳児神話とも言われ、子供を預けて働く母親たちに罪悪感や後ろめたさを抱かせたり、就労を断念させたりしてきた。

日本における母性尊重の風土は、育児の大切さに対する共通認識を高め、とくにその担い手を主として母親に限定することによって、女性たちの育児責任や育児能力を強化することに貢献したという側面は否定できない。よい母親にならなければという思い込みは、容易に母親としての自信喪失、自己否定へと繋がっていく（大日向, 1991）。

おわりに

本研究では、大阪市で行ったアンケート調査から得られたデータに基づいて、日本の働く女性の育児不安の状態とその影響要因を考察した。分析によって明らかになったことが下記の通りである。

まず、育児不安の現状について、働く女性は、職場役割と家庭役割という多重役割のもとで、生活が充実していると感じていると同時に、身体的には疲労感を感じている人が7割近くになっている。それに、精神的な方には、イライラ状態、育児不安徴候がある人は、5割以上を占めている。育児不安の中で、育児と自分の価値の実現が両立できない不安感が高い。

また、「育児や子どもに対するストレスや不安の感情」も強い傾向がみられた。

育児不安に影響を与える要因として、下記の三点が挙げられる。

第一は、夫との葛藤、実母との葛藤と義母からの支援の有無などの家庭的な要因の影響。家庭の中で、夫と子育て観の相違で葛藤も多く伴っている。夫からのサポートが多いほど妻の育児不安が低くなるという点は先行研究と同じであるが、本研究では育児ストレスと夫との葛藤との関連を明らかにした。その結果から、妻の育児ストレスを軽減するために、子育てに関して、夫婦の間に話し合う機会を増やし、交流を行う必要がある。また、義母からのサポートと、実母との交流も重視すべきである。

第二は、育児施設サービスの不備の影響。

分析結果をみると、地域の育児施設に対して、数量的には増えているが、施設の環境とサービスなどの質についてはまだまだ不十分であると感じている人が大勢いる。育児不安

を解消するために、政府や地域はもっと保育園数量を増加させると同時に、子供をめぐるサービスの提供などに力を入れる必要がある。

第三は、「三歳児神話」などの育児規範意識の影響。

女性の社会進出が進んでいるにもかかわらず、日本において「子供が3歳ぐらいになるまでは、母親は仕事をもたずにそばにいた方がよい」という子育て規範が人々の意識に強い影響を与えている。育児不安を軽減するには、乳幼児を持ち働いている母親の育児観・就労観に関連する意識面を支えられるような条件を整えていくことが必要である。

今回は、日本の働く女性の育児不安及びその規定要因を考察したが、同じ東アジアに位置する、また、共働きが普通になっている中国において、進行している少子化問題を解決するために、女性の育児不安の現状とその規定要因を明らかにすることが重要な意味があると考えられる。

注

- 1) 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai18/index.html>, 2019年3月1日閲覧。『平成30年(2018年)人口動態統計の年間推計』。
- 2) オイル・ショックとは、1973年(第1次)と1979年(第2次)に始まった(ピークは1980年)、原油の供給逼迫および原油価格高騰と、それによる世界の経済混乱である。石油危機、または石油ショックとも称される。
- 3) 合計特殊出生率とは、人口統計上の指標で、一人の女性が出産可能とされる15歳から49歳までに産む子どもの平均を示す。1989年(昭和64年・平成元年)には1966年の丙午の数値1.58をも下回る1.57であることが明らかになり、社会的関心が高まったため1.57ショックと呼ばれ、少子化問題が深刻になっていた。
- 4) 1987年「労働者派遣法」施行、1991年「育児休業法」公布、1993年「パート労働法」公布、1999年「男女共同参画基本法」の制定。
- 5) 女性の社会進出を促進するため、日本において、1984年から様々な政策を実施した。例えば、1984年「租税特別措置法」の一部改正(パート収入90万円まで非課税); 1985年「年金法」の一部改正(「国民年金」のいわゆる第3号被保険者問題); 1987年「所得税法」の一部改正(配偶者特別控除を新設)いわゆる、一連の「100万円の壁」などがある。
- 6) 大阪府市 <http://www.city.osaka.lg.jp/kenko/page/0000277916.html> 2019年3月6日閲覧。『大阪市：人口動態統計 平成29年までの動向』。
- 7) 日本内閣府 http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/s1-2.pdf 2019年3月10日閲覧。日本内閣府は各種行政施策の基本資料を得ることを目的として、1975年(昭和51年)第1回調査以来、5年ごとに「社会生活基本調査」を実施している。平成28年の調査は、全国10歳以上の約20万人を対象に、10月20日現在で実施した。

参考文献

- 牧野カツコ(1982)、「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』(3)、34-56 頁。
- 牧野カツコ(1983)、「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』(4)、67-76 頁。
- 牧野カツコ(1988)、「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』(10)、23-31 頁。
- 落合恵美子(1989)、『近代家族とフェミニズム』、頸草書房。
- 関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理(1991)、「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学』(3)、72-84 頁。
- 岩田美香(1995)、「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』(68)、191-233 頁。
- 大日向雅美(1991)、「「母性/父性」から「育児性」へ」(原ひろこ・館かおる『母性から生み育てる社会のために次世代育成能力へ』新曜社)、205-229 頁。
- 東洋・柏木恵子編(1999)、『社会と家族の心理学』、ミネルヴァ書房。
- 前田正子(2003)、『子育ては、いま変わる保育園、これからの子育て支援』、岩波書店。
- 石玲・桂田恵美子(2006)、「夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討—乳幼児をもつ母親を対象とした実証的研究」『母性衛生』(47)、222-229 頁。
- 山田昌弘(2008)、「ゆらぐライフコース—少子化とジェンダー」(江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学入門』、岩波書店、56-71 頁。
- 草野恵美子・小野美穂(2010)、「社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響」『小児保健研究』(69)、53-62 頁。
- 久保桂子(2015)、「保育園児を持つ母親の仕事と子育ての葛藤」『千葉大学教育学部研究紀要』(63)、279-286 頁。
- 太田仁・村上由衣(2018)、「母親の家庭・職場環境による子育てストレスの差と保育園・幼稚園への期待」『梅花女子大学 機関リポジトリ』(8)、17-34 頁。

The Actual State of Japanese Working Women's Child-rearing Anxiety and the Causes Involved: a case study in Osaka

LI, Donghui

Abstract

In recent years, Japan's problem of having fewer children and aging is becoming increasingly serious. Especially with more and more women entering the work force, child care assistance for working women has become a social issue. Based on the data obtained from the questionnaire survey in Osaka city, this study investigates and analyzes the current situation and the causes of

child-rearing anxiety of Japanese working women. First of all, it is found in the investigation that 70% of the working women feels fulfilled but tired when they take on multiple responsibilities at work and at home. Moreover, about half of the respondents feel irritable mentally and tend to have parenting anxiety. Additionally, about the working women's anxiety, the sense of insecurity that parenting and self-worth cannot be realized at the same time is higher. And it can be seen that parenting and negative emotions and uneasy feelings towards children are stronger. The causes leading to the child-rearing anxiety are related to the following three aspects. The first is family factors like conflicts with her husband and her mother, and whether she receives assistance from her mother-in-law. The second is whether the childcare facilities are adequate. Another is the influences coming from the 3-year-old parenting myth that children are better to be taken care of by their mother until they are three years old.

Keywords : child-rearing anxiety,the 3-year-old parenting myth, multiple roles,good wife and mum

「10人の傑出した母親」の選抜からみた中国女性の仕事と 家庭の二重負担 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に—

朴 紅蓮（寧波大学）

要旨

本稿では天津婦女連の「母親教育プロジェクト」とその一環として行った「10人の傑出した母親」の当選理由から、市場経済期に国家・社会が家庭内で行われてきた無償労働—家事労働を女性の責任としようとしている点について考察した。

「母親教育プロジェクト」の最大の問題点は本質主義的母性に基づいている点であり、これを利用して女性に無償労働を強要している点である。このような本質主義的な発想から、母親の本能である「愛」と「奉仕」を発揮しようとする時、女性は女性ではなく、母親に作り変えられ、本質主義的な母性は再生産され、強化されている。

2004年、2010年、2015年に3回行われている「10人の傑出した母親」の当選理由に関する分析から分かるように、国家・社会は母親に子どもの教育・ケア、家族構成員のケアなど家庭内の無償労働を担うことを期待している。これは市場経済に転換する過程で私事化した無償労働の担い手になることを意味するが、この時女性は労働市場から完全に家庭に戻るのではなく、仕事と家庭の両方を行うことを期待されている。しかし、自分を犠牲にしないと仕事と家庭の両立は難しい。母親に無償労働を強要する点は第2回と第3回の「10人の傑出した母親」から分かるように、それを社会に、他の家族構成員のケアまで延長している

キーワード： 仕事と家庭の二重負担、無償労働、本質主義的母性

はじめに

2019年2月、中国の人力資源社会保障部、全国婦女連などの9つの部¹は共同で「募集を標準化して女性の就職を促進することに関する通知（關於進一步規範招聘行為促進婦女就業的通知）」²を公表したが、同通知では育児サービスの拡大を通じて、女性のワーク・ライフ・バランスを支援することを求めている。同通知は具体策ではないものの、「全面二孩」政策（2016年）、いわゆる「二人っ子政策」の開始以来、低出生率から脱出するために、中国もワーク・ライフ・バランスに目が向けられるようになったことを意味する。

欧米や日本と違って、中国ではまだワーク・ライフ・バランスが重視されていない。しかし、女性が仕事と家庭の二重負担を背負っている問題は1980年代初頭の第3回「婦女回家（女は家に帰るべき）」論争³から現在まで議論が続いている。1980年代初期の女性の二重負担に関する研究は、女性が仕事と家庭を両立すべきか、それとも女性が自主的に一つを選択できるように権利を与えるべきかに焦点が当てられた（林松楽 1994、1995）。女性の仕事と家庭の二重負担について、張一兵（1992）、鄭晨（1994）、李静之（1994）、羅亜莉（2005）の研究では、中国の遅れている経済発展、儒教の「伝統」の影響があると指摘した。その一方、羅萍（1995、1996）は女性が仕事と家庭の二重負担を背負っている根本的な原因は「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業にあると主張している。

2000年代に入ってから女性の仕事と家庭の二重負担に関する研究は、仕事と家庭の衝突やワーク・ライフ・バランスという側面から、女性、特に出産後の女性が男性より家庭の負担が重いこと、その原因の一つが性別役割分業にある点を指摘している（陳万・陳昕 2011、金家飛・劉崇瑞・李文勇・Patricia Mary Fosh 2014、楊玉静 2015、楊恵・呂雲婷・任蘭蘭 2016）。

では、今日の中国女性はなぜ仕事と家庭の二重負担を背負っているのか。そこで本稿では、中国天津婦女連の「母親教育プロジェクト」（以下では「プロジェクト」とする）で選抜した「10人の傑出した母親」の当選理由に関する分析を通じて、国家・社会がどのように母親—女性に家庭負担をかけているかを分析する。

ここでいう天津婦女連は全国婦女連の天津の地方組織である。婦女連は中国共産党の指導の下で全国の各民族、各分野の女性がさらなる解放を求めるために連合した団体であり、各地域の末端まで支部組織を持っている。中国で婦女連は一言でいえば「中国女性の利益を代表する」組織であり、女性関連のこと以外に児童関連業務も行っている。後に詳しく述べるが、天津市は「母親教育プロジェクト」を最初に始めた地域であり、そのプロジェクトは後に全国で行われるようになった。そのため、本稿では天津婦女連のプロジェクトを対象にする。

竹中（2011）は家事労働とは家庭の中で行われている、生きている人間の属性としての労働力の再生産のための諸労働であると定義している。家事労働を論じる際に注意すべき点はそれが無償労働である、という点である。日本の「無償労働の貨幣評価の調査研究」（2009年）では無償労働を家事（炊事、掃除、洗濯、縫物・編物、家庭雑事）、介護・看護、育児、買物、社会的活動に分類している⁴。本稿では竹中（2011）の定義を参照しつつ、同調査の無償労働の分類の中で「社会的活動」以外の無償労働を中国女性の仕事と家庭の二重負担を論じる際の家庭の負担とする。また、本稿での仕事は賃労働—有償労働とする。

I. 統計データからみた 2000 年代以降の中国女性の二重負担

本章ではまず先行研究を踏まえながら、なぜ中国の女性たちが仕事と家庭の二重負担を背負っているのかを概観した後、統計データを用いて女性の二重負担についてみる。時系列のデータをみるため、本稿では主に「中国女性社会地位調査」（1990 年、2000 年、2010 年）のデータと人口センサスデータを用いる。

周知のように、中国では計画経済期に政府の主導の下で女性の社会進出が促進されたが、それを可能にしたのは、女性解放の意識以外に、終身雇用の労働制度⁵と「大鍋飯（一律の待遇）」という平等主義的配分制度⁶、「単位制度」である。計画経済期に都市部の労働者は単位に配置されたが、単位は職場であると同時に労働者の生活源泉であり、労働者及びその家族の出産・養老・医療・埋葬を保障してくれた。単位は食堂、幼稚園、美容院、学校、病院などのサービスを従業員に提供し、女性の出産・育児を支援した。しかし、女性へのこのような支援があったからといって、家庭内の家事労働が完全に社会化したわけでも、社会化できるわけでもなかった。

既存の研究で明らかにされたように、計画経済期に女性は賃労働に参加すると同時に家事労働も担っていた（蔣永萍 2000、金一虹 2006、尹鳳先 2009、左際平・蔣永萍 2009、宋少鵬 2011a・2011b など）。左際平・蔣永萍（2009）では、計画経済期に国家は女性も男性と同じく賃労働に参加して、家族を養うように女性の仕事を支援したが、男性は家庭より仕事を重視し、女性は仕事より家庭を重視したため女性が家事労働を多く担い、このような性別役割分業は社会的に肯定・賛美されたことを指摘している。また、同研究では計画経済期に単位は、女性が家事労働を多く担うように支援したこと、例えば単位は育児や介護負担が重い女性を家と近い職場に転勤させるなど仕事を調整したことを明らかにした。その一方で、遠山（1999）は、計画経済期には育児を母親の役割とし、仕事と家庭・育児の矛盾をまず女性個人の努力で解決するように国家が奨励したと指摘している。

このような先行研究から分かるように、計画経済期に国家は女性の仕事と家庭の両立を支援することで女性の家庭負担を軽減したが、これは同時に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業を確立・維持した側面もある。すなわち、計画経済期の女性の仕事と家庭の二重負担は国家の支援によって緩和・隠蔽されたわけである。そのため、国家の支援がなくなった時、女性の二重負担の問題が浮き彫りになり、2000 年代に「婦女回家」論争（第 4 回）、「段階的就業」論争（女性は出産後の一定期間家庭内で育児に専念し、子どもが少し大きくなると再び就職する）が起きている。

市場化の中で国家の労働・雇用政策は「統包統配」（国家による職場配置）が自主的就職へ、終身雇用が労働契約の締結へと変化し、女性も男性も仕事を中断・解雇されることなく定年まで働き続けることが保証されなくなった。これは女性の仕事への国家の支援・保護がなくなったことを意味する。市場化の進行にともなって、中国社会は競争・能力を重視する社会に変化した。計画経済期に行政的組織でもあった単位は市場経済期に純粋に

利益を追求する企業に変化し、コストを削減するために企業は女性の妊娠・出産・育児のための各種の配慮、休暇、施設、費用を削減した。このように市場化の中で単位が担っていた福祉は市場化、家庭化された。また、企業は女性より家事労働の負担が少ない男性労働力を選好し、女性は労働力市場で周辺化されるようになった（朴紅蓮 2019）。

以上のように、計画経済期には女性の仕事と家庭への国家の支援があったとはいえ、社会に進出した女性は依然として家庭の責任を担っていた。この負担は国家の支援がなくなる中で一層深刻化されたが、現状はどうだろうか。

2010 年の中国女性の年齢段階別労働力率⁷は「台形」型であり、25～40 歳の年齢段階で 80%台の労働力率を維持している⁸。第 3 回の「中国女性社会地位調査」で、「家庭のために自分の向上機会を放棄しない」に賛成した都市部男性は 69.3%、都市部女性は 60.6%で、男女差がそれほど大きくない。この点から女性も仕事や勉強に積極的に参加しようすることが分かるが、家庭の負担が重い時、それは衝突として表れる。男性と女性の仕事と家庭への時間配分をみると、表 1-1 のように、男性の仕事時間は女性より長い一方、女性の家事時間は男性より長く、また女性の余暇時間は男性より短い。

表 1-1 男女別の仕事と家庭への時間配分（2010 年）

単位：分

項目	男性 (A)	女性 (B)	差 (B-A)
仕事時間	482	458	-24
通勤時間	46	41	-5
家事時間	43	101	58
余暇時間	155	136	-19

出典：仕事と通勤時間、家事時間は宋秀岩・甄硯編（2013）『新時期中国婦女社会地位調査研究（上下巻）』中国婦女出版社 p. 399 より、余暇時間のデータは同上 p. 415 より。

表 1-2 未婚・既婚男女別の仕事と家庭への時間配分（2010 年）

単位：分

項目	未婚			既婚		
	男性 (A)	女性 (B)	差異 (B-A)	男性 (C)	女性 (D)	差異 (D-C)
仕事・学習時間	370	407	37	369	318	-51
家事労働時間	53	65	12	59	156	97
余暇時間	211	186	-25	193	165	-28

出典：宋秀岩・甄硯編（2013）『新時期中国婦女社会地位調査研究（上下巻）』中国婦女出版社 p. 336 より。

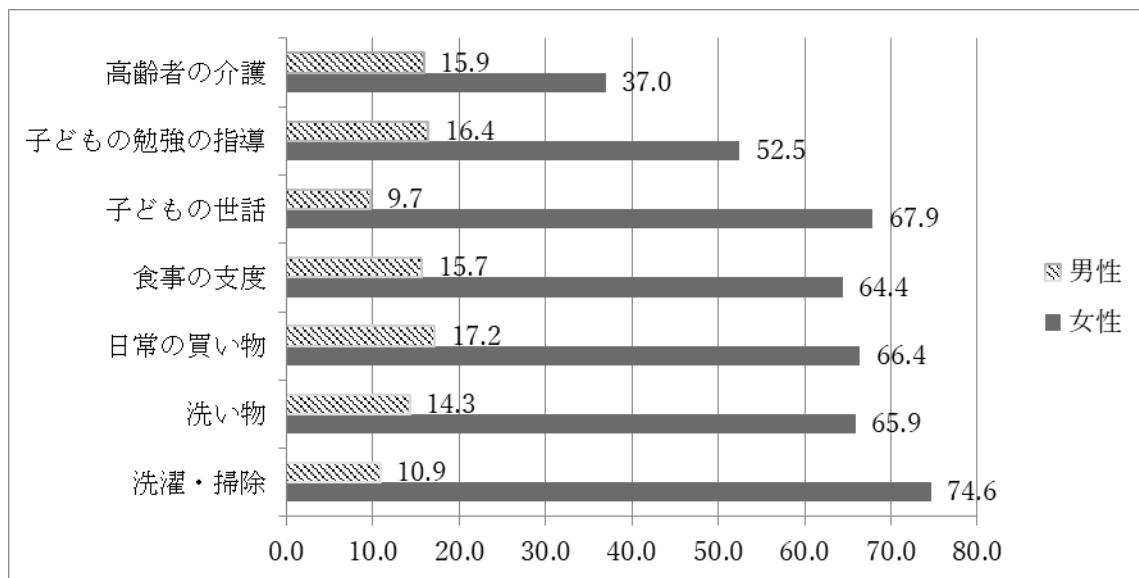
女性が男性より家事を多く担っている点は未婚者と既婚者の比較で一層明確である。表 1-2 のように未婚者の場合女性の家事時間は男性より 12 分長いのに比べて、既婚の場合女

性の家事時間は男性より 97 分長い。その一方で、既婚女性の仕事時間は男性に比べて約 1 時間短い。

では、実際男女は自分の家事負担に関してどう認識しているのか。2010 年の「中国女性社会地位調査」で「男性も積極的に家事を行うべきだ」という項目に対して都市部男性の 84.6%、都市部女性の 93.3%が賛成している（宋秀岩・甄硯編 2013：361）。しかし、図 1-1 のように、家事労働においてすべての調査項目で女性が男性より多く担っている。特に、洗濯・掃除、洗い物、子どもの世話において女性が男性より多く担っている。

図 1-1 都市部で家事の大部分あるいは全てを男性と女性どちらが担うのか（2010 年）

単位：％



出典：宋秀岩・甄硯編（2013）『新時期中国婦女社会地位調査研究（上下巻）』中国婦女出版社 p. 206 より。

また、市場化の中で性別役割分業への賛成が男性を中心に増えている。第 3 回の「中国女性社会地位調査」によると、1990 年から 2010 年までの 20 年の間に性別役割分業に賛成する男女の割合が増加し、賛成する男性の割合が女性より多い。1990 年に性別役割分業に賛成する男性の割合は 34.8%、賛成する女性の割合は 32.7%であったが（中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳 1995：97）、2010 年にこの割合はそれぞれ 52.9%と 44.5%となり（宋秀岩・甄硯編 2013：363）、男性が女性より 8.4 ポイント高い。

このような状況は本稿の対象地域である天津市でも同様である。女性が「大部分あるいは全てを行う」家事は洗濯（女性 71.7%、男性 13.6%）、子どもの世話（女性 67.5%、男性 7.8%）、皿洗い（女性 66.6%、男性 14.7%）、食事の支度（女性 66.2%、男性 15.1%）、日常の買い物（女性 61.3%、男性 16.1%）である。また、2010 年の「天津女性社会地位調査」で、10 歳から 17 歳までの子どもを対象とした調査で両親の就職状況を見ると、父親の 95.4%

が働いているのに対して、母親の 22.1%が家事をしていた（天津婦女社会地位調査課題組 2013:150）。同調査で女性が家事を行う主な理由は、「世話が必要な子どもがいる」（69.7%）、「高齢者の介護をする」（32.3%）である。また、天津市も全国と同じく 1990 年と 2010 年を比べると性別役割分業に賛成する男女の割合が増加している。2010 年時点で都市部男性の 57.2%と都市部女性の 45.8%が「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業に賛成し、男性が女性より 11.4 ポイント高い（天津婦女社会地位調査課題組 2013:316）。

本章では先行研究を踏まえながら計画経済期に国家は主に単位制度を通じて、女性の仕事と家庭の両方を支援したが、女性は男性より家事労働を多く担い、国家はそれを肯定・賛美した点についてみた。すなわち、計画経済期に性別役割分業は緩和・隠蔽されていただけで、市場化の中で国家の支援が消えると、女性の二重負担の問題が露呈した。統計データからも女性、特に既婚女性が男性より家事労働を多く行う点を確認した。

Ⅱ. 「10人の傑出した母親」の選抜からみた中国女性の仕事と家庭の二重負担 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に

本章では、天津婦女連の「母親教育プロジェクト」で選出された「10人の傑出した母親」はどのような母親であるかについて分析する。名称からも分かるように「傑出した」母親とは母親の役割を良く果たしている、他の母親の手本になりうる母親である。また、婦女連が主導的に行っている点、選抜に一般の人々が参加している点から、国家・社会が母親に何を期待しているのか、女性がどのようにより多くの家事労働を担うようになったのかという点について考察することができると考えられる。

まず、プロジェクト開始の契機、目的からみる。同プロジェクトを開始した背景には、未成年の家庭教育を強化しようとする中央政府の意図がある。2004 年に国務院では「未成年の思想・道德の一層の強化・改善に関する若干の意見（關於進一步強化和改進未成人思想道德建設的若干意見）」を公表して、未成年の家庭教育の強化を求め、全国の婦女連、教育部、小・中学校に家庭教育を促すことを要求した。これに応じて天津婦女連はまず母親教育に関する調査を行ったが、同調査で母親の教育が必要だと回答した者は 9 割を超えた。このような需要に応じて、天津婦女連ではプロジェクトを開始した。

プロジェクトの目的は「母親が愛の種をまき、子どもがその愛を継承して、人類に世界に愛を満たす」ことである（天津市婦女連 2005:34）。同プロジェクトでは母親を教育してその素質を高め、母親が子どもの手本になり、子どもを教育し、子どもの素質、国民としての素質を高めようとしている。同プロジェクトでは家庭教育は母親だけの責任ではないとしながら、「母親と子どもの関係はより密接なもの」で、子どもを産むという「自然な生命活動を続ける基礎である母親の生育機能」に基づいて、子どもを教育する「国民性を向上する基礎としての母親の教育機能」を成立させようとしている（天津婦女連 2005:33-34）。その手段としてプロジェクトでは母親の「愛」と「奉仕」の精神を広く宣伝しよ

うとしている。

この目的から同プロジェクトで、母親が子どもを教育するのに適切なのは、母親には「子を産む」という「自然な特質」があるからだ意識している点が分かる。母親は「自然な特質」つまり「自然としての母性」を持つゆえに、母親には子どもへの先天的で本能的な「愛」と「奉仕」がある。同プロジェクトでは母親はこの本能から出る「愛」と「奉仕」をよく発揮して、子どもの手本になる必要があるとしている。

このようなプロジェクトの目的に基づいて、天津婦女連は大学などで母親教育シンポジウム・展覧会・報告会の開催、母親教育のための本の編集、母親教育サイト運営、新聞社や天津市テレビ局と一緒に優秀な母親を宣伝するなどの活動を行っている。2005年に天津婦女連はプロジェクトの影響力を高めるために文化、教育、芸術、娯楽、展覧会などの活動を行う「母親文化週」を開催したが、全国から80万人が集まっている⁹。2007年に「母親に感謝の手紙を書く」という活動を行った時は、1ヶ月半の短い期間に百万通の手紙が届いた。また、2015年の第3回の「10人の傑出した母親」選抜時には、ネット投票に約20万人が参加している。このような点から、同プロジェクトは天津市の政府部門が参加しただけでなく、社会的にある程度の影響力を持っていることが分かる。

天津婦女連は2004年、2010年、2015年に3回にわたって「10人の傑出した母親」を選抜している。選抜は天津市の各区で推薦し、天津婦女連、天津市文明弁公室、天津市総工会、天津市関工会¹⁰、『今晚報』などからの専門委員会で選抜する方法で行っている。筆者は具体的にどのような基準で推薦し、また決定しているかを調べたがそれに関する詳しい資料は見られなかった。ただ、第3回では各区で推薦された後、ネット投票と専門委員会の審査で選出されている¹¹。以下にこの3回で当選した母親の当選理由について分析する。表2-1のように、筆者は主な当選理由に基づいて子どもの教育、子どものケア、家族のケアの三つに分類した。当選した母親のうち、子どもの教育を良く行って当選した者が22人、子どものケア、ここでは特に障害を持っている子どものケアを良く行って当選した者が10人、子ども以外の家族構成員（以下では「家族構成員」とする）のケアを良く行って当選した者が8人である。また、当選理由からみると、(1) 第1回目は自分の子どもの教育を良く行っている母親、(2) 第2回目は自分の子どもではない、社会の子どもの教育とケアを良く行っている母親、(3) 第3回目は家族構成員のケアを良く行っている母親、という特徴がある。以下ではこれに則して具体的に分析する。

まず、第1回目に選ばれた母親の主な当選の理由には、(1) 子どもの教育を重視して、心身とも優秀な子どもを育てている、(2) 家庭で母親の役割以外に妻・嫁などの他の役割もよく担っている、(3) 母親は自分の仕事を持ち、仕事で大きな成果を上げているかあるいは仕事で頑張っている、などがある。

表 2-1 「10人の傑出した母親」（2004年、2010年、2015年）

区分	名前	子ども		家族	その他
		教育	ケア	ケア	
第1回	穆 樺	○	○	—	長女が障害者、二人の娘とも名門学校
	張惠蘭	○	○	—	息子は障害者、息子は個人絵展を開催、絵本を出版
	趙桂芬	○	—	○	二人の娘は名門大学卒、優秀学生、優秀学生幹部など
	孟湛華	○	—	○	息子は名門大学に推薦入学、数学・化学などの大会で優勝
	楊榮芳	○	—	—	娘は軍事スポーツ競技の選手、世界大会で金メダル獲得
	肖伯芬	○	—	—	息子は全額奨学生としてアメリカボスト大学の博士課程
	姚学英	○	—	—	息子は26歳で殉職した警察官
	李艷霞	○	—	—	息子は名門大学博士課程在学中、数学大会で優勝
	蘇 杭	○	—	—	娘は名門大学大学院生、推進により進学、優秀学生幹部など
	李広英	○	—	—	息子は名門大学に在学中、優秀学生、優秀学生幹部など
第2回	張俊蘭	○	○	—	四川省の山奥で貧困家庭の子どもや孤児のための教育とケア
	孫惠萍	○	○	—	天津初の知的障害者委託センターを設立
	王秀敏	○	○	—	二人の娘を養子に、障害者や経済的に困難な家庭の子どもを支援
	王桂榮	○	○	—	障害がある息子がパラリンピックで金メダル獲得
	仁翠敏	○	○	—	障害がある娘の治療のために自分の骨を使用、娘のケア
	劉 方	○	—	—	「小・中学校貧困学生義務補習クラス」を設立
	張淑雲	○	—	—	大学生であった息子が強盗犯人を捕まる中で死亡
	袁濱渤	○	—	—	自分のお金で奨学金を設立して経済的に困難な学生を援助
	劉益素	○	—	—	5人の子どもがいるが、その中に有名な漫談家がいる
第3回	王惠芳	—	○	—	病院の前で見つかった重度の障害児の治療のために努力
	李国蘭	—	—	○	息子の嫁のケア
	楊志英	—	—	○	軽度障害者である娘夫婦のケアとその子どもの育児
	趙春榮	—	—	○	息子の嫁のケア
	白 玉	—	—	○	軍の天津養老院の院長
	張克英	—	—	○	家族8人の患者のケア
	張桂蘭	—	—	○	夫のケア
	穆瑞香	—	○	—	身体障害がある息子のケア
	陳美文	○	○	—	児童福祉院院長、脳性麻痺児童のケア・教育
	宋文華	○	—	—	東麗区教育局の局長
第4回	楊玉珍	○	—	—	軍人である息子が軍人関連の国際試合の金・銅のメダルを獲得

出典：以下の資料に基づいて筆者が分類・整理した。第1回目の資料は新華網（http://www.tj.xinhuanet.com/news/2004-05/28/content_2209648_1.htm 2014年5月2日アクセス）と天津婦女連HP（<http://www.xinddy.com/html/third/art3> 2014年5月2日アクセス）より。第2回目の資料は新華網（<http://xinwen.radiotj.com/system/2010/03/17/000265635.shtml> 2014年5月22日アクセス）より。第3回目の資料は北方網（<http://shequ.enorth.com.cn/system/2015/03/18/030096721.shtml> 2019年3月2日アクセス）より。

第一に、母親たちが最も重視したのは子どもの教育で以下の共通点がある。(1) 母親が子どもの手本になって普段の生活の中で子どもの教育を行っている。蘇杭は一人娘に他人を助けることの大事さを教えるために、知らない人に助けを求められても積極的に助けた。子ども教育関連の講演を行う蘇杭には、全国の母親から問い合わせの電話がかかってくる。ある時、一通の問い合わせの電話が2時間以上も続き、蘇杭は尿漏れをしたこともある。普段の生活のなかで、蘇杭のこのような姿をみてきた娘は、母親を見習って、積極的に他の人を助けるようになった。孟湛華は働きながら独学で37歳の時に大学卒業試験に合格し、41歳で「高級統計士」の資格を取得した。このように休まず勉強する母親の姿を幼い時から見てきた息子も、学校の勉強以外に数学や自分が興味を持っているプログラミングなどを学び、数学オリンピックやプログラミング大会などに積極的に参加して優勝した。

(2) 母親たちは子どもの学校での成績だけを重視したのではなく、独立心や社会性を育てると同時に子どもの趣味を活かすように努力した。夫婦ともリストラされた孟湛華の家庭は一時期経済的に困難な状況に置かれていたが、その時息子はプログラマーのバイトをして家計を助けた。蘇杭は持病があり、入院して治療することが多かったが、彼女の娘は蘇杭が入院する度にその看病をしてきた。楊榮芳の娘は軍事スポーツ競技の選手であるが、娘が5歳の時から、彼女は毎日自転車で娘をスイミングプールに連れて行って、訓練が終わるまで外で2〜3時間立って待っていた。

このような母親の教育の成果は子どもの成果として現れている。子どもたちは名門大学に入学する、様々な大会で優勝する、ボランティア活動に積極的に参加するなどの成果を上げている(表2-1)。このように母親たちが子どもの教育を良く行っている手本として選ばれたのは、その子どもが優秀であるからである。すなわち、母親の教育が良くできているか否かを判断する基準は子どものいわゆる「成功」である。子どもが優秀でないと母親も子どもの教育を良く行っている「傑出した母親」になれない。

第二に、母親たちは家庭での他の役割も良く担っている。孟湛華は家事や育児を一人で行う以外に、夫と自分の両親のケアも担ってきた。彼女は義母が入院するたびに、その看病をし、周りの人から「本当の娘のようだ」と言われた。張恵蘭の息子は脳に重い障害を持っていたため、ご飯さえ自分で食べるができなかった。夫が軍人で家にいない期間が長いため、張恵蘭は家事、息子の治療やケアを一人で担ってきた。彼女の毎日の睡眠時間は3〜4時間で、ちゃんと座ってご飯を食べる時間もなかった。しかし、夫の不在に対して、彼女は、軍人の妻として夫に迷惑をかけてはいけなさと、考えていた。

第三に、母親たちは仕事で頑張っている。第1回目に選ばれた母親のうち、一人の専業主婦以外に他の母親は全員働いている¹²。趙桂芬は中国初の局長級の女性の税関関長で天津税関関長を10年間務めたが、仕事が忙しく自分の時間がほぼなかった。重度障害がある息子がいる張恵蘭は中間管理者であった時、いつも現場の人と一緒に残業をし、工場の書記に昇格した後も努力して赤字の工場を黒字に変えた。孟湛華は仕事を熱心にやり班長か

ら一歩ずつ進み企業の社長、党書記になった。

以上のように、母親たちの手本になりうる者は、仕事・子どもの教育・その他の家庭での役割を全て上手く行っている者である。しかし、この全てを良く行うために、母親は自分を犠牲にしなければならない。母親には仕事で頑張るために休まずに一所懸命働く者、「尿漏れ」までしながら他人を助ける者、休まずに子どもの習いごとに付き添う者、座ってご飯を食べる時間もなく子どものケアをする者、義母の看病を積極的に行う者がいる。すなわち、自分自身を犠牲にしないと、働きながら子どもの教育・ケア、家事、家族のケアなどを良く行うことができない。この点は計画経済期に国家が女性自身の努力で家庭の困難を克服するように奨励したことと同様である。

同プロジェクトでは、母親が子どもの手本になって、生まれつきの「愛」を子どもに伝えることを求めているが、自分を犠牲にしながら、仕事と家事労働—無償労働を行う母親から子どもたちが継承するものには、家事労働を女性の責任とする意識も含まれていないだろうか。同プロジェクトでこのような母親を母親・子どもの手本として「傑出した」と肯定・宣伝・賛美することは、女性が家事という無償労働を担うように強要することではないだろうか。

母親が無償労働を担うことへの賛美は第2回の選出で一層明確になっている。第2回目では、「愛」と「奉仕」の精神が社会でいかに発揮されているのかをテーマにしているが、その対象は我が家の子どもから社会の子どもに拡大されただけで、子どもに対する「愛」と「奉仕」の枠を超えていない。第2回目では主に（1）社会で経済的に困難な子どもの教育を無償で行っている母親、（2）社会で子どものケアを担っている母親が当選した。

第1点目に関して、教師である袁濱渤は母親のように生徒たちを教育し、自分のお金で奨学金を設立して経済的に困難な学生を援助してきた。劉方は2005年に、「小・中学校貧困学生義務補習クラス」を設立して、貧困家庭の子どもを対象に無償の補習を行ってきた。張俊蘭は1997年からボランティアとして、四川省の山奥の地域で貧困家庭の子どもや孤児のための教育・ケアを行っている。王秀敏は2009年から小・中学校や大学で「愛心講座」を開き、「愛心」団体を作って、生活が困難な学生を支援した。孫惠萍は1990年に天津初の知的障害者委託センターを設立して、障害を持っている子どもの教育方法を模索してきた。王秀敏は二人の娘を引き取って育てただけではなく、2003年から6人の障害者家庭の子どもと41人の生活困難な家庭の子どもを経済的に援助した。王惠芳は偶然に病院の前で見つかった重度障害児の治療のために努力している。

以上のように、同プロジェクトの目的からみると、自分の子どもではなく、助けを必要とする他の子どもを教育・ケアすることは、母親に生まれつきの「自然的」な「愛」と「奉仕」の精神があるからこそ可能である。また、「補習クラス」や「知的障害者委託センター」の設立から分かるように、個人的に一人や二人の子どもを助けるのではなく、大勢の子どもの教育・ケアをするためには時間と精力が必要である。さらに、ボランティアとし

て働くことや奨学金の基金を作ること、経済的に子どもを援助するなどは無料で行うことで、これも無償労働である。

同プロジェクトでは母親の「愛」と「奉仕」の精神を広く宣伝しようとしているが、そのような意味で社会にて子どもの教育・ケアを「愛」でささえ、「奉仕」している母親たちは最も良い手本である。母親たちは家庭に限定される必要がなく、社会でも子どもの教育・ケアという無償労働を行うことが可能である。このような母親たちは最も「偉大」である。第2回目では社会で奉仕する母親を賛美することで、子どもを教育・ケアする無償労働を女性に強要すると同時に、母親の役割を家庭内から家庭外へと延長している。

このように第2回目が母親の役割を家庭外に延長したとしたら、第3回目では家庭内で母親が担うべき役割の対象を子どもから他の家族構成員に拡大している。張克英は、一人で義母・夫・夫の兄の妻・夫の弟の夫婦・甥の夫婦とその子どもなど8人の患者のケアをしている。そのため彼女は朝から晩まで彼ら・彼女らの家を回り、休み時間が全くない。楊志英は、今まで軽度障害者である娘夫婦のケアをし、その子どもを育てた。李国蘭は乳がんになった息子の嫁のケアを、趙春榮は4階から落ちて重度障害者になった息子の嫁のケアをしている。また、社会で老人のケアを良くしている者もいるが、白玉は天津養老院の院長で、院長の仕事に全力を尽くしている。このような家族のケアで共通している点は、ほぼ全ての家族が肉親ではないということである。自分の子どものケアだと言うのが当然視される可能性があるが、肉親ではないゆえに母親たちの「愛」が拡大され、高く評価されるのである。

第3回目の「10人の傑出した母親」を選出する時には、「最も美しい家庭」の選抜も同時に行われている。そこに選ばれた10人のうち6人が男性、4人が女性であるが、女性は義父・義母のケアをした劉学洪、再婚後自分と血縁がない夫の子どもを育てた王玉霞、軍人である夫のために自分のキャリア・アップを犠牲にした何立娜、80代なのに小学校で授業をしている王希萍などである。この4人の母親も子どもの教育と家族のケアの枠組を超えていない。その一方で、当選した男性の家庭は、自費で設備を購入して農村で映画を放映した者やごみを再利用する工芸家など、無償労働と全く関係がない者もいる。このように「最も美しい家庭」の選出でも、男性と違って女性は教育とケアで評価されているが、この点から無償労働を女性の責任としている点が伺える。

以上のように本章では、天津婦女連が「母親教育プロジェクト」の一環として3回選出した「10人の傑出した母親」に関して分析し、国家・社会が母親に家庭内での無償労働一家事労働を担うことを求めている点についてみてきた。

本章で分析したように、「傑出した母親」は子どもの教育・ケア、家族のケアを良く行っている母親である。しかし、仕事をしながらこのような家庭の無償労働を良く担うためには、苦労を我慢し、自分の努力で乗り越えなければならないだけでなく、自分を犠牲にしなければならない。この時、国家・社会は母親には生まれつきの「愛」と「奉仕」があ

るとし、この本質主義的母性を利用しているが、その利用の方法が自己犠牲をする母親を「傑出した母親」だと肯定・賛美・宣伝することである。また、第2回と第3回の「10 人の傑出した母親」の当選理由から分かるように国家・社会はこのような賛美・宣伝を通じて、母親の役割を自分の子どもに限定するのではなく、他の子ども、他の家族構成員まで延長している。この延長の危険性は母親、さらに女性が無償労働を担っているか、無償労働を良く行っているのかで評価されている点である。

おわりに

本稿では天津婦女連の「母親教育プロジェクト」とその一環として行った「10 人の傑出した母親」の当選理由から、市場経済期に国家・社会が家庭内で行われてきた無償労働—家事労働を女性の責任としようとしている点について考察した。

まとめると本稿では以下のような点を明らかにした。

第一に、計画経済期に国家は女性の社会進出を促進し、主に単位制度を通じて女性の仕事と家庭の両方を支援している一方で、女性により多くの家庭責任を期待した。そのため、計画経済期の女性の仕事と家庭への国家の支援は「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業を見えないものにした側面もある。

第二に、「10 人の傑出した母親」の当選理由に関する分析から分かるように、国家・社会は母親に子どもの教育・ケア、家族構成員のケアなど家庭内の無償労働を担うことを期待している。これは市場経済に転換する過程で私事化した無償労働の担い手になることを意味するが、この時女性は労働市場から完全に家庭に戻るのではなく、第1回目の「10 人の傑出した母親」のように仕事と家庭の両方を行うことを期待されている。しかし、自分を犠牲にしないと仕事と家庭の両立は難しい。このように女性に無償労働、仕事と家庭の両方を強要する時、国家・社会は母親には生まれつきの「愛」と「奉仕」の精神があるから、誰でもできることだとし、それを発揮すべきだと、本質主義的母性を利用している。

第三に、母親に無償労働を強要する点は、第2回と第3回の「10 人の傑出した母親」から分かるように、それを社会に、また他の家族構成員のケアにまで延長している。すなわち、母親は「愛」と「奉仕」の精神があるから、自分の子どもだけではなく、社会でも家庭のほかの人に対しても自己犠牲的に奉仕をすることが可能であり、そのような無償労働を良く行う者が高い評価を得る。

今までみたように同プロジェクトの最大の問題点は本質主義的母性にに基づいている点であり、これを利用して女性に無償労働を強要している点である。このような本質主義的な発想から、母親の本能である「愛」と「奉仕」を発揮しようとする時、女性は女性ではなく、母親に作り変えられ、本質主義的な母性は再生産され、強化されている。同プロジェクトでは母親を教育してその素質を高め、母親が子どもの手本になり、子どもを教育し、子どもの素質、国民の素質を高めようとしているが、これは結局母親・女性の価値は良い

国民を育てるところにあるということになる。このように女性の無償労働の負担を増加させる動きは、女性の仕事と家庭の二重負担の問題を深刻化させ、これは結局出生率に影響を与えることになるだろう。

注

- 1) 人力資源社会保障部、教育部、司法部、衛生健康委員会、國務院国有企業資産監督管理委員会、医療保障局、全国総工会、全国婦女連、最高人民法院などの9つの部門が出した通知である。
- 2) 中華人民共和国中央政府サイト (http://www.gov.cn/xinwen/2019-02/22/content_5367613.htm 2019年3月17日アクセス)。
- 3) 中国では今まで4回の「婦女回家」論争があった。第3回「婦女回家」論争は、1949年の社会主義革命以降初めての「婦女回家」論争となった。同論争は二つの段階に分けることができるが、1980～1985年の第一段階の論争は、1979年から発生した就職難の解決策として経済学者の厲等三らが「婦女回家」論を提起したことによって開始された。1986～1989年の第二段階の論争は、1988年に「中国婦女報」で「私の出路（出口）はどこに」と「大邱庄『婦女回家』の考察」が掲載され、「女性の出路（出口）はどこに」に関して討論を展開することになった。
- 4) 内閣府 HP (<https://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/sonota/satellite/roudou/contents/20090824g-unpaid.html> 2019年3月2日アクセス)。
- 5) この時期の終身雇用制度は「統包統配」で、国家が労働者を職場に配置すると、職場は労働者を解雇することができないと同時に、労働者は職場を選ぶことも、自ら辞職することもできない。しかし、この制度によって労働者は就職を一生保障される。
- 6) 「大鍋飯」の平均分配の下では、職種、年齢、勤続年数と学歴が同じ労働者の間で男女労働者給料の差はほとんどなかった。1956年の全国第2回給料制度改革では「能力に応じて働き、労働に応じて分配する」という賃金原則が公表された。その原則に基づいて「基本給の等級制、奨励制度、補助金制度」の三つを含む賃金体系が形成された（丁紅衛 2007：71-72）。
- 7) 労働力率=16歳及び16歳以上の労働力人口/16歳及び16歳以上の人口×100。
- 8) 2010年の人口センサス電子版を利用して算出（国家統計局のHPより：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス）。
- 9) 天津市婦女連 HP (http://www.xinddy.com/html/third/art3_5638.html 2014年5月17日アクセス) より。
- 10) 「関工会」とは次世代に関心を寄せる工作委員会の略称である。
- 11) <http://news.enorth.com.cn/system/2010/04/23/004627065.shtml> 2019年3月10日アクセス。
- 12) 専業主婦は警察官である一人息子が殉職した特殊なケースである。

参考文献

- 尹鳳先（2009）、「仕事と家庭の両立を模索する女性たち—50 年代から 60 年代までの『中国婦女』誌を中心に」『ジェンダー研究』第 12 号、107-122 頁。
- 竹中恵美子（2011）、『竹中恵美子著作集 第Ⅵ巻 家事労働（アンペイド・ワーク）論』明石書店。
- 中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳（1995）、『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社。
- 遠山日出也（1999）、「第一次五カ年計画期の都市における保育政策」中国女性史研究会編『論集中国女性史』、282-3002 頁。
- 朴紅蓮（2019）、『中国の育児期女性と「良き母親」言説—都市部で働く「80 後」の高学歴女性を中心に』吉林大学出版社。
- 陳万・陳昕（2011）、「生育対既婚婦女人材工作与家庭的影響—来自上海的質化与量化総合研究」『婦女研究論叢』第 2 号、42-51 頁。
- 丁紅衛（2007）、『經濟發展与女性就業』中国市場出版社。
- 蔣永萍（2000）、「50 年中国城市女性就業問題回顧」『労働保障通訊』第 3 号、29-30 頁。
- 金家飛・劉崇瑞・李文勇・Patricia Mary Fosh（2014）、「工作時間与工作家庭衝突—基于性別差異的研究」『科研管理』第 8 号、46-52 頁。
- 金一虹（2006）、「鉄姑娘再思考—中国文化大革命期間的社会性別与労働」『社会学研究』第 1 号、169—193 頁。
- 李静之（1994）、「職業婦女的角色衝突理論和对策浅見」『理論縱横』第 4 号、49-52 頁。
- 林松樂（1994）、「1981-1992 年中国職業女性角色衝突觀點總述」『高校社科情報』第 3 号、15-21 頁。
- （1995）、「關於性別角色的几次爭論」『社会学研究』第 1 号、106-108 頁。
- 羅萍（1995）、「略論中国社会轉型時期婦女角色全面轉換」『理論月刊』第 6 号、37-40 頁。
- （1996）、「職業女性角色衝突的思考」『女人与家庭』武漢大学出版社、81-91 頁。
- 羅垂莉（2005）、「職業女性角色衝突的成因及对策分析」『四川教育学院学报』第 7 号、27-29 頁。
- 宋少鵬（2011a）『「回家」還是『被回家』？—市場化過程中『婦女回家』討論与中国社会意識形態轉型』『婦女研究論叢』第 4 号 5-12、26 頁。
- （2011b）、「公中之私—1950 年代中国關於家庭労働的国家話語」『近代中国婦女史研究』第 19 号、131-172 頁。
- 宋秀岩・甄硯編（2013）、『新時期中国婦女社会地位調查研究（上下卷）』中国婦女出版社。
- 天津婦女社会地位調查課題組（2013）、『天津婦女社会地位調查（2000-2010 年）』中国婦女出版社。
- 天津市婦連（2005）、「方案 14『母親教育』工程实施方案」『中国婦運』第 6 号、33-35 頁。
- 楊惠・呂雲婷・任蘭蘭（2016）、「二孩对城鎮青年平衡工作家庭的影響—基於中国女性社会地位調查数据的实証分析」『人口与經濟』第 2 号、1-9 頁。
- 楊玉静（2015）、「城鎮既婚女性的工作与家庭衝突研究—基於時間利用的分析」『山東女子学院学报』第 1

号、40-46 頁。

張一兵 (1992)、「試析城鎮職業婦女的角色負擔及對策」『婦女研究論叢』第 4 号、24-28 頁。

鄭晨 (1994)、「當代職業婦女的角色衝突的社會學分析」『浙江學刊』第 1 号 71-73、127 頁。

左際平・蔣永萍 (2009)、『社會轉型中城鎮婦女的工作和家庭』當代中國出版社。

The Double Burden of Chinese Women's Work and Family from the Selection of "Top Ten Outstanding Mothers": Taking the "Mother Education Project" of Tianjin Women's Federation as an Example

PIAO, Honglian

Abstract

This paper analyzes the “Top 10 Outstanding Mothers” in the “Mother Education Project” of the Tianjin Women’s Federation and examines how the state and society in the market economy impose unpaid labor-housework on women.

The biggest problem with the "mother education project" is that it takes the essential motherhood as the starting point, and the project uses this essentialist motherhood to impose unpaid labor on women. Starting from this essentialism, when "love" and "dedication" are mothers' instinct, women are not simple women, but mothers. Essentially, motherhood is and will constantly produced and continuously strengthened.

Three “Top Ten Outstanding Mothers” were selected in 2004, 2010, and 2015. From the perspective of their election, the state and society require mothers to take responsibility of unpaid work, such as children’s education and rearing, family members’ care, etc. This means that women are the bearers of the unpaid work that has been converted to privatization in the market economy. At this time, Chinese women were not completely returned to the family and were required to take care of work and monitoring. They can't take care of both without self-sacrifice. From the reasons for the election of the second and third "Top Ten Outstanding Mothers", it can be seen that the imposition of unpaid work on mothers is not limited to the family, and its scope extends to the care of the society and other family members.

Keywords : Double burden of work and life, unpaid work, essentialism motherhood

学会役員

<顧問>

山泉進（明治大学名誉教授・学長補佐）

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

<会長・理事>

安達義弘（日韓言語文化交流センター・
副代表）

<副会長・理事>

李東哲（新羅大学・客員教授）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・教授）

海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

<常任理事>

李東軍（蘇州大学・教授）

金龍哲（神奈川県立保健福祉大学・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

<事務局長・理事>

安勇花（延辺大学・副教授）

<一般理事>

阿莉塔（浙江大学・副教授）

白曉光（西安外国語大学・副教授）

崔肅京（富士大学・教授）

宮脇弘幸（大連外国語大学・客員教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

金斑実（商丘師範学院・講師）

李鋼哲（北陸大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

李慶国（追手門学院大学・教授）

名嶋義直（琉球大学・教授）

娜荷芽（内蒙古大学・副教授）

任星（厦門大学・副教授）

施暉（蘇州大学・教授）

矢野謙一（熊本学園大学・教授）

王宗傑（越秀外国語学院・教授）

徐瑛（浙江越秀外国語学院・副教授）

鄭亨奎（日本大学・教授）

植田晃次（大阪大学・准教授）

朴銀姫（魯東大学・教授）

学会動向

◆「第二回日本学研究国際シンポジウム」開催地の変更

2019年9月20日（金）～22日（日）開催予定の「第二回日本学研究国際シンポジウム」の開催地は公開応募によって商丘師範学院（中国・河南省商丘市）に決まったが、受け入れ先の事情により急遽開催地変更を余儀なくされ、理事会で検討後、新羅大学校（韓国・釜山市）で開催することになった。

◆学会誌創刊号の印刷

『東アジア日本学研究』投稿要領で、学会誌は東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開し、執筆者は必要に応じて個人負担で論文の別刷り（抜刷）の作成を依頼することができるとしたが、学会誌を登録した日本国立国会図書館への献本も必要だったので常任理事会の承認を経て創刊号を100冊印刷し、有料で（印刷費用相当）執筆者をはじめとする会員に提供することにした。

◆学会ホームページの完成

安達義弘会長の数か月にわたる苦心の結果、今年7月に学会ホームページが完成し、学会誌創刊号もホームページで自由に見ることができるようになっている。今後、大いに活用していただきたい。

※東アジア日本学研究学会ホームページ：<https://www.east-asia.info/>

◆次期会長選挙委員会設立

会則にしたがえば、会長の任期は2年であり（但し、再任可）、初代会長の安達義弘氏の任期は2020年3月までなので、会員総会で承認を得る必要から今年7月会長選挙委員会（金龍哲委員長）を設立した。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

創刊号の訂正

p. 193 下から7行目

（誤）三島通庸→（正）三島通陽

東アジア日本学研究学会会則

<名称>

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

<目的>

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をととして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをととして、学問の進歩及び当該地域の平和的發展に寄与することを目的とする。

<事業>

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

<会員>

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

<入会・退会>

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。
会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

<会費>

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員 5,000 円

学生 3,000 円

賛助会員 50,000（1口） 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、帝京大学文学部・安達義弘研究室（〒192-0395 東京都八王子市大塚 359）とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2019年度分の春季号は翌2020年春、秋季号は翌2020年秋に発行予定）
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。
- 5) 投稿者が大学院に在籍中の場合は、指導教員による承諾書（100～300字程度。様式は任意）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない。
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとする。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDF ファイルにて公開する。（学会ホームページの作成は検討中）
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と論文要旨（300～600字程度）を提出する。論文要旨は、日本文タイトル・英文タイトル・電話番号・メールアドレスとともに、下記の所定の様式で提出すること。
- 12) 完成原稿と論文要旨は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。
- 15) 執筆者は、別刷り（抜刷）の作成を依頼することが出来る。これに必要な費用は執筆者の自己負担とする。
- 16) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

（2019年9月20日改定）

論 文 要 旨		
氏名		
所属・職位		
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
英文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史	
該当番号を記入	5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
<論文要旨> （300～600字程度）		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚(注・図表・参考文献を含む)、秋季号論文は10～15枚(注・図表・参考文献を含む)とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ…とし、その下の款項には1.、2.、3. …を用いる。さらにその下の項には(1)、(2)、(3) …を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい(番号は付けない)。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする(欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く)。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号(m kg など)を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名(発行年)、『書名—副題』出版社。

(日中韓語の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」『雑誌名』巻数(号数)、〇—〇頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」(編者名『書名—副題』出版社)、〇—〇頁。

(日中韓訳書) 編著者名(発行年)、『書名——副題』(訳者名、原著は〇年発行)出版社。

(欧文の書籍) 編著者名(発行年)、書名：副題、発行地：出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名：副題」雑誌名、巻数(号数)、pp. 〇—〇。

(欧文の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名：副題」編者名 ed.、書名：副題、発行地：出版社、pp.

〇—〇。

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

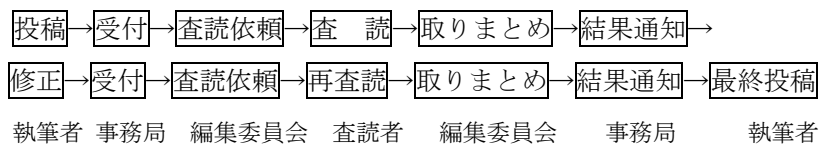
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先: 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

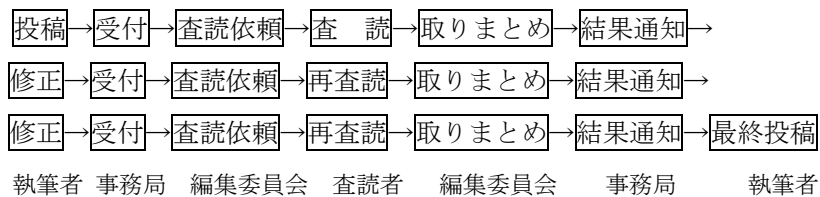
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が1ヶ月で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。

- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

＜総合判定ガイドライン＞

(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)

採用 : ◎◎ (6点)

条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)

再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)

不採用 : ×× (0点)

- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には16本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用6本、条件採用5本（最終的に全て採用）、不採用3本、辞退2本という結果となりました。編集作業を効率よくするため、投稿の際は必ず所定のフォーマットを使うようにしてください。

編集委員 加藤三保子（豊橋技術科学大学教授）

第2号に採用された論文は、今後、各国で多くの人々に読まれることとなりますが、読者の専門領域は必ずしも論文執筆者と同じではありません。特に調査データ等を載せる場合は、説明不足に注意し、第三者にわかり易く論を展開することが大切です。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

東アジア日本学研究学会の学会誌第2号が刊行の運びとなりましたこと、まことに嬉しく思います。今回も多様な論文を読ませていただき、充実感でいっぱいです。精緻なデータの分析を重ねて自身の問いに迫るプロセスは、たいへん勉強になり刺激的でした。

編集委員 李鋼哲（北陸大学教授）

近年、日韓・日中・日朝などの関係が厳しい中でも、日本学研究を土台に東アジアで強い絆を構築していく本学会および学会誌から、国際的・学際的研究の広がりや深まりを実感します。皆様の献身的な努力により、この学問的交流の輪はさらに広がると信じます。

学会誌担当副会長 海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

「水清ければ月宿る」という諺を「読み深ければ問題宿る」に置き換え、実行することで、良い論文が自然と生まれます。原典や先行論文などの深読みと問題意識の深掘りは価値のある論文の基礎であります。本学会誌はこのような論文を心からお待ちしています。

【本号の査読者】（50音順・査読時点）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、李昌玟（韓国外国語大学校副教授）、植田晃次（大阪大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学教授）、関承（大連外国語大学講師）、施暉（蘇州大学教授）、李光赫（大連理工大学副教授）、李鋼哲（北陸大学教授）、李成愛（山東科技大学講師）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学客員教授）、中川良雄（京都外国語大学教授）、任星（厦門大学副教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、宮崎聖子（福岡女子大学教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）

後 書 き

今回は、中国人による投稿論文が中心でしたが、今後は日本人や韓国人による投稿にも期待したいと思います。

本学会は、若手・中堅の研究者の会員が比較的多い学会です。その意味で、これからの東アジアにおける日本学の研究分野において大きな成果が期待できる学会です。会員相互が切磋琢磨しながら、さらなる研究の高みに向かって邁進していくことができれば、その成果として学会誌の質の向上は必然です。会員相互の国際的な切磋琢磨を期待します。くわえて、若手研究者に刺激を与え、学会を活性化させるべく、熟達会員の投稿にも期待したいと思います。

東アジア日本学研究学会会長 安達義弘

東アジア日本学研究 第2号 Japanese Studies in East Asia No.2

2019年9月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: ea2017@163.com

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
